28）と類似している。また中野市立ヶ花窯跡（中野市教委1995）に同類の甕がみられる。３と４は口縁部に沈線が巡っている。

５・６は須恵器杯Ｂで、底部は5が回転糸切り未調整で、６が回転ヘラ削り調整である。高台がやや内側に入って接合され、杯腰部が直角に近く立ち上がっている。７は須恵器杯Ａで底部ナデ調整である。８は口縁部が面取りされた甕Ｄである。

上記の出土土器より粘土採掘跡は大きく２時期に分類される（第225図・第10表）。また、遺物が出土しない土坑、および出土遺物から詳細な時期が判明しない土坑については、形状と覆土から下記のいずれかの時期に属するものと推定した。

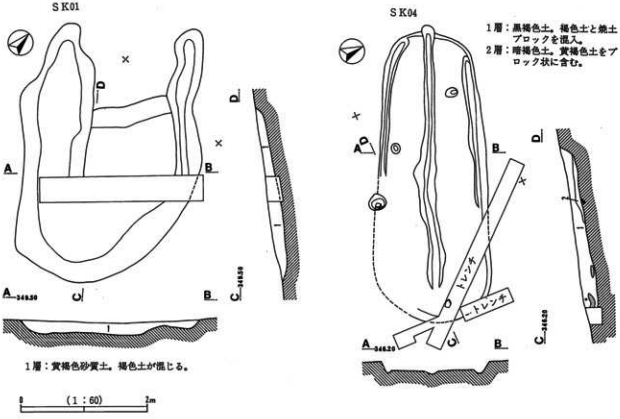
８世紀前半期－SK20、21、SK24、SK32、SK45、SK53、SK62、SK71、SK73、SK77、SK81、SK87、SK88、SK97、SK98、SK99、SX01。

８世紀後半期から９世紀初頭期－SK22、SK23、SK31、SK34、SK39、SK68、SK79、SK95。

４　その他の遺構

ＳＫ０１（第234図）　東向きの斜面部、ＳＹ０２の東側7.5ｍに位置し、2.8ｍ×2.7ｍの不整な方形に２カ所の溝状の突出部を持つ。焼土、炭化物などは確認されず、遺構内での人の活動の痕跡は確認されない。覆土より窯体、瓦10点、須恵器の甕・壺が各１点出土したが、本遺構に伴う遺物は確認できず、出土遺物から遺構の時期は明言できない。しかし、清水山窯跡、牛出古窯遺跡でも窯に近接した不整形な土坑が存在しており、これらの土坑と同様な性格の遺構であると推定され、いずれかの窯跡構築に関わるものであると考えられる。

ＳＫ０４（第234図）　東向き斜面部、ＳＹ０６の南側約13ｍ位置し、4.64ｍ×1.72ｍの隅丸の長方形を



第234図　池田端窯跡　ＳＫ０１・０４

呈する。斜面下方の東側は、壁面が確認できず推定線（破線部）で示している。土坑底面は約８度傾斜しており、長軸方向に中央部と両壁際に幅15cm前後、深さ約５cmの溝が検出された。覆土には炭化物と焼土粒や焼土塊が認められ、特に土坑底面には多量の炭化物が出土した。火床面は確認されなかったが、覆土中に焼土塊が認められることを考え合わせると本遺構内で火を焚いたことは明らかである。浅いピットが３ヵ所確認されたが本遺構の施設であるか否か判断できない。覆土中より須恵器甕片が１点出土したのみであるが、遺構は窯跡群と粘土採掘跡の間に位置しており、また粘土採掘跡群からのびＳＤ１２の延長上に位置することから須恵器生産に関わる遺構であると推定される。

ＳＤ０５（第197図）　ＳＹ０４の斜面上方に弧状に巡る溝である。長さ約８ｍ、幅50cm～60cm、深さ約35cmの断面Ｖ字状で、覆土は黒褐色土の単層で、近世以降の溝の覆土と明瞭に区別された。覆土上層より土師器甕の破片が出土した。遺物から奈良・平安時代の遺構と思われるが遺構の性格は不明である。

ＳＤ１２（第189図）　東向き斜面部の窯跡群と粘土採掘の土坑群とを結ぶ方向に走る溝である。長さ約50ｍ、幅50cm～60cm、深さ10cm～15cmで、わずかに蛇行しながら等高線にほぼ平行する。溝の南端部は確認したが、北端部は検出面が低いため確認できず、溝はさらに北方向に続く。溝底面のレベルはほぼ水平で、北端が南端より約５cm高く中央部がわずかに両端よりも窪んでいる。出土遺物は須恵器片・土師器片が数点出土したが、詳細な時期を判別できる遺物はないが、窯跡と粘土採掘跡との位置関係から須恵器生産に関わる遺構と推定される。

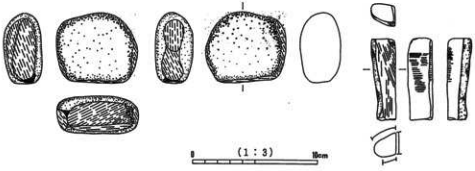
ＳＦ０１（第189・232図）　粘土採掘土坑群の北西約60ｍの緩斜面部に直径約30cmの火床面が確認され、火床面の周辺には土師器甕片などがまとまって出土した。火床面は表土直下に検出されており、竪穴住居址に伴うものかどうかは確認できなかったが、竈周辺に長胴甕が出土する事例は多く、火床面は竈の残存部分である可能性が高い。

出土遺物（第232図下段１・２）　１は胴部表面は縦方向のヘラ削り、内面は胴上半部がカキ目、下半部はハケ目である。２は口縁端部が面取りされており、胴部の表面は縦方向のヘラ削り、内面は粗いハケ目である。

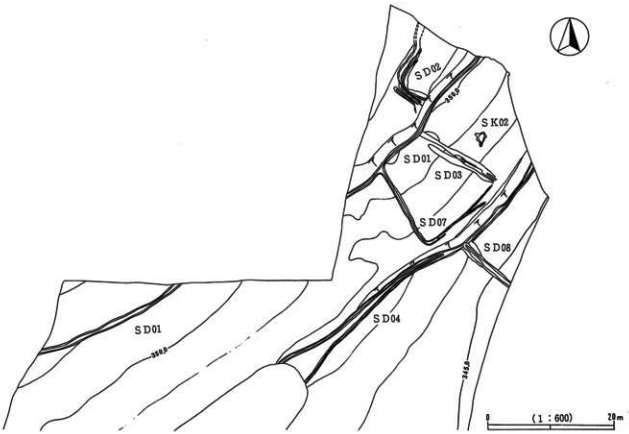
第５節　近世以降の遺構

①区と②区北端に溝６条と土坑１基が確認された。（第236図）。いずれも時期を判断できる遺物がなく詳細な時期は不明であるが、表土に近似する覆土であることから近世以降のものと判断した。

ＳＤ０１・０４は等高線と平行する削平面と一致しており、さらに、ＳＤ０３・０７・０８はＳＤ０１・



第235図　池田端窯跡　時期不明石製品



第236図　池田端廻跡　近世以降の遺構

０４に規制されており、いずれも２段の削平面よりも新しい溝である。ＳＤ０３・０４ではわずかにずれる溝が重複しており、数回の掘り直しが行われたものと思われる。なお、ＳＤ０３覆土にはＳＹ０２で焼かれたと思われる瓦がまとまって大量に出土した。

ＳＤ０２はＬ字状に曲がる溝であるが、複数の溝が重複しており、数回の掘り直しが行われたものと思われる。また、等高線と平行する削平面に規制されていないことからＳＤ０１他などよりも古い溝と思われる。

註

1　分析結果の報告は上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14（平成９年度刊行予定）に掲載する。

引用・参考文献

斎藤孝正　1995a　Ⅰ第３章　１彼投廻と出土遺物　『須恵器集成図録』第３巻東日本編１

斎藤孝正　1995c　Ⅰ第３章　２馬北廻と出土遺物　『須恵器集成図録』第３巻東日本編１

後藤健一　1990　追記　『静岡県湖西市吉美中村遺跡』

高橋一敏　1990　Ａ地点　『静岡県湖西市吉美中村遺跡』

中野市教育委員会　1995　参考資料　『長野県中野市安源寺遺跡（中野市西部デイサービスセンター建設敷地内）発掘調査報告書』

第８章　牛出古窯遺跡

第１節　遺跡と調査の概要

１　遺跡の概要

牛出古窯遺跡は長野県中野市大字牛出字芝野704他に所在し、ＪＲ飯山線立ケ花駅より北東に約1.3kmの位置にある。千曲川の東岸に広がる高丘丘陵の北西縁の河岸段丘状の地形に立地する。従来、段丘崖の斜面に須恵器窯跡が存在することが知られていたが、集落跡としては周知されていなかった。調査区は、林檎などの果樹栽培を行う畑地で、現在の牛出の集落から東へ200ｍ、千曲川から約700ｍのところにある。遺跡周辺には３段の平坦面があり、本遺跡の範囲は一番高い平坦面とその下の平坦面にとどまる。一番下の平坦面は牛出遺跡とされており本遺跡とは区別されている。本遺跡では一番高い平坦面を上段段丘面、その下の平坦面を下段段丘面とし、その標高差はおよそ15ｍである。下段段丘面には主に古墳時代初頭の集落跡と中世の墓が、段丘崖の斜面部には奈良時代窯跡、上段段丘面には旧石器時代石器、奈良・平安時代の住居址が確認された。

牛出古窯遺跡と同時期もしくは前後する時期の周辺の遺跡をあげると、北西200ｍの牛出遺跡では中世の集落跡が確認されており、本遺跡の中世の墓との関連が予想される。弥生時代後期末から古墳時代初頭では牛出遺跡・がまん淵遺跡・安源寺遺跡・栗林遺跡・七瀬遺跡などの集落跡があげられる。がまん淵遺跡は弥生時代後期の集落跡で南に1.5km、牛出遺跡は600ｍ北西の千曲川の川岸に立地しており、本遺跡と同時期もしくは前後する時期の集落跡である。安源寺遺跡、栗林遺跡、七瀬遺跡は弥生時代後期から続く集落跡で直線距離で、1.2kmから3.0kmの距離にある。集落跡以外では安源寺遺跡で前方後方形周溝墓が調査されている。須恵器生産関連では、本遺跡は高丘丘陵古窯址群の北西端の窯跡となる。

２　調査の概要

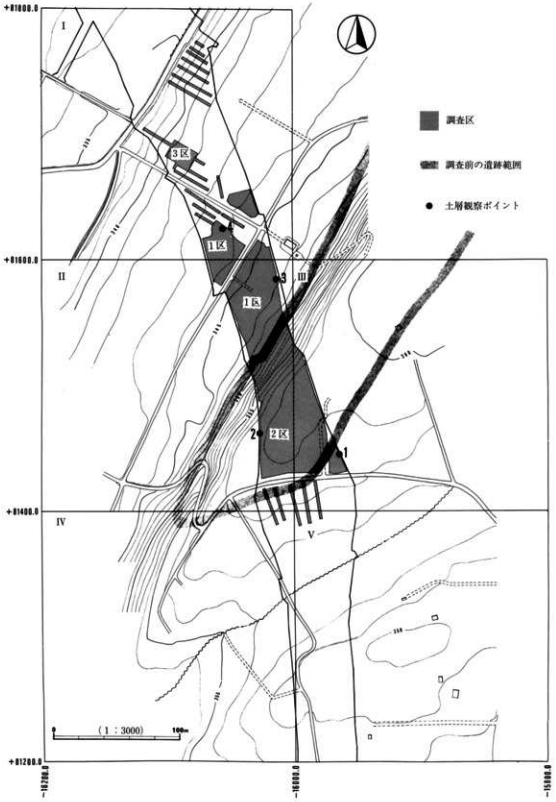
(1)　調査範囲と調査方法

調査範囲（第237図）　表土剝ぎを行い遺構の有無を確認した範囲を第237図に示した。本調査開始前の、窯跡としての遺跡推定範囲は斜面部から上段段丘面にかけてであったが、重機によるトレンチ調査により下段段丘面にも遺跡が広がることが確認され、下段段丘面を１区、斜面から上段段丘面を２区として調査を開始した。その後の試掘により１区の北西約100ｍに土師器が出土し、そこを中心に調査区（３区）を広げたが、他に遺構・遺物は確認されなかった。

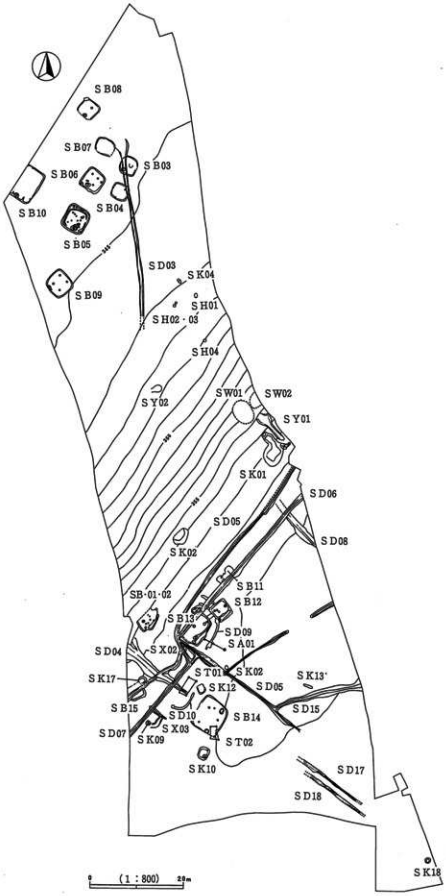
グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様により設定し(第１章２節３項参照)、大々地区と調査区との関係を第237図に示した。

調査の方法　重機によるトレンチ調査で遺構・遺物の確認されたところを、重機により全面表土剝ぎを行い、遺構の調査を行った。トレンチ調査時点で出土した遺物はトレンチごとに一括して取り上げ、その他遺構検出時に確認された遺構外の遺物は、２ｍ×２ｍの小地区単位で取り上げた。なお、１区の古墳時代の調査では遺構外の遺物についても出土地点を記録した。遺構の調査では、特に住居址の遺物の出土位置はほぼ全点記録した。更に、１区住居址の調査では、管玉、ガラス玉が出土する可能性があったため、

覆土を３㎜角のふるいにかけ、残った土をウォターセパレーションにかけた。その結果、ＳＢ０５以外には玉類がほとんど含まれていないことが判明した。遺構の調査終了後、数点の旧石器時代と思われる剥片が出土した上段段丘面で人力による試掘を行った。遺物が出土した試掘坑を中心に調査区を設定し、両刃鎌で掘り下げた。



第237図　牛出古窯遺跡　調査範囲



第238図　牛出古窯遺跡　遺構配置図

なお、遺物の取り上げと遺構の実測は㈱写真測図研究所のコーディクシステムによる単点測量を行った。

(2)　調査経過（調査日誌抄）

調査期間　平成５年（1993年）４月６日～同年７月２日、同年11月１日～同年12月22日

４月６日　斜面部表土剝ぎ開始。
４月７日　窯跡検出。
４月12日　発掘開始式。
４月13日　SB01･02検出。
４月14日　遺構掘り下げ開始。
４月15日　１区（下段段丘面）トレンチ調査。
４月21日　２区南部のトレンチ調査開始。
４月26日　１区で中世の埋葬施設を確認。
５月13日　１区で古墳時代の住居址（SB03～SB08）を検出。
　　２区遺構密集地区を除き確認調査終了。
５月20日　下段段丘面の道路北西側トレンチ調査開始。
５月24日　古墳時代住居址発掘開始。
　　覆土の水洗いを並行して行う。
５月26日　SB05より勾玉出土。
６月８日　SB09を確認。
６月12日　現地説明会。見学者90名
６月16日　SB05より鉄製品出土。
６月18日　空撮実施（㈱写真測図研究所に委託）。
６月24日　SB10掘り下げ開始、ガラス玉出土。
７月１日　地形測量（㈱写真測図研究所に委託）
　　SB10以外の１区遺構調査終了。
７月２日　貫ノ木遺跡調査のため調査を一時中断。
11月１日　調査再開。２区で表土剝ぎ開始。
11月４日　SB11･12の奈良時代住居址など遺構調査開始。
11月10日　旧石器時代と思われる剝片が数点出土。
11月11日　旧石器の確認のため試掘開始。
11月16日　１区でダメオシをして調査終了。
11月19日　古代の遺構調査と並行して旧石器時代の調査開始（ＳＱ０５・０６）。
11月22日　玄照寺跡より作業員合流。
12月３日　第２回目の空撮実施（２区）（㈱写真測図研究所に委託）。
12月８日　磨製石斧を含む旧石器時代ブロックを新たに確認（ＳＱ０７）。
12月13日　調査と並行して遺物の水洗い注記を開始。
12月17日　ＳＱ０７調査終了し牛出古窯遺跡の発掘作業終了。
12月21日　２区で重機による埋め戻し。
12月22日　機材を撤収し調査終了。

(3)　調査結果の概要

本遺跡では旧石器時代、古墳時代前期、奈良・平安時代、中世の遺構を調査した。段丘斜面部には奈良時代の須恵器窯跡が、その上方の上段段丘面（２区）には旧石器時代のブロックと奈良・平安時代の集落跡が、そして下段段丘面（１区）には古墳時代前期の集落跡と中世の墓跡が確認された。旧石器時代のブロックでは台形様石器と局部磨製石斧を伴う石器群が出土した。古墳時代前期の集落跡ではほぼ同時期と見られる竪穴住居址５棟・竪穴状遺構３基を調査し、箱清水式の特徴を残す在地の土器と東海系の土器が出土した。奈良・平安時代では、須恵器窯跡１基と、工房跡を含む住居址６棟、土師器焼成遺構と思われる焼土坑２基などを調査した。中世では古銭を伴う火葬骨の埋葬施設を３基調査した。この他にも、平安時代の埋葬施設と思われる遺構が１基検出されている。

(4)　基本土層　　本遺跡では段丘上段と下段で層序が異なっているが、第239図に示した段丘下段の土層観察ポイント３の層序を牛出古窯遺跡の基本層序とした。Ⅰ層は暗褐色土、Ⅱ層は黒褐色土、Ⅲ層は黒褐

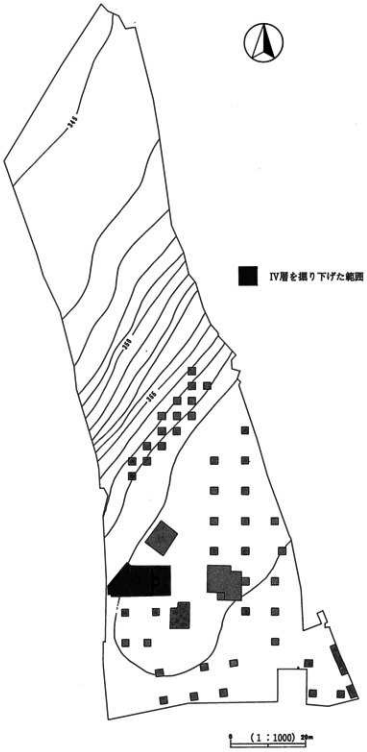
第239図　牛出古窯遺跡　基本土層

色土、Ⅳ層は黄褐色土である。Ⅲ層上面で中世の埋葬施設を確認し、Ⅱ・Ⅲ層中より奈良時代の須恵器が、Ⅲ層より縄文時代中期の土器片が出土している。

段丘上段では、ⅡまたはⅡ・Ⅲ層が欠落している。特に奈良時代の遺構が集中する段丘の縁辺部にはⅡ・Ⅲ層が欠落する。Ⅰ層の下面は不連続面で明瞭に分層され、Ⅱ層またはⅢ層が流失していることを示している。ポイント１の土層は、Ⅰ層が暗褐色の砂質土、Ⅲ層が黒褐色土、Ⅳ層は黄褐色シルトで段丘下段のⅣ層とは土質が異なり、旧石器時代の遺物を包含する。Ⅴ層は黄褐色粘土、Ⅵ層は黄褐色シルト、Ⅵ層以下は砂層とシルト層の互層が続きその下は砂礫層になる。この砂層と砂礫層が斜面部では検出面に露出する。

第２節　旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代の石器が検出された上段段丘面は、沢田鍋土遺跡、がまん洲遺跡などと同じ丘陵面である。その上段段丘面の調査区のほぼ全域に２ｍ×２ｍの試掘坑を設定しⅣ層を掘り下げ、遺物が発見された試掘坑を中心に４か所の調査区を設け、それぞれＳＱ０５、ＳＱ０６、ＳＱ０７、ＳＱ０８とした。ＳＱ０５・０６・０８にそれぞれ１つ、ＳＱ０７には３つの合計６つの遺物集中箇所が認められる。これらの集中箇所を以下のようにブロック１～６として捕えておきたい。ＳＱ０５調査区の遺物集中をブロック１、ＳＱ０６調査区の遺物集中をブロック２、ＳＱ０７調査区の遺物集中は東側からブロック３、ブロック４、ブロック５、ＳＱ０８調査区の遺物集中をブロック６とする（第241図）。これらのブロックは、段丘面の縁で周囲よりやや高まった場所に位置している。なお、調査はⅣ層上面まで重機で掘り下げ、そこから人力で掘り下げを行っている。試掘を行っていない所は、Ⅳ層上面を全面にわたって１cm弱掘り下げており、遺物点数が多いブロックを見落としている



第240図　牛出古窯遺跡　旧石器時代調査範囲

可能性はほとんど無い。

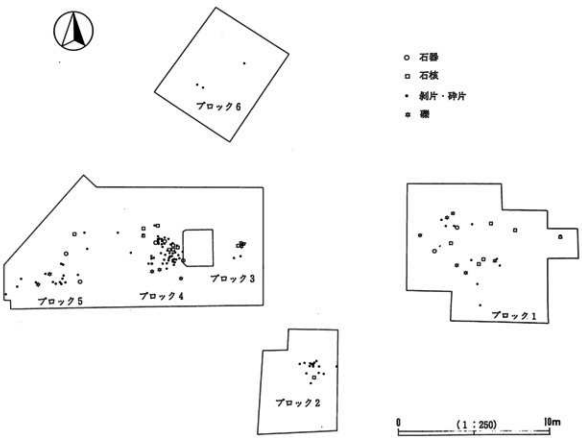
出土層位　耕作により浮き上がったものを除いて、すべの石器の出土層位は基本土層Ⅳ層（黄褐色シルト層）である。なお、同じ段丘面にある他の遺跡においても旧石器時代の遺物は本遺跡のⅣ層に相当する黄褐色シルト層より出土している。基本土層については１節に述べた。

さて、上段段丘面では基本土層Ⅲ層が欠落しているところがあり、ブロック２、ブロック５、ブロック６では中世以降の堆積層（Ⅱ層）の直下に旧石器時代の包含層（Ⅳ層）が続いている。そのような場所ではⅣ層の上部が流失しており、現在残されている遺物は、本来遺跡に残された遺物の全体ではなく部分であると考えられる。

以下に各ブロックの内容を示し、それぞれのブロックの関係について触れてみたい。なお、出土遺物は第244～第247図に示し、１～８はブロック１、27・28はブロック３、11～18・20～25はブロック４、９・10・19・26はブロック５である。各遺物の属性は付章遺物観察表に示した。

ブロック１（第242・244・245図）

局部磨製石斧未製品１点、二次加工のある剥片１点、剥片10点、石核４点、礫５点で構成され、およそ9.3m×6.4mの範囲に分布する。出土点数は少ないが、含まれる石材は黒曜石、蛇紋岩、流紋岩、チャート、砂岩、めのうとバラエティーに富む。また、剥片の数に比べ石核が多いのが特徴的である。ただし、Ⅳ層上面からも遺物が検出されており、上層に浮き上がったため失われた遺物があると思われる。



第241図　牛出古窯遺跡　旧石器時代遺物分布図

1は蛇紋岩の円礫に数回の大きな剥離痕が認められ、石材から考えて磨製石斧の素材もしくは未製品と思われる。2・3は分厚い板状の剥片を素材として周辺部から剥片剥離を行っているもので、同様の特徴を持つものを本報告書では石核とした。4は数回の打面転移を行っている石核である。石材は、2が砂岩、3が流紋岩、4がめのうである。礫は2kgを越えるものが2点で他は小形のものである。これらの礫は、2m～3mの間隔を置いて分布している。なお、断面図の長方形は礫の出土レベルを示す。

ブロック2（第242図）

石核1点、剥片・砕片15点から構成され、2.4m×1.6mの範囲に分布する。1ないし2個体の同一母岩からなる赤色チャートの石核と剥片が主体となり、珪質頁岩3点、安山岩と凝灰岩が各1点含まれている。遺物は表土直下のⅣ層上面より検出されている。本ブロックの上部は流失してしまった可能性が強い。

ブロック3（第243・247図）

石核1点、剥片2点、礫3点で構成され、直径1m以内に納まる小範囲に分布する。ブロック4に近接するが石材構成が異なるため少数ではあるが分離しブロック3とした。28は流紋岩の石核で2点の剥片と同一母岩と思われる。礫は安山岩と花崗岩で3点とも拳大の大きさでまとまって出土した。なお本ブロックは一部重機により掘り下げており、遺物のサンプリングエラーが他のブロックに比べ多い可能性がある。

ブロック4（第243・246・247図）

磨製石斧1点、台形様石器1点、スクレイパー1点、使用痕のある剥片1点、石核7点、剥片・砕片53点、礫3点より構成される。重機による試掘でブロックの東側が失われていた可能性が強いが、現在確認される分布範囲は3.2m×3.4mの範囲に納まる。石材構成では黒曜石と蛇紋岩が主体となるブロックで、この他に黄色の鉄石英が2点含まれる。

11は基部の二側縁に調整加工を施した台形様石器、12は掻器状の刃部のスクレイパーで、13には切断と微細な剥離痕が認められる。いずれも黒曜石である。9は刃部が丹念に磨かれている磨製石斧の欠損品で平面分布ではブロック5の中に含まれる。しかし、ブロック4の蛇紋岩の剥片と同一母岩と思われること、Ⅱ層より出土しており原位置から平面的にも移動していると考えられること、以上のことから9の磨製石斧はブロック4の分布範囲内にあったものが斜面下方に動いたと考えられ、本来はブロック4の遺物であったと理解しておく。また、蛇紋岩の剥片には研磨面が認められるものが多く、9と同一個体の可能性が高く、本ブロックの蛇紋岩の剥片は、磨製石斧の第1次的製作にかかわるものではなく、破損・破壊もしくは再加工によって生じたものであると判断される。また、砥石などの研磨具は認められない。礫はブロック周辺部に分布しており、5.7kgの人頭大ほどの大形の礫がある。礫表面は、発掘時の傷で使用痕があるか否か観察できない。

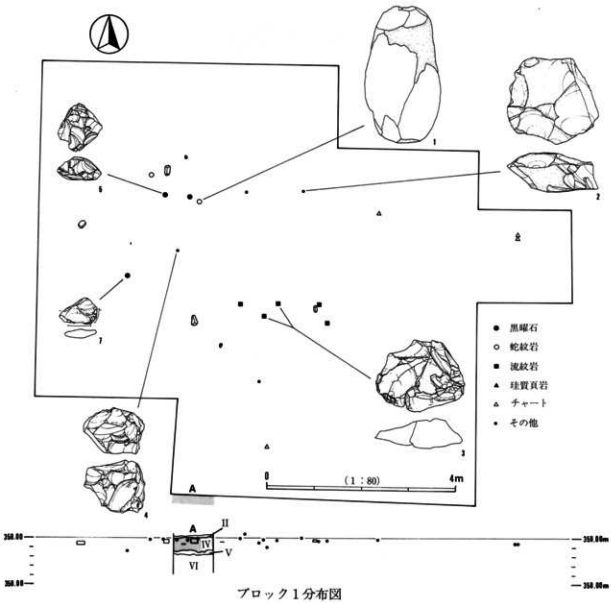
ブロック5（第243・246・247図）

台形様石器1点、石核1点、剥片・砕片18点、礫2点より構成される。ブロック4に比べ散漫に分布しており8.4m×2.9mの細長い範囲に分布する。石材構成は流紋岩、黄色い鉄石英、黒曜石、チャート、安山岩と多様で、それぞれの石材別に分布範囲を見ると更に小さな集中範囲が確認できる。2点の礫はほぼ同一レベルで出土しており、生活面のレベルを示していると思われる。本ブロックは地表面からおよそ25cmで検出され、遺物を包含するⅣ層は非常に薄く、Ⅳ層と共に遺物が流出した可能性が強い。

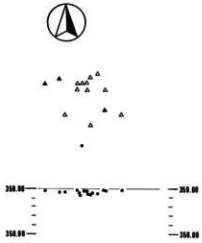
10の台形様石器は切断と裏面での剥片剥離により形状を作り出した後、基部表面に細かな調整加工を行っている。前述したが、9の磨製石斧はⅡ層中より出土したもので、本来ブロック4に含まれていたものと思われる。

ブロック6（第242図）

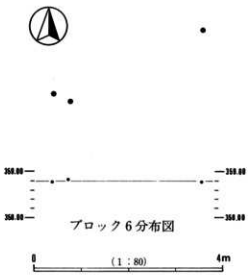
旧石器時代の調査を開始した検出面で剥片が認められ、調査区を設定し掘り下げたが、黒曜石の剥片が



ブロック１分布図

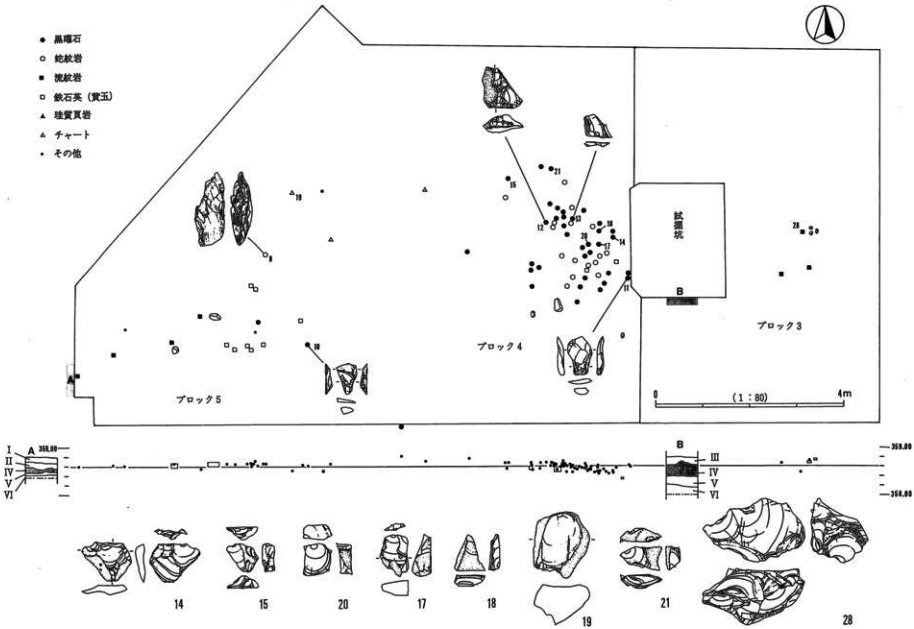


ブロック２分布図

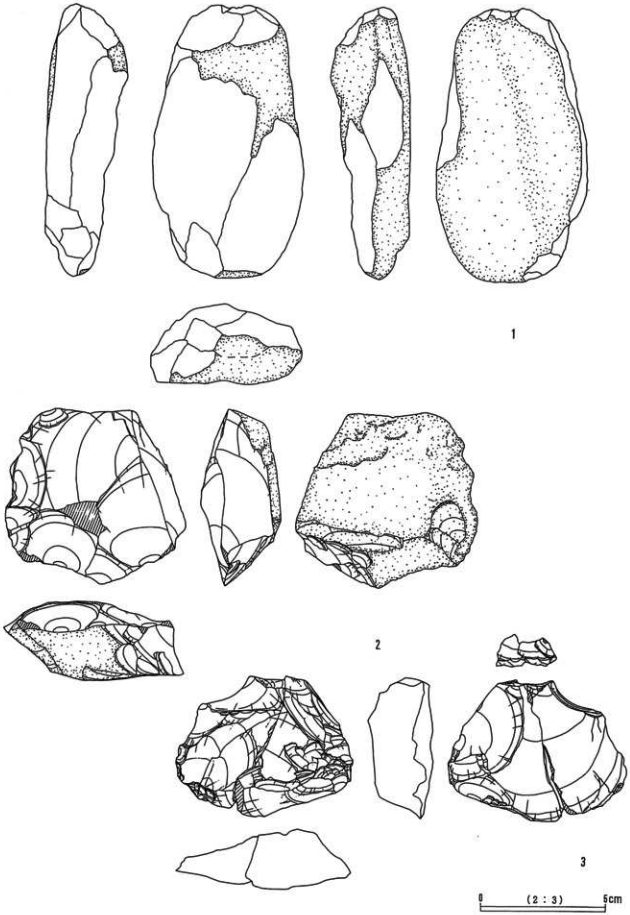


ブロック６分布図

第242図　牛出古窯遺跡　ブロック１・２・６石材別遺物分布図



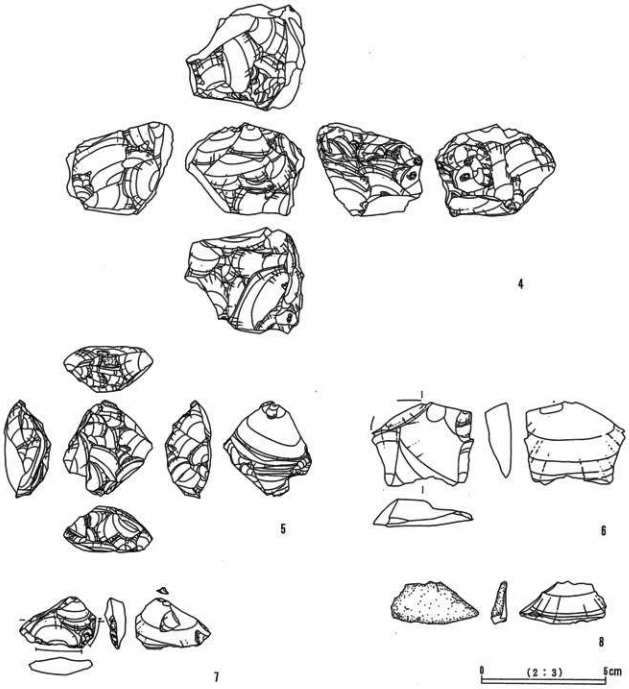
第243図　牛出古窯遺跡　ブロック3・4・5石材別遺物分布図



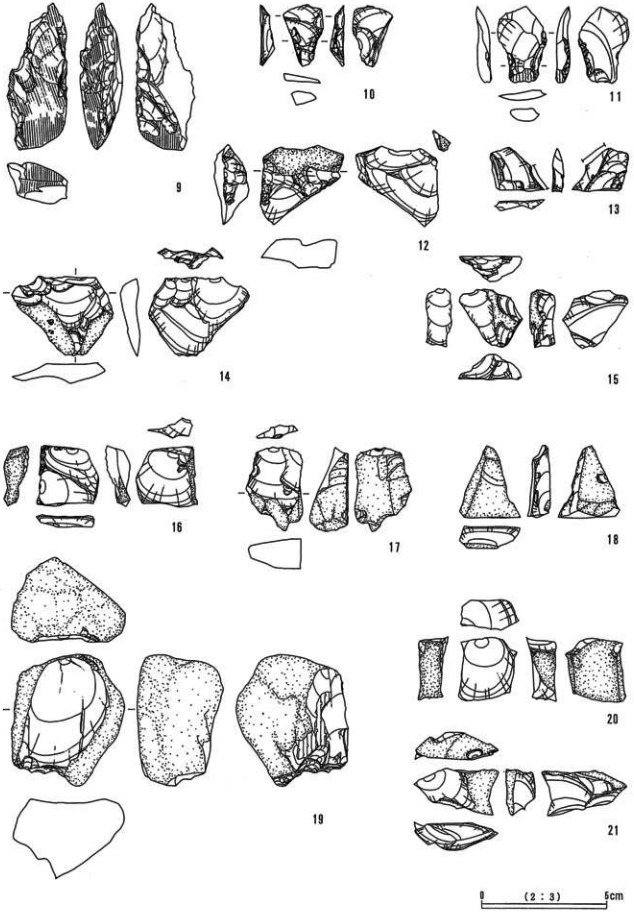
第244図　牛出古窯遺跡　ブロック１出土遺物(1)

３点出土したのみである。他ブロックと同様に包含層の流失が考えられ、更に多くの遺物より構成されていたブロックの残存と考えられる。

牛出古窯遺跡上段段丘面では、以上の６つのブロックが確認された。すべて本遺跡基本土層Ⅳ層より出土したものではあるが、周辺遺跡の状況と同様に、時期差を層位的に検出することは不可能であるため、出土層位でブロックの同時性は議論できない。ブロック４と５は類似する台形様石器の存在と同一母岩と思われる鉄石英が両ブロックに含まれていることから同時期に残されたものと判断できる。またブロック

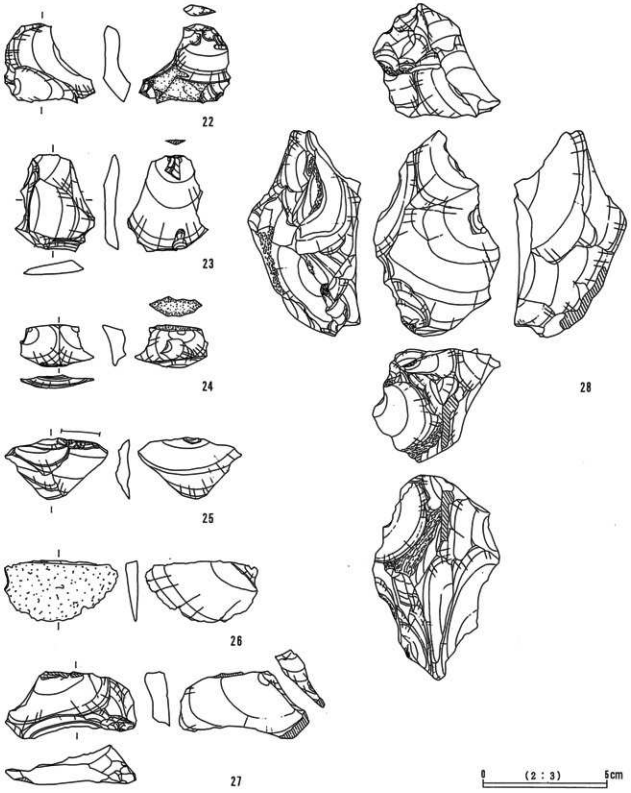


第245図　牛出古窯遺跡　ブロック１出土遺物(2)



第246図　牛出古窯遺跡　ブロック３・４・５出土遺物(1)

３はブロック５と同一母岩の可能性がある流紋岩を共有しており両者は同時期のブロックと判断できる。以上のことからブロック３・４・５は有機的関係を持つブロックと認定できる。ブロック１には磨製石斧の未製品と見られるものがあり、野尻湖遺跡群の調査成果によると本ブロックはＡＴ層より下位の石器群



第247図　牛出古窯遺跡　ブロック３・４・５出土遺物(2)

と考えられ、ブロック４との関連が想定される。他のブロックについては時期を判断する石器がなく、積極的に同時期性を示すデータは認められないが、ブロック２にはブロック５の石核（第246図19）と類似するものが認められ、石材もブロック間で相互に関連を持ち、すべてのブロックがおよそ37ｍの円の中に納まっていることから、ブロック２・６についても同時期の所産と考えるのが妥当と思われる。以上のことから本遺跡出土のブロックは何らかの有機的関係を持つブロック群と評価したい。

第３節　縄文時代・弥生時代の遺物

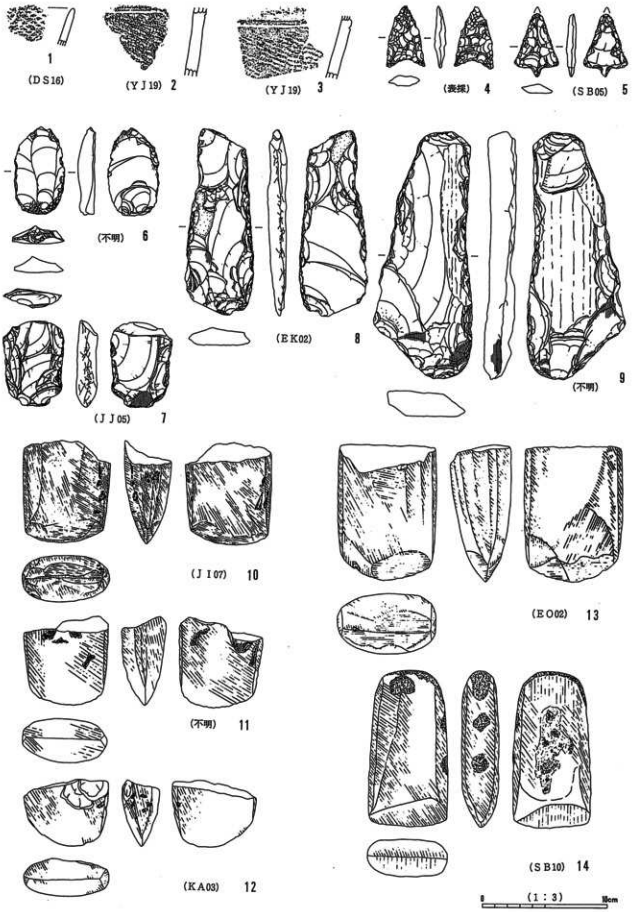
縄文時代から弥生時代の遺構は検出されず、土器片と石器が数点出土したのみである。

縄文時代の遺物（第248図）

土器では早期の楕円押型文と中期前葉の土器片が数点出土したのみである。中期の土器は調査区北隅に集中しており、調査区外に遺構が広がる可能性もある。石器では石鏃３点、打製石斧６点、スクレイパー１点、石核３点、剥片19点が出土している。

弥生時代の遺物（第248図）

弥生時代中期と思われる甕の破片数点と太形蛤刃石斧が出土した。甕は縦羽状の櫛描直線文の胴部破片で、弥生時代後期の終わりから古墳時代にかけての遺物の可能性もあり４節の第272図に示した。磨製石斧は５点出土しており、その内４点は下段段丘面より出土したものである。完形品はＳＢ１０覆土より出土した１点のみ（14）で、他は刃部のみの欠損品である。14は他の４点に比べ扁平であること、完形品であること、側面及び正面に敲打痕を有すること、住居内覆土出土ということ、以上のことから14の磨製石斧は、他の４点とは異なった経緯で本遺跡に残されたものであると推測される。すなわち、10～13は弥生時代中期の遺物であり、14は古墳時代前期には転用されて使われた可能性がある。



第248図　牛出古窯遺跡　縄文・弥生時代の遺物

第４節　古墳時代の遺構と遺物

１　概要

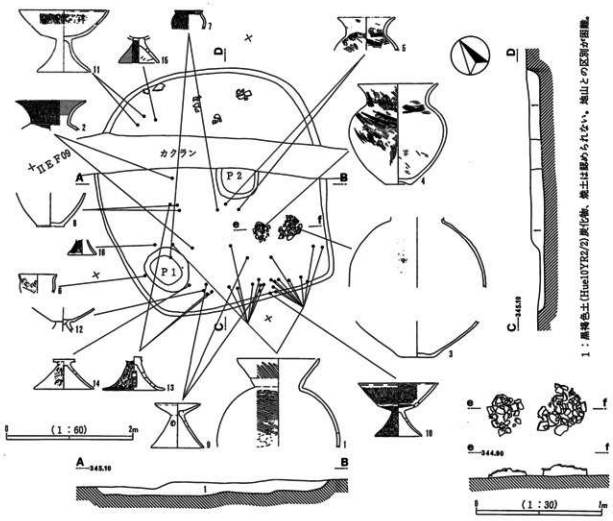
下段段丘面に古墳時代前期初頭の集落跡が検出され、当該期の竪穴住居址が５棟と竪穴状遺構の３基を調査した。後者は形状が竪穴住居址に類似するものの、規模が小さく炉跡、柱穴、貯蔵穴などの施設が検出されず竪穴状遺構として区別した。この他に、直径30cm前後のピットが１８基発見されたが掘立柱建物址と認められるものはない。なお、ＳＢ０５（５号住居址）からは骨片、管玉、勾玉、ガラス小玉、砥石、ヤリガンナなどが出土しており、住居址内の埋葬施設を想定させる遺物の出土状況が確認された。

古墳時代前期の遺構集中区より北西に100ｍの地点で、古墳時代中期と思われる土師器片が十数片出土しているが、遺構は検出されなかった。なお、図示した土器の観察記録は付章の遺物観察表に掲載した。

２　竪穴住居址・竪穴状遺構

ＳＢ０３（３号竪穴状遺構）（第249・250図）

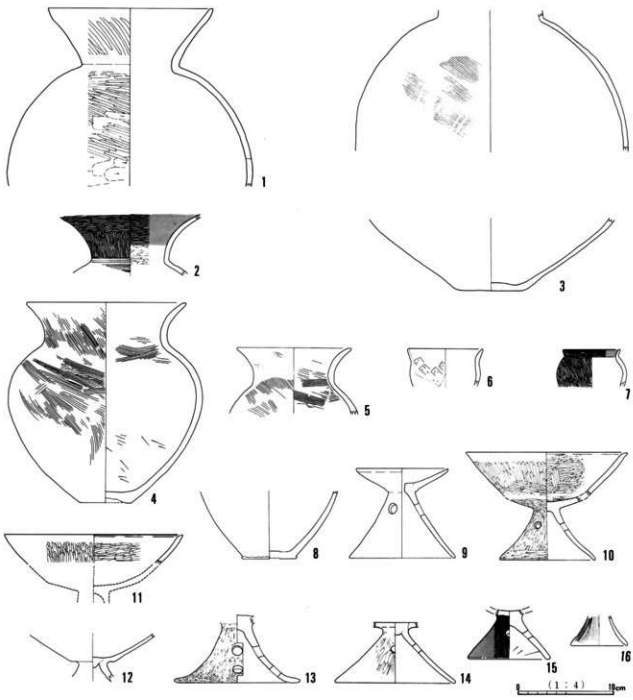
遺構の構造　3.54ｍ×3.80ｍの隅丸方形を呈している。ただし、壁際の覆土と地山の区別が非常に困難



第249図　牛出古窯遺跡　ＳＢ03

で、住居址の形態も不明確である。床面もはっきりとは確認できず掘り下げ過ぎたところもある。ピットが２ケ所検出されたが、柱穴と思われるものはなく、炉跡も確認できない。床面からの深さはＰ１が14cm、Ｐ２が18cmで、覆土は住居址覆土と類似するが、本遺構に付属する施設であるとは断定できない。遺構中央部が配水管施設により撹乱されている。

遺物出土状況　第249図に出土地点を示した土器はすべて覆土下部から床面にかけて出土したものである。このうち床面出土の土器は、３・４・９・12・13・14である。３と４は床面に破片がまとまって出土したが、失われた破片があり完形にはならない。これらは住居内に廃棄され、その後押しつぶされたもの



第250図　牛出古窯遺跡　ＳＢ03出土遺物

と思われる。このうち３は６号住居址の２と同一固体である可能性が高い。これらに対し、１は接合する破片が比較的広範囲に分布しており、破片となったものを住居内に廃棄したものと思われる。10はEF14グリッドおよび４号住居址出土の破片と接合している。検出面よりガラス玉が１点出土した。Ｐ１・２からは遺物は出土していない。

出土遺物　図示したものの他に、口縁部破片で、櫛描波状文・簾状文を有する甕（以下箱清水系の甕とする）１片、高坏６片（この内赤色塗彩されたもの２片）、土師器壺・甕９片、鉢形土器１片、その他１片、ガラス小玉１点（第257図12）がある。なお、覆土中に奈良時代の須恵器片が３点混入している。

ＳＢ０４（４号竪穴状遺構）（第251・252図）

遺構の構造　3.48ｍ×3.28ｍの隅丸方形を呈し、検出面より10㎝～14㎝の深さである。床面は不明瞭で、硬緻な部分は検出されない。小さなピットが３ケ所確認されたが本遺構の施設であるかは不明である。柱穴や炉跡は検出されず覆土にも炭化物等は含まれず、土器以外には人の行為の痕跡が感じられない遺構である。

遺物出土状況　図示したもののうち、６以外は覆土下部から床面にかけて出土したものである。ただし、床面から出土したものと検出面から出土したものが接合している例もあり、出土レベルの差は余り有為なものではない。４・７・８の３点は床面に横倒しの状態で出土し、一部を欠損しているもののほぼ完形に復元できるものである。なお７はピットの覆土上面に出土しており、出土レベルが当時の床面であったと推定すると、Ｐ１は本遺構の廃棄時には埋没していたものと思われる。

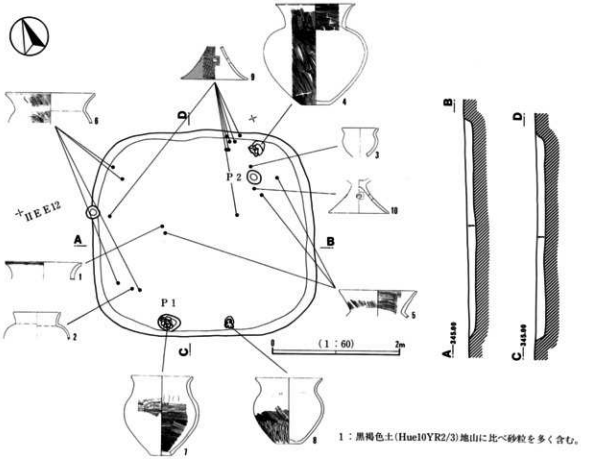
出土遺物　図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系甕１片、土師器壺・甕４片、高坏11片（この内赤色塗彩された高坏５片）、器台１片が出土している。なお、奈良時代の須恵器片が２片混入している。

ＳＢ０５（５号竪穴住居址）（第253～257図）

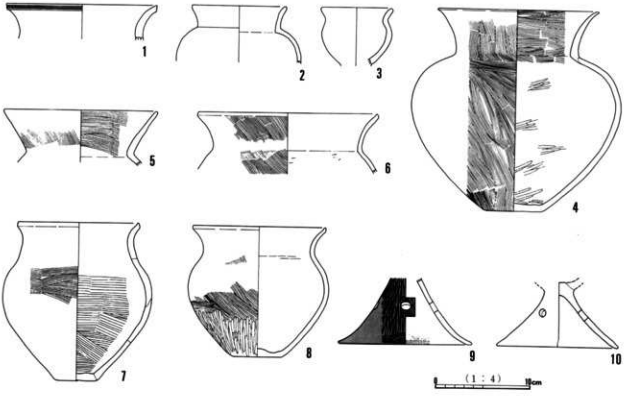
本遺構は拡張を行っており、新旧二段階の遺構が重なっている。拡張以前を５ａ号住居、拡張した新しいものを５ｂ号住居として記述する。なお、土層断面でも切り合いは非常に確認しにくく、覆土掘り下げ中には５ｂ号住居の床面を明確に捕らえることができず、５ａ号住居の床面まで一気に掘り下げており、遺物の出土状況と残されたセクションベルトの観察とから新旧関係を明らかにした。すなわち、後述するＢ群の遺物群が５ａ号住居の壁立ち上がりを覆っており、５ａ号住居の方が古いと判断した。また、遺物の出土状態から５ｂ号住居が住居としての機能を失った後、埋葬施設になったと考えられる。

遺構の構造　５ａ号住居は内側のわずかに窪んだ部分で、およそ4.40ｍ×4.00ｍの隅丸方形を呈し、検出面より37㎝の深さである。Ｐ３・９・７・12が柱穴に相当すると思われ、深いもので床面から70㎝、浅いものでも35㎝である。Ｐ12の断面観察によると、深さ30㎝のところで柱穴の直径が17㎝に対し柱痕は10㎝であった。床面に火床面が検出されたが、柱穴から想定される中心線からははずれた位置にある。この火床面は床面を掘り下げ過ぎたためにわずかに焼土と思われるものが認められたのみであるが、地床炉の底面であると思われる。南東壁の一部に周溝と思われる溝が検出された。

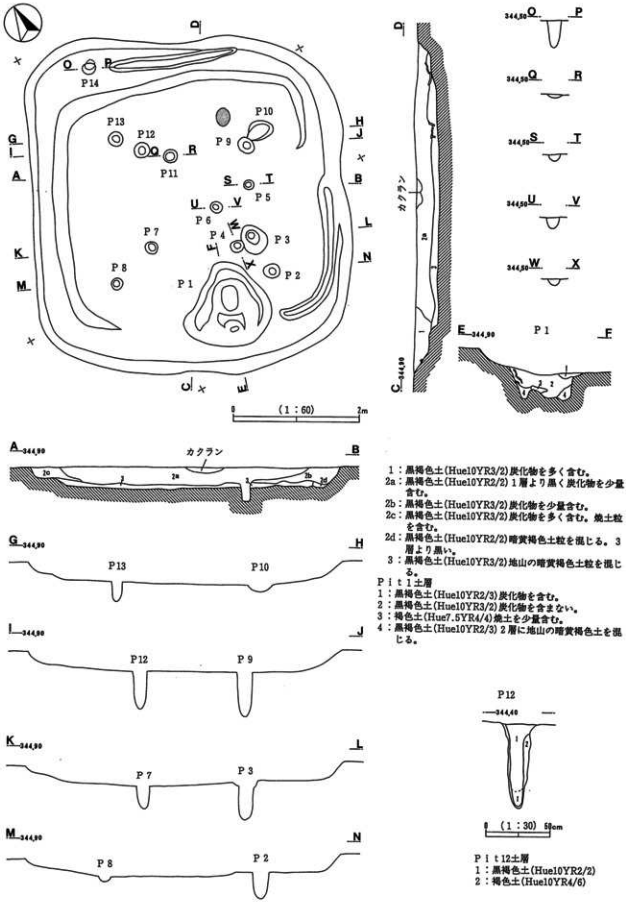
５ｂ号住居は、５ａ号住居址よりも一段高い床面で、4.94ｍ×5.28ｍの隅丸方形を呈し、検出面よりおよそ30㎝の深さで床面となる。Ｐ２・８・10・13が柱穴に相当すると思われるが、Ｐ10は非常に浅く不定形であり、５ａ号住居の柱穴としたＰ９が５ｂ号住居の柱穴として機能していた可能性もある。Ｐ１は上端では不整な形状をしているが、底面部分では隅丸の方形を呈しており、およそ100㎝×60㎝、深さ80㎝の規模の貯蔵穴と思われる。５ｂ号住居の床面を３層上面とすると、炉跡と思われる焼土は検出されていない。遺物の出土状況から考えて、５ａ号住居の床面を共用することはあり得ないので、先に述べた炉跡を



第251図　牛出古窯遺跡　ＳＢ04



第252図　牛出古窯遺跡　ＳＢ04出土遺物

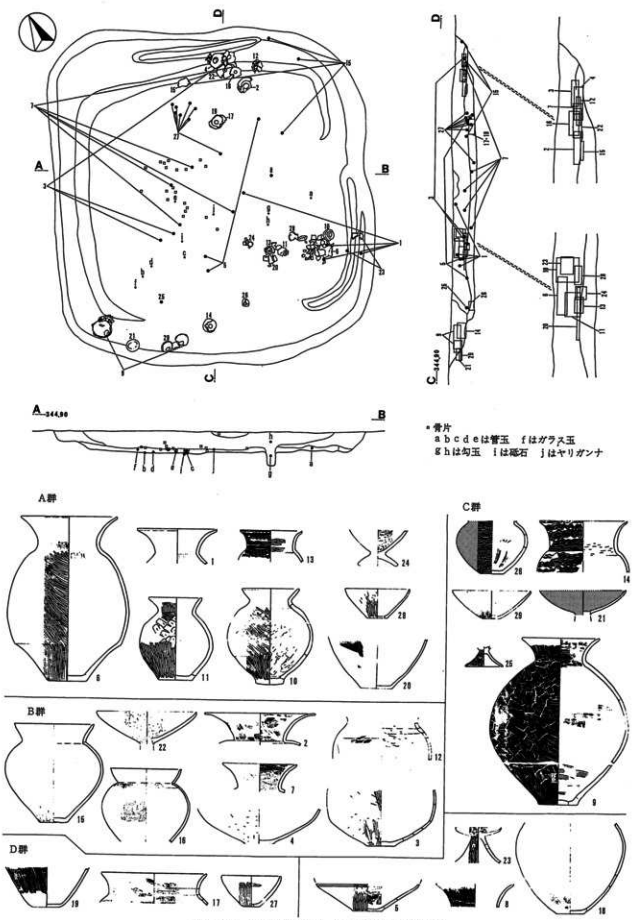


1：黒褐色土(Hue10YR3/2)炭化物を多く含む。
2a：黒褐色土(Hue10YR2/2) 1層より黒く炭化物を少量含む。
2b：黒褐色土(Hue10YR3/2)炭化物を少量含む。
2c：黒褐色土(Hue10YR3/2)炭化物を多く含む。焼土粒を含む。
2d：黒褐色土(Hue10YR2/2)暗黄褐色土粒を混じる。3層より黒い。
3：黒褐色土(Hue10YR3/2)地山の暗黄褐色土粒を混じる。

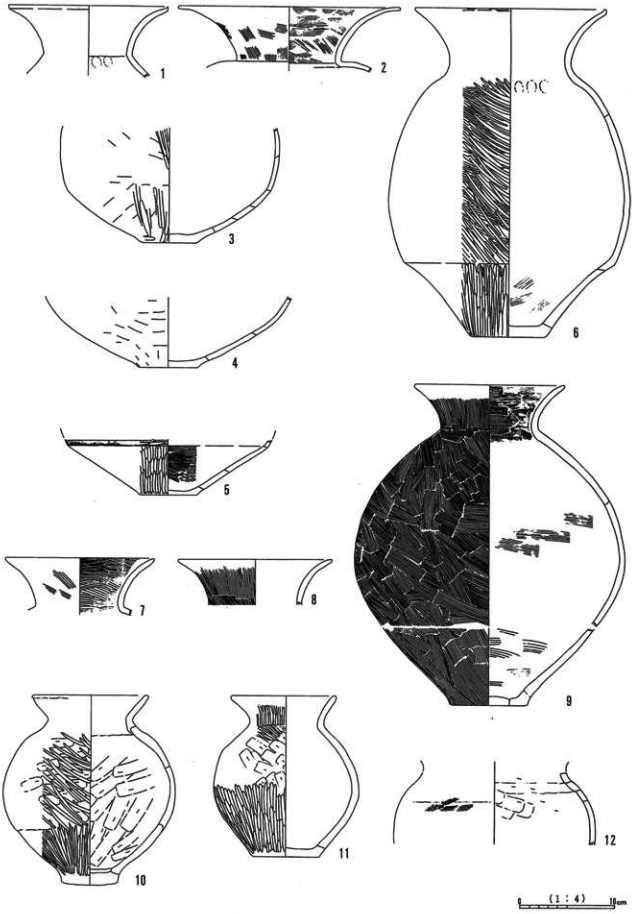
Ｐｉｔ１土層
1：黒褐色土(Hue10YR2/3)炭化物を含む。
2：黒褐色土(Hue10YR3/2)炭化物を含まない。
3：褐色土(Hue7.5YR4/4)焼土を少量含む。
4：黒褐色土(Hue10YR2/3) 2層に地山の暗黄褐色土を混じる。

Ｐｉｔ12土層
1：黒褐色土(Hue10YR2/2)
2：褐色土(Hue10YR4/6)

第253図　牛出古墳遺跡　ＳＢ05



第254図　牛出古窯遺跡　ＳＢ05遺物出土状況

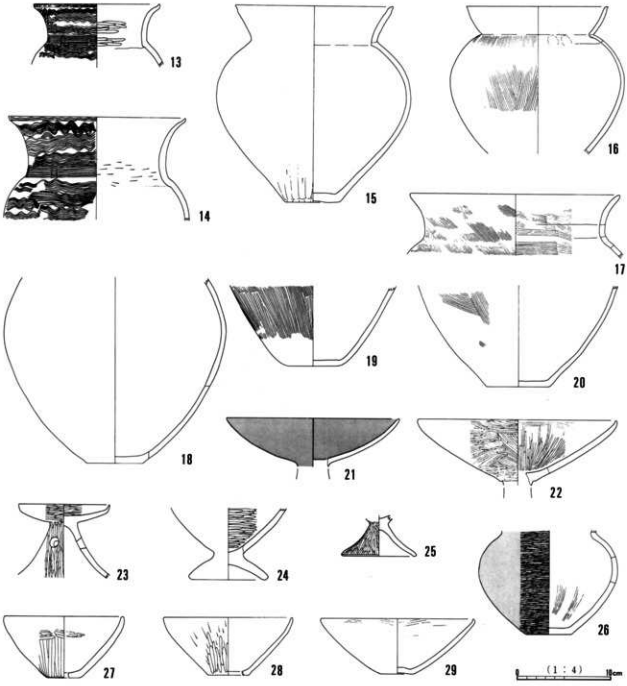


第255図　牛出古墳遺跡　ＳＢ05出土遺物(1)

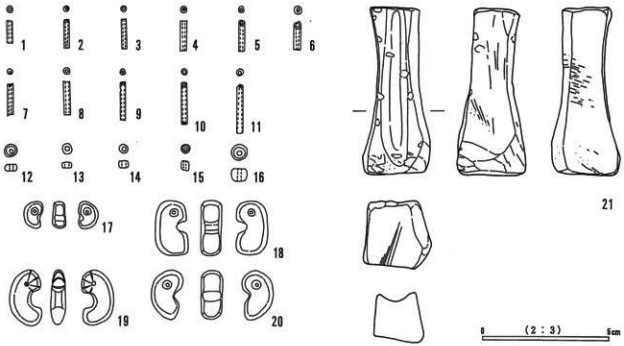
共用することは考えられない。北東壁際に浅い溝と住居内側に傾いたＰ14が検出されたが、本遺構の施設か否かは判断できない。この他に浅いピット（Ｐ５・６・11）が検出されており、このうちＰ５は５ｂ号住居の施設であることがセクションベルトの観察から確認されている。また、後述する玉類の出土状況から覆土内埋葬の可能性もあるためセクションベルトを観察したが、覆土内の掘り込みは確認できなかった。

覆土　１層、２a層、２b層は類似した層である。２c層は多量の焼土と炭化物が含まれた層で、北西壁際に帯状に広がっている。また３層には地山の暗黄褐色土粒が含まれており、埋め戻しによる堆積と判断される。

遺物出土状況（第254図）　完形、もしくは完形に近い形の土器が多く出土しているのが特徴的である。



第256図　牛出古窯遺跡　ＳＢ05出土遺物(2)



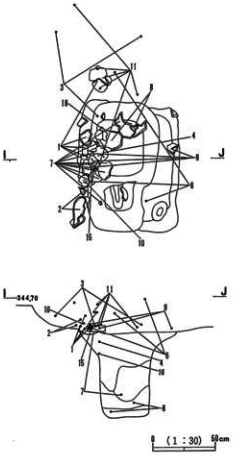
第257図　牛出古墳遺跡　ＳＢ05他出土玉類など

第11表　牛出古墳遺跡　玉類観察表

図版No.	整理No.	遺構名	器種名	石材	色調	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考
図－1	3011	ＳＢ05	管玉	滑石	緑灰色	9	3		完形　片面穿孔
〃 2	3006	ＳＢ05	管玉	鉄石英	赤	11	3		完形　片面穿孔
〃 3	3003	ＳＢ05	管玉	滑石	緑灰色	12	2		完形　片面穿孔
〃 4	3010	ＳＢ05	管玉	滑石	緑灰色	11	3		完形　片面穿孔(片面割れ)
〃 5	3010	ＳＢ05	管玉	鉄石英	暗赤褐色	12	3		欠損　片面穿孔
〃 6	3013	ＳＢ05	管玉	鉄石英	赤	11	3		欠損　片面穿孔
〃 7	3012	ＳＢ05	管玉	鉄石英	暗赤褐色	13	2		欠損　片面穿孔
〃 8	3013	ＳＢ05	管玉	めのう	乳白色	13	3		完形　片面穿孔
〃 9	3007	ＳＢ05	管玉	鉄石英	暗赤褐色	15	3		欠損　片面穿孔
〃 10	3004	ＳＢ05	管玉	滑石	緑灰色	16	3		完形　片面穿孔
〃 11	3009	ＳＢ05	管玉	滑石	緑灰色	19	3		欠損　片面穿孔
〃 12	3001	ＳＢ03	ガラス玉	ガラス	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	3	5		
〃 13	3013	ＳＢ05	ガラス玉	ガラス	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	2	4		
〃 14	3013	ＳＢ05	ガラス玉	ガラス	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	3	4		
〃 15	3017	ＳＢ10	ガラス玉	ガラス	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	4	3		
〃 16	3002	ＳＢ05	ガラス玉	ガラス	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	5	6		
〃 17	3008	ＳＢ05	勾玉	ヒスイ		11	7	6	両面穿孔
〃 18	3005	ＳＢ05	勾玉	ヒスイ		22	14	10	両面穿孔
〃 19	3015	ＳＢ05	勾玉	不明	黒褐色	22	12	5	片面穿孔？
〃 20	3016	ＳＢ09	勾玉	ヒスイ		20	14	10	両面穿孔
〃 21	3014	ＳＢ05	砥玉	砂岩		67	27	27	47.3g

床面付近から骨片、管玉、勾玉、ガラス小玉、砥石、ヤリガンナ？が出土しており埋葬施設である可能性を指摘できる。なお骨片については、小破片であるため人骨とは断定できない。玉類は出土地点を示したもの以外にも覆土のウォーターセパレーションにより検出されており、合計で管玉11点、勾玉３点、ガラス小玉３点が出土している。ＳＢ０５以外の住居址の覆土もすべてウォーターセパレーションを行った結果、本住居址の玉類の出土数は特別に多い(第11表)。これらの玉類は副葬もしくは住居廃絶時に遺棄されたものと思われる。本遺構は床面出土の遺物が多く、出土状態から大きく４群に分けて捕らえることができる。Ａ群は１・６・10・11・13・20・24・28の８個体で、５ｂ号住居の床面にまとまって出土したものである。６・10・11は完形品に復元され、出土状態から見て特に一括性が高い。６の出土レベルが他に比べ高いのは、直立状態で置かれていたものが、埋没過程で横転したため出土レベルが高くなったと判断される。Ｂ群は２・３・４・７・12・15・16・22で、５ｂ号住居北東壁際にまとまって出土した一群である。重なるように出土しており非常に一括性の高い一群である。なお、Ａ群に含めた１は３と同一個体と思われる。Ｃ群は、９・14・21・25・26・29で、５ｂ号住居の南西壁際に並んで出土した一群である。９は胴部以上の部分と底部が離れて出土したもので完形には復元できず、破損してから本住居に持ち込まれたものである。26はＰ１の上面で出土したもので出土レベルがやや低く、Ｐ１埋没後に廃棄されたものである。Ｄ群は、17・19・27で、５ａ号住居床面で出土し、17と19は重なって出土している。なお８はＰ５内、18はＰ１内より出土している。

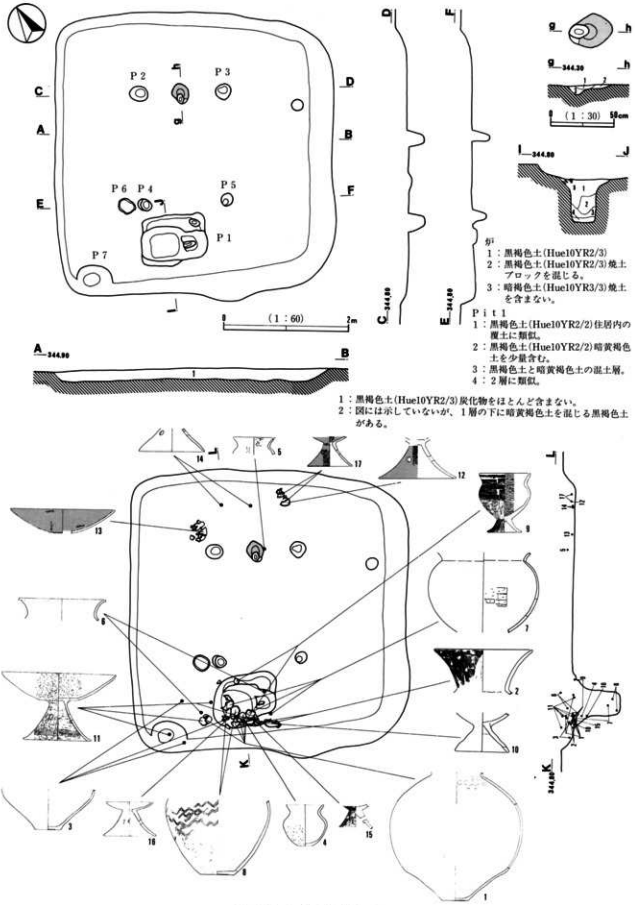
出土遺物　図示したものの他に口縁部破片で、箱清水系甕８片、その他壺甕10片、小形土器１片、高坏13片（その内赤色塗彩されたもの２片）が出土した。土器以外では管玉11、勾玉３、ガラス小玉３、砥石１、ヤリガンナ？１が出土した（第257図）。なお、覆土中に縄文式土器１点、弥生時代中期土器片１点、奈良時代の須恵器片４点が混入している。



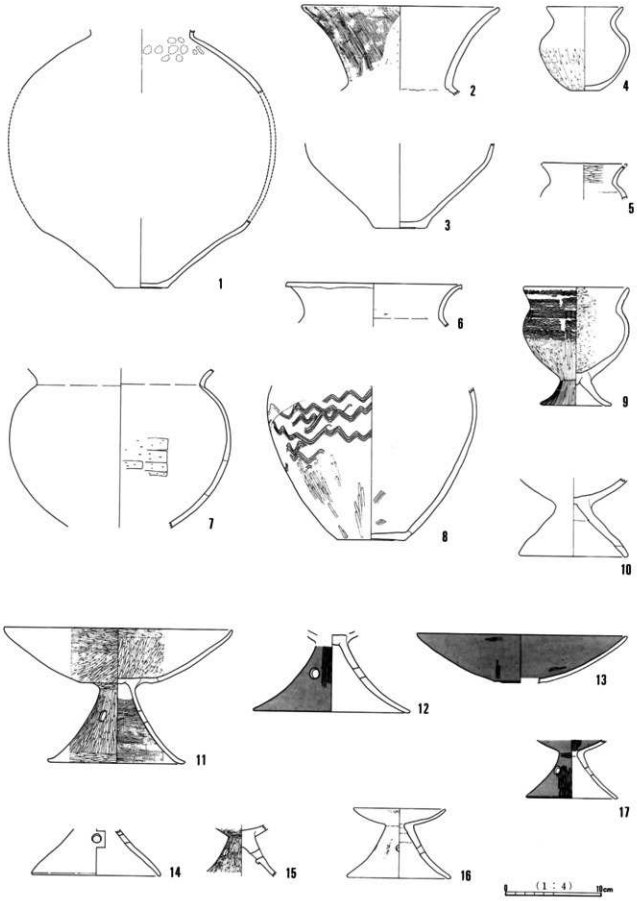
第258図　牛出古窯遺跡ＳＢ06Pit１遺物出土状況

ＳＢ０６（６号竪穴住居址）(第258～260図)

遺構の構造　4.38ｍ×4.43ｍの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さはおよそ20㎝である。柱穴はＰ２・３・４・５で、直径18㎝～24㎝、深さ24㎝～30㎝である。Ｐ１は３段構造になっており、１段目は1.0ｍ×0.8ｍで浅い窪み状のもので、２段目は床面からの深さ約30㎝のテラス状、３段目は深さ72㎝で65㎝×55㎝の長方形の底面は平坦になる。炉跡は地床炉でＰ２とＰ３の中間に位置し、床面から７㎝窪んだ皿状の火床面が確認された。火床面は一部がさらに深く掘られて落ち込んでいるが、その部分の覆土には焼土が含まれていない。Ｐ７は深さ10㎝ほどの浅い皿状に窪むピットである。住居址の覆土は黒褐色土で分層できず単層である。



第259図　牛出古墳遺跡　ＳＢ06



第260図　牛出古窯遺跡　ＳＢ06出土遺物

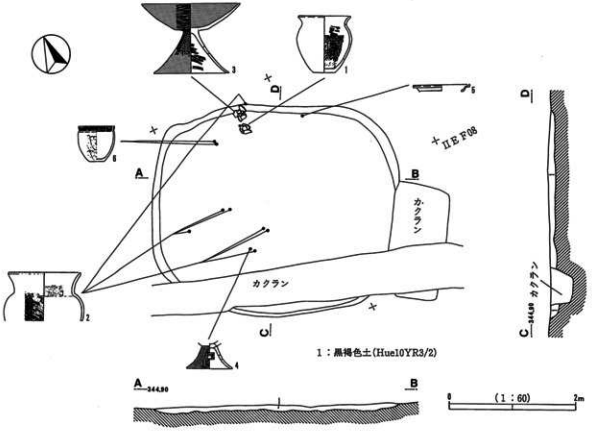
遺物出土状況　第258・259図に出土状況を示した。Ｐ１の上面からやや落ち込んだところにまとまって遺物が出土している。図の１・２・３・４・６・７・９・10・11・15・16がそれに当たり、出土状況から一括性の非常に高い遺物群である。７はピットの底部付近から出土したものとピット上面出土のものが接合したもので、これらの遺物群がＰ１埋没開始時にはすでに本住居内に存在していたと考えられる。すなわち、壁際に置かれていた土器群が、Ｐ１が完全に埋没する直前に崩れ落ちた、と推定できる。以上の解釈が正しいとすると、Ｐ１の下部から出土した８の甕もこれら一群の土器と一括遺物であると考えられる。この他に12・13・17も床面から出土したもので、本住居にともなう遺物である。

出土遺物　図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系の甕１片、箱清水系の壺３片、その他壺甕10片、広口短頸壺？１片、高坏12片が出土している。なお、奈良時代の須恵器片17点が混入している。

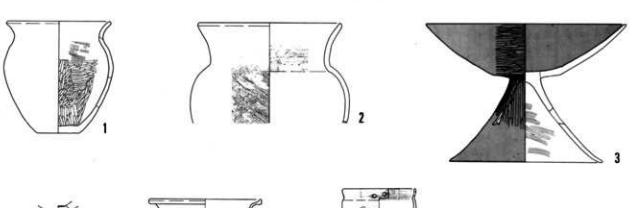
ＳＢ０７（７号竪穴状遺構）（第261・262図）

遺構の構造　3.92ｍ×3.34ｍの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さはおよそ５㎝～10㎝である。柱穴、炉跡、貯蔵穴などの施設はなく、床面は明瞭には確認できない。配水管埋設などにより一部破壊されている。覆土は黒褐色土の単層で、地山の土とは区別し難く、やや黒ずんだ範囲を遺構として掘り下げたもので立ち上がりも明確には確認できなかった。

遺物出土状況　１・３が床面から出土したものである。他は、覆土中より出土したものである。出土遺物は他の遺構に比べ少なく、図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系の甕１片、土師器甕２片、高坏４片（この内赤色塗彩のもの３片）が出土している。



第261図　牛出古墳遺跡　ＳＢ07遺物出土状況



第262図　牛出古窯遺跡　ＳＢ07出土遺物

ＳＢ０８（８号竪穴住居址）（第263・264図）

遺構の構造　3.90ｍ×推定3.70ｍの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さはおよそ４㎝～８㎝と浅い。床面は明確に捕らえることができず、柱穴は確認されない。炉は地床炉で、皿状に約５㎝窪んだ火床面が確認されている。Ｐ１は貯蔵穴と思われ、配水管埋設により一部破壊されているが、60㎝×推定70㎝の隅丸の長方形で床面から深さ45㎝、底面は平坦である。

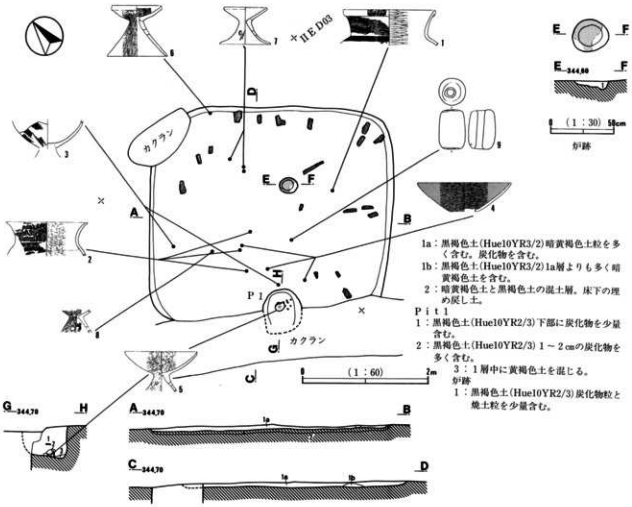
遺物出土状況　図示したものでは２・４・９が検出面より出土したもので他は床面直上出土である。５はＰ１底面に置かれた状態で出土した高坏で脚部が欠損している。この高坏の上にのる２層中には直径１㎝～２㎝の炭化物が多量に含まれており、そのうち10片の樹種同定をしたところ、同定可能な８点すべてがブナ科コナラ属クヌギ節（クヌギなど）であった。また、住居床面付近には18点の炭化材が出土した。これらは長さ15㎝～38㎝の板材及び丸太材で、建築部材の一部であろう。同定の結果17点がブナ科コナラ属クヌギ節、１点がブナ科コナラ属コナラ節（コナラ・ミズナラ、カシワ、ナラガシワなど）である。なお、樹種同定は㈱パレオ・ラボの藤根久氏に依頼した。[注1]

出土遺物　図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系甕１片、箱清水系壺１片、土師器甕１片、壺１片、高坏５片（この内赤色塗彩のもの２片）、内湾口縁鉢３片が出土している。土器以外では大形の土錘が１点出土した。なお、奈良時代の須恵器片４点が混入している。

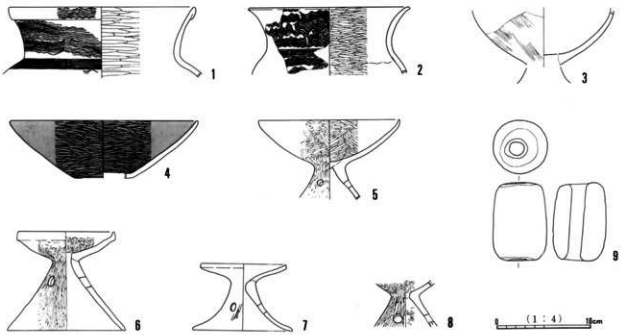
ＳＢ０９（９号竪穴住居址）（第265～267図）

遺構の構造　4.98ｍ×4.80ｍの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さは約20㎝である。覆土と地山の土が類似しており立ち上がりが不明瞭で床面は他の住居址同様堅緻な部分は認められず、床面の検出が困難である。柱穴はＰ２・３・４・５で直径約30㎝、深さはＰ２以外は25㎝前後で、Ｐ２のみ40㎝となる。Ｐ２とＰ３の間の焼土が炉の痕跡と思われるが、薄い焼土層が確認されたのみで他の地床炉で認められる窪みは確認されない。貯蔵穴と思われるＰ１は48㎝×65㎝の隅丸の長方形、深さ40㎝で底面は平坦となり、完形の壺が置かれている。Ｐ６は直径30㎝深さ15㎝で本遺構の施設であるか否か不明である。

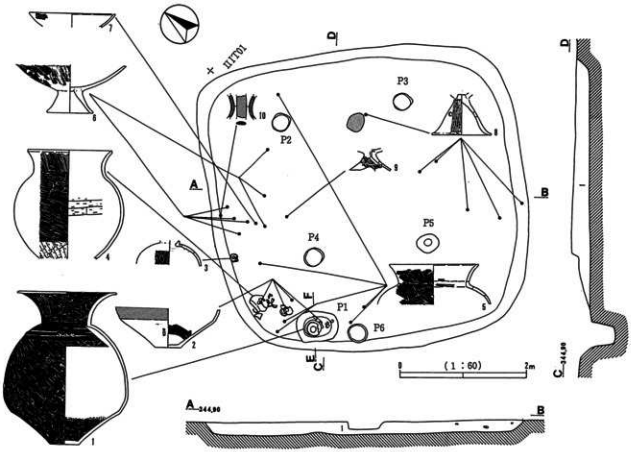
Ｐ１の覆土中より炭化材の小片が出土しており、樹種同定の結果12点がブナ科コナラ属クヌギ節、１点がブナ科コナラ属コナラ節（コナラ・ミズナラ、カシワ、ナラガシワなど）である。このような状況はＳＢ０８の貯蔵穴と思われるＰ１にも見られる。すなわち、①底面付近にまとまって炭化材の小片が出土する。②出土する炭化材はほとんど全てがクヌギ節１種であり、まとまって出土した炭化材がで同一固体で



第263図　牛出古窯遺跡　ＳＢ08遺物出土状況



第264図　牛出古窯遺跡　ＳＢ08出土遺物

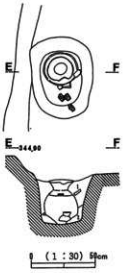


1：黒褐色土(Hue7.5YR3/2)炭化物粒を少量含む。

第265図　牛出古窯遺跡　ＳＢ09遺物出土状況

ある可能性がある。以上の２点から、ＳＢ０８とＳＢ０９の住居廃絶後の貯蔵穴に材が落ち込んだと推定され、その材は貯蔵穴の上に乗せられていた可能性がある。ただし、炭化材が小片であるため材が板材であったのか丸太材、角材であったのかは判別できない。更に、ＳＢ０５、ＳＢ０６、ＳＢ１０の貯蔵穴では、いわゆる二重ピットのように浅い窪みがめぐらされている痕跡が認められた。これは蓋を落とし込むためのものと考えられ、他の住居址に於ても、住居使用時には貯蔵穴に何らかの蓋が被せてあった可能性が強いと推定される。なお、上記の樹種同定は㈱パレオ・ラボの藤根久氏に依頼した。(註3)

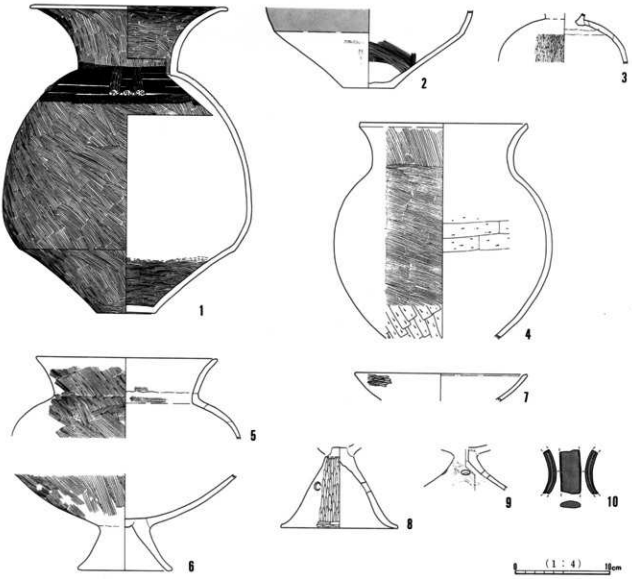
遺物出土状況　１はＰ１内より完形で出土した壺で住居使用時にピット内に置かれていたものと思われる。甕内には土のみが詰っており、他には何も検出されなかった。図示したものの中で２・３・４は床面出土の遺物で、２は床面から出土したものとＰ１内の甕に接して出土したものが接合している。また、他の図示した遺物はすべて覆土の下半部より出土したものである。



1：黒褐色土(Hue10YR2/2)炭化材と焼土を含む。
2：暗褐色土(Hue10YR3/3)地山暗黄褐色土を混じる。

第266図　牛出古窯遺跡　ＳＢ09Pit１

出土遺物　１・２は箱清水系の壺形土器で、２は赤色塗彩されているが、１は全面ハケ調整により赤色塗彩は見られない。３は表面が丁寧にみがかれ、内面には輪積痕が明瞭に残る。４・５・６は甕形土器、



第267図　牛出古窯遺跡　ＳＢ09出土遺物

７～９は高坏で、７は口縁端部に面取りをした東海系の高坏と思われる。10は両端を欠損し、全面に赤色塗彩された何かの把手の一部かと思われる。図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系の壺形土器５片、土師器の甕形土器７片、高坏13片（その内赤色塗彩されたもの２片）が出土している。覆土のウォーターセパレーションにより勾玉（第257図20）が１点見つかったが、作業時の手違いでこの勾玉がＳＢ０５の遺物である疑いがある。なお、縄文式土器１片、奈良時代の須恵器片２点が混入している。

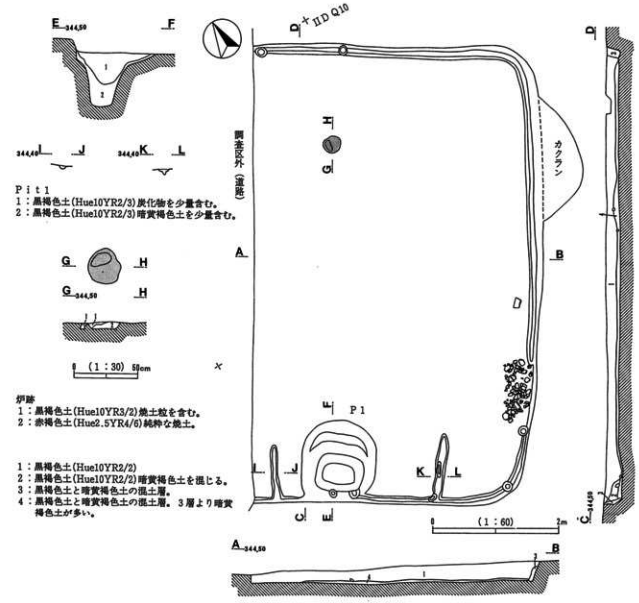
ＳＢ１０（10号竪穴住居址）（第268～270図）

遺構の構造　本遺跡で最大の竪穴住居址であるが、西側が道路下になっており調査できなかった。推定される規模は、炉と貯蔵穴を中心軸とした左右対称構造を想定すると7.28ｍ×6.60ｍ、二本の間仕切りと壁との距離が等間隔とすると更にスリムとなり、7.28ｍ×5.64ｍの隅丸の長方形となる。床面までの深さはおよそ20cmである。柱穴は床面を剥いで検出したが確認されず、本住居には主柱穴がないことを確認した。壁際には周溝がめぐっているが、南東壁で１ｍに亙って周溝がとぎれ、南西壁ではＰ１の両わきに周溝に直行した間仕切りと思われる溝がのびる。また周溝中に直径約15cm、床面からの深さ15cm～20cmのピットが４カ所確認された。炉は地床炉で26cm×28cmの範囲の僅かに窪んだ不整楕円形の火床面が検出された。

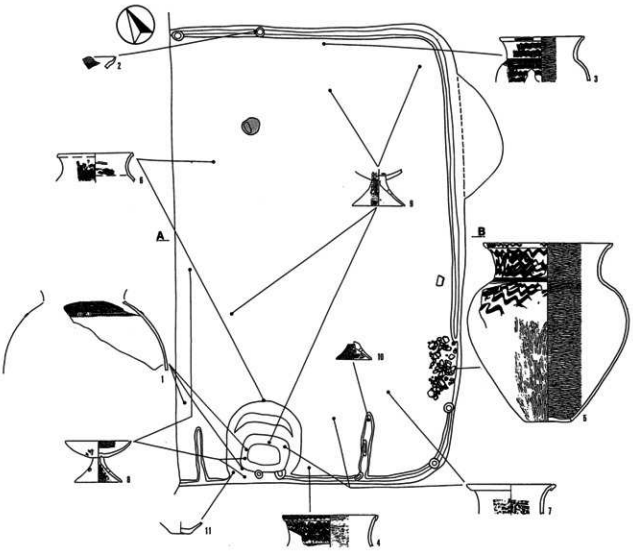
Ｐ１は120㎝×120㎝の隅丸方形の浅い窪みの中に60㎝×76㎝の隅丸方形の深い穴がある二段構造の貯蔵穴とされるものである。底面は平坦で、床面からの深さは86㎝と他の住居の貯蔵穴に比べかなり深い。またＰ１の壁際の周溝の延長上に２つの小ピットが見つかった。

遺物出土状況　図示したもののうち１・８以外は床面出土である。５は周溝の途切れる南東壁際に出土したもので、ばらばらに割れた破片が床面にへばりつくように出土した。すなわち土圧により割れたのではなく、破片に割れた後に床面に廃棄されたと推定される。１・４・７・８はＰ１覆土出土の破片と接合した。

出土遺物　図示した土器の他に、口縁部破片で箱清水系甕形土器３片、箱清水系壺形土器１片、土師器壺形土器・甕形土器17片、高坏17（内赤色塗彩のあるもの４）片が出土している。覆土のウォーターセパレーションによりガラス玉（第257図15）が１点出土した。この他に覆土上層から奈良時代須恵器片16点、弥生時代磨製石斧１点が混入している。磨製石斧については、古墳時代に転用品として用いられた可能性もある。



第268図　牛出古窯遺跡　ＳＢ10



第269図　牛出古窯遺跡　ＳＢ10遺物出土状況

3　その他の遺構

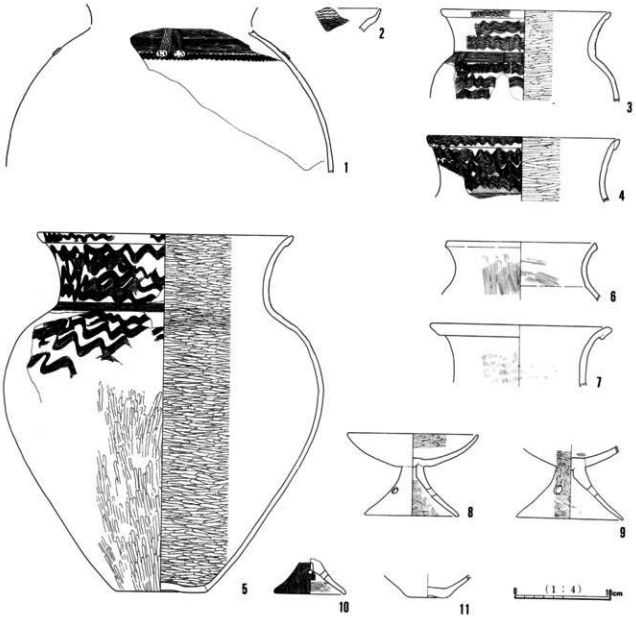
ピット群（第271図）

18基の小ピットが確認されたが、ピットの配列から掘立柱建物址ではないようである。ピット群はＳＢ０８の北東側とＳＢ１０の北東側との２ケ所に集中して見られる。直径20cm～30cm前後のもので遺物は出土していない。覆土が類似することから住居址などと同時期の遺構と判断した。ピットの配置のみを第271図に示した。

4　遺構外の出土遺物とその出土状況（第271・272図）

第271図は遺構の配置と遺構外の遺物の出土状況を示したものである。ドット１つは土器片１片を示す。道路側のＳＢ０８、ＳＢ１０付近に遺物が見られないのは、包含層が削られてしまったためである。これは表土を剝いだ状態でＳＢ０８の床面がほとんど露出する状態であったことから確かめられる。それ以外の部分では、多少なりとも包含層及び包含層と同時期の堆積層は残っている。

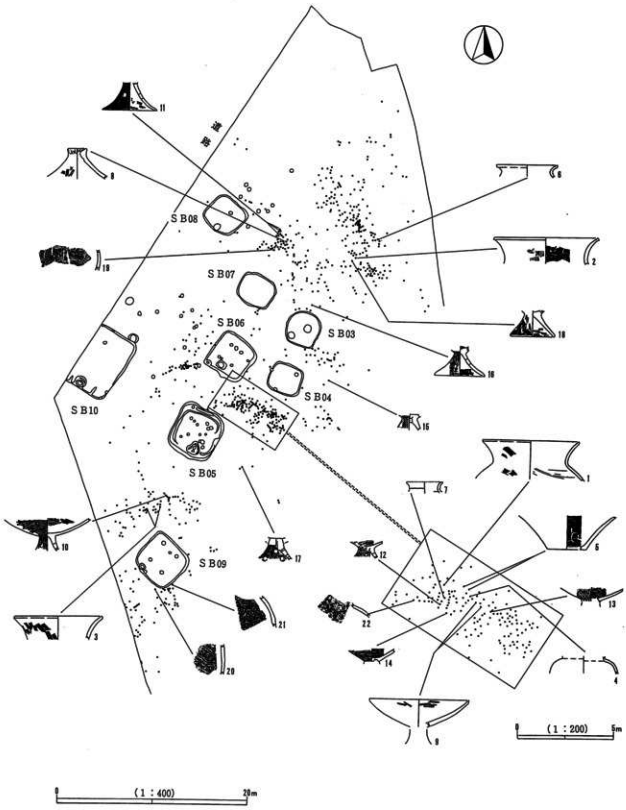
ＳＢ０５の北東側の遺物集中箇所は、比較的大きい破片が同一レベルでまとまって出土しており、集落内において何らかの意味を持った空間であったことを想定させる。この他にＳＢ０８の東側にも土器片の



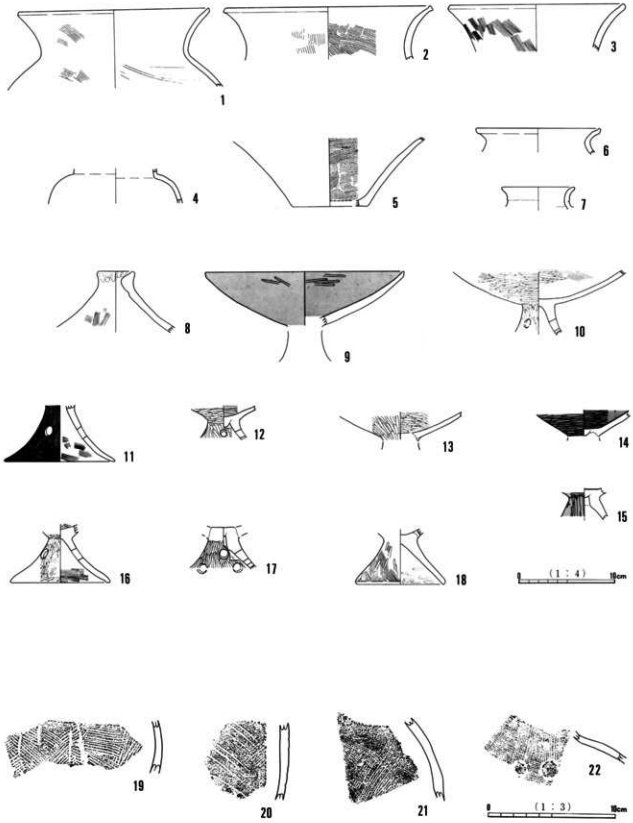
第270図　牛出古窯遺跡　ＳＢ10出土遺物

集中が認められる。遺物出土状況と遺構との関係を見ると、住居址の周辺に土器片が残されていることが観察される。住居内覆土からも多くの土器が出土していることも考慮すると、土器は住居周辺を含む意味での居住空間内に廃棄されたと考えられる。調査区東壁側には住居址がなく、遺物の量が希薄になっていることから、ＳＢ０３、ＳＢ０８より北東側には居住域が広がらないものと想定される。また、ＳＢ０９の南西側は、遺物が調査区の境界まで出土していることから、調査区外に居住空間が広がる可能性がある。更につけ加えるならば、本調査区から道路をはさんだ北西側も調査したところ、遺構は検出されていない。ただし、道路の北西側は表土を剥いだところ検出面は一段下がっており、遺構が千曲川の氾濫により削られた可能性がある。

なお、第272図19・20・21の縦羽状の櫛描直線文の甕形土器は、当該期のものではなく弥生時代中期の甕形土器である可能性もある。弥生時代中期の遺物は、太形蛤刃磨製石斧が出土しているのみで、他に弥生時代中期の土器は見られない。



第271図　牛出古墳遺跡　古墳時代遺構外出土遺物の分布



第272図　牛出古窯遺跡　遺構外出土遺物

第５節　奈良・平安時代の遺構と遺物

１　概要（第273図）

奈良・平安時代に属する遺構は、上段段丘面から段丘崖にかけて、須恵器の窯跡１基、灰原３、竪穴住居址６棟、掘立柱建物址２棟、竪穴状遺構２基、墓坑１基、焼土坑３基、性格不明の溝、土坑他が検出された。主な遺構の出土遺物については第12表にその概要をまとめた。

２　窯跡関係の遺構

ＳＹ０１（１号窯）（第274～276図）

段丘斜面の上半部に位置し、主軸方向はＳ－45°－Ｅで斜面に直行する。調査区の東端に検出された。

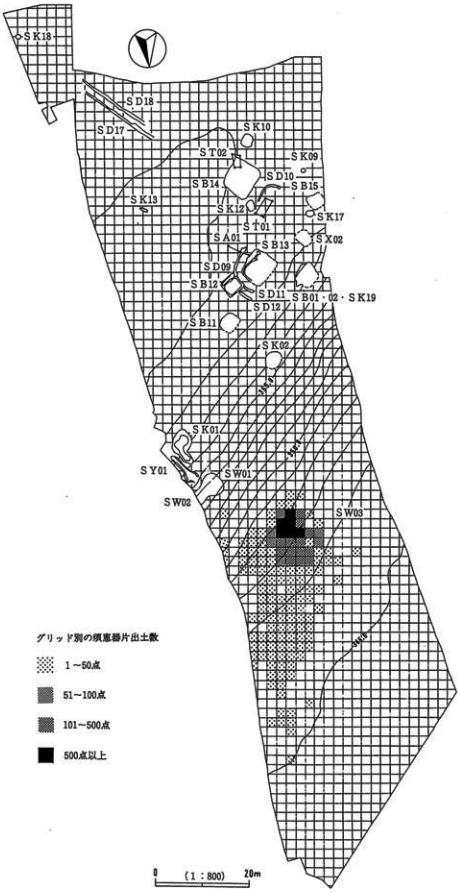
土層　１層は表土、２層群（２ａ～２ｅ層）は天井崩落後の堆積層、３層群（３ａ・３ｂ層）は崩落した天井部の窯体を主体とした層、４層群（４ａ～４ｄ層）は燃焼部から前庭部に堆積する炭化物を多量に含む層、５層群（５ａ・５ｂ層）は窯壁と窯底、６層群（６ａ～６ｃ層）は窯底と窯壁構築以前に埋められた層、７層は床下のピットの覆土である。窯底部分の地山は砂層であり、土を貼って窯底を作っている。なお、４ａ層と４ｃ層が分層してあるが、漸移的な変化である。

遺構の構造　半地下式無階無段の登り窯。煙道、窯尻は残っていない。前庭部を含めた全長7.40ｍ、最大幅95cm、床面傾斜27°である。燃焼部から焼成部の全長は4.84ｍ。窯壁は一部ずれ落ちているが、そのほかは比較的良好な状態で残っている。崩れ落ちた窯体片から窯の修復回数を観察すると、焼成面が２面認められるものがあることから、本窯は最低２回の焼成が行われている。いくつかの窯体片には直径1.5cm～4.5cmの管状の空洞が見られ、天井部を支える骨組材の痕跡と思われる。セクションＧ－Ｈの窯壁の裏側に直径3.5cmの棒状の炭化材が検出されている。これも天井部を支える

第12表　牛出古窯遺跡　遺構別口縁部（低部）破片数

	須恵器						土師器				黒色土器	備考
遺構名	杯A	杯B	杯蓋	壺	甕	大甕	杯	椀	長胴甕	その他甕	椀	
ＳＢ０１	0	2 1	1 1	0	1 1	0	0	0	3	0	0	
ＳＢ０２	26 11	15 6	42 7	24 2	6 2	0	0	0	1	3	0	
ＳＢ１１	8 5	3 3	16 3	0	0	0	0	0	0	0	0	
ＳＢ１２	10 5	8 3	10 2	17 3	2 1	0	0	0	1	4 1	0	高台付き高杯１ 高杯２
ＳＢ１３	23 9	16 6	115 23	37 5	12 3	2 1	0	0	4 1	13	0	高台付き高杯１
ＳＢ１４	8 5	2 1	18 2	0	3 1	3 1	0	3	0	0	0	羽釜１
ＳＢ１５	11 4	5 2	18 4	3 1	2 1	0	0	0	1	1	0	
ＳＫ１０	1	0 0	1	0	0	0	1	0	8 1	4 1	0	
ＳＫ１２	3 1	2 1	5 1	0	0	0	1	0	1	0	0	
ＳＫ１３	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
ＳＹ０１	118 41	22 6	88 5	6 1	11 1	データなし					0	
ＳＷ０１	96 6	22 4	86 6	データなし	データなし	データなし					0	
ＳＷ０３	672 142	448 76	775 49	データなし	データなし	データなし					0	杯蓋つまみ65

上段の数値は遺構内出土の口縁部破片数、ただし杯Ａ・Ｂは底部破片数。
下段の数値は残存率を累積加算した数値。小数点第一位を切り上げ。



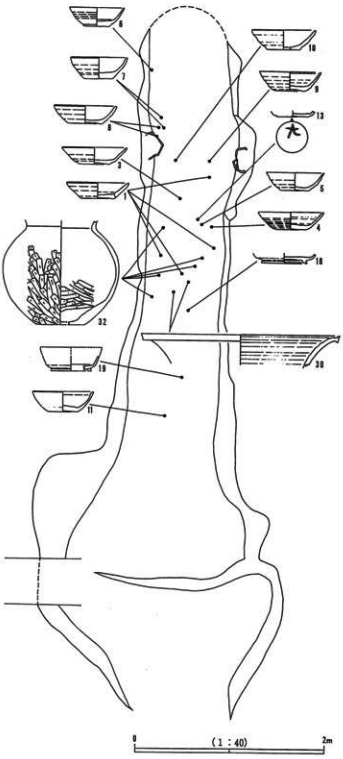
第273図　牛出古窯遺跡　奈良・平安時代遺構配置図

骨組材と思われる。焼成部と燃焼部の境界部分には不整形なピットがある。舟底状ピットに類するものであると思われるが、ピット上面を焼けた窯底が覆っていたか否かは調査時の不注意で確認できなかった。焼成部上端の窯底下の掘り込みは底面が焼けており、覆土（６c層）に焼土ブロックを含む。窯体を築いている土は、壁面及び天井部ではスサを含む粘土で、窯底はスサを含まない砂質の土である。

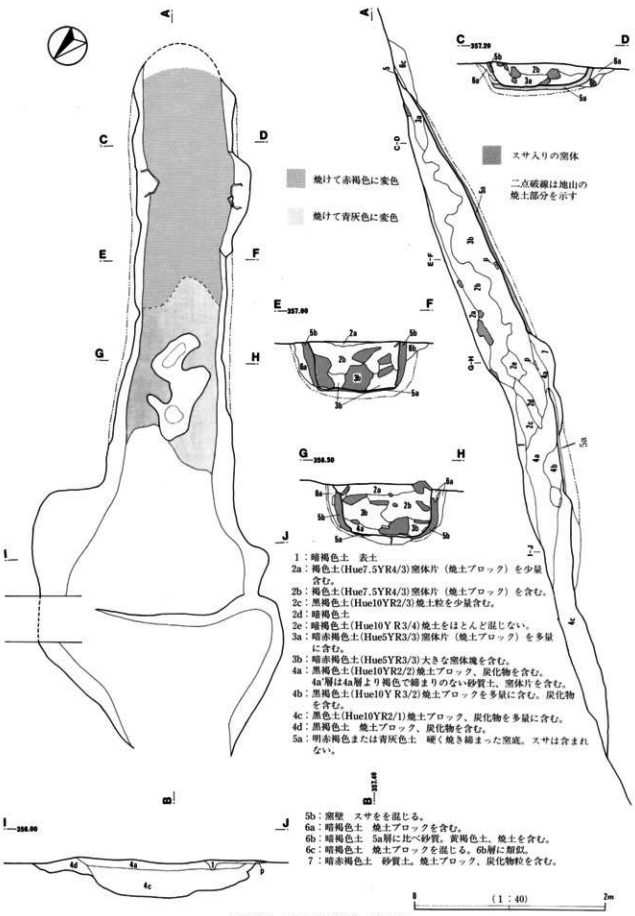
灰原　燃焼部から前庭部にかけて炭化物を多く含む黒褐色土が広がる。更にその斜面直下にはＳＷ０１・０２が広がり、ＳＹ０１内灰原の続きと思われる。更にＳＹ０１で焼かれた須恵器を捨てたと思われる灰原（ＳＷ０３）が認められる。

遺物出土状況　遺物は、３層下部から床面にかけてと４層群中より出土している。焼成部床面には小破片も含めて200点余りが出土した。第274図には実測した遺物のうち焼成部床面より出土した物の出土位置を示した。また、スサ入り粘土と須恵器片が付着した物が35点出土した。これらは焼台と思われるが、一括して取り上げたため出土地点は不明である。燃焼部から前庭部の灰原にかけても多くの須恵器が出土している。

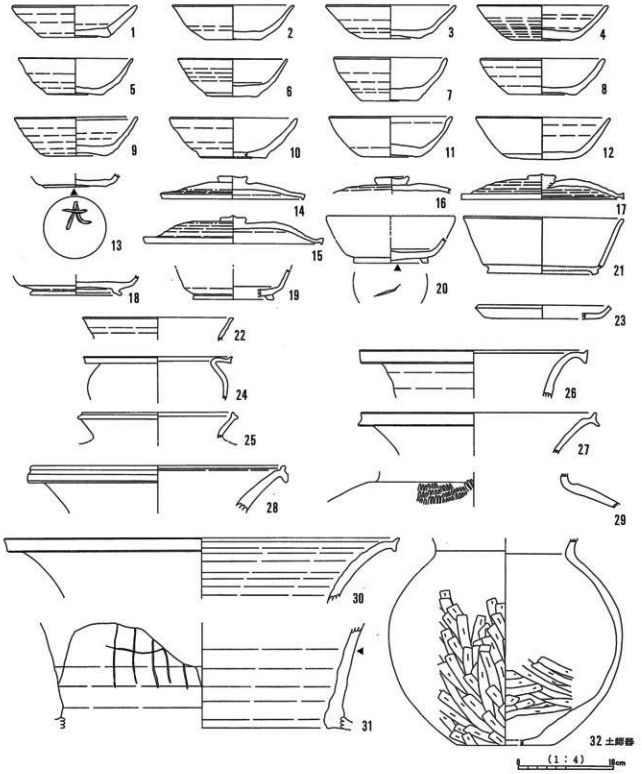
出土遺物（第276図）　須恵器杯Ａ（１～13）、蓋Ｂ（14～17）、杯Ｂ（18～21）、皿Ｃ(23)、短頸壺Ｃ(22・24・25)、甕Ａ（26～31）、球胴甕（32）が出土している。杯Ａは全点糸切り未調整である。杯Ａの６・７・10は底部は回転糸切りの際、円柱部分に近い下方を切ったため底部が分厚い。底径は６cm前後である。杯Ａの法量は３種類みられ口径から、１類（６・７）、３類（１～５、８・９）、４類（10～12）に分類される。13の杯底部外面には刻書「大」がある。文字は枝状工具の小口を用いたと思われる。筆順は「人」の後に横の「一」が描かれている。杯Ｂは回転糸切り後外周ヘラ削りされるものが多く、20のみ回転ヘラ切り後ナデ調整さ



第274図　牛出古窯遺跡　ＳＹ01遺物出土分布図



第275図　牛出古窯遺跡　ＳＹ01



第276図　牛出古窯遺跡　ＳＹ01出土遺物

れている。破片が多く杯Ｂの法量は、明瞭なものがないが大小２種類と思われる。19・20は小さめのもの、18・21は大きめのものである。高台が底部の内側に巡る高台径の小さいものが多い。18の高台は丸みを持ち、外側にはみ出す踏ん張り型である。杯Ｂと同様に、蓋Ｂも法量に２種みられる。14は口径の小さいもの、15・17は口径の大きいもの。蓋の口縁部と天井部の屈曲部がはっきりとしており、15・17のように屈

曲部から天井部にかけて沈み込むものもみられる。23は皿Ｃの破片と思われる。破片であるため、形態がはっきりとしないが、口縁部が斜めに面取りされていて底部は平らであると思われる。皿ではない可能性もあり、類似例を待ちたい。24は短頸壷Ｃで、焼き歪の口頸部をもつ。口縁部が上方に向く形態と思われる。25は短頸壷Ｃの口頸部と思われる。口縁部に沈線が巡っている。26と27は甕Ａで、器壁が薄い。28は口縁部に沈線が巡り受け口状を呈する。30と31は大きめの甕Ａである。31は頸部に５本の縦線と１本の横線のヘラ描きがみられる。29は甕Ａの体部と思われる。体部上部に最大径がみられる。100は土師質の球胴甕である。内外面とも体部下半部はハケ目に近いヘラ削りが施されている。

ＳＹ０１は、杯Ａ、杯Ｂは回転糸切りが主であるが、法量が安定化せず、杯Ｂにヘラ切りが残る。ヘラ切りと糸切りの過渡期の窯と思われる。美濃須衛窯ではヘラ切りに変わって回転糸切りが主流になることはなく、また陶邑古窯址群は回転糸切りが主流となるのは律令体制崩壊期である。猿投窯では、回転糸切りが杯以外で普遍化するのが岩崎25号窯（猿投第Ⅳ期８世紀中葉）からであり、杯Ａ（猿投窯無台椀）のほとんどが回転糸切りとなるのが黒笹１号窯（猿投第Ⅳ期第３小期８世紀後半）からである。このことからＳＹ０１は、この時期猿投の影響を受け、まだ回転ヘラ切りを残す糸切りへの転換期、つまり８世紀中葉から８世紀後半期と考える。

ＳＷ０１・ＳＷ０２（１号・２号灰原）（第273・277図）

ＳＹ０１直下の斜面に広がる。炭化物、焼土、須恵器片と窯体を含んだ黒褐色の薄い包含層で、約４ｍ×約６ｍの範囲に広がり、中央がくぼれる瓢箪形の分布を示す灰原である。調査区外にもう１基窯跡が存在することを想定して、くぼれの西側をＳＷ０１、東側をＳＷ０２としたが、明確には分離できず、遺物包含層は５㎝～10㎝の厚さで分層はできない。出土遺物は少なくテン箱２箱に満たない。

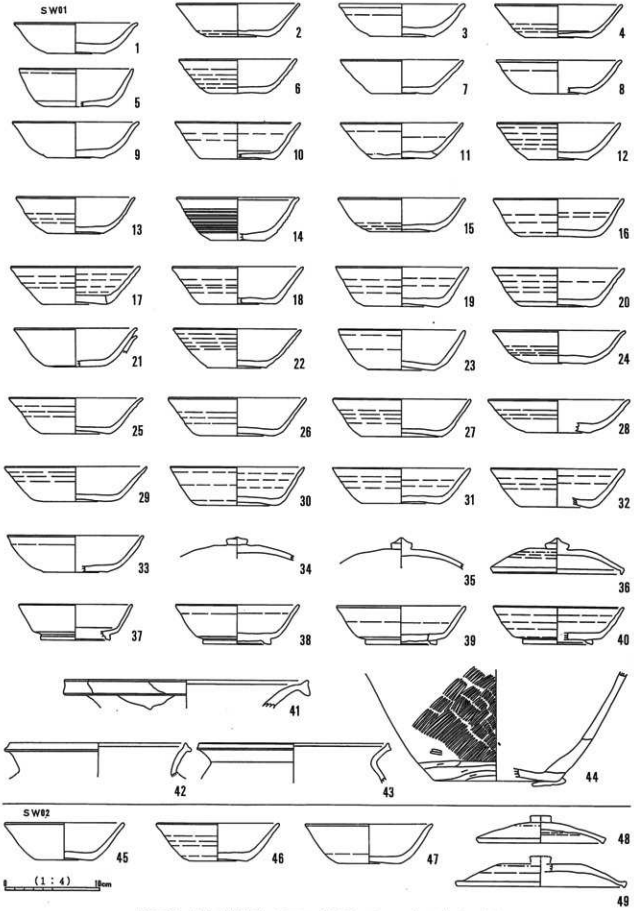
出土遺物（第277図）　ＳＷ０１では須恵器杯Ａ（1～33）、蓋Ｂ（34～36）、杯Ｂ（37～40）、短頸壷Ｃ（42･43）、甕（41・44）が出土している。杯Ａはすべて回転糸切り未調整であり、法量が口径差から３種類に分けられ、２類（1～14）、４類（15～25）、５類（26～33）である。形態は底部立ち上がりから口縁部まで逆台形に開く形態が多く、杯身に膨らみを持つもの（5･8･9･13･24･28･30･33）は数少ない。14は杯身にヘラ状工具によるナデ調整がされており、数条の沈線がみられる。35と36の蓋Ｂはツマミ中央部が凸である。36の口縁部から天井部に到る折り目ははっきりした稜がみられる。杯Ｂの法量は、１類(37)、２類(38～40)の２種である。42と43の短頸壷Ｃは有段口縁である。41の甕ＡはＳＹ０１の26・27の甕Ａと類似する。44は甕Ａの平底底部である。

ＳＷ０２では須恵器杯Ａ（45～47）、蓋Ｂ（48・49）が出土している。杯Ａは回転糸切り未調整で、形態は１号灰原のものに類似している。法量は２類(45・46)、３類(47)の２種ある。蓋Ｂは大小２種であり、48は口縁の屈曲がわずかで、49は口縁の屈曲が小さく口縁から天井部にかけての境目が沈み込むような形態である。２点ともツマミが欠損している。

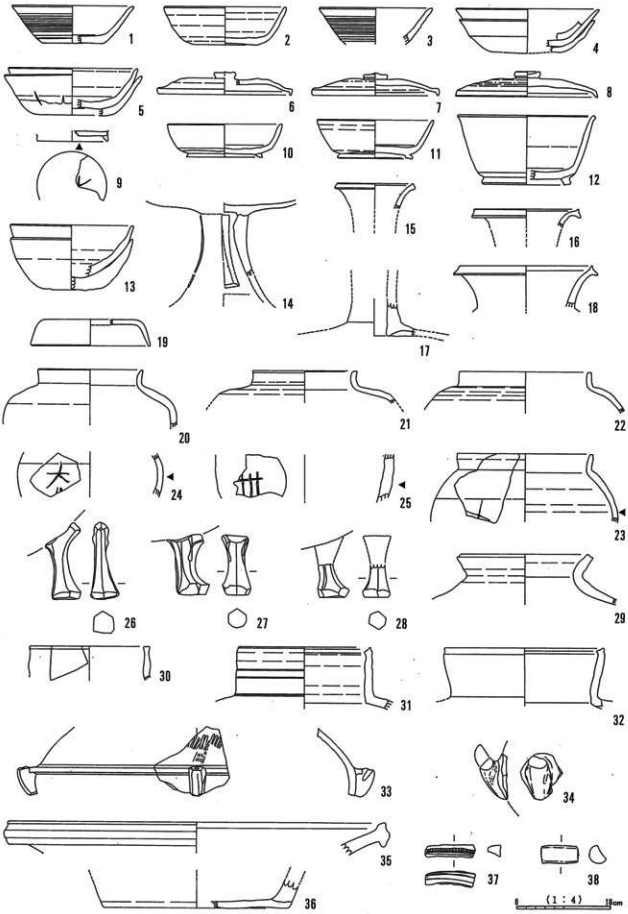
ＳＷ０３（３号灰原）（第273・278図）

ＳＹ０１の斜面斜め下方の緩斜面に、須恵器が多量に出土する地点をＳＷ０３とした。須恵器はおよそ８ｍ×12ｍの範囲に特に多く認められ、第273図に示すように遺物密度の高いところでは、２ｍ四方のグリッドに500点以上の須恵器片を出土している。遺物包含層は分層はされず、基本土層Ⅱ層からⅢ層に相当すると思われる。炭化物や焼土は余り含まれず遺物が多量に出土していることから、須恵器のみを捨てた物原であると思われる。ただし、出土遺物にはＳＹ０１では見られない糸切り底の須恵器杯なども含まれており、ＳＹ０１で焼かれた須恵器以外のものが少量含まれているようである。

出土遺物（第278図）　須恵器杯Ａ（１～５・13）、蓋Ｂ（６～８）、杯Ｂ（９～12）、高杯（14）、長頸壷（15～18）、壷蓋（19）、短頸壷Ｂ（20～23）、三足壷の脚（26～28）、短頸壷Ｃ（29）、短頸壷Ｂ（30～32）、



第277図　牛出古墳遺跡　ＳＷ01（上段）・ＳＷ02（下段）出土遺物



第278図　牛出古窯遺跡　ＳＷ03出土遺物

凸帯付四耳壺（33）、甕把手（34）、甕Ａ（35）、甕底部（36）が出土している。

杯Ａは回転ヘラ削り未調整である。１と３はＳＹ01の杯Ａに類似し、外傾する逆台形である。２・５は１などに比べ、外傾が少なく箱型で、脣部に丸みを持つ。１と３には杯身にヘラ状工具によるナデ調整がされており、数条の沈線がみられる。杯Ｂの法量には４種みられる。12は脣部が丸みを帯び、底径が小さく外傾し、口縁部も丸みを帯びやや外反する。11も底径が小さく外傾する。９は法量が小さく底部に「×」とおもわれるヘラ描きがみられる。９と10の高台は断面三角形である。13は椀形の底部丸底の杯Ａである。４・５・13は杯の重ね焼きである。13には火襷が認められる。

14の高杯は脚部破片のみの出土である。長い脚部には長方形の透孔がみられる。美濃須衛窯では古墳期からみられる脚の透孔が９世紀代まで残る。このことから高杯脚の透孔は美濃須衛窯の影響と思われる。

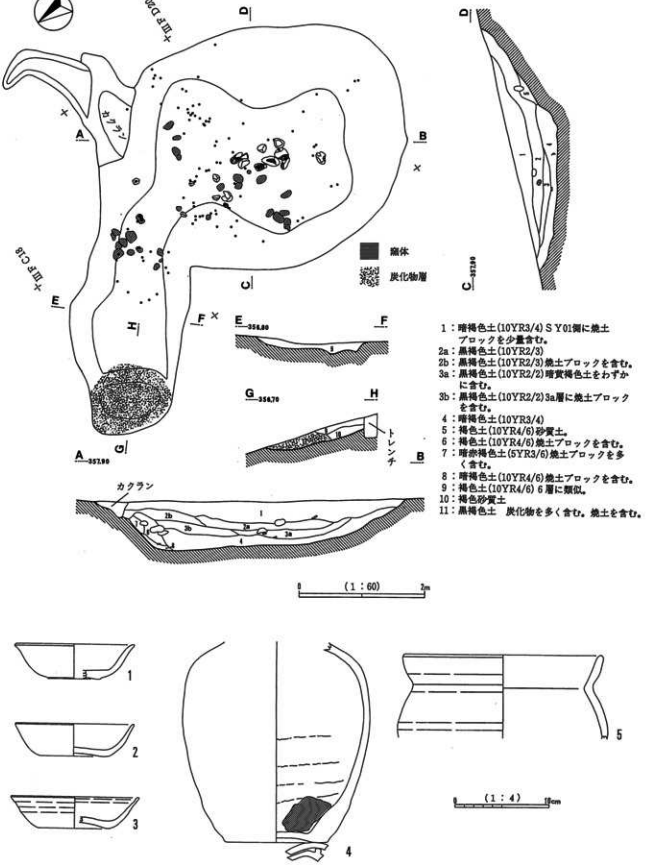
長頸壺の15は口縁部に折り返しがみられる。17は長頸壺口頸部接合部分の破片である。肩部の接合部に粘土帯を巡らせ、その上に口頸部をのせ接合したものと思われる（第181図３）。16と18は大きめの長頸壺である。口縁部の折り曲げ部が顕著である。短頸壺Ｂの20は口唇部が断面三角形であり、21と22と23は口唇部の断面が方形である。19の壺蓋は、短頸壺Ｂの蓋であり、蓋内面天井部にカキ目がみられる。23～25の短頸壺Ｂの体部外面中央部に「大」「卅」「×」のヘラ描きがみられる。26～28は金属器の三足（獣足）壺の模倣品と思われる。３つの脚とも断面六角形にヘラ削りされ、獣足の爪を思わせる部分は面取りされている。三足壺は短頸壺Ｂに類する壺に三足接合していたものと思われる。26は細身で脚が長い。しかし27は脚が若干太く短い。また26は壺の胴下半部に接合されるが、27は底部付近に接合されると思われる。この３点が同一個体の一部とは思われず、このような金属器模倣品を複数生産していた可能性がある。壺や硯の獣足は稲田山13号窯（美濃須衛窯第Ⅳ期第３小期前半）、鳴海32号窯（猿投窯第Ⅳ期第２小期）など８世紀中葉から９世紀初頭の窯跡で出土している。29は口径が小さく体部径がかなり広い短頸壺Ｃである。30－32は甕Ｂでロ縁部が平らなもの（30）と若干内面に傾くもの（31・32）がみられる。33の凸帯付四耳壺は凸帯部が断面方形であり、耳部の穴が貫通していない。34は甕Ｂの把手の部分であろうか。35は甕Ａのロ縁部で、36は甕Ａの平底と思われる。37は甕の体部の上端を切り落としたもので、38は粘土紐の半截である。

時期　杯Ａの形態は第278図２のように箱型の様相も残している。また三足（獣足）壺の存在や高杯の脚の透孔、凸帯付四耳壺の存在などから美濃須衛Ⅳ－３、猿投Ⅳ－２などに対比される８世紀中葉から９世紀初頭の様相を持つと思われる。

ＳＫ０１（１号土坑）（第279図）

遺構の構造　ＳＹ０１に並んで斜面部に位置する。平面形は4.02ｍ×4.60ｍの不整な楕円形で、その北端が斜面下方に張り出す。なお、東側に伸びる溝状の張り出しは撹乱である。覆土中には人頭大の焼けた礫が９個まとまって出土し、張り出し部の先端には炭化物層が広がっている。しかし、明確な火床面は確認されず、覆土中に含まれる焼土はＳＹ０１から流れ込んだものと思われ、本遺構内で火を焚いた可能性は少ない。焼けた礫は、被熱した時の原位置ではなく、被熱後本土坑の覆土中に廃棄されたもので、炭化物はＳＹ０１からもたらされたと考えられる。覆土は自然堆没状態を示している。出土遺物は焼けた礫と窯体片の他に、須恵器片が出土し、遺物からＳＹ０１と同じ時期と考えられる。本土坑の性格については、清水山窯跡にも類似した土坑が窯跡に隣接しており、窯体を構築するための土を取った穴であると推定されるが、ＳＹ０１より新しい時期の遺物もわずかに含まれており、これらの遺物を混入と見るか否か、問題点を残している。

出土遺物（第279図）　須恵器杯Ａ（１～３）、短頸壺（４）、土師器長胴甕（５）の出土がみられる。杯Ａは回転糸切りである。４は口縁部が欠損した短頸壺Ｂと思われる。底部に焼台替わりに用いたと思われ



第279図　牛出古窯遺跡　ＳＫ01

る杯Ｂの破片が融着する。土師器長胴甕５はロクロ甕で、口縁部が肉厚で内湾の頸部が「く」の字状となる。口頸部の特徴はいわゆる北信甕[註3]である。

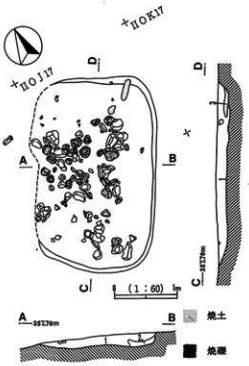
3　竪穴住居址・掘立柱建物址・棚列

ＳＢ０１（１号住居址）（第280図）

上段段丘面の斜面落ち際に位置する。一部は消失しているが、隅丸の長方形を呈しており、3.05ｍ×2.05ｍの規模と推定される。床面は不明瞭で、柱穴、竈は検出されず、覆土中には拳大から人頭大の礫が検出された。覆土中より出土した礫の重量分布は第13表に示したとおりで、総重量153kgになる。一部の礫は焼けて変色しており、覆土中には焼土のブロックも検出されている。須恵器片、土師器片を24点出土しているが、これらはＳＢ０２の遺物が混入したものと思われる。

ＳＢ０２（２号住居址）（第281・282図）

本遺構は、調査時点で遺構の重複を認識できず、ＳＫ１９と同一の遺構として掘り下げたが、断面から推定すると焼土坑（ＳＫ１９）に切られていると判断できる。上段段丘面の斜面落ち際に位置する。



第280図　牛出古窯遺跡　ＳＢ01

遺構の構造　ＳＢ０１の床下に検出された。床面は一部は消失しているが、方形を呈しており、残存する部分では一辺4.00ｍを測る。床面は不明瞭で硬い面はない。柱穴は認められない。竈は斜面上方の壁の中央から南西よりに位置する。須恵器甕片を竈の芯材として用いており、両袖部分には甕片が直立して出土し、竈内及び周辺には芯材に用いられた須恵器片が崩れている。竈内には支脚石が置かれている。竈の脇にあるＰ５（直径約35cm深さ16cm）から杯と杯蓋が出土した。杯はピットの底面より出土し、杯蓋は底面から８cm高いレベルで出土した。Ｐ９と竈の間にＬ字状に曲がった浅い溝が検出され、竪穴住居の施設と考えられる。なお、Ｐ１～Ｐ４はＳＢ０２の覆土を掘り込んでおり、本遺構の施設ではない。ＳＢ０１の柱穴とも考えられるが、柱穴にしては位置が不自然である。

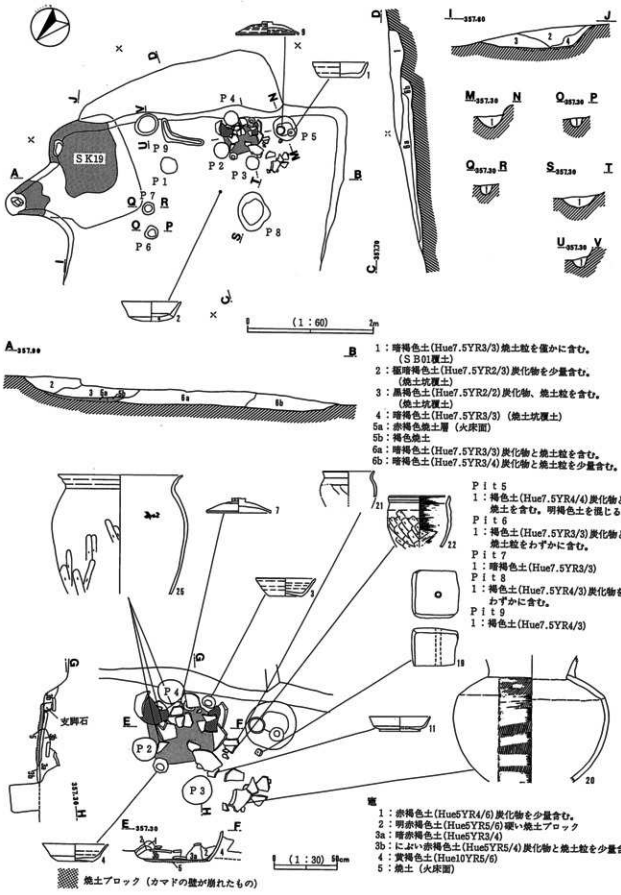
遺物出土状況　ピット内に埋められた遺物と、床面直上出土の遺物と、竈付近にまとまって出土した遺物の出土状況を第281図に示した。これらはＳＢ０２に直接関わる遺物である。これ以外のものは覆土中より出土したものである。なお、第282図15の坏Ｂは焼土坑（ＳＫ１９）内から出土した遺物である。

出土遺物(第282図)　須恵器杯Ａ（１～４）、蓋Ｂ（５～９）、杯Ｂ（10～16）、椀Ｃ（17・18）、甕Ｃ（20）、土師器小型甕（21・22）、鉢Ｂ（23）、長胴甕（24・25）、土錘（19）が出土した。

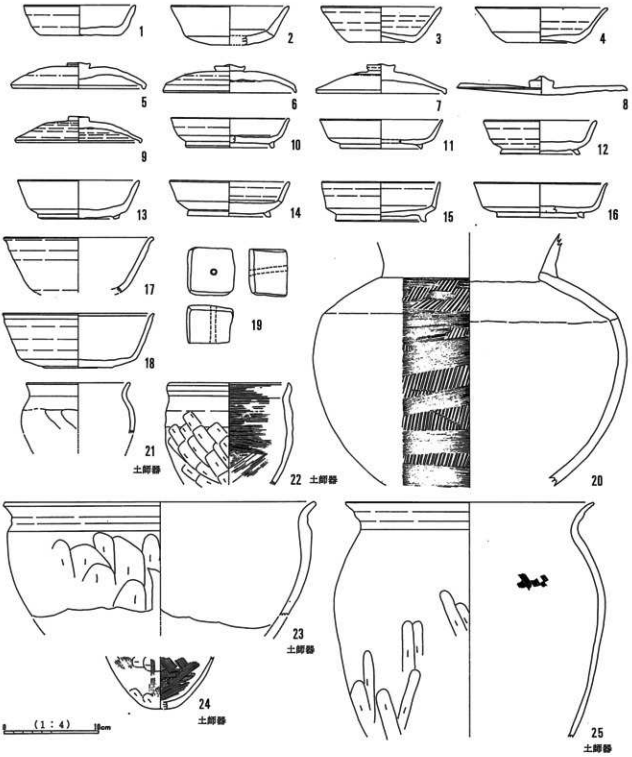
杯Ａの底部切り離し技法には３種類ある。１は静止糸切りの杯Ａである。底径が大きく8.2cmある。２は回転ヘラ切りで底部がやや丸みを帯びている。３と４が回転糸切りの底部である。口径が12.8cmと14.0cm

第13表　牛出古窯遺跡　ＳＢ０１出土礫の重量分布

重量	～1kg	1.1～2.0kg	2.1～3.0kg	3.1～4.0kg	4.1～5.0kg	5.1～6.0kg	6.1～7.0kg	7.1～8.0kg	8.1～9.0kg	9.1～10kg	合計
個数	41	25	9	9	3	1	1	1	0	1	91



第281図　牛出古窯遺跡　ＳＢ02



第282図　牛出古墳遺跡　ＳＢ02出土遺物

で底径が6.6cmと7.4cmである。３は焼け歪がある。杯Ｂには回転ヘラ切り未調整の杯に高台を付けたもの（13・14）と回転ヘラ削り調整した後に高台を接合したもの（10・12・15・16）がみられる。10は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りしている。11の高台は断面三角形である。15・16は杯底部と杯身の境目に角張った稜がみられ、高台が他に比べ内側に巡っている。壷Ｂの５～７・９は口径がほぼ等しい。５は天井部2/

3まで回転ヘラ削りが及んでいるが、6・7・8は1/3しか回転ヘラ削りが行われず、天井部分が丸身を帯びる。7はツマミの回りに沈線が巡っている。8の口径は17.8cmで天井部が偏平である。これは18の椀蓋であろうか。椀Cの18は底部が回転ヘラ切り未調整で小さい。17・18は口縁部下に沈線が巡っており、その部分をツマミながら口縁をわずかに外反させている。金属椀の模倣品と思われる。20は甕Cである。体部上半に屈曲する部分がみられるが、体部と肩部の接合部で歪んだ物と思われる。平底であろう。土師器小型甕の22は口縁部が内湾している。内面はカキ目調整され、外面は斜めヘラ削りされている。23の口頸部はロクロ整形され、頸部にロクロ痕がみられる。胴部はヘラ削りされている。北信型の鉢であろうか。25は口頸部がロクロ整形されており、頸部にロクロ痕が残る。胴部は縦位ヘラ削りである。24は砲弾形の底部である。19は立方体で中央に径4mmの穴が貫通する土錘である。外面は全面に布目痕がみられる。

時期　ＳＢ０２の杯Ａには回転ヘラ切り、静止糸切り、回転糸切りの３種がみられ、数量的には回転糸切りが上回っている。糸切りとヘラ切りの技法が交じりあう様相が認められる。猿投窯第Ⅳ期第１小期（８世紀中葉）、美濃須衛窯第Ⅳ期第２小期後半（８世紀中葉～後半）の時期にヘラ切りと糸切り技法が交じり合う様相がわずかにみられる。したがって、ＳＢ０２はほぼ８世紀中葉から後半の時期の住居址と思われる。

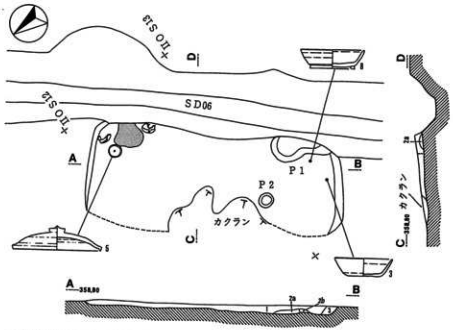
ＳＢ１１（１１号住居址）（第283・286図）

上段段丘面の斜面落ち際に位置する。

遺構の構造　住居の北西半分は床面が消失しており、南東壁の立ち上がりはＳＤ０６により壊されているが残存部では一辺4.1mを測る。覆土は厚いところで8cmしかなく、上層部は流失しているものと思われる。住居址中央部は床面まで攪乱されている。竈は東の角に火床面のみ確認され、その両脇に須恵器甕の破片が直立して出土した。これは竈の芯材として使われたものであると思われる。Ｐ１は深さ10cm、Ｐ２は深さ３cmの浅い窪みである。いずれも本住居址の施設と考えられる。

遺物出土状況　第283図に床面出土遺物の出土地点を示した。

出土遺物（第286図上段）須恵器杯Ａ（２～４）、杯Ｂ（６～８）、蓋Ｂ（５）、器種不明（１）が出土している。１は口唇部が面取りされており、内面もロクロナデがあまり丁寧に行われておらず、底部は回転ヘラ削りしている。蓋か杯かはっきりしない。類例を待ちたい。杯Ａには、回転ヘラ切り（２）と回転糸切り（３・４）の２種類の底部切り離し技法がみられる。両者とも底径は７cm～８cmと大ききめで、形態も精形で類似する。４は回転糸切り痕が太く粗い。杯Ｂも杯Ａ同様２種類の切り離しがある。６は回転ヘラ切り未調整であり、７は回転糸切り後、外周ヘラ削りしお



第283図　牛出古窯遺跡　ＳＢ11

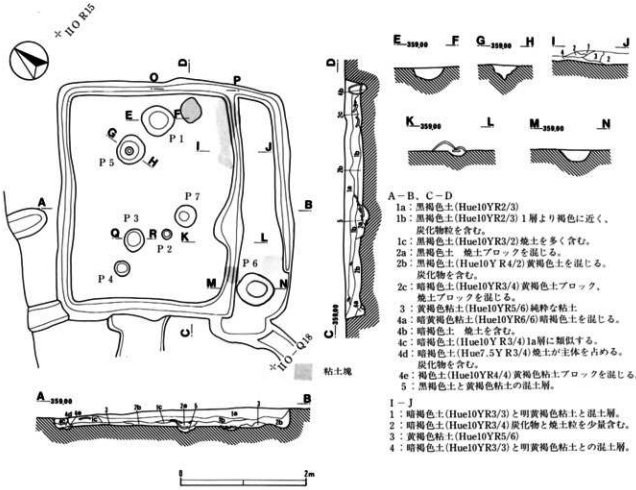
り、８は回転ヘラ削りを行っているため切り離し技法は不明である。７と８は底部から杯腰部に明瞭な稜がみられる。

時期　杯Ａの回転ヘラ切りと回転糸切り技法の交じり合うＳＢ０２とほぼ同一期と思われる。

ＳＢ１２（12号住居址）（第284～287図）

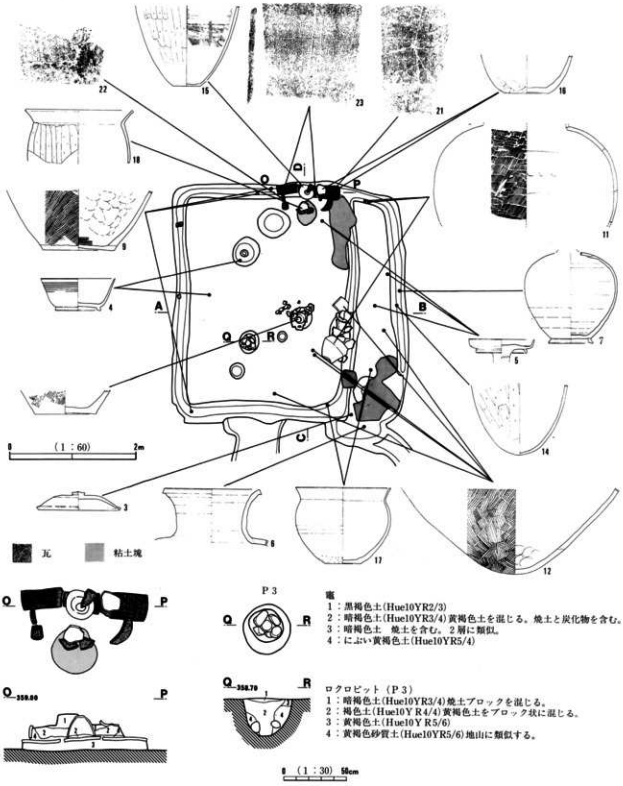
上段段丘面の斜面際に位置する。ＳＤ０９（ＳＤ１１）・ＳＸ０１と切り合い関係にある。ＳＸ０１がＳＢ１２の覆土を掘り込んでいることが確認された。ＳＤ０９とは覆土が類似しており遺構の新旧関係は確認できない。

遺構の構造　3.7m×3.8mの方形を呈し、南西壁に張り出し部がある。硬い床面は認められず、床面が明確に捕らえられない。周溝が張り出し部分を除いて「の」の字状に巡っており、部分的に須恵器甕片を覆い被せるように置いている。周溝内の覆土は、竈に近い部分では焼土と炭化物を含む暗褐色土で、竈から離れた部分では黄褐色土を含む褐色土となる。竈は北東壁のほぼ中央に位置する。瓦を芯材として用いたと思われ、火床面の両脇に直立した平瓦が出土し、竈周辺に瓦が数点出土している。火床面壁際の周溝上面を平瓦が覆っており、その中央部に長胴甕が伏せて置かれている。これも竈に関連する施設かと思われる。煙道は認められない。Ｐ１は直径約50cm、深さ20cmで、焼土ブロックと0.5cm～１cmの炭化物が覆土に含まれており、竈に関連した穴であろう。Ｐ３は直径40cm、深さ30cmで、底面に内径約10cmの円を描くように拳大の礫を並べている。いわゆるロクロピットである。Ｐ６は深さ10cmと浅く、黄褐色粘土塊に覆

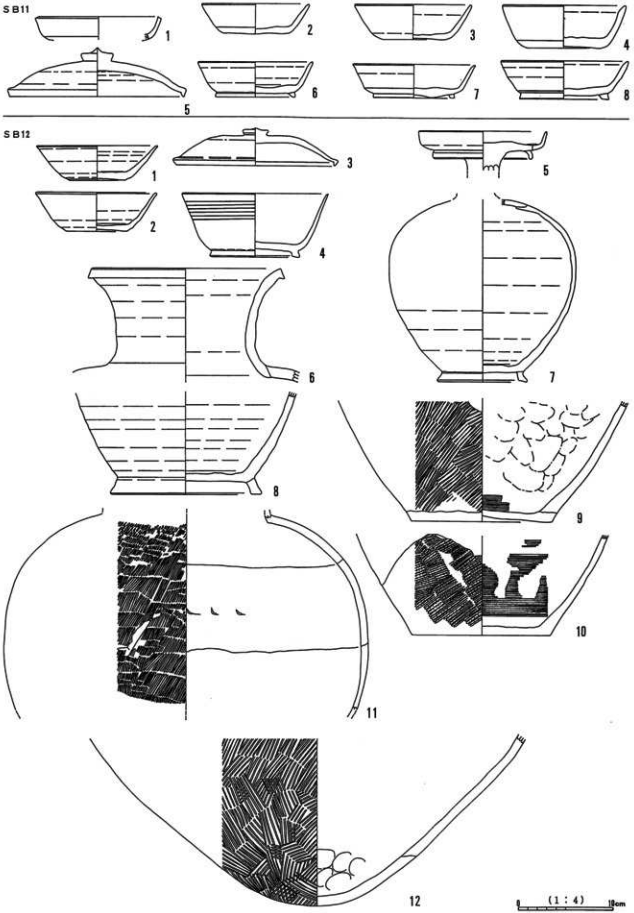


第284図　牛出古窯遺跡　ＳＢ12

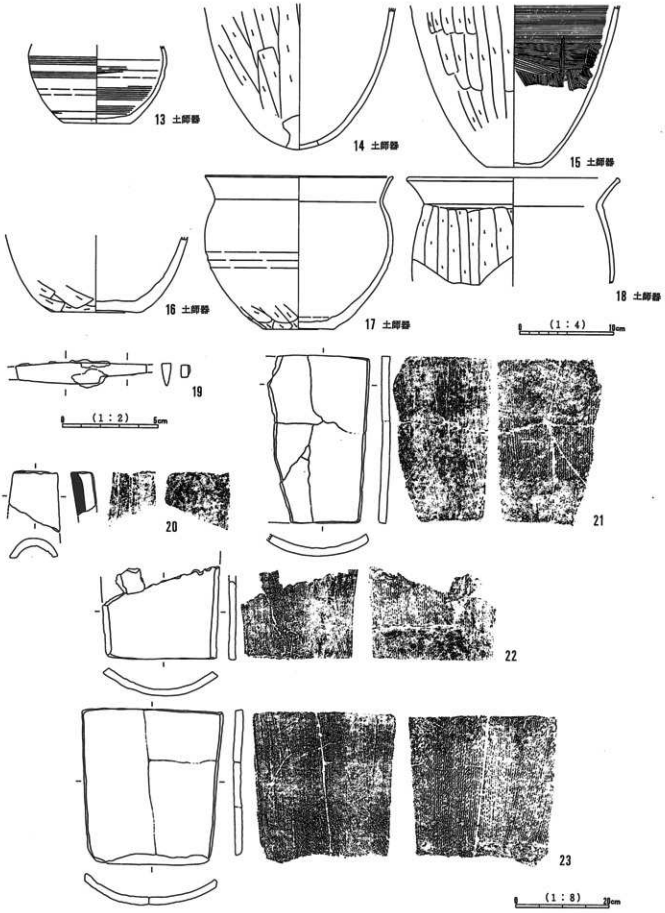
われている。Ｐ７には須恵器甕底部が埋められており、甕の内側には焼土ブロックが含まれており甕自身も被熱している。甕の直下は火床面となっており、炭化物と焼土ブロックを含む覆土がその下に続く。Ｐ２・４は深さ４cmほどの浅い窪みである。Ｐ５は床面を剥いだ時に検出され、直径48cm、深さ16cmで、さらに底面中央に直径10cm、深さ８cmの穴が確認された。



第285図　牛出古窯遺跡　ＳＢ12遺物出土状況



第286図　牛出古窯遺跡　ＳＢ11（上段）・ＳＢ12（下段）出土遺物(1)



第287図　牛出古窯遺跡　ＳＢ12出土遺物(2)

遺物出土状況　第285図に床面直上に出土したものと、住居施設の一部として用いられているものを示す。また、竈付近とＰ６を覆って粘土の塊が出土している。北西壁の周溝内に炭化材が直立して出土している。

出土遺物（第286図下段・287図）　須恵器杯Ａ（１・２）、杯Ｂ（４）、蓋Ｂ（３）、高杯Ｄ（５）、長頸壺Ｃ（７）、長頸壺底部（８）、甕Ａ（６・９・10）、甕（11・12）、土師器小型甕（13・17）、長胴甕（14・15・18）、甕底部（16）、布目瓦（20～23）、鉄製刀子（19）が出土した。

１と２は回転糸切り底の杯Ａである。ＳＹ０１の杯Ａ（第276図２）に法量や形態が類似する。１は内外面に火襷が見られる。４は回転糸切り後未調整の杯Ｂである。高台は杯底部外側に付けられ、深身の逆台形を呈する。杯腰部は丸みを帯びる。杯身部は板状工具を当ててナデ調整を行っており、数本の沈線がみられる。３はツマミの外周の天井部を回転ヘラ削りして平らにした器高の高い蓋Ｂである。口縁端部の折りは少なく、口縁部と天井部の折り目が明瞭で沈み込みがある。４の杯Ｂとセットと思われる。５は高杯Ｄである。身の浅い杯Ｂに脚部を取り付けている。長野市の田牧居帰遺跡、上ノ田遺跡でも同様の高杯Ｄが出土している。中野市立ヶ花窯跡でも完形の高杯Ｄが出土している（第382図）。７は頸部が欠損しているが、頸部の細い金属器模倣の長頸壺Ｃである。高台が高く外側にはみ出す形態である。８は長頸壺Ｂの底部と思われる。高台が高い。６は器壁の薄い甕Ａの口頸部である。９と10は甕Ａの平底の部分である。11・12は周溝に敷かれていた甕である。これらの甕の口縁部は不明であるが、11は体部が球形であり、12は丸底である。11・12は奈良時代前半期の甕Ａの胴部や底部であると思われる。土師器小型甕は13・17がみられる。13は口頸部を欠く胴部球形、平底で、内外面カキ目調整である。17は球胴形の壺で口径と胴部径が等しく、やや頸部が屈曲する。回転ナデ調整で底部外側に削り調整がみられる。18の長胴甕は口径が胴部径よりも大きく、胴部外面は縦位のヘラ削り調整である。14の底部は砲弾形で、15は胴下半部が砲弾形、小さな平底である。16は球胴形の甕の平底部と思われる。

瓦が竈から出土している。20の丸瓦は凸面に縄目のタタキ成形痕を残しており、凹面には布目痕と、桶型の痕跡を残す。21・22・23は平瓦で凹面に糸切り痕と桶型痕、布目痕を残す。21～23の平瓦は凸面の幅の狭い部分、縄目タタキ目の一端が約4.5cm幅で消されている。これら瓦は池田端２号窯で焼かれた平瓦（第204図）と形状、大きさ、胎土、焼成度などの特徴が類似しており、池田端より持ち込まれた可能性が高い。

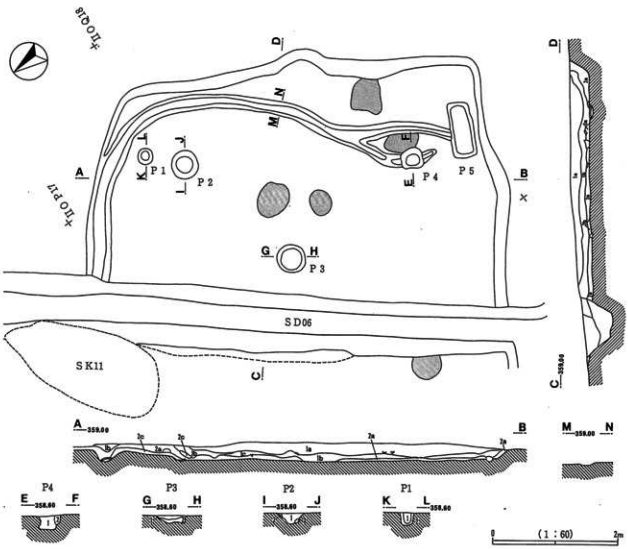
時期　ＳＢ０２、ＳＢ１１と違い回転糸切り技法が主となる時期の住居址で、これらの住居址より若干新しいと思われる。また、池田端窯跡製瓦の竈への転用や奈良時代前半期のものと思われる甕の遺溝への転用から、奈良時代前半期より多くの時間が経過しない時期と考えられよう。さらにＳＹ０１の杯Ａとの類似から、本住居址は８世紀中葉から後半の時期とおもわれる。

ＳＢ１３・ＳＫ１１・ＳＤ０９・１１・１２（13号住居址）（第288～294図）

上段段丘面の斜面際に位置する。ＳＫ１１はＳＢ１３の施設の一部であることが整理途中で確認された。また、ＳＤ０９・１１・１２もＳＢ１３の関連施設である可能性が高いのでここでまとめて記述する。ただし遺物等の注記は調査時点の遺構名をそのまま使用している。なお、ＳＸ０１はＳＢ１３の関連施設である可能性があるが、ＳＸ０１の詳細は別項で述べる。

遺構の構造　ＳＢ１３はＳＤ０６により一部破壊されている。斜面下方の壁は流失しており確認できない。他の住居址の形態から推定して、一辺6.56ｍのほぼ正方形をしていたものと考えられる。覆土は大きく二分され、下層には黄褐色土又は黄褐色粘土を混じている。ＳＸ０１と切り合うセクションポイントＡのところでは２a層がＳＸ０１の覆土に続いているように観察され、ＳＸ０１との前後関係は確認できない。柱穴は確認されない。竈は南東壁の中央からやや南隅によったところに位置する。調査時の不注意で、

火床を確認したのみで上部構造や竈内の覆土については一切不明である。竈のほかに、床面に4か所の火床面が確認されている。また、北東壁から竈の手前を通りＰ５に至るＬ字状の溝があり、須恵器甕の破片が壷のように溝上を覆っている(第290図)。セクションＡ－Ｂで甕が溝に陥没したため１b層が溝の部分だけ落ち込んでいることが観察され、このことから須恵器甕が溝の上に壷として載せられていたことを確認できる。この甕片の壷には最低４個体分の甕が使用されており、復元実測可能なもの３個体を第292・293図に示している。ＳＫ１１とした部分の須恵器甕片の並び方から、溝はＳＤ０６を越えて更に斜面下方に伸びていたものと思われる。この溝は幅20cm～30cm、深さ５cm～12cmで底面は５cmほどの高低差はあるが、ほぼ水平で一方に傾斜する構造ではない。ＳＫ１１は、砂質土の色がくすんだ部分を掘ったものであるが



1a：暗褐色土(Hue10ＹR3/3)砂質土。
1b：暗褐色土(Hue10YR3/3)砂質土。炭化物、焼土粒を含む。
1c：暗褐色土(Hue10YR3/3)砂質土。多量の炭化物、焼土粒を含む。
2a：褐色土(Hue10YR4/4)黄褐色土をブロック状に混じる。炭化物、焼土粒を含む。
2b：にぶい赤褐色土(Hue5YR4/4)焼土ブロックを混じる。
2c：黄褐色粘土(Hue10YR5/6)2a層の土を小量混じる。

Ｐｉｔ１
1：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)黄褐色粘土をブロック状に混じる。炭化物を小量含む。
2：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)１層より黄褐色粘土を多く混じる。

Ｐｉｔ２
1：褐色土(Hue10YR4/4)黄褐色粘土を混じる。炭化物を含む。
2：明黄褐色粘土　床面に見られる粘土が落ち込んだもの。
3：褐色土(Hue10YR4/4)１層より多く黄褐色粘土を混じる。

Ｐｉｔ３
1：暗褐色土(Hue10YR3/3)炭化物を多量に含む。
2：暗褐色土(Hue10YR3/3)炭化物を含まない。

Ｐｉｔ４
1：暗褐色土(Hue10YR3/3)炭化物を多量に含む。焼土を小量含む。
2：褐色土(Hue10YR4/4)砂質土。

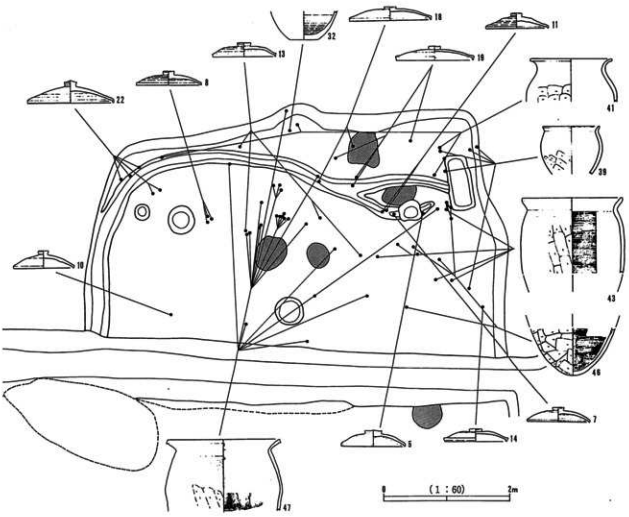
第288図　牛出古窯遺跡　ＳＢ13

出土遺物はなく色がくすんだ部分は住居内の溝からの水がしみ込んだため変色したものと推定され、遺構ではないと判断したものである。Ｐ１は直径22cm、深さ20cmで、住居覆土とは異なった土が入っており、住居廃絶時点ではすでに埋まっていたものである。Ｐ２は直径40cm、深さ18cmで、床面に分布した粘土の一部が落ち込んでいる。Ｐ５は長方形を呈し、底面は溝とほぼ同じ高さで溝と関連した施設である可能性が強い。覆土には焼土と炭化物が多量に含まれているが、火床面は認められない。Ｐ３は直径42cmで、深さ13cm、Ｐ４は直径34cmで深さ20cmである。床面に認められる複数の焼土と床面出土の炭化材などから見て焼失住居の可能性がある。

遺物出土状況　第289図に床面及び２層から出土した遺物を示し、第290図には住居使用時の原位置をとどめていると判断される遺物を示した。竈の南側には杯と杯蓋が置かれている。その中の２点の杯には「別」の文字がヘラ描きされている。Ｐ２の北西側の床面には黄褐色粘土塊が分布していたが、範囲が記録されていないので図示できない。また板状の炭化材が床面より出土し、コナラ節９点、クヌギ節３点という鑑定結果である。

出土遺物（第291～294図）　須恵器杯Ａ（１～４）、杯Ｂ（26～29）、蓋Ｂ（５～25）、高杯Ｂ（30）、短頸壺（31・32）、甕Ａ（33～38）、土師器小型甕（39・40）、長胴甕（41～47）が出土している。

杯Ａはほとんど回転糸切りの杯であるが、上層から出土したものには回転ヘラ切りの杯Ａの破片がある。

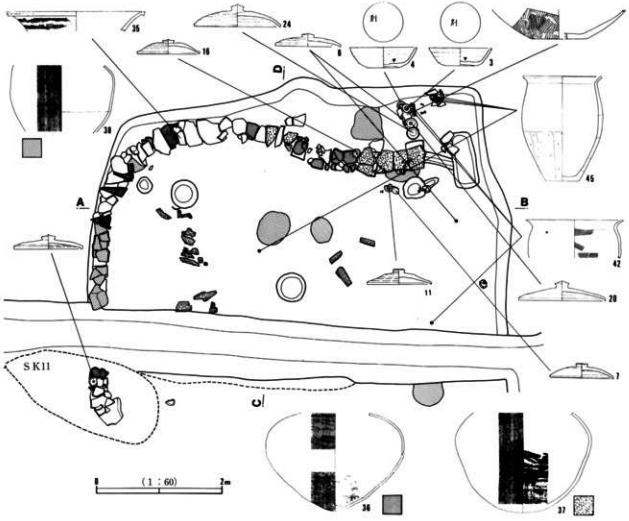


第289図　牛出古窯遺跡　ＳＢ13遺物出土状況(1)

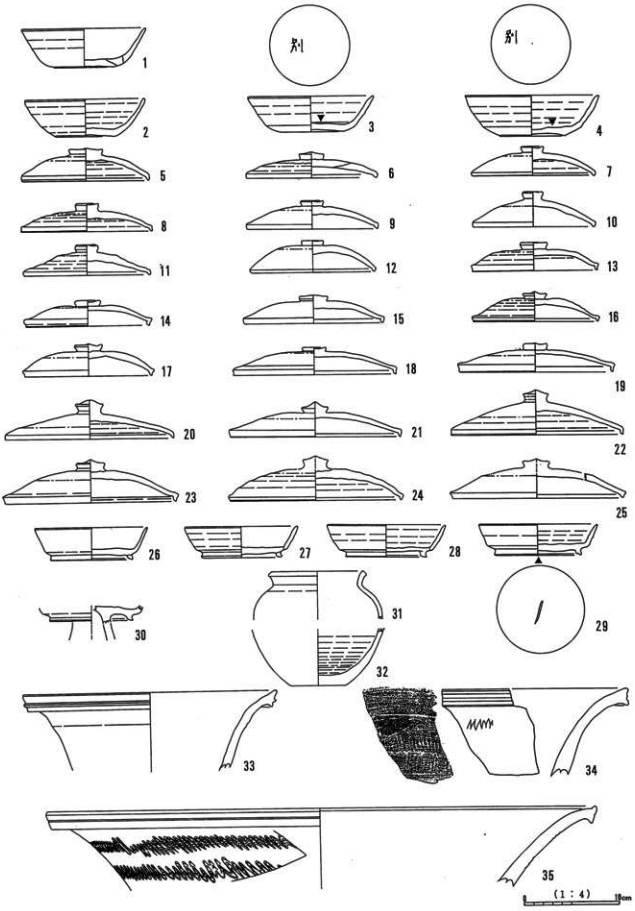
杯Ａの３・４の底部内面には「別」のヘラ描き文字がみられる。杯Ｂの底部の調整方法は回転糸切り未調整、回転ヘラ切り未調整、回転ヘラ削り、回転糸切りで外周を回転ヘラ削り調整したものがあり多様である。杯Ｂの法量差はほとんどなく均一化している。30の高杯ＤはＳＢ１２のものと類似する。31は短頸壺Ｃの口唇部が面取りされたものである。体部下半部の32は体部上半部球形の31と同一個体かあるいは類似する個体である。甕Ａの33は器壁の薄い、口縁部に細い凸部が巡っている甕である。34の頸部のタタキで整形後、スリ消し調整している。頸部に波状のヘラ描きがみられる。35は頸部に34のようにタタキ目が残り、その上に櫛描波状文が描かれている。口頸部が欠損する36の甕Ａはやや尖った丸底で、肩部がかなり張るタイプである。36は胴下半部に同心円文の当て具痕がみられる。体部のみの37・38は球形に近い形態をしている。底部は丸底と思われ、36～38は清水山１号窯の甕Ａの形態（第154図190）に近似すると思われる。

土師器小型甕39は口頸部が短く口径と胴部径に差がなく、底部形態は40と類似すると思われる。

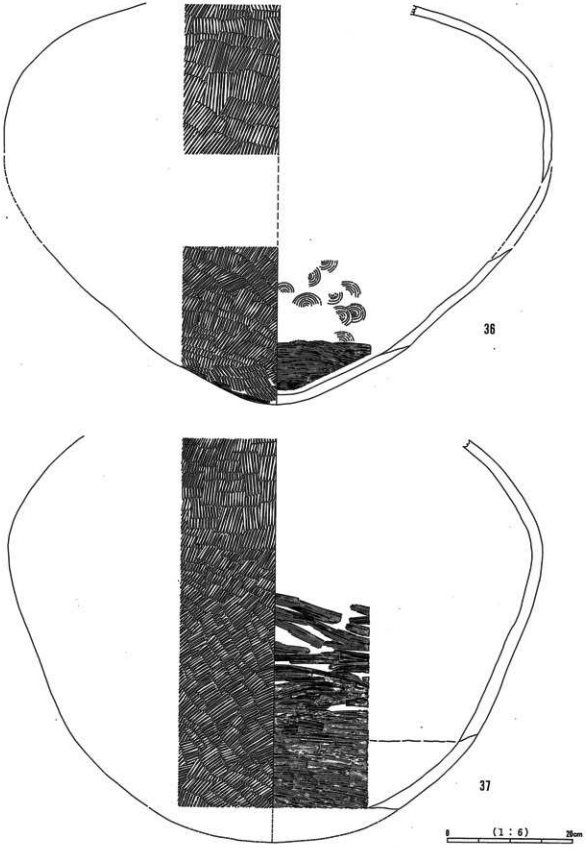
長胴甕にはいろいろなタイプがみられ、41は口縁径が小さく、胴部上半に最大径があり、頸部下に横位のヘラ削り調整が行われている。42は口縁部が「く」の字に屈曲しながら開く形態。43は胴部径と頸部径に差があまりなく口縁が開く形態で内面カキ目、胴部外面縦位の短いヘラ削り調整で口頸部回転ナデ調整



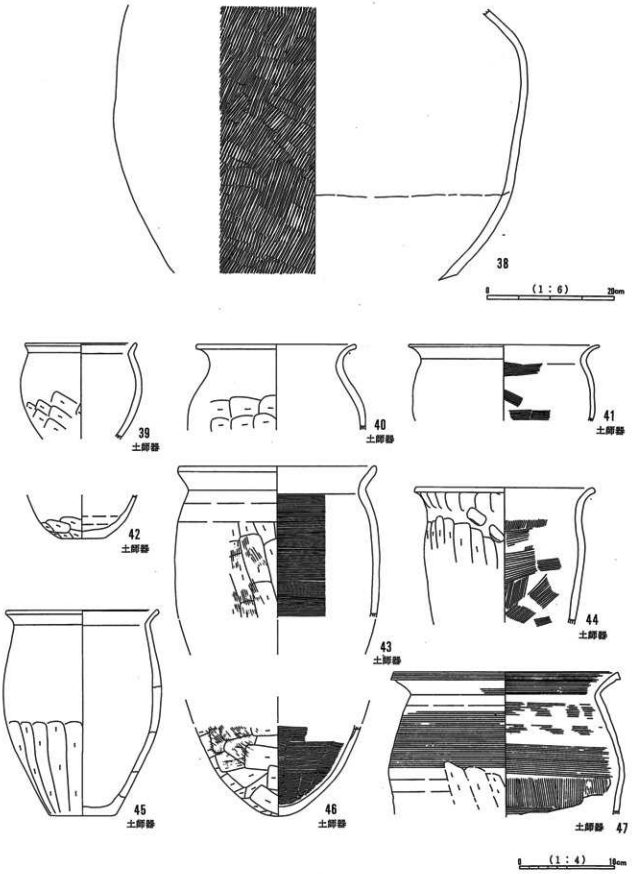
第290図　牛出古窯遺跡　ＳＢ13遺物出土状況(2)



第291図　牛出古窯遺跡　ＳＢ13出土遺物(1)

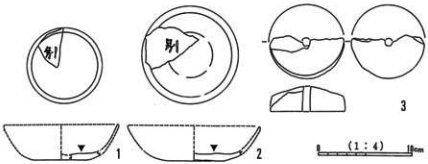


第292図　牛出古墳遺跡　ＳＢ13出土遺物(2)



第293図　牛出古窯遺跡　ＳＢ13出土遺物(3)

のいわゆる北信甕である。46は43の砲弾形の底部と思われる。45は平底で、胴部下半部縦位ヘラ削りである。47は口頸部から胴上半部の内外面カキ目調整し、胴下半部外面を縦位ヘラ削り調整している。また胴部と口頸部の境目が屈曲し、口唇部が斜めに面取りされ、ハケ状工具を当ててロクロ回転しカキ目調整している。口唇部の特徴から北信甕と同様の北陸系の長胴甕[註1]（笹沢1988a、坂井1993、小林1993）である。



第294図　牛出古窯遺跡　ＳＢ13関連（ＳＤ05・06）遺物

なお、第294図に示したＳＤ０５・０６出土遺物は、出土位置から考えて、ＳＢ１３の覆土に含まれていたものと思われる。１・２は底部内面に深くはっきりと「別」の字がヘラ描きされている。ＳＢ１３内出土のものと合わせて「別」とヘラ描きされた須恵器は４点になる。３の土製紡錘車は上面が山状に盛り上がり、中央に直径８㎜の穿孔が見られる。

時期　ＳＢ１１と同様な高杯Ｄが出土し、須恵器杯Ａが回転糸切り離しがほとんどであることなどから、ＳＢ１３はＳＢ１２とほぼ同時期でＳＢ１１以降のあまり時間差のない時期の住居址と思われる。

ＳＢ１４（14号住居址）（第295・297図）

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。

遺構の構造　6.26m×6.88mの方形を呈する。形態からＰ４・６・９は柱穴の可能性があるが、他のピットは柱穴とは思えない。竈については、南壁際の東隅よりに火床面が確認され、その近くに３個の川原石が出土している。石組の竈が想定されるが、竈周辺は撹乱されており詳細は不明である。硬い床面は認められないが、２層群が貼り床で、２層上面が床面と思われる。

遺物出土状況　第295図に床面出土のものを示す。杯蓋は完形品で、他は破片または欠損品であった。覆土も浅く遺物数は少ない。

出土遺物（第297図上段）　須恵器蓋Ｂ（２）、甕Ａ（６、７）、凸帯付四耳壺（５）、土師器杯（１）、椀（３、４）、羽釜（８）が出土している。

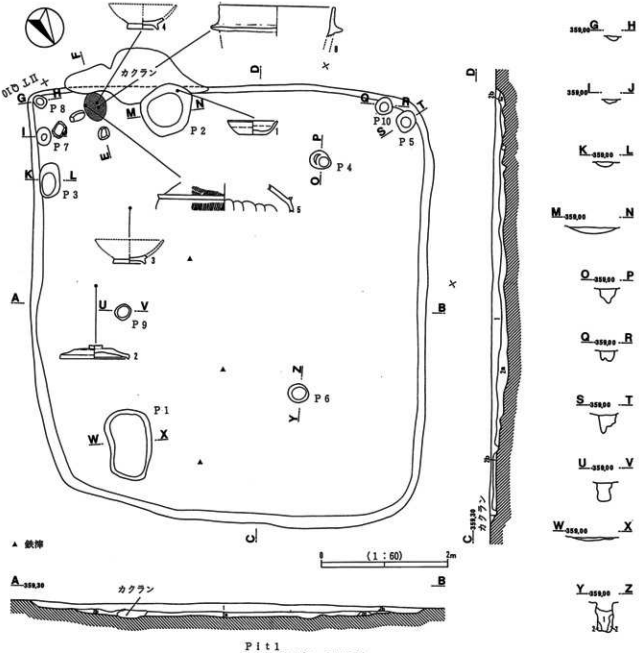
２は口縁端部の折りが少なく、天井部の1/2の所まで回転ヘラ削りされておりその部分が平らになっている。ツマミが中央部から少しずれたところに接合されている。５は凸帯付四耳壺で凸帯部は断面三角形であり耳部分は欠損している。６・７の甕Ａは口縁折り曲げ部分が三股状になっている。土師器杯Ａは回転糸切り底であり、杯身がやや丸みを持って立ち上がっている。底部内面中央部はやや盛り上がっている。口径が10.6㎝、底径が5.6㎝、器高が低く2.9㎝である。３と４は土師器椀Ｂ底部の破片である。底部が小さく、高台が断面三角形を呈し、やや外向きに傾斜して取り付けられている。８の羽釜は鍔が一巡している形態で小型である。この他に鉄滓が３点出土している。

時期　土師器椀や羽釜の存在[註4]や特徴から、平安時代中葉期の住居址と思われる。

ＳＢ１５（15号竪穴状遺構）（第296図）

上段段丘面の斜面部に位置する。

遺構の構造　ＳＤ１３と配水管埋設により破壊され、また北西側の斜面下方は流失してプランは確認で

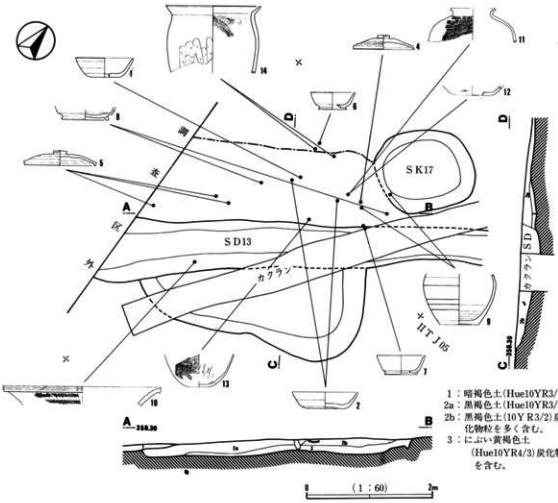


第295図　牛出古窯遺跡　ＳＢ14

きない。当初、住居址として調査を進めたが、竈、柱穴など住居に関連する施設は確認されず、掘り込みのみが確認されたので竪穴状遺構とした。

遺物出土状況　実測図に示した遺物の出土位置を第296図に示した。覆土中からも多くの遺物が出土しており、遺構より斜面下方の表土中にもＳＢ１５から流失したと思われる遺物が多数出土している。

出土遺物（第297図下段）　須恵器杯Ａ（１～３）、杯Ｂ（６～８）、蓋Ｂ（４・５）、短頸壺（９）、甕Ａ



第296図　牛出古窯遺跡　ＳＢ15

(10・12)、甕Ｃ（11・13)、土師器長胴甕（14）が出土している。

杯Ａには回転糸切りのもの（１・２）と回転ヘラ切り（３）のものがみられる。６と７の高台は杯底部のやや内側に巡っており、杯腰部には明瞭な稜はみられない。８は底径が大きく、高台は杯底部の内側に巡っている。杯腰部には明瞭な稜がみられる。９は短頸壺の体部下半部であり、球形体部に沈線が数本巡っている。10は甕Ａであり、ＳＢ１３の第291図35と類似する。12は平底ぎみで、10の甕Ａの底部と思われる。11は甕Ｃであり、丸底ぎみの13がこの甕Ｃの底部の形態と思われる。11は体部と頸部の境目がくの字となり上に開く形態で口唇部が薄い。胴部は縦位ヘラ削りである。

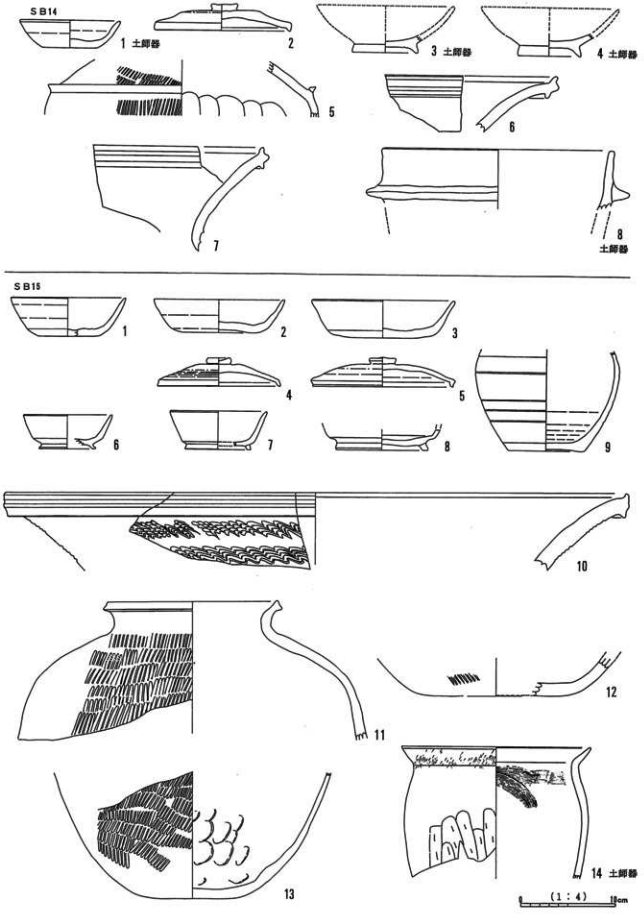
時期　ヘラ切りと糸切り技法の交じり合うＳＢ０２やＳＢ１３とほぼ同一期の住居址と思われる。

ＳＴ０１（１号掘立柱建物址）（第298図）

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。平面形は１間×１間で、規模は南北列4.0ｍ、東西列1.8ｍで面積7.20㎡を測る。それぞれのピットは、直径20㎝～24㎝、検出面からの深さは14㎝～24㎝である。出土遺物はないが、奈良・平安時代の遺構の覆土に類似するので同時期の所産であると判断した。なお、ＳＴ０１の南側に、ＳＤ１０及びＳＫ０７があるが、位置関係からＳＴ０１にかかわる施設とも考えられる。

ＳＴ０２（２号掘立柱建物址）（第298図）

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。ＳＢ１４床下に検出された。平面形は１間×１間で、規模は南北



第297図　牛出古窯遺跡　ＳＢ14（上段）・ＳＢ15（下段）出土遺物

列2.4mと2.9m、東西列1.4mと1.7mで面積3.86m²を測る。それぞれのピットは、直径16cm～23cm、検出面からの深さは8cm～16cmである。出土遺物はないが、奈良・平安時代の遺構の覆土に類似するので同時期の所産であると判断した。

ＳＡ０１（１号柵列　ＳＫ０８・１４他）（第299図）

調査時点でＳＫ０８、ＳＫ１４としていた土坑と未命名の土坑が一直線に並ぶことが整理中に明らかとなった。規模と覆土が類似することから相互に関連した穴と認定した。出土遺物はないが、覆土の様子から奈良・平安時代の遺構と判断した。居住施設と関連した遺構と思われるが、その性格は不明である。

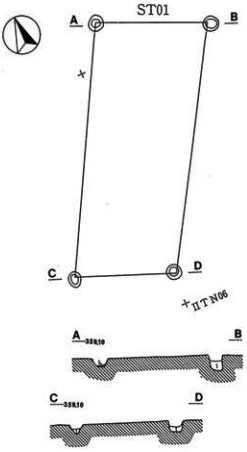
4　墓坑

ＳＫ１３（13号土坑）（第300図）

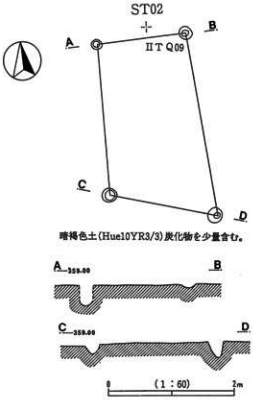
上段丘陵面の居住域から離れた平坦部に位置する。長さ2.08m、幅0.40m、深さ26cmで、短辺が弧状の細長いカプセル形を呈する。底面はほぼ平坦で、浅いピットがひとつある。土坑内より黒色土器の杯が３個出土した。１つは西側の壁際に接して、２つはピットの脇に合わせ口の状態で出土した。これらの杯のうち１点に墨書が認められたが、文字の判読はできない。

土坑墓と想定して土坑中央部のセクションベルトから採取した土壌のリン・カルシウム分析を行い、土坑内にリン酸とカルシウムが多く含まれていることが明らかとなった。分析者は、「リン酸がどのような物質に由来して富化されたかであるが、土坑の下部ではなく上位で含量が高くなること、堆積物が周辺土壌より有機質であることからすると、リンの含量の増加は土坑内に入れられた物質よりも、むしろ土坑を埋積した土壌に起因する可能性がある。」[註5]としているが、土坑の形態、出土遺物の状況から本遺構は土坑墓と推定され、リンの含量の増加は遺体埋葬の結果であると考えた方が妥当であろう。

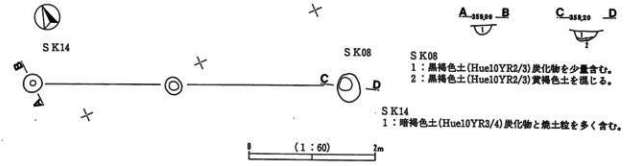
出土遺物（第300図）　１～３は内面黒色処理された杯Ａである。３には墨書が見られるが墨がうすくて判読できない。



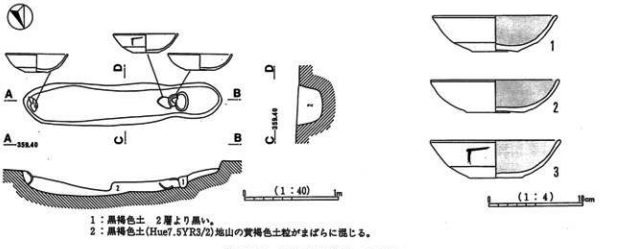
１：暗褐色土(Hue10YR3/4)黄褐色土をブロック状に混じる。



第298図　牛出古窯遺跡　ＳＴ01・02



第299図　牛出古窯遺跡　ＳＡ01



第300図　牛出古窯遺跡　ＳＫ13

5　焼土坑

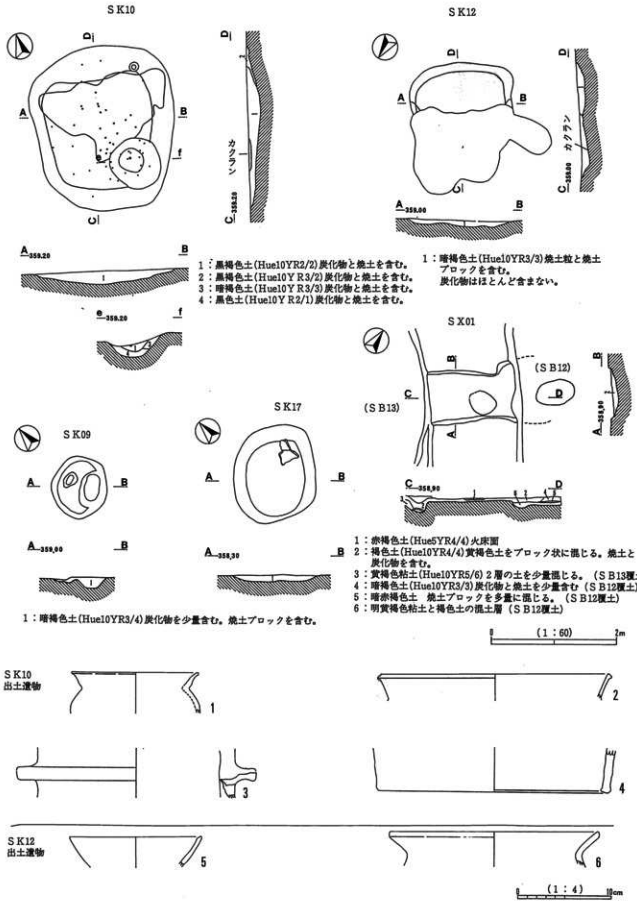
ＳＫ１０（10号土坑）（第301図）

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。南北2.60ｍ、東西2.24ｍの不整な隅丸の方形で、最深部は検出面より24㎝の深さである。底面の北半分に火床面が認められ、覆土には焼土と炭化物が含まれている。床面には大小二つのピットが確認され、ＳＫ１０と類似する覆土であったが、焼土坑に関連した施設か否かは確定できない。遺物は床面から浮いているものが多い。遺構の構造と出土遺物から本遺構は土師器の焼成遺構と判断した。

出土遺物　覆土中より須恵器片９点、土師器片約130点が出土した。須恵器は杯・甕、土師器は杯・長胴甕（２）・小型甕（１）・羽釜（３）・甑（４）が出土した。２と同じタイプの長胴甕口縁破片が他に６個出土しており、本遺構で焼成された甕であると思われる。破片から推定して長胴甕はケズリ調整で平底である。この他に植物繊維を混入した焼けた粘土塊が８点出土し、窯壁のような上部構造に用いられたものと思われる。また、須恵器には奈良時代の特徴を示す杯があり、土師器とは時期が異なることから須恵器は混入したものと考えられる。

ＳＫ１２（12号土坑）（第301図）

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置し、北西側は攪乱によって破壊されている。規模はＳＫ１０よりやや小さく、残存する一辺が1.58ｍ、覆土は厚さ12㎝で焼土ブロックを多く含んでいる。底面と壁面の全面が赤



第301図　牛出古窯遺跡　ＳＫ09・10・12・17、ＳＸ01

褐色に焼けた火床面となっている。ＳＫ１０と遺構の規模は異なり、遺物の出土量も少ないが、窯体と思われる粘土塊が出土していることから、本遺構も同様に土師器の焼成遺構と判断した。

出土遺物　須恵器片31点、土師器片44点が出土した。須恵器は杯、杯蓋、甕、土師器は長胴甕（６）、杯（５）である。この他に植物繊維を混入した焼けた粘土塊が25点出土し、窯壁のような上部構造に用いられたものと思われる。また、土師器焼成遺構とすると須恵器は混入したもである。多量の混入した遺物が見られることから、図示した土師器も混入した可能性がある。

ＳＫ１９（19号土坑）（第281図）

ＳＢ０２の覆土内に掘り込んでおり、ＳＢ０２の床まで掘り下げた時に確認された土坑である。

遺構の構造　底面と一部の壁面が硬く焼けている。残存している火床部分から平面形態を推定すると、隅丸方形で北側に張り出し部分があるものと思われるが、張り出し部分については、火床面が途中でとぎれており、焼土坑の施設である確証はない。焼土坑底部の火床面の残存範囲は80cm×80cmである。遺構の切り合い関係からＳＢ０２→焼土坑→ＳＢ０１の順に作られたものと観察される。

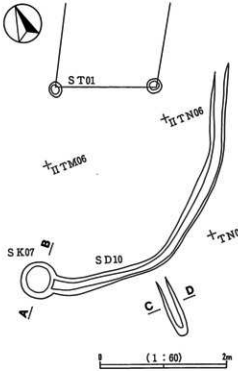
6　その他の遺構

ＳＤ１０・ＳＫ０７（10号溝・７号土坑）（第302図）

ＳＴ０１の南側に隣接し、「Ｙ」字状の溝の一端に直径66cm、深さ20cmの土坑が掘られている。土坑と溝の覆土の切り合いは認められず、一つの施設と考えられる。検出面が低いため溝は底面のみが残っており、「Ｙ」字状に分岐する部分は底面が検出されていない。また、溝は北東方向へまだ続くものと思われる。ＳＫ０７より須恵器片が数点出土している。ＳＴ０１に近接しており、関連施設の可能性を考慮したい。

ＳＤ１７・１８（17号・18号溝）（第273図）

上段丘陵面平坦部に確認された。調査区南東側に２条の平行した浅い溝である。それぞれの幅約30cm～60cmで、約1.0ｍの間隔で平行して走っている。検出面が低いため、およそ17ｍに渡って確認されたのみであるが、さらに南東方向と北西方向とに続く溝であると思われる。北西側に溝を延長させると竪穴住居群がある場所に当たり、二本の溝はいずれかの居住施設に関連したもの、例えば集落へ通じ道路施設であ



1：黒褐色土(Hue7.5YR2/2)炭化物、焼土粒を少量含む。
2：暗褐色土(Hue10YR3/3)地山の黄褐色土(Hue7.5YR4/4)を混じ、焼土粒を含む。
3：暗褐色土(Hue10YR3/3)２層より焼土を多く含む。

第302図　牛出古窯遺跡　ＳＤ10・ＳＫ07

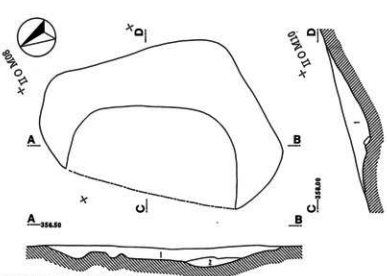
ると思われる。出土遺物はないが、覆土から奈良・平安時代の遺構と判断した。

ＳＫ０２（２号土坑）（第303図）

上段丘陵面縁辺の斜面部に位置する。斜面下方は流失しており、全貌は不明である。底面も凸凹しており、出土遺物も見られない。覆土より奈良・平安時代のものと判断した。

ＳＫ０９（９号土坑）（第301図）

上段段丘面縁辺の平坦部に位置する。60cm×68cmの楕円形を呈し、底面には大きな凹凸がある。覆土から判断して奈良・平安時代のものとしているが、出土遺物が無く遺構の時期については明言できない。さらに後世の所産であるかもしれない。



第303図　牛出古窯遺跡　ＳＫ02

ＳＫ１７（17号土坑）（第301図）

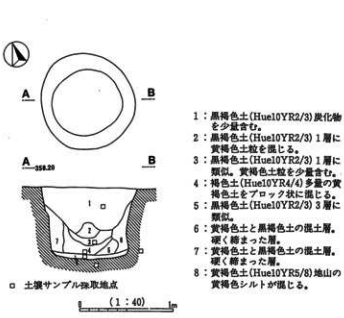
上段段丘面の斜面部に位置する。南側がＳＢ１５に接しており、両遺構間で接合する遺物もあり、ＳＢ１５の一部であったものかもしれない。底面から須恵器甕の破片が出土した。

ＳＫ１８（18号土坑）（第304図）

上段段丘面の平坦部に位置し、他の遺構が集中する地区からは約60ｍほど離れて単独で存在している。直径約1.04ｍ、深さ0.8ｍの円筒形の土坑である。覆土の２層以下は埋め戻しによる人為的な体積層と考えられ、特に６層・７層は、硬く締まった土であたかも土坑中央に何かを置きそのまわりに土を詰めて突き固めたようである。その後土坑内の物質は腐食により消滅し土坑内に陥没が起こり１層が自然堆積した、と土層断面観察により推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。覆土の１層が、基本土層Ⅲ層に類似することから、縄文時代から平安時代のいずれかの時期の遺構であるとしか言えない。なお、土坑墓である可能性を考えてリン・カルシウム分析を行ったが、土坑内とその周辺との土壌中のリン・カルシウムの量に有為な差はない、という分析結果が得られている。

ＳＸ０１（第301図）

ＳＢ１２とＳＢ１３の間に検出された浅い溝状の遺構である。住居址と切り合う部分では不整な形状をしている。検出面で火床面が１ケ所確認されている。他に、ＳＢ１２の覆土中に確認された火床面の可能性がある焼土は、層位が異なっており先述の火床面と同一



第304図　牛出古窯遺跡　ＳＫ18

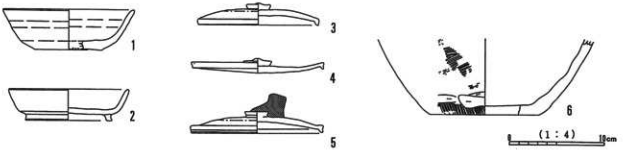
時期ではないと判断される。覆土には黄褐色土または灰色粘土がブロック状に混じており、人為的な埋め戻し土もしくは盛り土の崩落による堆積と考えられる。また、ＳＸ０１の覆土２層はＳＢ１３の床面の覆土につながっていることから、本遺構は、住居址が埋没する過程で形成されているか、もしくは住居址に関係する施設であったか、の二通りの解釈ができる。以上の覆土の観察からＳＢ１２→ＳＢ１３→（＝）ＳＸ０１となる新旧関係が確認される。遺構の性格は不明である。出土遺物はないが、ＳＢ１３との関係から奈良時代後半期のものと考えられる。

ＳＸ０２（第273・305図）

上段段丘面の斜面部に位置する。自然流路のＳＤ０４と配水管埋設により破壊され、覆土のみが残されているため形態は不明である。覆土の暗褐色土中に須恵器片が含まれている。ＳＢ１５と同様の竪穴状遺構であるかもしれないが残存部がわずかであるため詳細は不明である。

出土遺物（第305図）　須恵器杯Ａ（１）、杯Ｂ（２）、蓋Ｂ（３～５）、甕底部（６）がみられる。１は回転糸切り未調整で、法量のやや大きめな杯である。６は平底である。

時期　ＳＢ１３と同類の杯や蓋がみられ、同時期（８世紀中葉～後葉）のものと思われる。



第305図　牛出古窯遺跡　ＳＸ02出土遺物

第６節　中世以降の遺構と遺物

１　集石土坑（墓坑他）

覆土に焼骨と炭化物を含む土坑と、その上面に人頭大の礫を配しているものが２基確認された。火葬墓と思われる。

ＳＨ０１（第306図・第14表）

被熱した礫が直径約80cmの円の範囲に不規則に配されている。礫を除去すると直径約50cm、深さ12cmの皿状の土坑が検出された。土坑の覆土には炭化物と焼土と焼骨が含まれれていた。覆土上面より、古銭が３枚まとまって出土した。土坑を覆っている礫の多くは被熱しており、礫面の一部が赤褐色または黒褐色に変色している。被熱している礫面の位置関係を観察すると、変色部分が連続しないことから、礫は原位置で被熱したのではなく、被熱後土坑上に集められたものであると判断できる。土坑底面は焼けていない。したがって、本遺構は火葬施設ではなく火葬した焼骨を埋葬した施設と考えられる。火葬時に被熱したものと考えらる礫が土坑上面に配されていることから、火葬の場所も本遺構に近接したところと考えられるが、その痕跡は検出できなかった。

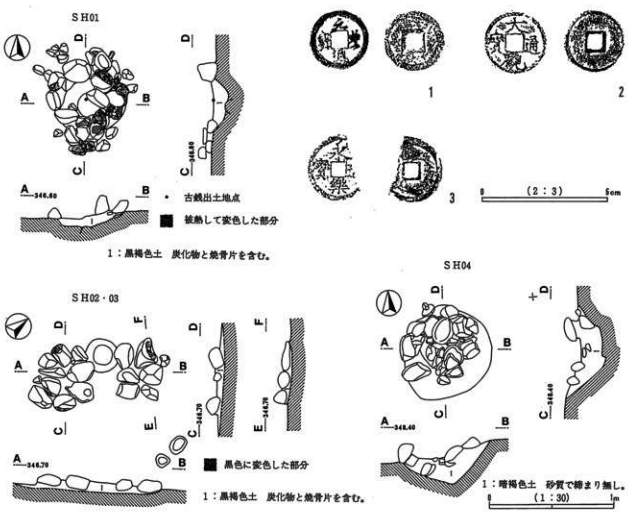
出土遺物　古銭３点（第14表）。大観通宝は被熱のためか、一部黒色に変色している。焼骨。

第14表　牛出古窯遺跡　出土銭貨一覧

図版No.	出土地点	銭貨名	初鋳造年	王朝名	外径	備考
第306図－１	SH01	元豊通宝	1078年	宋	24.9mm	
第306図－２	SH01	大観通宝	1107年	宋	25.0mm	被熱で一部黒色に変色している。
第306図－３	SH01	永楽通宝	1408年	明	26.5mm	欠損
	SH02付近	開元通宝	621年	唐	24.9mm	
	DT12グリッド	祥符元宝	1008年	宋	—	周囲欠損

ＳＨ０２・０３（第306図）

Ⅲ層上面に、人頭大の礫を約50cm四方に平らに配したものが二か所並んでいる。礫はすべて焼けており、部分的に黒く変色しているものがある。変色した被熱部分が連続しないことから推定して、礫は焼けた後に円形もしくは方形に配されている。礫の下はわずかに皿状にくぼんでいることがセクションから観察されるが、検出面を下げ過ぎたため、掘り込みの形状は不明である。窪みのほぼ中央部にはピットが検出された。直径27cm、深さ５cm、覆土は礫下の窪みの覆土と同様に、焼けた骨片を含む黒褐色土である。以上の状況から、礫の配列は２つのまとまりになるが、これらは同時に配石されたものでひとつの遺構として捕らえられる。火床面は認められない。出土遺物は焼骨片のみ。ＳＨ０１と同様に、火葬した焼骨を埋葬した施設と考えられる。遺構付近から開元通宝が出土している（第14表）。



第306図　牛出古窯遺跡　ＳＨ01・02・03・04

ＳＨ０４（第306図）

直径70cmの土坑中に礫が落ち込んでいる。礫の数点は赤褐色に焼けている。覆土は基本土層Ⅱ層に類似し、ＳＨ０１・０２・０３の覆土とは異なり焼骨は含まれない。出土遺物なし。遺構の性格は不明である。時期は中世以降のものである。

２　炭窯

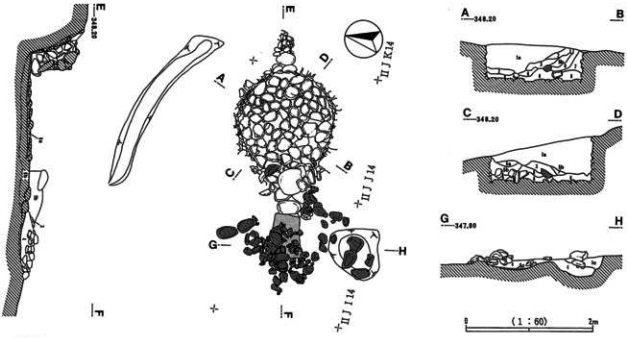
下段段丘面に炭窯が１基検出された。時期は限定できないが本項で取り上げる。

ＳＹ０２（第307図）

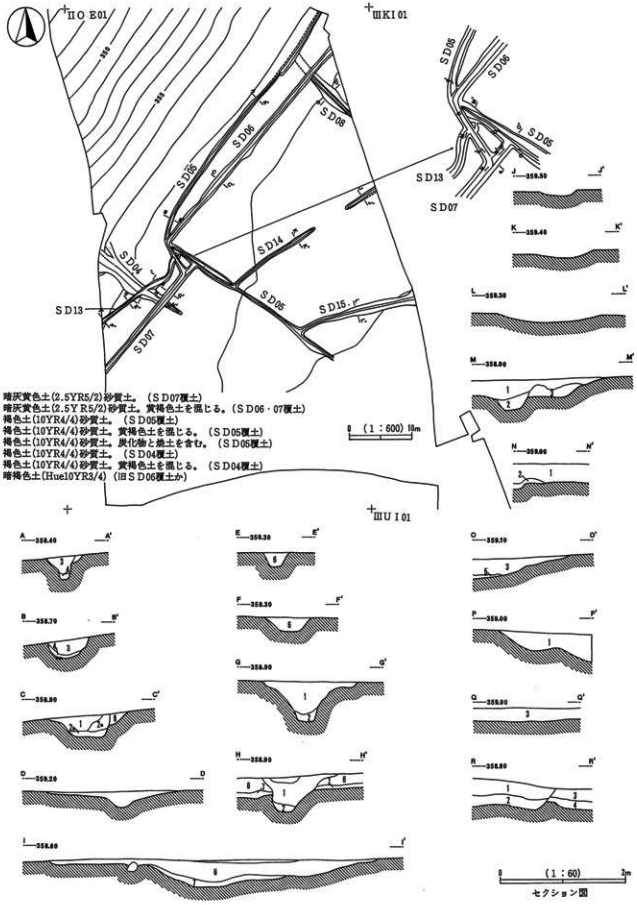
窯の構造　内径約1.6ｍの円筒形に石を積み上げ、東西方向に焚き口と煙道とが対峙して構築され、床面には平石が敷きつめられている。壁面では石と石との隙間に土が詰められている。窯底での敷石部分の規模は、南北2.7ｍ，東西1.48ｍである。焚き口西側には焚き口を構築していたと思われる焼けた石が崩れ落ちている。窯の天井と思われる焼土ブロックが覆土に堆積しているため、天井部は土で覆われていたものと推定される。焚口部西側の土が焼けており、炭の窯出時に焼けたものと思われる。ちなみに、炭焼きの経験者の話によると、この窯は、いわゆる白炭を焼く窯であるとのことである。

付属施設　焚き口の南西側に直径50cm，最大深さ50cmの不整形な土坑が検出された。民俗例からこれは焚口部を塞ぐための土を取った穴と判断できる。また窯体北側に幅30cm、長さ2.95ｍ，深さ15cm～20cmの溝があるが、窯よりも斜面下方に位置しており、窯との関連があるか否かは不明である。

時期決定をできる遺物がなく、時期は不明である。



第307図　牛出古窯遺跡　ＳＹ02（炭窯）



第308図　牛出古窯遺跡　近世以降の溝

３　溝

ＳＤ０４・０５・０６・０７・０８・１３・１４・１５（第308図）

ＳＤ０４は自然に侵食されてできた溝であが、他は人工的な溝である。断面の切り合い関係から、(ＳＤ０４→）ＳＤ０５→ＳＤ０６・０７の順に掘られていることがわかる。また、ＳＤ１４・１５はＳＤ０５に関連した溝であると捕らえることができる。ＳＤ０８は基本土層Ｉ層が覆土であり、他の溝よりも新しい。これらの溝は覆土から見て中世以降の溝であることは明らかであるが、時期を決定できる遺物は出土していない。性格も不明である。

註

1　分析結果は上信越自動車道堀廻文化財発掘調査報告書14（平成９年度刊行予定）に掲載する。

2　註１と同じ。

3　北信甕は短い口縁部と砲弾形の胴部、丸底が特徴である。口縁部が回転ナデ調整されている。口縁部と胴部上半部にロクロ痕やカキ目を残し胴下半部に外面ケズリ、内面ハケ調整がされている。北信地域を中心に分布している。直井（直井　1996）氏によると「８世紀後半頃出現し、あるいは導入され、10世紀代まで煮炊具の中心として存在する。」とされる。

北陸甕の特徴は北信甕と同様であるが相違点は北信甕の方が胴下半部の丸味がやや少ないのとタタキ技法の痕跡が確認されない個体が多いこと（直井　1996）である。

坂井氏は北陸系の甕を２分類し、９世紀後半以降加賀方面においてみられる口縁部が短く立ち上がり受け口状となるタイプと、口縁端部をロクロでつまみ上げられた越後系のタイプをあげている。また、北信甕は口縁部を回転ナデ調整(ロクロナデ)しているとした。

また坂井氏は北信系の甕と越後系の甕は形態の相違だけでなく胎土にも相違がみられるとし、北信系の胎土は砂粒が多く、赤味が強く、越後系胎土は白くて肌色に近く砂粒が少ないと指摘した（坂井　1993)。

ロクロ土師器甕の口縁端部は、面取りしたようなものと摘み上げのような面取りのあるものと回転ナデのものがあり、これらの三種が栗林遺跡焼成遺構（中島　1994）では同時に焼成されていたことが報告されている。

4　羽釜は松本平では松本11期（10世紀後半）に長胴甕と小型甕に代わって出現すると小平氏は述べている（小平　1990)。

武蔵国の中世成立期の煮炊き土器を扱った水口氏によると（水口　1991)、武蔵型甕Ａ類（口頸部「区」の字形）・Ｂ類（口頸部「コ」の字状）から甕Ｃ類へ転換する第Ⅱ段階第２小期（下限は10世紀後半）に羽釜が登場し、この段階で須恵器の生産が終わるとしている。羽釜は第Ⅳ段階（下限は11世紀後半）まで続くとしている。

5　註１と同じ。

引用文献

小平和夫　1990　第３章第５節古代の土器　『一松本市内その１－総論編』中央自動車道長野線堀廻文化財発掘調査報告書４

小林眞弗　1993　所謂「北信型の甕」について　向坂鋼二還暦記念論集

坂井秀弥　1993　長野県飯山市平安期佐渡産須恵器・越後系土器　『北陸古代研究』４

坂井秀弥　1989ｂ北陸型土師器長甕の製作方法『新潟県考古学談話会会報』３新潟県考古学談話会

笹沢　浩　1988ａ古代の土器　『長野県史』考古史料編（四）

直井雅尚　1996　信濃における奈良平安時代の土師器甕について　『鍋と甕　そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム

中島庄一　1994　第Ⅲ章栗林遺跡第６節５遺物「土師器焼成遺構の土器」　『一長野県中野市内一栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県堀廻文化財センター発掘報告書19

水口由紀子1991　武蔵国における中世成立期の煮沸土器小考　『埼玉考古学論集設立10周年記念論文集』埼玉県堀廻文化財調査事業団

第９章　調査の成果と課題

第１節　高丘丘陵における中期・後期旧石器時代移行期から後期前半期の石器群―がまん淵遺跡を中心として―

１　高丘丘陵の旧石器時代遺跡

(1)　高丘丘陵の地形

高丘丘陵は長野盆地の北端部、盆地が幅を狭めて収束する部分に位置し、西を画する西部山地に平行するように南北に延びる細長い丘陵（長丘・高丘丘陵）の南端部分にあたる。西部山地と長丘・高丘丘陵の間には千曲川が嵌入蛇行し、両者を分断する。丘陵の南端部では西部山地との距離がやや広がり、盆地低部が湾状に入り込み、丘陵は西部山地から延びる半島状の地形をなしている。

次に高丘丘陵の形成過程を概観し、遺跡の形成年代について考えておきたい。フォッサマグナの海に約1400万年前に誕生した古長野湾（ほぼ松本盆地と長野盆地、飯山盆地以北）は約170万年前には陸地化し、約70万年前筑摩山地の隆起により松本盆地と長野盆地にあたる地域が分断される。そして、約50～60万年前、長野盆地の西縁部を境に西部山地側が隆起、河東山地側が沈降する活動が開始され、盆地西縁部に沿って細長い凹地が長野市から飯山市にかけて形成された。これが初源期の長野盆地である。凹地には周囲から河川が流れ込み、豊野町付近を中心として、湖が形成され、厚い堆積層を形成した。この湖を古豊野湖と呼び、堆積した地層を豊野層と呼ぶ。

20～40万年前、盆地西縁部は急激な断層運動により隆起し、盆地西縁部の境界を明瞭にするとともに、豊野層を不整合に覆う角礫層や砂礫層からなる南郷層が形成される。南郷層は20～10万年前の間に堆積したと考えられている。その後、西部山地はさらに急激な隆起運動を行い、盆地よりの西部山地裾部分に新しい丘陵群を形成した。高丘丘陵はこの隆起運動によって形成された新しい丘陵群の一つであり、豊野層と南郷層をのせ、盆地低部と西部山地との境界線を形成している。

このように、高丘丘陵に人類が活動できる環境が形成されたのは、高丘丘陵が湖底より隆起した20～10万年前以後のことであると考えられる。したがって、高丘丘陵の旧石器時代遺跡は少なくとも20～10万年前以後に形成されたものであると考えられるのである。

高丘丘陵は半島状をなして、盆地低部に突き出しているが、その先端部分の東側は延徳田圃と呼ばれる低湿地になっている。ボーリング調査で、地下35ｍに厚さ５cmに堆積した姶良Tnが確認されている。姶良Tn降下以後35ｍの土砂が堆積し、低湿地を埋めたことになる。とすれば、遺跡が営まれた当時、延徳田圃一帯には湖が形成され、高丘丘陵はその湖に突き出していた可能性もある。

(2)　高丘丘陵の遺跡と立地

盆地低部に突き出した高丘丘陵にはがまん淵遺跡をはじめ、沢田鍋土遺跡（さわだなべつち）、立ヶ花表遺跡（たてがはな）、牛出古窯遺跡（うしでこよう）、浜津ヶ池遺跡（はまつがいけ）、安源寺遺跡（あんげんじ）が知られ、千曲川を挟んだ対岸の西部山地裾部の丘陵には南曽峯遺跡（みなそね）が知られている。結論が前後してしまうが、南曽峯遺跡は中期旧石器時代新段階、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺

跡は中期・後期旧石器時代移行期、立ヶ花表遺跡、浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡は後期旧石器時代前半期に編年される石器群である。中期及び移行期の遺跡は高丘丘陵南半部分の限られた範囲に集中し、特に移行期のがまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡は丘陵の先端を二つにわける小さな谷を挟んで隣接している。

ところで、がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡については若干の説明が必要である。埋蔵文化財センターは半島状に突き出した高丘丘陵の先端を二つにわける小さな谷底に沿うように建設された高速道路幅部分を調査しているが、高速道路の建設に伴い周辺道路も整備され、それらの道路部分については中野市教育委員会が調査している。したがって、がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡は調査時期を違えて、埋蔵文化財センターと中野市教育委員会でそれぞれ調査した経緯がある。がまん淵遺跡石器出土地点は谷の東斜面に位置し、埋蔵文化財センターの調査範囲を越えて東側に広がる可能性があった。この部分については中野市教育委員会が調査する計画であったが、掘削面が豪雨で崩落し調査出来なかった。

谷の西斜面に位置する沢田鍋土遺跡は中野市教育委員会による2回の調査が実施されている。1回は埋蔵文化財センターの調査区に平行する道路整備に伴うもの、2回目はその調査区の北端に直行して西に延びる道路建設に伴うものである。中野市の第1回目の調査区では細石刃石器群のブロックと撹乱層からペン先形の台形様石器及び剝片類を検出している。第2回目の調査では移行期のブロックを検出している。このブロックは1回目の調査区からやや西に離れている。こうした調査結果から、谷の斜面には移行期あるいは後期前半期のブロックが複数存在していた可能性が高い。その意味で、細石刃ブロックに含めた大型石器や中野市教育委員会の1回目の調査で検出された打製石斧様の石器については移行期ないし後期前半期の所産である可能性も否定できない。

ちなみに、後期前半期の立ヶ花表遺跡も沢田鍋土遺跡の調査区とはやや距離をおくが同じ西斜面に位置している。このように、谷を挟む東西の斜面には点々と、移行期から後期前半期のブロックが分布していると思われ、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡は谷を挟んで分布するブロック群が発見された地点の名称といった趣さえある。

高丘丘陵の先端に開析された小さな谷という地形条件と遺跡の立地は強い関連性をもっていると考えられる。場合によっては先ほど推測した延徳田圃の湖が谷底にまで広がり、谷の斜面は湖に面した斜面であったかもしれない。水辺付近は丘陵部の単純な森林植生ではなく、より多様な植生をもった水辺環境を形成し、空のひらけたスペースを提供したであろう。数少ない移行期の遺跡が狭い範囲に複数分布するのは当該期の遺跡がこうした限定的な立地環境を要求したためであろうか。

2　がまん淵遺跡

(1)　石器の分類

石器は（1）素材剝片剝離技術→（2）素材剝片の細分→（3）調整加工の部位と石器の形態の順に階層的に分類する。がまん淵遺跡の石器の形態は調整加工によって素材剝片の形状を大きく変えておらず、素材剝片のあり方が石器の形態＝機能に大きな影響を与えていると考えられるからである。こうした石器の形態と調整加工のあり方は二つに解釈可能であろう。第1の解釈は石器形態と素材剝片剝離は無関係であり、造ろうとする石器形態に似合う剝片を選択したため調整加工が少ないとする場合、第2の解釈は剝片剝離と石器形態が結びついており、造ろうとした石器にあわせて剝片を剝離したため調整加工が少ないとする考え方である。

また、これとは別に、石器の全体的な形態は全く意識されておらず、刃部のみが意識されていたと考えることもできよう。このように考えれば刃部のみの分類を行うべきであり、分類基準は全く異なるものと

なろう。が、筆者は否定的である。すでに、前期段階に優美な斧状の両面加工石器が存在し、それがどのような意識と結びついていたかは別として、人類は特定の形の石器形態を作り続けていたからである。

さて、仮に第１の解釈が正しければ特定の剥離方法で作られた剥片の類型が石器の形態に結びつかないであろうし、第２の解釈が正しければ剥離方法、素材剥片の形態、石器の形態が有機的に結びつくことになろう。がまん淵遺跡のみでは明確にはならないが高丘丘陵の石器群全体を視野にいれると、第１と第２の解釈の中間的な様相を示していると考えられる。面一的な素材提供→多様な形態への加工という調整加工技術に大きく依存する後期旧石器時代後半期の石刃技法による手法とは異なる石器製作のあり方である。

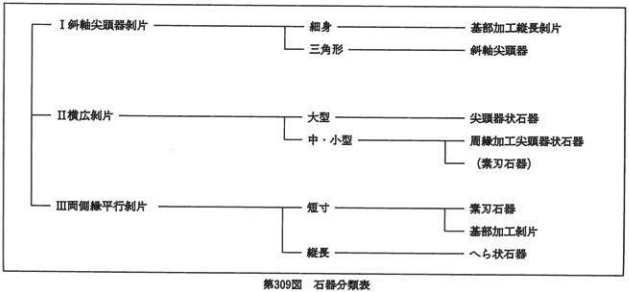
素材剥片はⅠ斜軸尖頭器剥片、Ⅱ横広剥片、Ⅲ両側縁平行剥片に分類する。

Ⅰ斜軸尖頭器剥片は三角形の剥片で、主要剥離の方向と石器の軸が斜めに傾くもの（安斎・1988）、円盤状石核から剥離されたとされる。おそらく、ひとつの円盤状石核から１・２枚の斜軸尖頭器剥片が剥離された程度であったろう。

斜軸尖頭器剥片はＡ細身の三角形とＢ三角形の二者に分類できる。前者を斜軸尖頭器剥片とするに抵抗があるかもしれないが、第43図４を見れば斜軸尖頭器剥片と同じであることが理解されよう。主要剥離面の方向と剥片軸及び稜がずれ、細いけれども三角形を呈し、通常の斜軸尖頭器剥片と同様な要件を満たしているものと思う。Ａ細身のものは基部加工縦長剥片の素材となり、Ｂ三角形はそのまま斜軸尖頭器として利用される。

Ⅱ横広剥片は長さに比して、横幅の広い貝殻状剥片である。平坦な剥片剥離作業面が用意されれば、普通はこの形態の剥片しか剥離されない。もっとも、原則的な剥離技法であろう。大きく厚い横広剥片と中・小型の貝殻状剥片の二者がある。前者は１例であるが、尖頭器状の石器の素材となっている。後者は周縁加工や両面加工の尖頭器状石器、素刃石器の素材として利用される。

Ⅲ両側縁平行剥片は剥片の両側縁がほぼ平行するものをさし、短寸のものと縦長の二者があり、前者は素刃石器、後者はへら状石器の素材となる。



第309図　石器分類表

(2)　石器各説

Ａ基部加工縦長剥片（第43図２・３）

細身の斜軸尖頭器剥片を素材とし、基部を中心として背面及び腹面の両面から平坦な調整剥離が認められる。２では側縁にまで調整剥離が認められ、３も基部付近に大きめの剥離が認められる。調整剥離は刃

部を作出するものではなく、打面部分の幅を狭くし、全体に柳葉状の形態に仕上げるためと思われる。

高丘丘陵では沢田鍋土遺跡に類例を求めることができる。また、野尻湖遺跡群立ヶ鼻遺跡、安沢遺跡、権現山遺跡Ⅱ、七曲遺跡などにも類例を求めることができようか。基部加工縦長剥片は佐藤宏之氏の定義にかかるものであるが、細身であるという相違点がある。むしろ、佐藤氏が初期ナイフ形石器に先行する形態の石器として取り上げた基部加工縦長剥片は本稿で基部加工剥片として分類する石器により類似する。しかし、初期ナイフ形石器との形態的な類似のみに限れば本例のほうが、基部加工剥片より類似度が高いといえよう。

B斜軸尖頭器（第50図　61・64・65）

斜軸尖頭器剥片をそのまま用いた石器である。三例とも先端部分の側縁にマイクロコンタクトフラクチャーを観察することができることから、石器として利用されたものと考えた。64は基部及び先端部分に調整剥離様の剥離痕が観察される。61にも基部に剥離が認められるが調整剥離かどうか判然としない。いわゆる斜軸尖頭器剥片と比較するとやや幅に比して長さが短い。打面を水平に位置させると横広剥片や両側縁平行剥片との類似性が目立つ。福島県上野出島遺跡（第313図８～10）や馬場壇Ａ６層（第313図１）に類例を求めることができようか。

がまん淵遺跡の斜軸尖頭器の先端部分にマイクロコンタクトフラクチャーが観察され、尖頭状に交差する鋭い縁辺が刃部であると考えられると同時にこの石器の機能を暗示している。斜軸尖頭器には縁辺が未調整の場合と調整剥離痕のような小剥離が認められるものがある。これらの小剥離痕が使用痕である可能性も否定できない。また、大きく業材剥片の形状を変えた例もあるが、刃部再生の可能性も考える必要があろう。

C尖頭器状石器（第50図59）

大型で厚い横広剥片を業材として、主に腹面側からの平坦剥離により片面加工の尖頭器状の形態に加工されている。類例として、南曽峯遺跡の両面加工の尖頭器状石器（第314図２）、福島県大平遺跡（第313図33）や竹ノ森遺跡上層（第313図40）の斧状石器に類例を求めることができようか。

D業刃石器（第50図60）

厚い中型の横広剥片を業材とする。打面部分とステップフレイキングとなった先端を側縁とした台形状の石器である。側縁にあたる打面部分に急角度な調整剥離が認められる。

E周縁加工尖頭器状石器（第50図63）

横広剥片が利用されたと思われるが、業材剥片の変形が著しく、どのような業材剥片であるか断定できない。腹面側からの調整剥離により桃実状の平面形態に加工される。中期新段階の石器群を構成する両面加工や円周加工のスクレイパーと同種の石器であると考える。

F基部加工剥片（第312図28）

短寸の両側縁平行剥片を業材剥片とし、基部に調整剥離がなされる。打面は急角度の小さな剥離によって取り除かれ、基部の背面と腹面に打面側からの平坦な調整剥離が認められる。類例は沢田鍋土遺跡に認められる（第312図17）。佐藤宏之氏が初期ナイフ形石器に先行するとした基部加工縦長剥片との類似性が高い。先端の縁辺にマイクロコンタクトフラクチャーが認められる。

後出と考える沢田鍋土遺跡では業刃石器（第312図20・21）とは分離されることから、基部加工剥片としたが、機能的には業刃石器との類似性が指摘されよう。

J一側縁加工石器（第50図58）

縦長の剥片を業材とし、その一側縁に並列するやや急角度の小さな調整剥離痕が認められる石器である。類例は沢田鍋土遺跡に認められる（第312図16）。

また、後期前半期に認められる弧状ナイフ形石器（佐藤1992）と形態的に極めてよく似ている。系譜として連続するものとは思えないが、機能的には類似しているのであろう。

Hへら形石器（第43図１）

大型の縦長剥片を素材とし、基部及び側縁に小さな調整剥離を施した石器である。素材となった剥片の背面は先端部分に礫面を残し、主要剥離面と同じ打面から剥離されたと思われる細長い剥離痕が残る。佐藤宏之氏がへら形石器に機能的連関を示すとした秋田県松木台Ⅲ遺跡出土例に類例を求めることができようか。

(3) 剥片剥離

A石核

石核（残核）の分類についてはがまん淵遺跡からの出土例のみでは、資料数が少なく、類型化できないため、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡（台形様石器伴出）、浜津ヶ池遺跡（台形様石器伴出）、立ヶ花表遺跡（台形様石器伴出）の石核を加えて分類した。移行期から後期旧石器時代前半期までを一括して取り扱うことには問題があるが、驚くほど類似する部分が多く、移行期から後期旧石器時代への移行が連続的であること示す結果となっている。

第１類（第310図１～５）：円盤状ないし盤状を呈し、打面と剥片剥離作業面がそれぞれ表裏面に位置するものを本類とした。打点は選択された打面の全周をめぐり、結果として剥片剥離の方向は石核の中心に向かうことになる。がまん淵遺跡１・２・４、牛出古窯遺跡３、沢田鍋土遺跡５を本類とする。がまん淵遺跡４を本類に含めることには若干の躊躇したが、石核が臨機的な石器として利用されたものと考えた。

比較的大きなものは、採取してきた原石をそのまま利用するのではなく、いったん分厚い剥片に分割して用いている様子ががまん淵遺跡１や牛出古窯遺跡３の表皮を残したものから伺われる。剥離面が表裏両面に認められるが、その数はどちらか一方の面に偏り、打面がある程度固定されていたことを示している。

残された剥離痕からみる限り、これらの石核から剥離された剥片は貝殻状ないし台形を呈した横広剥片であったと考えられる。

例外として、牛出古窯遺跡２がある。この例には石核が切断されたかのように、縁辺の一部が分厚くなっている。これが故意なのか、偶発的なものなのかは判断しかねるが、分厚い縁辺の角近くを打点にした剥離では４cm前後の長さをもつ剥片が剥離されたており、注目される。おそらく、剥離された剥片は加撃の方向と剥片の長軸が交差する三角形であろう。

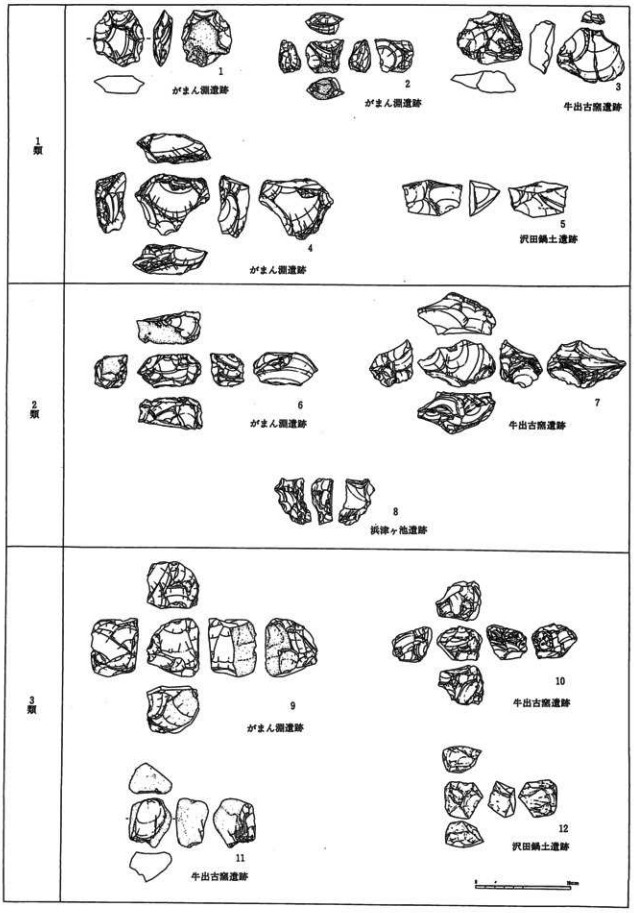
第２類（第310図６～８）：三角柱ないし角柱の形態をしたもので、側面に打面を設定し、隣接する側面を剥片剥離作業面として、打点を横方向に移動させながら、複数回の剥片剥離が行われている。１類と比較すれば、剥片剥離角が小さくなっている。

がまん淵遺跡６、牛出古窯遺跡７を本類とした。また、立ヶ花表遺跡や浜津ヶ池遺跡からも出土している。がまん淵遺跡６は二つの打面と二つの剥片剥離作業面が認められ、両打面とも積極的な打面調整は認められない。牛出古窯遺跡７は打面が固定され、大きな剥離痕が残る。未発達な打面調整の可能性もある。

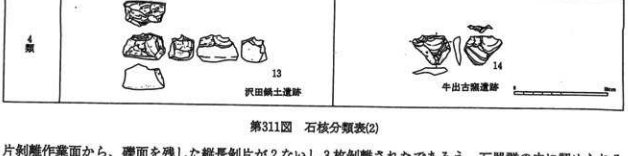
なお、がまん淵遺跡６では打面となった二つの側面及び上下の頂面に礫の表皮が残り、ほぼ角柱状の転石がそのまま石核として利用されたと考えられる。

第３類（第310図９～12）：立方体の石核で打面と剥片剥離作業面を入れ替えて剥片剥離作業を行う石核である。同一打面から数回の剥片剥離が行われる。がまん淵遺跡９、牛出古窯遺跡10・11が本類にあたる。また、牛出古窯遺跡11は本例の初期段階に何らかの理由で、剥片剥離が中止されたものであろう。

全体的には台形ないし貝殻状の剥片が剥離されたもの考えられるが、がまん淵遺跡９の例では初期の剥



第310図　石核分類表(1)



第311図　石核分類表(2)

片剥離作業面から、礫面を残した縦長剥片が2ないし3枚剥離されたであろう。石器群の中に認められる縦長剥片にはこうした過程で剥離されたものが含まれていよう。

第4類（第311図13・14）：本類には不定形の石核を一括しておく。今後の資料の増加の中で類例が増加するものと考える。沢田鍋土遺跡13、牛出古窯遺跡14・第246図12は厚い剥片の裏面から素材剥片を剥離している。

B接合資料

接合資料3（第47図39～42）

三例の剥片が接合した例である。40は三角形、41は縦長剥片、42は三角形の剥片である。40と41は同一打面から、42は180度逆方向の打面から剥離される。打面は剥離面を利用するが、打面調整は認められない。剥片はいずれも礫面を残しており、剥離行程の初期の段階で剥離されたものであろう。接合資料の背面には両極の打面とは異なる方向、左側縁には90度横方向から、右側縁には下部打面と同一方向及び45度の方向からの剥離痕が認められる。これらの剥離は接合剥片が剥離される以前の段階のものである。残された礫面は緩やかなカーブをもっており、石核の原材は直径10cm前後の転石であった可能性が高い。接合した剥片が剥離される以前に、上下の打面は形成される。

この接合資料は縦長の剥片が、両極にある打面から、打面を固定して複数回の剥片剥離が行われたことを示している。縦長剥片の連続的な剥離へと結びつく可能性もあり、重視されなければならない。

接合資料4（第47図43～45）

二つの横広剥片が接合した例である。両剥片は打面を共有する。打面は平坦な剥離面であるが打面調整は認められず、打点は横方向に移動する。両剥片の打面と45度あるいは90度方向を変えた剥離痕が両剥片の背面に残されている。

(4)　小結

素材剥片を大きく三類に分類した。斜軸尖頭器片（1類）は中期旧石器時代を特徴づける剥片であり、横広剥片（2類）は中期旧石器時代から後期旧石器時代にかけて、両側縁平行剥片（3類）は移行期に特徴的な剥片とすることができよう。

中期旧石器時代に認められる斜軸尖頭器剥片と横広剥片が作り出す剥片双極構造は、縦長剥片と短寸な側縁平行剥片を含めて、がまん洲遺跡の石器群にも基本的に受け継がれているものと推測される。また、周辺加工の尖頭器状石器は中期旧石器時代新段階の特徴的な石器であり、斜軸尖頭器剥片とともに伝統的な要素と考えられよう。

こうした中期旧石器時代との同質的傾向と反対に新しい様相を見せる部分もある。一つは基部加工縦長剥片の素材となった細身の斜軸尖頭器剥片の出現である。斜軸尖頭器剥片と同質に剥片剥離過程によって剥離されたものと考えているが、縦長剥片への志向性が強く斜軸尖頭器剥片剥離過程に反映された結果ではないかと考える。この要求は移行期をとおして両側縁平行剥片の縦長化へと結び付いていくことになる

と考えられるが、がまん洞遺跡では斜軸尖頭器剝片の剝片剝離過程にも求められていたのであろう。

また、剝片基部に対する調整剝離が、縦長剝片や両側縁平行剝片に顕在化する。がまん洞遺跡では両側縁平行剝片や細身の斜軸尖頭器剝片（縦長剝片）を素材とした石器に限定してこの傾向が認められるが、後続する沢田鍋土遺跡では横広剝片の基部加工も顕在化し、定形的な石器形態を形成している。基部加工やその他調整剝離には平坦剝離が基本的に利用されるが、一側縁加工石器（第50図58）と基部加工剝片（第50図62）には比較的急角度で並列しながら連続する剝離が認められる。中期旧石器段階では平坦剝離を用いて、素材剝片の形状を大きく変えるのが一般的であり、こうした急角度の調整剝離は新しい要素とすることができよう。

石器は基部加工縦長剝片、基部加工剝片、尖頭器状石器、一側縁加工石器、へら状石器、周縁加工尖頭器状石器、斜軸尖頭器、素刃石器に分類した。周縁加工尖頭器状石器や斜軸尖頭器は中期旧石器時代前半期を特徴づける石器であり、中期から移行期に連続する尖頭器状石器、素刃石器を除く他は新出の石器である。

以上見てきたように、がまん洞遺跡の石器群は中期旧石器時代的様相と移行期の両特徴を備えており、中期新段階から移行期への過渡的な石器群ということができ、移行期の古い段階の石器群であると考えられよう。そして、中期新段階的な伝統的様相と移行期の新しい様相の併存は中期旧石器時代の石器群を母胎として移行期の石器群が成立していることを示しており、その間には急激な変化が存在しなかったことは確かであろう。

安斉正人氏は移行期の石器群は石子原遺跡→平林遺跡→山方遺跡と変遷しているとする。この変遷観に従えば、がまん洞遺跡は石子原以前の段階とすることができようか。

3　高丘丘陵の石器群

(1)　変遷段階の想定

本節ではがまん洞遺跡を含めた高丘丘陵の石器群を概観し、中期旧石器時代新段階から後期旧石器時代前半期までの石器群の変遷過程を想定しておきたい。高丘丘陵の石器群については、地質学的な年代測定や理化学的な年代測定は行われていない。したがって、各遺跡石器の石器群を通時区分するためには、石器や剝片の形態、剝片剝離技術、石器組成など類似性や差異をこれまでの編年に対比させ、その変遷を想定する他に手段はない。この手法は大きな誤ちを犯す危険性が高いが、がまん洞遺跡の考古学的な位置づけを考えるために、敢えて高丘丘陵の石器群の変遷を想定しておきたい。

高丘丘陵の当該期の遺跡にはがまん洞遺跡の他に、南曽峯遺跡（第314図）、沢田鍋土遺跡（中野市教育委員会1995）、立ヶ花表遺跡、牛出古窪遺跡、安源寺遺跡（長野県考古学会1969）、浜津ヶ池遺跡（中野市教育委員会1996）がある。これらの石器群は斜軸尖頭器剝片が含まれる南曽峯遺跡、がまん洞遺跡のグループと含まれない沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡、牛出古窪遺跡、安源寺遺跡、浜津ヶ池遺跡のグループに大きく二分することができる。

斜軸尖頭器剝片を含むグループには斜軸尖頭器剝片を中心に組成されている南曽峯遺跡、斜軸尖頭器剝片と両側縁平行剝片が併存し、半両面加工の尖頭器状石器を組成するがまん洞遺跡がある。

斜軸尖頭器剝片剝片、半両面加工の尖頭器状石器は中期旧石器時代新段階を特徴づける石器類である。一方、両側縁平行剝片は縦長志向性をもつ移行期の特徴を具現していると考えられる。したがって、斜軸尖頭器状剝片の減少と両側縁平行剝片（寸詰まりの縦長剝片）の増加を当該期の石器群変遷の大きな流れと考え、南曽峯遺跡→がまん洞遺跡という時間的序列を想定しておきたい。

一方、斜軸尖頭器状剝片剝片を含まない石器群は台形様石器を伴わない沢田鍋土遺跡と、台形様石器を伴う立ヶ花表遺跡、牛出古窯遺跡、浜津ヶ池遺跡があり、後者では使用される石材も黒曜石に集中し、様相を大きく変えている。沢田鍋土遺跡は短寸の両側縁平行剝片や素刃石器を組成とし、台形様石器を欠落させることから、台形様石器を伴う石器群の前段階に編年されるであろう。また、台形様石器を伴う石器群は明確な基部両側縁加工を持たない台形様石器から組成される立ヶ花表遺跡、基部両側縁加工の台形様石器に局部磨製石斧が伴う牛出古窯遺跡、やや小型の幾何学的な台形様石器を伴う浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡という変遷序列を想定しておきたい。

南曽峯遺跡→がまん淵遺跡→沢田鍋土遺跡→立ヶ花表遺跡→牛出古窯遺跡→浜津ヶ池遺跡・安源寺遺跡という変遷が考えられ、南曽峯遺跡は中期旧石器時代新段階、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡は移行期、立ヶ花表遺跡以降は後期旧石器時代の所産であり、立ヶ花表遺跡が関東武蔵野台地関東ロームⅩ層ないしⅨ層段階、牛出古窯遺跡がⅨ層、浜津ヶ池遺跡・安源寺遺跡はⅦ層段階に相当すると考えておきたい。

(2)　斜軸尖頭器剝片の変質

斜軸尖頭器は南曽峯遺跡とがまん淵遺跡から、合計７点出土しているが、その形態にバリエーションがある。佐藤宏之氏は中期旧石器時代新段階で斜軸尖頭器状剝片の主要剝離の方向と石器の軸が一致し、剝片の両側縁が平行するようになると指摘し、斜軸尖頭器（剝片）が中期旧石器時代をとおして変化することを指摘している。おそらく、南曽峯遺跡とがまん淵遺跡の斜軸尖頭器に見られる相違も斜軸尖頭器剝片の通時的な変化の一端を示していると考えられる。

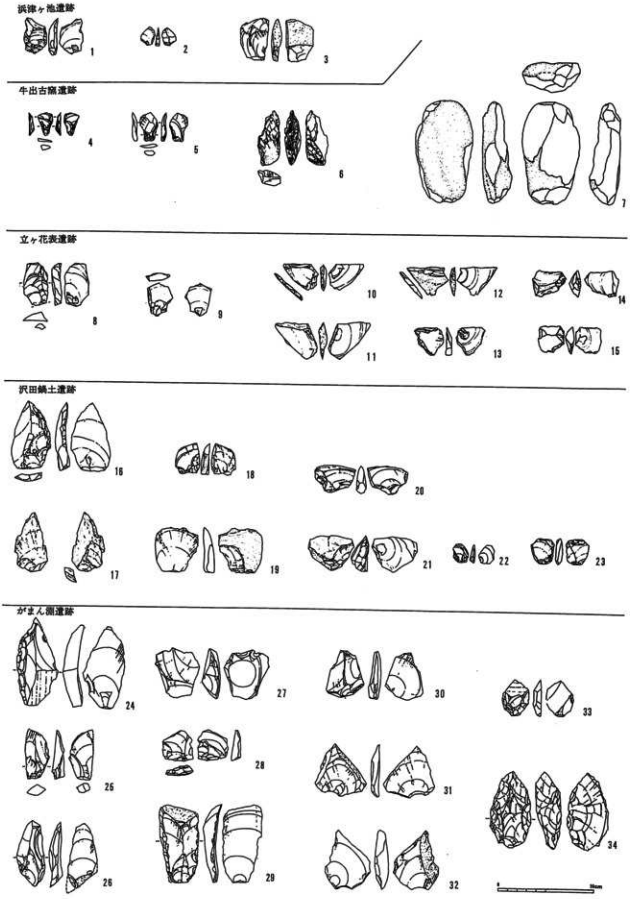
南曽峯遺跡の斜軸尖頭器剝片（第314図１）は主要剝離面の方向と石器の軸は一致しないが、両側縁が平行しており、佐藤氏の指摘する縦長化の方向の様相を示しているのではないかと考える。一方、南曽峯遺跡に後出すると考えたがまん淵遺跡の斜軸尖頭器には細身のものと平面形が菱形状をなす二つの斜軸尖頭器が認められる。菱形を呈するものはやや小型で主要剝離面の方向と石器の軸はずれ、全体として斜軸尖頭器剝片の形態をもっているが、打面の幅が広く、長さも短く、それまでの斜軸尖頭器剝片とはやや異なる印象を抱かせる。

後期旧石器時代前半期に編年される立ヶ花表遺跡の剝片の置き方を変えるとがまん淵遺跡の斜軸尖頭器剝片と良く似た形状となり、立ヶ花表遺跡の剝片と共通する特徴を備えていることがわかる。接合関係から立ヶ花表遺跡の剝片は１類に分類した円盤状の石核から剝離されたことがわかっている。立ヶ花表遺跡後期旧石器時代前半期の遺跡であり、単線的に連続するとは考えられないが、菱形状を呈する斜軸尖頭器は後期前半期の円盤状石核から剝離される剝片と形態的類似性を強めると同時に、斜軸尖頭器剝片がもつ固有性を移行期の初期段階で失うのではなかろうか。

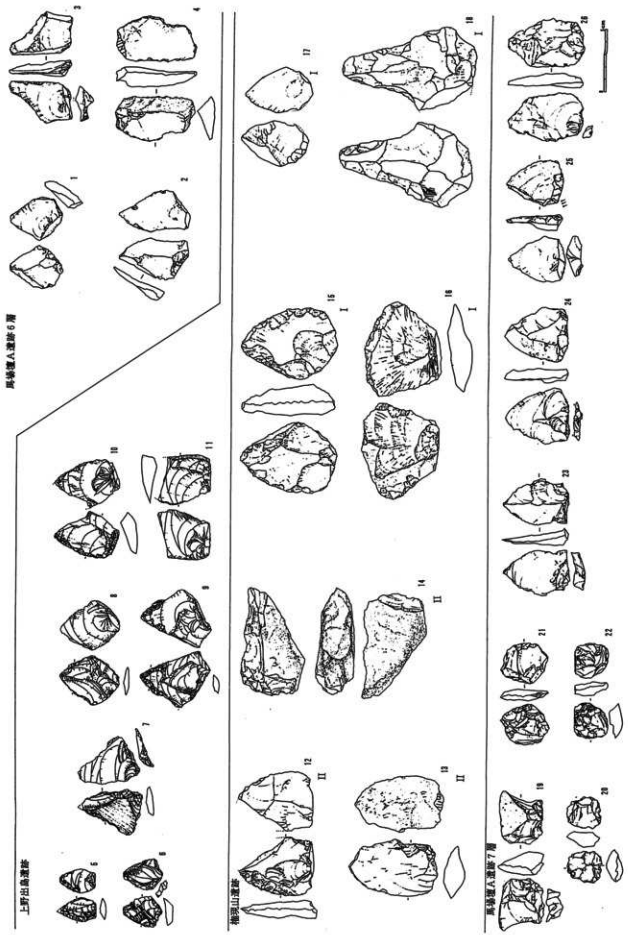
がまん淵遺跡における細身の斜軸尖頭器剝片と菱形状の斜軸尖頭器剝片の共存関係は斜軸尖頭器がもっていた統合的機能のうち刃器的用法はより特殊化した細身の斜軸尖頭器剝片・基部加工縦長剝片、削器・掻器的用法は菱形を呈する斜軸尖頭器や側縁加工石器・尖頭器状石器へと分化したことを示しているのではないかと考える。

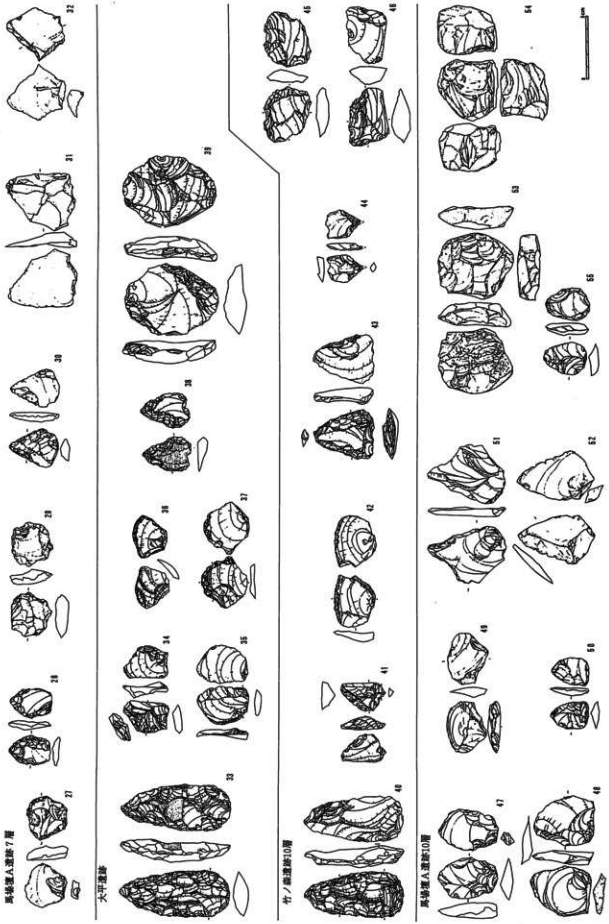
(3)　基部加工剝片の出現

基部加工剝片には細身の斜軸尖頭器剝片を素材とするものと、短寸な両側縁平行剝片を素材とする二者がある。細身な素材をした例は全体として柳葉状の形態をなし、鋭い縁辺（刃部？）が石器の長軸と平行するが、短寸な両側縁平行剝片を素材としたものは鋭い縁辺が石器の軸と直交あるいは斜行し、両者は異なる機能を背景とした形態であると考えられる。前者を基部加工縦長剝片、後者を基部加工剝片と呼称したい。

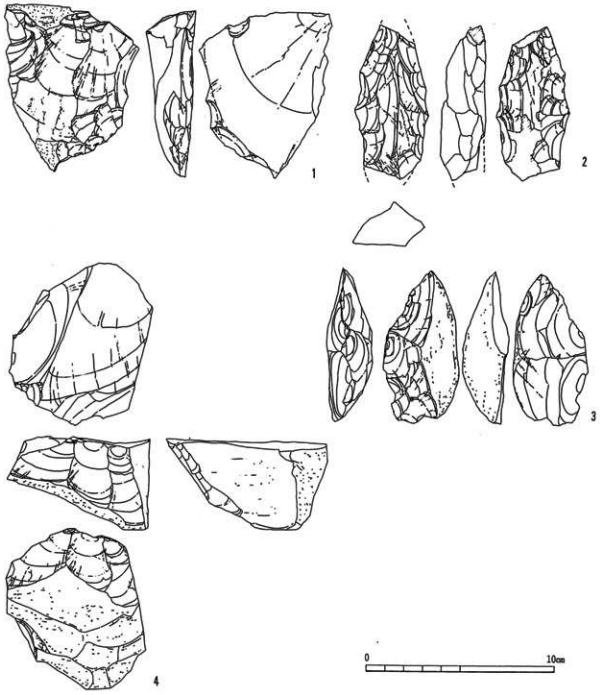


第312図　高丘丘陵石器群Ａ変遷


馬場第八遺跡6層
上野出島遺跡
柿原山遺跡
馬場第八遺跡7層



第313図　中期旧石器時代～中期・後期移行期の石器群



第314図　南曽峯遺跡出土の石器

がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡（第312図17・25・26）に認められる基部加工縦長剝片と立ヶ花表遺跡（第312図8）や浜津ヶ池遺跡（第312図1）に認められる初期ナイフ形石器は、両者とも石器の長軸と鋭い縁辺が平行するように配慮されること、縦長の剝片を素材とし、平坦な剝離による基部調整が主であることなど、機能的にも形態的にも類似性が高いといえよう。おそらく、こうした基部加工を伴う縦刃形の石器は移行期の初期に出現し、後期旧石器時代前半期にまで受け継がれていく要素であろう。

また、一側縁加工石器とした類（第312図24）は、石器の軸と鋭い縁辺が平行関係にあり、側縁加工を石器の形態を整えるためのものと考えれば、基部加工縦長剝片と同様な機能的背景を持っているとされよう。側縁加工石器は沢田鍋土遺跡（第312図16）にも伴い、さらに後期旧石器時代前半期の初期ナイフ形石器の類型のひとつである側縁加工のナイフ形石器へと受け継がれていくのではないだろうか。

(4)　素刃石器・台形様石器

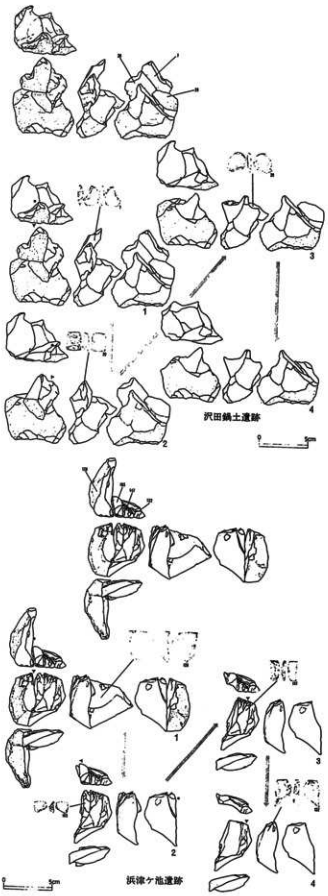
貝殻状剥片を素材とする横刃形の石器（素刃石器）は中期旧石器時代をとおして存在し、後期旧石器時代前半期の石器群の構造的要素となる台形様石器に受け継がれていくとされている。高丘丘陵の石器群の変遷をとおしても、この指摘は裏付けられる。

がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡には側縁あるいは基部を加工した横刃形の石器・素刃石器（第312図20・21・27）が伴う。がまん淵遺跡では明瞭でない基部加工は沢田鍋土遺跡で顕在化し定型的な石器形態として定着した感がある。鋭い縁辺とそれを挟む側縁部分調整剥離が行われる石器形態は台形様石器のそれと基本的に一致し、両者は類似した機能をもっていたことをうかがわせる。

しかしながら、がまん淵遺跡や沢田鍋土遺跡に出現した横刃形の基部ないし側縁加工の石器だけが、台形様石器に結び付くのではないだろう。台形様石器の鋭い縁辺は必ずしも、石器の軸に直交せず、尖頭状のものや、斜行するものがある。がまん淵遺跡や沢田鍋土遺跡に認められる短すの剥片の基部を加工した石器（基部加工剥片・第312図18・28）との機能的類似性を考えることができ、立ヶ花表遺跡では特に基部加工を持たない横刃型石器（台形様石器第312図10～15）と荒い基部加工を伴い刃部が尖頭状を呈する台形様石器（第312図9）が共伴している。沢田鍋土遺跡から立ヶ花表遺跡へ移行する間に、素刃石器と基部加工剥片のもつ機能は融合分離し、改めて台形様石器として出現するのではないだろうか。

(5)　縦長剥片剥離技術

縦長剥片は南曽峯遺跡から認められるが、高丘丘陵の後期旧石器時代前半期において縦長剥片が石器群の主体を占めることはない。また、後期旧石器時代前半期の新しい段階まで腰付剥片剥離を伴う石刃技法から剥離され



第315図　沢田鍋土遺跡(上)浜津ケ池遺跡(下)石核接合資料

たと確証できるものはないし、そうした石刃核も出土していない。

縦長剥片剥離技術を考えるうえで、浜津ヶ池遺跡の接合資料（第315図上段）は注目されよう。この石核では母岩が盤状に荒割りされ、盤状の分厚い剥片の側面（小口）を剥片剥離作業面として縦長剥片が剥離されている。未調整の打面が固定され、複数回の縦長剥片が連続的に剥離されるが、打面の周囲を打点が移動し、剥片剥離作業面のなす稜の角度を保持しながら、縦長剥片を剥離する手法とは明らかに異なる。

一方、沢田鍋土遺跡には打面と剥片剥離作業面を交互に入れ替えながら、短寸の両側縁平行剥片を剥離した石核の接合資料（第315図下段）がある。これは選択された母岩が偏平なもので、偏平な側面（小口）を剥片剥離作業面としている。

これら二つの石核に共通するのは、幅の狭い剥片剥離作業面を用意する点にある。この方法であれば、剥片が縦に長くなろうとも、横方向に剥離が広がることはできず、縦長剥片が剥離される。典型的な剥片の背面は中央に陵をもたず、横断面は凹面状を呈している。

一方、がまん淵遺跡第310図3類（9）などの石核をみると縦長剥片は多面体石核による剥片剥離行程の初期段階で生じていることがわかる。母岩の表皮を強く剥離すると打面が用意される。この打面を利用する初期段階の剥離はあたかも石刃核の打面側からの側面調整と同様な剥片剥離過程となり、礫表面の形状や先行する剥離面が剥片剥離作業面に適当な角度の稜を形成した時には、短寸な縦長剥片や縦長剥片（両側縁平行剥片）が剥離できるからである。

こうした例などを介在させれば、打面が固定され、打点が打面の周囲をめぐる石刃技法は容易に成立すると思えるのだが、こうした傾向を高丘丘陵の石器群に見ることはできない。

扁平な石核を利用した縦長剥片剥離は沢田鍋土遺跡の両側縁平行剥片・短寸な縦長剥片剥離にその萌芽を見せ、浜津ヶ池遺跡段階まで、同一の技法が継続し、その過程で縦長化したと考えられよう。しかしながら、縦長剥片はこの技法からのみ剥離されたのではなく、立方体をなす石核の初期過程でも剥離された。後期前半期の縦長剥片剥離は技法として確立していたのではなく、複数の剥片剥離行程の過程に埋め込まれていたのであろう。

縦長剥片の連続的剥離の確立は中期・移行期と後期旧石器時代を分別する重要な要素である。高丘丘陵の石器群にのみ限れば、それは後期旧石器時代前半期段階でも確立していない。ただし、南関東武蔵野台遺跡のX層段階では断面三角形の縦長剥片が連続剥離された例がある。この例が剥片剥離作業面に生じた稜を利用したものであれば石刃技法につながる、あるいは祖型の石刃技法と評価しておかねばならない。打点の移動は剥片剥離作業面の稜を保持する形で行われているが、荒割りした礫の小口面を利用している点が気にかかる。いまだ、技法として確立したものではないと考えておきたい。

(6)　横広剥片剥離技術

他方、縦長剥片と対置関係におかれる横広剥片剥離技法は中期・移行期を経由し、後期旧石器時代前半期まで継続している。1類から4類に分類した石核はいずれも原則的には横広剥片を剥離したものである。いずれも石核調整は認められない。打面の固定や打点の移動が観察の視点として重視されてきているが、高丘丘陵の石核ではそうした要素の変化を通時的にとらえることはできない。

むしろ、打面の固定や打点の移動の様相は石核として選択された母岩の形状に大きく左右されているとすべきではないかと思われる。たとえば、角柱状の石核素材では打面が横方向にのびているため、打点が横方向に移動し、複数回の剥片剥離がなされる。立方体の石核素材では打面が横方向に狭いため、一打面からの剥片剥離数は前者よりも少なく、打面転移が頻繁に行われる。やや薄い盤状の石核素材では周囲の側面全体が打面となり、結果として剥離痕はすべて石核の中心に向かう。また厚い扁平な石核素材では上

面あるいは下面のどちらか一方が打面として選択され、打点が周囲を巡るように剥片剥離が行われる。こうした事例は単に打面の固定や打点の移動法の技術的側面と評価することはできない。

最も、重視しなければならないのは石核調整が認められない点である。これは資料数が少ないため、未発見の調整石核が存在している可能性も否定できないが、今後の大きな課題である。

石核調整の問題で若干注意しておきたいのは、母岩を荒割している可能性があることである。母岩を荒割りすることは大きさの調整とともに石核素材の形態を整える効果を生む。浜津ヶ池遺跡例では荒割りされた盤状剥片が石核素材として利用され、一つは縦長剥片剥離、他方は横広剥片剥離の石核とされ、盤状素材の小口は縦長剥片剥離の剥片剥離作業面として利用されている。

(7)　小結

がまん淵遺跡をはじめとする高丘丘陵石器群は中期旧石器時代新段階から後期旧石器時代前半期に編年される。南曽峯遺跡は中期新段階、がまん淵遺跡は移行期の前半段階、沢田鍋土遺跡は移行期の後半段階、立ヶ花表遺跡は武蔵野台地関東ロームⅩ層あるいはⅨ層段階相当、牛出古窯遺跡は武蔵野台地関東ローム層Ⅸ層段階相当、浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡は武蔵野台地関東ロームⅦ層段階相当と考えられよう。

高丘丘陵石器群の中期新段階から後期前半期までとおして概観すると、石器群は中期旧石器時代と移行期、移行期と後期旧石器時代前半期との間で石器群の様相が変化し、区分されうることは明らかである。ただし、その変化は急激なものではなく、先行する石器群の中に新しい様相が出現し、新しい様相が支配的になると同時にさらに新しい様相が出現するという過程を踏む。

移行期には中期石器時代を代表する斜軸尖頭器、周辺加工の尖頭器状石器が序々に消え、基部加工縦長剥片や基部加工剥片、基部加工を伴う素刃石器の定型化が求められる。またがまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡の石器群は移行期の所産と考えられるが両者の石器群は若干異なる様相をみせる。両石器群に認められる差異は基本的に中期旧石器的様相が減少していくという移行期の傾向を示しているものと考えらる。移行期は基部加工の顕在化と両側縁平行剥片剥離によって特徴づけられよう。移行期－後期旧石器時代前半期は台形様石器の出現をメルクマールとするが、立ヶ花表遺跡段階のあり方は単に台形様石器の出現という表現のみではとらえきれない一面をもっていよう。しかし、使用される石材は一変し、沢田鍋土遺跡でわずかに見られた黒曜石が支配的になる。この傾向は後期旧石器時代前半期に共通する。

縦長剥片はがまん淵遺跡以後の石器群の中に認められるが、組成に占める割合はほぼ一定で、特に後期旧石器時代前半期に増加する傾向は認められない。また、剥片剥離作業面の稜を利用して、連続的に縦長剥片を剥離する縦長剥片剥離技法は認められず、立方体石核の剥片剥離行程初期段階に生じる縦長剥片や扁平な石核の小口を利用する剥片剥離によって得られていたものと思われる。

4　まとめ

すでに、述べてきたように、高丘丘陵の中期旧石器時代から後期旧石器時代前半期の石器群は通時区分されるが、各々の石器群は先行する石器群の様相を残しつつ変化しており、急激に石器群の系統が入れ替わるという状況は観察されない。しかし、だからといって高丘丘陵の石器群が孤立的な自律変化を遂げていたということではない。変化の要因を限定された生態学的環境との相互作用にのみ求めることはできまい。生態学的な環境とは別に、人間が作り出す情報環境といった人工的環境も希薄であるとはいえ存在していたと予想されるからである。

特定の石器群が一つの製作技術によってのみ支えられているのではなく、表層的には相反するとさえ思

える製作技術が併存し石器群を支えていることを佐藤宏之氏は端的に示し、ともすれば製作技術と強く結び付けた特定の器種の変遷を記述することで石器群の変遷を考察する危険性を指摘し、石器群を構成する器種や器種組成、製作技術を分離することなく統一的に理解していく方向性を示し、石器群の変化を単に技術的な側面からのみ説明するのではなく、外環境との相互作用による説明へと転化した。

佐藤氏はこうした分析をするにあたり、石器群の構造という概念を用いている。構造を深層と表層と呼ぶべき階層性に分割し、深層には外環境への適応戦略を、表層には技術と機能を背景とした器種としての石器群を配置する。表層に位置する石器群は深層の適応戦略にコントロールされながら、弁別される要素（器種と製作技術）を有機的に関連させた構造が石器群のあり方だとしていると筆者は理解している。したがって、表層的な器種組成率や形態の変化が、即石器群の本質的な変質には結び付かず、発露された適応戦略の一バリエーションと評価される。後期旧石器時代前半期における縦長剥片・ナイフ形石器と横広剥片・台形様石器の両極構造という佐藤氏の表現は、適応戦略が選択した機能的な対置関係のことであると理解できる。

編年表はA石器群からB石器群が成立するという発生論的な記述が要求され、それが入れ子状に器種レベルや製作技術の記述にまで遡及しなければならない。佐藤氏の石器構造という概念は石器群レベルの発生論から、器種レベルに展開するときに、従来の分析と大きな違いをみせる。すなわち、具体的な器種そのものが系譜関係におかれるのではなく、適応戦略に選択された機能区分が次世代に系譜的に連なると考えるのである。したがって、具体の石器の見かけ上の類似性は石器の形態と製作技術が直線的な系譜関係、石器が石器を産むといった関係で結ばれていることを示すわけではない。場合によってはみかけ上の類似性にも関らず、大きく構造が変化している可能性も考慮しなければならない。

我々はこうした石器群のあり方（構造）に対する仮説の検証を個々の石器の分析から始めなければならない。したがって、石器の形態分類はまず機能のレベルで分類され、さらに地域差や時間差のレベルで細分されるのが理想的であろう。

石器の機能は（1）切断、（2）切削、（3）穿孔、（4）刺突、（4）こう打、（5）研磨に大別される。具体的に石器の機能を明らかにするためには使用痕観察が必要であるが、ここに大別した機能は刃部の形態（機能部）とその運動によって定まる。例えば、切断は鋭い縁辺（対象の硬度との相対的な関係を考慮する必要はあるが）が前後に運動することが原則的である。切削は刃部の方向と対象が直交するように運動する。したがって、刃部には強度が要求され、その形態はおのずと決定される（どのように加工されるかは別問題）。このように、石器の形態からある程度の機能を推測することができる。

がまん淵遺跡の基部加工縦長剥片石器は切断ないし刺突の機能をもつ縦刃形石器、基部加工剥片石器は切断機能をもつ横刃形石器、一側縁加工石器は切断機能をもつ縦刃形石器、葉刃石器は切断機能をもつ横刃形石器、尖頭器状石器は切削あるいは刺突機能が推測される。

このような視点から見れば、移行期の石器群は切断という同一機能をもちながら縦刃形石器と横刃形石器の二形態に区分される。一方これらの石器と表裏一体の関係をなす製作技術は重要な背景とはなるが、適応戦略の機能区分とはやや問題の側面を異にし、素材の供給と加工、消費という物質生活の過程という構造内部の相互作用に還元されていくものである。

横刃形石器と縦刃形石器は同機能をもつが、対象や手の動きを加えた実際の使用方法は異なっていたことは明らかである。縦刃形石器と横刃形石器の違いは運動方向の伝え方にある。縦刃形は前後に、横刃形は左右に手を動かさなければならない。したがって、その握りかたに相違が生じる。縦刃形は掌と指を使うバトンを握るような形、横刃形は親指と人差し指でつまむ形で使用されたであろう。あるいは基部加工が定着する感のある移行期以後は着柄も考慮にいれる必要があるかもしれない。

中期段階における斜軸尖頭器と小型のスクレイパーは機能区分と保持の仕方が密接に関連しているように思える。すなわち、剝片双極構造は単に機能的な対置関係を表象するばかりではなく人類の身体的な能力を表象している可能性も否定できない。

一方、移行期を経て後期旧石器時代前半期に確立する横刃形と縦刃形石器を明確に区分する石器群のあり方はより機能的な要素を強く反映したものと思われ、中期旧石器時代の石器群のあり方と様相を異にしていると考える。　安斉正人氏が指摘するように、後期旧石器時代の指標となる縦長剝片の連続的剝離は、世界各地での前身である中期旧石器時代の剝離技術の中から、独自に成立した可能性があるとされる。特に、レバノンのボカー・タクチト遺跡において、マーカスらによって研究された層位的事実から、明らかにされたルバロア技法の変容と石刃技法の成立は印象的である。そして、日本列島を含めた極東アジアでも、事情は同じであるといち早く指摘したのは安斉氏らであった。

高丘丘陵における石器群の変遷過程から、安斉正人氏や佐藤宏之氏らが指摘するように、中期旧石器時代新段階の石器群を母胎として、中期・後期旧石器時代移行期の石器群が成立し、中期・後期旧石器時代移行期の石器群を母胎として、後期旧石器時代前半期の石器群が成立したらしいことが理解される。

しかし、中期・後期旧石器時代移行期から後期旧石器時代前半期へは縦長剝片への志向性や両側縁が平行な縦長剝片の連続的な剝離は認められるものの、稜付剝片を伴う明確な石刃技法の成立をみることはできない。当地域では稜付剝片を伴う石刃技法が成立するのは後期旧石器時代後半期初頭に位置づけられる飯山市太子林遺跡の段階である。

もちろん、石刃技法の定義やそのバリエーションの捉え方にも関わる問題であり、軽々しく論じることはできないのであるが、木村英明氏が指摘したマリク遺跡の石刃技法、稲田孝司氏が指摘した水洞溝技法は、いずれも層平な母岩を用い、剝片剝離作業面に形成される稜を保存することで連続的に縦長剝片を剝離している。基本的な原理は稜付剝片を伴う石刃技法と同じである。

また、先ほど述べたレバノンのボカー・タクチト遺跡から発見された石刃石核は、剝片剝離の初期段階が明らかではないけれども、同様な原理で打点が打面の周囲を移動している。筆者は石刃技法の成立には間接打法の成立と剝離作業面に生じた一定角度を持つ稜を利用して縦長剝片が剝離できることに気づくことが必要だと考えている。その意味でルバロア技法は石核調整が剝片剝離作業面に一定の角度を用意するために行われており、その延長線上に石刃技法は成立するのだと考える。

がまん淵遺跡の石核などから、もう一歩進めれば石刃技法へと転化しそうな状況があることはすでに述べた。しかし、実際には縦長剝片は台形様石器を伴う浜津ヶ池遺跡で認められた盤状剝片の狭い側面を用いる技法と同様な剝片剝離技術で剝離されていたと思われ、中期・後期旧石器時代移行期の沢田鍋土遺跡の両側縁平行剝片を剝離した石核と原理的には連なる。中期・後期旧石器時代移行期の剝片剝離技術と後期旧石器時代前半期の剝片剝離技術の大きな原理的差異を認めることはできず、高丘丘陵の石器群は明確な石刃技法とは異なる伝統的な技法で縦長剝片を剝離していたものと思われる。

しかし、関東地方の後期旧石器時代前半期の初頭段階で、浜津ヶ池遺跡で復元された方法とは異なる縦長剝片の剝離技法が知られている。武蔵野台遺跡Ｘｂ層出土例である。半裁礫の小口を利用し、断面三角形の小型石刃を連続的に剝離している。剝離作業面の稜を利用した縦長剝片剝離である。一方、多摩蘭坂遺跡では断面凹状の剝片が、前後に接合しており、浜津ヶ池遺跡例と同様な剝離技法が予想される。田村隆氏は後期旧石器時代前半期においては、明確な石刃技法に必要な要素は存在しているが、統合していなかったと指摘する。後期旧石器時代前半期には明確な石刃技法が存在しないと考えるべきであろうか。そして、縦長剝片の剝離技法が独立した技法ではなく、様々な技法の剝片剝離行程の中で縦長剝片剝離が供給されていたと考えるべきであろうか。

ところで、素材剥片剥離技法と石器の機能的な形態のあり方とを直接的に結びつけることはできない。確かに石器形態と素材剥片剥離や調整剥離の技法は表裏一体をなすのであるが、形態は第一義的に機能に制約されるものである。例え石器の加工技術が稚拙で完全に希望する石器形態が製作出来なくとも、石器の形態は機能を満たすものでなければならない、少なくとも石器はその条件を満たしていなければならない。ただし、実際には前期旧石器時代の優美なアシュリアンハンドアックスの例をみれば明らかなように、人類はある意味で石の加工方法の極限を前期の段階で知っている。したがって、剥片剥離技術はどうすれば最も効果的に石器形態が作れるのかという点が中期以降の剥片剥離技術の観察の視座となるのである。素材剥片剥離の技法はカール・ポランニー氏が指摘する社会における物質の社会化過程の問題として、原材の入手の段階から検討しなければならない事柄だといえよう。素材剥片の剥離方法は石器素材提供のバリエーションに関連する事柄であり、石器の機能的形態とはやや視点が異なる。石刃技法の成立は様々な機能形態への素材提供が一元化されたことを示しており、佐藤氏が指摘する剥片選択から脱却し、素材剥片剥離と調整剥離が有機的に連鎖した手順重視型の石器製作へと移行したことを示しているのである。その意味では縦刃形石器である初期ナイフ形石器と横刃形石器である台形様石器が作り出す二極構造という現象は統一的な素材剥片が提供されていない状況を示していると考えることができよう。

様々な剥片剥離過程の中で生じた剥片の中から、それぞれの石器に似合う素材剥片を選択し調整加工を加えるのであれば、特定の形態の石器は特定の形態の剥片素材に結びついているかのように見えるはずである。高丘丘陵石器群の石核にはいくつかの類型があるが、いずれも石核調整を伴っていない。石核調整が行われていないとすれば、残された石核の多様なあり方は剥片剥離が行われる以前の母岩段階の形状が大きく関与していることになる。移行期から後期旧石器時代前半期における素材剥片剥離は一定の技法に収斂せずに、石器製作、素材剥片の選択に大きく依存していたのであろう。

長野県の旧石器時代研究はようやく移行期を視野にいれた比較研究が可能になったところであり、高丘丘陵に見た石器群のあり方は極めて限られた資料から推測された姿にすぎない。しかし、日本列島でも数少ない移行期の遺跡から後期へと連続的な石器群が得られたことは大きいと思われる。長野県の旧石器時代研究も人類史をも射程に入れた議論が可能になったと同時に大きな課題を背負ったことになろう。

引用・参考文献

安斎正人　1988　「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行　－前・中期／後期旧石器時代過度期の研究－」『先史考古学研究』1

大竹幸恵　1989　「原村弓振日向遺跡の石器群」『第2回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』

大野憲司　1984　「七曲台における旧石器時代遺跡群調査」『七曲台遺跡群』

岡村道雄他　1972　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　飯田市その3』

岡村道雄　1986　「宮城県の「前期旧石器」とその編年」『馬場壇A遺跡　Ⅰ』

岡村道雄　1990　『日本旧石器時代史』

奥村吉信　1987　「石刃技法の展開」『太平台恩恵』6

鎌田俊昭　1987　「宮城県における旧石器時代前・中期の諸問題」『旧石器考古学』34

佐藤宏之　1988　「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3

佐藤宏之　1990　「後期旧石器時代石器群構造の発生と成立」『法政考古学』15

佐藤宏之　1992　『日本旧石器文化の構造と進化』

田村　隆　1989　「二項的モードの推移と巡回－東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相－」『先史考古学研究』2

東京都埋蔵文化財センター調査研究部　1987　「多摩ニュータウンNo.471-B遺跡の調査外報」『月刊文化財』291

東北歴史館・石器文化談話会　1986　『馬場壇A遺跡Ⅰ　－前期旧石器の研究－』

東北歴史館・石器文化談話会　1988　『馬場壇A遺跡II　－前期旧石器時代の研究－』
東北歴史館・石器文化談話会　1989　『馬場壇A遺跡III　－前期旧石器時代の研究－』
戸田正勝　1989　「北関東前期旧石器の諸問題」『太平台史窓』8
中野市教育委員会　1955　『沢田鍋土遺跡発掘調査報告書』
中野市教育委員会　1996　『中野市埋蔵文化財発掘調査報告書　浜津ヶ池遺跡』
野尻湖考古研究グループ1993「仲町遺跡第6回陸上発掘の考古学的成果」『野尻湖博物館研究報告』第1号
藤村新一他　1990　「福島県白河郡東村に所在する上野出島遺跡発見の前期旧石器時代の石器群の報告」『福島考古』31
藤村新一他　1993　「福島市竹ノ森における前期旧石器時代の石器群」『福島考古』34
柳田俊雄　1995　「阿武隈川流域における中期旧石器時代の研究」『郡山女子大学紀用』31
Anthony E. Marks & Phillip Volkman 1987 「Technological variability and change seen throught core reconstruction」『The human uses of flint and chert』

第2節　弥生時代後期から古墳時代前期の土器

1　奥信濃の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年研究の現状

本報告書で取り上げたがまん瀬遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡では弥生後期から古墳出現期前後の土器資料が出土した。土器の様相はそれぞれの遺跡で異なり、本遺跡を取り巻く奥信濃の当該時期の細かな土器編年が必要となっている。先に、近接する中野市七瀬遺跡において赤塩氏が箱清水式から御屋敷式にかけての編年案を示した(赤塩1994)。その後も古墳出現期前後の遺跡が調査されており、七瀬遺跡に後続する資料も提示されてきた。

当該期の土器型式の認識は、1957年桐原健氏が飯山市柳町遺跡の報告の中で柳町式を設定したことに始まる。箱清水式とした柳町5・6号住居を切る4号住居に2・3号住居の資料を加えて柳町式とし、箱清水式に後続する弥生時代の土器型式とした(桐原1957・1959)。後年、桐原氏は柳町5・6号住居の資料を御屋敷式とし、柳町式は古墳時代の土器であると回想している(桐原1993)。しかし現在では柳町式の型式名は一般には使われていない（笹沢1988)。その後笹沢浩氏は御屋敷式を設定し（笹沢1976)、これを弥生時代後期終末期の様相としたが、後に御屋敷式土器を古墳時代の土器の中で説明している（笹沢1988)。

その後追加された資料により宇賀神氏・青木氏らにより弥生時代終末から古墳時代前期の土器編年が行われている（宇賀神1988b・1993、青木1989・1993・1996、青木・宇賀神1992)。また、上木戸遺跡（宇賀神1988a)、鵜前遺跡（臼居1994b)、七瀬遺跡（赤塩1994）などの当該期の集落跡の発掘調査により、東海系、北陸系土器などの外来系土器の流入が問題とされ、他地域の編年との対比によるそれぞれの遺跡での編年案も示されている。

弥生時代後期では箱清水式土器文化圏の中でも更に小地域毎の土器様相の違いが指摘され(笹沢1986)、中野市、飯山市の遺跡を中心とした奥信濃の弥生時代後期の土器の様相は善光寺平南部のものと趣を異にした一つの小地域圏を形成している。近年、奥信濃地域では本報告書で取り上げたがまん瀬遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の他にこれまで実態が不明であった弥生時代後期末から古墳時代前期の遺跡の調査例が増加してきている。中野市内では七瀬遺跡（赤塩他1994)、西条・岩船遺跡群（綿田1991)、安源寺遺跡前方後方形周溝墓（中野市教育委員会1995)、牛出遺跡（未報告)、周辺市町村では小布施町大遺上遺跡（未報告)、飯山市柳町遺跡（飯山市教育委員会1995)、同上野遺跡（飯山市教育委員会1990）などがある。

このような資料の中から赤塩仁氏（赤塩1994)、中島庄一氏（中島1996)、望月静雄氏（望月1995）がそれぞれ奥信濃における弥生時代から古墳時代への変換期の編年案を提出している。これらの成果を踏まえて本報告書で取り上げた3遺跡に編年的位置を与えたい。

2　土器の分類

がまん瀬遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の当該期の資料について七瀬遺跡の分類を基本に、甕形土器、壺形土器、広口短頸壺形土器、小型土器、高杯、器台、鉢形土器、有孔鉢形土器、内湾口縁鉢形土器、壺形土器に器種分類をした。それぞれの器種は、胴部から口縁部の形状、器面の調整により細分しアルファベット大文字を付し、さらにその口縁端部形態によりさらに細分し算用数字を付す。

なお、器面調整を以下のように分類し、表記した。

ハケA：板状の工具による櫛歯状の細い条線。(ハケと表記)

ハケB：板状の工具による条線でハケAより条線の間隔が広く、条線も太い。一見タタキ調整に見える

ものもある。

ナデA：指などで撫でるもので、器面が綺麗に仕上げられるもの。(ナデと表記)

ナデB：撫でた部分が窪み、ナデの単位が明瞭に見られ、その単位内には繊維束をひいたような条線が認められるもの。

ナデC：指で撫でた凹凸が明瞭に見られるもの。粘土を掻き取ったように見えるものもある。

ナデD：工具を用いて撫でたと思われ、浅い条線が認められる。条線はハケBのように明瞭には認められない。

ミガキ：工具を用いて磨いたと思われるもので、幅3㎜～5㎜の磨き痕跡が認められる。

タタキ：板状工具の平坦面で叩いたと思われる痕跡で、平行タタキ目が認められる。

甕形土器（第316図）

［甕A類］　箱清水式の甕形土器もしくはその系譜を引いているもので、頸部が「く」の字に屈曲するものと緩やかに湾曲するものがある。頸部には櫛描簾状文、口縁部から胴部上半にかけて櫛描波状文が施される。口縁部破片が多いため、台付甕も本類に含めて扱う。口縁端部形態により以下の4類に細分する。

A1類　口縁端部を丸くおさめる単純口縁。

A2類　口縁端部を面取るもの。面取り部分に櫛描波状文が施されるものが多い。

A3類　口縁端部が受口状になるもの。口縁端部の櫛描波状文は頸部から連続するものと、受け口部分に稜を持ち頸部からの波状文とは別の文様帯を意識させるものがある。

A4類　折り返し口縁のもの。折り返し部に櫛描波状文が認められる。

［甕B類］　羽状の斜走直線文が施されるもの。本類は出土点数は少なく、北信地方では弥生中期もしくは後期前半の吉田式に認められる施文方法であるが、東信地方においては御屋敷期併行期までは認められるため当該期のものである可能性を残して分類項目に入れた。

［甕C類］　櫛描波状文が施文されるが箱清水式の甕の形態に系譜をたどれないもの。

［甕D類］　有段口縁を持ち、北陸地方に系譜を求められるもの。

D1類　口縁部に擬凹線文もしくは刷毛状工具による擬似擬凹線文が施されるもの。

D2類　ヨコナデ調整のみで擬凹線文もしくは疑似擬凹線文を欠くもの。

［甕E類］　口縁が「く」の字に屈曲している甕のうち、外面にハケ調整の認められるものを一括する。頸部が短いものが多く口縁端部の形状により細分する。

E1類　口縁端部を面取るもの。

E2類　口縁部はやや外反し、口縁端部を丸くおさめるもの。

E3類　ヨコナデにより口縁端部がわずかに丸く肥大するもの。

E4類　口縁端部が厚く肥大するもの。

E5類　口縁が内湾するもの。

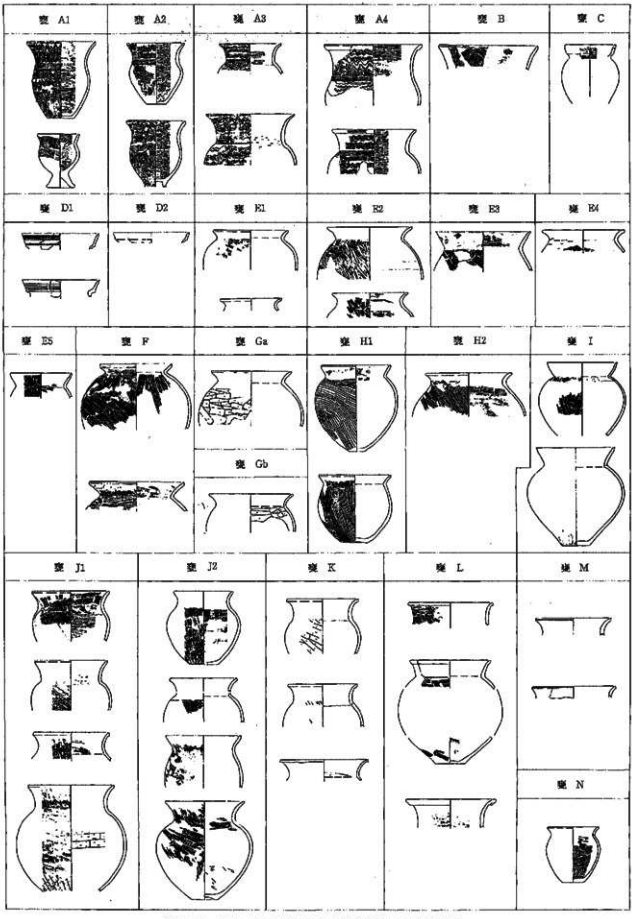
［甕F類］　口縁が「く」の字に屈曲している甕のうち、外面にくの字のハケ調整を施したもので、口縁部は直線かわずかに内湾し、口縁端部を面取るもの。面取り部分にはナデ調整による細沈線が認められるものがある。

［甕G類］　口縁が「く」の字に屈曲している甕のうち、外面がケズリ調整によるもの。ケズリ調整の違いにより細分する。

Ga類　鋭利な工具で削ったもの。

Gb類　粘土をきれいにそぎ落とすのではなく、撫でつけるもしくは掻き取ったと思われるもの。

［甕H類］　口縁が「く」の字に屈曲し、タタキまたはタタキに類似する板状の工具による粗いハケ調整



第316図　弥生時代後期から古墳時代前期の土器分類(1)

（ハケB）のもの。口縁端部の形状により細分する。

Ｈ１類　口縁端部を面取るもの。

Ｈ２類　口縁端部を丸くおさめるもの。

［壺Ｉ類］　口縁部が「く」の字に屈曲しわずかに内湾する。口縁端部はつまみあげて先ほそりになる。外面にはハケメ調整が見られ、器壁が薄い。

［壺Ｊ類］　頸部から緩やかに外反、もしくは伸長してから外反する口縁部で、器面外面にハケ調整を施したもの。口縁端部形態により２細分する。

Ｊ１類　口縁端部を面取るもの。

Ｊ２類　口縁端部を丸くおさめるもの。

［壺Ｋ類］　頸部から緩やかに外反もしくは伸長してから外反する口縁部で、口縁端部を面取る。器面外面にケズリ調整もしくはナデＢ・ナデＤ調整が施される。

［壺Ｌ類］　頸部から緩やかに外反もしくは伸長してから外反する折り返し口縁のもの。器面外面はハケ調整である。

［壺Ｍ類］　口縁部破片しか確認できないが、外反した口縁端部の面取られた部分には、ナデもしくは浅いハケ調整による細沈線が認められる。色調が白色味を帯びており、他の多くのものと区別される。

［壺Ｎ類］　器面外面がナデ調整によるもの。

壺形土器（第317図）

［壺Ａ類］　箱清水式もしくはその系譜上にある壺形土器で、胴下半部に稜をもち、頸部から胴上部に櫛描Ｔ字文もしくは櫛描直線文を施す。Ｔ字文にはボタン状の貼り付けが見られ、器面外面は縦のミガキ調整で、ほとんどが胴上半以上の外面から口縁部内面にかけて赤彩される。口縁部端部の形態により以下の３類に細分する。なお七瀬遺跡では壺Ａ類の折り返し口縁のものが出土しているが、本報告書で取りあげた遺跡では見られない。

Ａ１類　口縁端部を丸くおさめるもの。

Ａ２類　口縁端部を面取るもの。端部をややつまみあげるものとそうでないものの２種がある。口縁端部には櫛描波状文もしくは羅状文が施されるものが多い。

Ａ３類　口縁端部が受け口状になるもの。受け口状に立ち上がった部分に櫛描波状文が施される例がある。

［壺Ｂ類］　胴下半に稜を持つ器形の特徴から箱清水式の系譜上にある壺形土器と言えるが、櫛描Ｔ字文や赤彩が見られないなどＡ類にある要素が欠落し、Ａ類とは異なる要素を持つものを一括する。

Ｂ１類　胴下半に稜を持つ球胴形の器形で、肩部には櫛描Ｔ字文、その他の部分にはハケ調整が施される。全体の器形を確認できるのは１個体であるが、頸部は「く」の字に屈曲し口縁は外反し口縁端部を丸くおさめる。

Ｂ２類　器形はＢ１類に準じるが、櫛描Ｔ字文が見られない。器面はハケもしくはナデ調整を施す。

Ｂ３類　胴下半の稜が不明瞭な球胴形で、櫛描Ｔ字文が見られず器面はミガキ調整を施す。

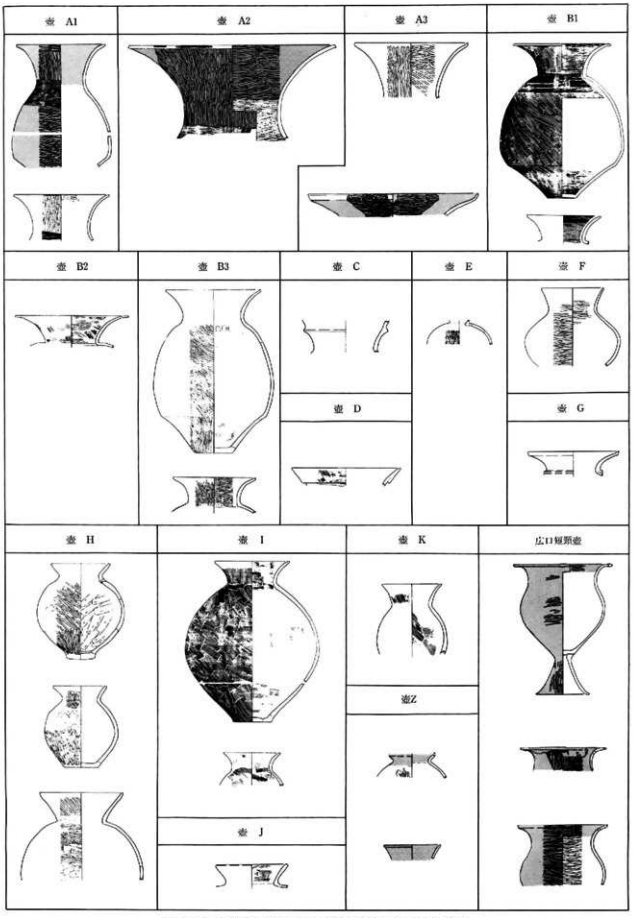
［壺Ｃ類］　口縁部に段を持つもの。１点確認されたのみである。

［壺Ｄ類］　幅広の折り返し口縁のもの。１点確認されたのみである。

［壺Ｅ類］　口縁部が内湾する小型の内湾口頸壺。

［壺Ｆ類］　横方向のミガキ調整が施されるもので、１点確認されたのみである。

［壺Ｇ類］　頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が面取りされ、頸部には突帯が貼りつけられる。器面は丁寧なナデ調整で胴部は球胴形になると推定される。１点確認されたのみである。



第317図　弥生時代後期から古墳時代前期の土器分類(2)

［壺Ｈ類］　頸部は緩やかに「く」の字に曲がり、胴部は球胴形を呈する。器面外面は粗雑なミガキ調整が施され、全体に雑で厚ぼったい感じを受ける。

［壺Ｉ類］　頸部は緩やかに「く」の字に曲がり、口縁端部を丸くおさめる。胴部は球胴形を呈し、器面外面は細かなハケ調整が施される。

［壺Ｊ類］　頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部を面取る。本類は口縁部のみが確認されているが、器面外面はナデ調整を施し、内面にはハケメ調整が施されている。

［壺Ｋ類］　頸部は緩やかに「く」の字に曲がり、胴部は球胴形を呈する。器面外面はハケメ調整の後粗雑なナデ調整を施す。

［壺Ｚ類］　Ａ～Ｋ類に分類されない赤色塗彩された壺形土器を一括した。

広口短頸壺形土器（第317図）　口縁部が短く外反し、赤色塗彩される。形態的には甕形土器に共通点を持つ。

台付きのもの、頸部に文様帯を持つもの、口縁部に２孔１対の小穴を有するものなどがある。

小型土器（第318図）　小型の壺形土器、甕形土器を一括し、大きさと器形により細別した。

［小型土器Ａ類］　最大径が11cm～14cmの相対的に大型のもののうち、「く」の字に口縁が屈曲し肩が張らない器形のもの。器面が摩滅しているものが多く、器面調整は不明なものが多い。

［小型土器Ｂ類］　最大径が13cm～14cmの相対的に大型のもののうち、「く」の字に口縁が屈曲し肩が張る器形のもの。赤彩されたものがある。

［小型土器Ｃ類］　最大径が6cm～11cmの相対的に小型のもののうち、頸部のくびれが明瞭で、口縁が「く」の字に屈曲するもの。器面調整はケズリ・ミガキ・ナデとさまざまで、さらに細分が可能である。

［小型土器Ｄ類］　最大径が6cm～11cmの相対的に小型のもののうち、頸部のくびれが不明瞭であるもの。器面調整はケズリによるものが多い。

高杯（第318図）　主に杯部の形態により以下のようＡ類～Ｆ類に分類し、杯部が不明な脚部のみの資料については１～７に分類した。

［高杯Ａ類］　杯部中位に稜を有し、口縁部が外反する有稜高杯。杯部器面は横方向のミガキで赤色塗彩がされており、箱清水式に多く見られる形態である。杯部と脚の接合部にヘラ状工具の刺突を持つ突帯がめぐるものがある。完形の資料は無いが高杯脚１がＡ類の脚になる。

［高杯Ｂ類］　杯部口縁が内湾しながら緩やかに立ち上がるもの。杯部の直径が20cmを越える大形のものが多く、脚部は正三角形に近いプロポーションで緩やかに外湾する。口縁部をわずかにつまみあげるものとそうでないものがある。赤色塗彩されるものが多い。杯部の形状により以下の２類に細分する。

Ｂ１類　杯底部付近にわずかな稜を持つもの。

Ｂ２類　杯底部に稜を持たないもの。

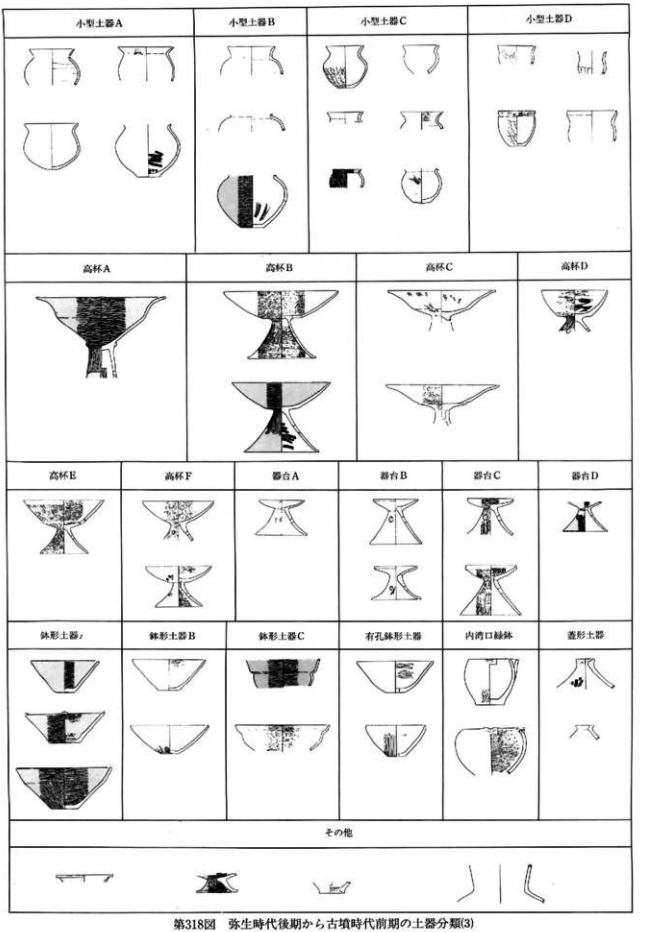
［高杯Ｃ類］　杯部下半部に稜を有し、外反しながら伸長する口縁のもの。完形のものが無く脚部の形態は不明である。

［高杯Ｄ類］　杯底部に稜を有し杯部口縁が内湾しながら立ち上がるもの。１点出土したのみで、内面の一部に赤色塗彩が認められる。

［高杯Ｅ類］　杯底部に稜を有し内湾しながら立ち上がり、口縁内面端部の内そぎ面には横ナデによる細沈線がみられる。脚部端部はわずかに内湾する。

［高杯Ｆ類］　杯部の直径が15cm前後で杯部口縁が内湾しながら緩やかに立ち上がる。脚部はわずかに内湾する。口唇部形態では高杯Ｂと類似するが、杯部体部に稜を持たず高杯Ｂに比べ小形である。

［高杯脚１］高杯Ａの脚部と考えられるもので、伸長した脚部で底部がわずかに外反する。ほとんどすべ



第318図　弥生時代後期から古墳時代前期の土器分類(3)

てが赤彩されており、三角形の透かしを持つものが少数ある。

［高杯脚2］　脚部底径が脚高より大きく、底部が外反して開いているもの。高杯Bの脚部に多い。

［高杯脚3］　脚部底径が脚高より大きく、端部が直線的に収束するもの。

［高杯脚4］　脚部底径が脚高より大きく、内湾して収束するもの。多くは高杯Eの脚部と考えられる。

［高杯脚5］　類例が少なく全体の形状が不明なものを一括した。柱状の細長い脚部で赤色塗彩されるもの。脚高が低く大きく横に開くものなどがある。

器台（第318図）　器台は脚部が口径を凌駕する小型器台のみで、口縁の形態により以下のようにA～Cに分類した。

［器台A類］　口縁部は内湾しながら口縁端部を丸くおさめる。

［器台B類］　口縁部は直線的で口縁端部外縁にゆるい稜を持つ。

［器台C類］　口縁端部をつまみ上げ、縁を有するもの。

鉢形土器（第318図）　口縁部形態、器面調整により以下のA～Cに分類した。

［鉢形土器A類］　平底・逆台形の形態で、ミガキ調整を基本とする。精巧水式土器の系譜上に認められるもので、赤色塗彩が認められるもの。口縁に突起を持つものがある。

［鉢形土器B類］　形態的には鉢形土器Aに類似するが、赤色塗彩が認められないもの。

［鉢形土器C］　有段口縁を有するもの。

有孔鉢形土器（第318図）　鉢形土器A・Bの底部に穿孔したもの。出土数が少なく細分は行わない。

内湾口縁鉢（第318図）　注ぎ口を有するもののみ確認され、注ぎ口を持たないものは確認されなかった。出土数が少な

第15表　器種分類別口縁部破片数

（　）内は類部または調部破片数

遺跡名	かまど類	釈迦堂遺跡	中出古墳	中出古墳	中出古墳	中出古墳	中出古墳	中出古墳	中出古墳	中出古墳
遺構名	SD01・SQ01	粘土採掘坑	SB03	SB04	SB05	SB06	SB07	SB08	SB09	SB10
甕A 1	183	1				1		2		2
甕A 2	109	3			7					
甕A 3	13				2					
甕A 4	48	1	1		1	1	1	1		4
甕B	(6)	3								
甕C										
甕D 1		7								
甕D 2		1								
甕E 1		8								
甕E 2		4								
甕E 3		6								
甕E 4		1								
甕E 5		1								
甕F		3								
甕G a		2								
甕G b		3				1				
甕H 1		3								
甕H 2		1								
甕I					3					
甕J 1		2		2			1	1	1	7
甕J 2		9	3	4	1				1	4
甕K		5			1	1				
甕L		4								1
甕M		1		1			1			
甕N							1			
壺A 1	76								5	
壺A 2	96									1
壺A 3	60							1		1
壺A		(2)	1							(1)
壺B									1	
壺B 1			1		2	2				
壺B 3		17			2					
壺B					1	3				
壺C		1								
壺D		1								
壺E										
壺F										
壺G		1								
壺H			1		2					2
壺I					2					
壺J		3								
壺K										
壺Z	1	3	1				1	1		1
広口無頸壺	14	2				2 ?				
小型土器A		3								
小型土器B				1	1					
小型土器C		1	1	1	1	2				
小型土器D	1	1	1				1			
高杯A	73									
高杯B	4 (120)	3	7	11	14	14	5	6	13	15
高杯C		5								
高杯D		1								
高杯E			2		1				1	2
高杯F						(1)		1		1+(1)
器台A						2				
器台B			1							
器台C				1	1			2		
鉢形土器A	3									
鉢形土器B	1									
鉢形土器C	2									
鉢形土器		2	1		2					
有孔鉢形土器	1				1					
内湾口縁鉢	2	1						3		
蓋形土器	1									
ミニチュア土器	2									

く細分は行わない。

壺形土器　出土数が少なく、全体の形態を確認できるものがないため、細分は行わない。

3　がまん淵・沢田鍋土・牛出古窯遺跡の土器群の様相

前項の器種分類に従って各遺跡の器種別の口縁部の破片数を第15表に示した。小破片も点数に加えており、提示した数値がそのまま各器種の個体数を反映しているわけではない。以下に器種ごとに各遺跡の概要を記述しまとめとしたい。

甕形土器　がまん淵遺跡は櫛描波状文が施されるA類が主体となり、B類・C類がわずかに見られる。C類（第70図53）は小破片で全体の器形は不明であるが、七潮遺跡などに類例があり、北陸地方の有段口縁の甕の影響を受けて成立した器形であると思われる。

沢田鍋土遺跡の甕形土器の種類は多様で、特にE類・J類が多くA類は希である。H類の口縁部が確認できるものはすべてタタキを模倣したと思われるハケB調整であるが、胴部破片ではタタキ調整のものも数点出土している。また、口縁部は出土していないがS字状口縁甕の脚部と思われるもの（第110図109）が出土した。

牛出古窯遺跡はJ類を主体とし、A類も比較的多く見られる。沢田鍋土遺跡に見られるB類～H類がなく、I類が牛出古窯遺跡のみに見られる。また、A類・I類などに5㎜前後の薄い器壁のものがあり、他の2遺跡の甕形土器と比較して全体的に器壁が薄い印象を受ける。

前項の分類では破片資料が多いため、器形を細分類の基準にはできなかったが、各遺跡の甕形土器A類を比較すると、がまん淵遺跡では頸部が緩やかに湾曲し口縁部へと続く器形を示すのに対し（第69図39～49）、牛出古窯遺跡では櫛描簾状文を境に頸部が屈曲する器形を示す（第256図13・14）。沢田鍋土遺跡では両者の中間形態を示すものが認められ（第106図21・24・27）、甕形土器A類の時間的変遷が予想される。すなわち、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の順に新しくなるものと推定される。また、沢田鍋土遺跡では頸部で屈曲する器形もあり（第106図20）、遺跡の継続期間が牛出古窯遺跡と一部重複する可能性がある（第319図）。

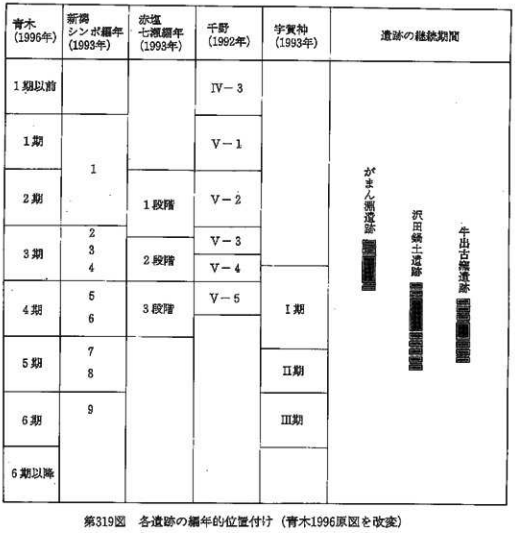
また、各遺跡の主体となる甕形土器を見ると、がまん淵遺跡はA類、沢田鍋土遺跡はE類とJ類、牛出古窯遺跡はJ類である。各遺跡の主体となる土器は地元で製作された土器と考えられ、先述した遺跡の前後関係を勘案すると、在地の甕形土器はA類からE類を介在して甕J類へと変化したと理解することができる。

壺形土器　がまん淵遺跡はF類の1点を除きすべてA類である。沢田鍋土遺跡は壺形土器の出土点数が少ないものの種類は多様である。甕形土器に比べ出土数が少ないのは粘土採掘跡という遺跡の性格によるものと思われる。牛出古窯遺跡ではA類・B類・E類・H類・I類が見られる。A1類の5点は同一個体の可能性が高く、A類の個体数は少ないものと思われる。また、A類は破片資料が多く全体の器形を確認できるものはない。それに対しB類は完形のものや器形が復元できる個体が相対的に多い。

なお、壺A類では、がまん淵遺跡のもの（第75図1）と比べ、沢田鍋土遺跡（第106図1）と牛出古窯遺跡（第270図1）のものは球胴化の傾向があり、器形の変化が認められる。

小型土器　がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡では出土点数が少なく、牛出古窯遺跡に出土例が多い。特にC類・D類とした小型のものは器形と器面調整が個々に異なっており、分類枠の再検討を要する。ちなみに、器台は牛出古窯遺跡のみに出土している。

高杯　がまん淵遺跡ではA類とB類が見られ、特にA類が主体を占める。B類の120点は小破片のため点数が突出しており、実際の個体数とはかけ離れた数値となっている。また、鉢形土器A類との識別ができ



第319図　各遺跡の編年的位置付け（青木1996原図を改変）

ず、120点の中には鉢形土器A類の口縁部も含まれており、確実に高杯B類と認識できるものは4点のみで、個体数はA類に比べて少ない。

沢田鍋土遺跡ではB類・C類・D類が見られ、特にC類の個体数が多い。口縁部は確認できなかったが、A類と思われる脚部（第111図153）が1点出土している。また、壺形土器と同様に他の2遺跡に比べ高杯の個体数が極めて少ない。

牛出古墳遺跡はB類・E類・F類が見られる。口縁部破片ではB類とF類の識別ができず、すべてB類として数えており、高杯B類の数値にはF類の口縁部数が含まれている。また、B類は小破片が多く実際の個体数とはかけ離れた数値となっている。F類と思われる脚部が数点見られること、E類の口縁部破片は同一個体の可能性が高いことから、正確な個体数は把握できないが、B類・F類が多数で、E類は小数であったと思われる。完形に復元されたB類では、器形がほとんど同じものの、赤色塗彩したもの（第262図3）には三角形の透かし、赤色塗彩されないもの（第260図11）には円形の透かしがあり、前者には古い伝統が認められる。なお、B類とした破片の約2割は赤色塗彩されたものである。

これらの土器群を外来系土器と在地系土器[注1]の関係で捕らえると、がまん淵遺跡では甕形土器C類、鉢形土器C類（第71図103）などに北陸地方の影響が認められるものの、その点数は僅かである。沢田鍋土遺跡では北陸地方の影響が認められる甕形土器D類（第107図33～38図）・壺形土器G類（第106図4）と、東海地方の影響が認められる甕形土器F類（第108図64～66）・高杯D類（第111図149）と、畿内地方の影

響が認められる甕形土器Ｈ類（第109図75～79）など、各地の土器が混在した状況を示し、外来系土器が多数認められる。牛出古窯遺跡では高杯Ｊ類（第250図10・11）・Ｋ類（第270図８）、壺形土器Ｅ類（第267図３）などに東海地方の影響が見られるものの、がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡で見られた北陸地方の直接的な影響はほとんど認められない。

がまん淵遺跡と牛出古窯遺跡は集落跡、沢田鍋土遺跡は粘土採掘跡と遺跡の性格が異なり、前二者に比べ後者は遺跡の継続期間が長いと推定され、遺跡を単位としての比較には慎重であらねばならないが、以上の３遺跡の対比により、赤塩氏の七瀬遺跡での分析結果（赤塩1994）と大枠で一致するものの、細部で齟齬を生じるという結果を得た。すなわち、北陸系土器が流入した後に東海系土器が流入するという大きな流れは認められるものの、七瀬遺跡の七瀬第二段階では外来系土器が3割以上を占めるのに対し、型式学的に同段階に比定されるがまん淵遺跡では外来系土器はほとんど認められない。この齟齬が七瀬遺跡とがまん淵遺跡の集落の性格の違いによるものなのか、微妙な時間的差によるものなのか、現段階では説明できない。

当埋蔵文化財センターでは牛出古窯遺跡に後続すると思われる牛出遺跡の発掘調査を行い、現在その整理作業を進めている。土器編年などの細部にわたる検討は牛出遺跡の整理を待って行い『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14－中野市その３・豊田村－』（平成９年度刊行）に掲載する予定である。

註

1　箱清水式土器以外にその出自を求められる土器群を外来系土器とし、箱清水式土器及び外来系土器の影響を受けながら箱清水式の伝統の中から成立したと考えられる土器群を在地系土器とする。

参考文献

桐原　健　1957　「北信後長峯丘陵柳町遺跡調査概報」『信濃』Ⅲ９－12
桐原　健　1959　「北信後長峯丘陵笠出式遺跡」『考古学雑誌』45－１
笹沢　浩　1976　「弥生時代」「上水内郡誌歴史編」
笹沢　浩　1977　「弥生土器－中部高地」『考古学ジャーナル』133・134
笹沢　浩　1986　「箱清水式土器の分布圏と小地域」「歴史手帳」２
宇賀神誠司　1988ａ　「在来系土器群の構造」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書２・上木戸遺跡」長野県埋蔵文化財センター
宇賀神誠司　1988ｂ　「長野県における古墳時代前期の絵画的動向」「長野県埋蔵文化財センター紀要」２号長野県埋蔵文化財センター
笹沢　浩　1988　「２.時代と編年　４古代の土器」『長野県史　考古資料編　全１巻（４）遺構・遺物』
青木一男　1989　「土器に見る森将軍塚古墳出現の前後－千曲川中流域の研究と今後の課題－」「長野県埋蔵文化財センター紀要」３
飯山市教育委員会　1990　「小沼遺跡バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ　上野遺跡・大倉崎遺跡」
綿田弘実　1991　「西条・岩船遺跡」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器、第３分冊』
青木一男・宇賀神誠司　1992　「４世紀を中心とした土器編年表」「科研における古墳出現期の現状と課題」長野県考古学会
千野　浩　1992　「善光寺平南部（長野市域）における弥生集落研究の現状」長野県考古学会30周年記念大会資料集「中部高地における弥生集落の現状」長野県考古学会
青木一男　1993　「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70　長野県考古学会
赤塩　仁　1994　「第７節　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」「系林・七瀬遺跡」財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19
宇賀神誠司　1993　「４世紀を中心とした土器編年表」『長野県考古学会誌』69・70　長野県考古学会
白居宣之　1994ａ　「４．周辺の文化」「赤い土器の国」長野県埋蔵文化財センター
白居宣之　1994ｂ　「弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物」「鴨前遺跡」財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書17
飯山市教育委員会　1995　「柳町遺跡」
桐原　健　1995　「６　面部・柳町遺跡の調査」「柳町遺跡」飯山市教育委員会
中野市教育委員会　1995　「安源寺遺跡発掘調査報告書」
窟月静雄　1995　「９小畑」「須田ケ峯遺跡」飯山市教育委員会
青木一男　1996　「第１節　北平１号墳の調査」「大星山古墳群・北平１号墳」財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20
中島庄一　1996　「２遺物」「西条・岩船遺跡群発掘調査概報」中野市教育委員会

第3節　高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について

1　器種分類

奈良・平安時代の土器を次のように分類した。

1 焼成　須恵器、土師器。

2 用途　須恵器…杯、壷、椀、皿、蓋、高杯、鉢、鼎、平瓶、横瓶、広口壷、瓶壷、短頸壺、長頸壺、双耳壷、凸帯付四耳瓶、甕、硯。

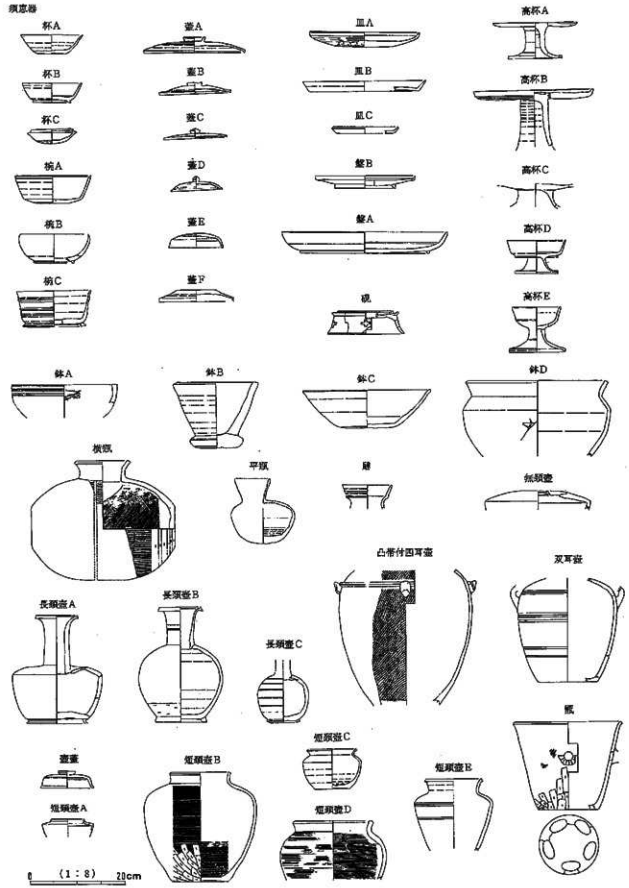
土師器…杯、椀、鉢、小型甕、球胴甕、長胴甕、羽釜。

3 器種　差をアルファベットで記入。

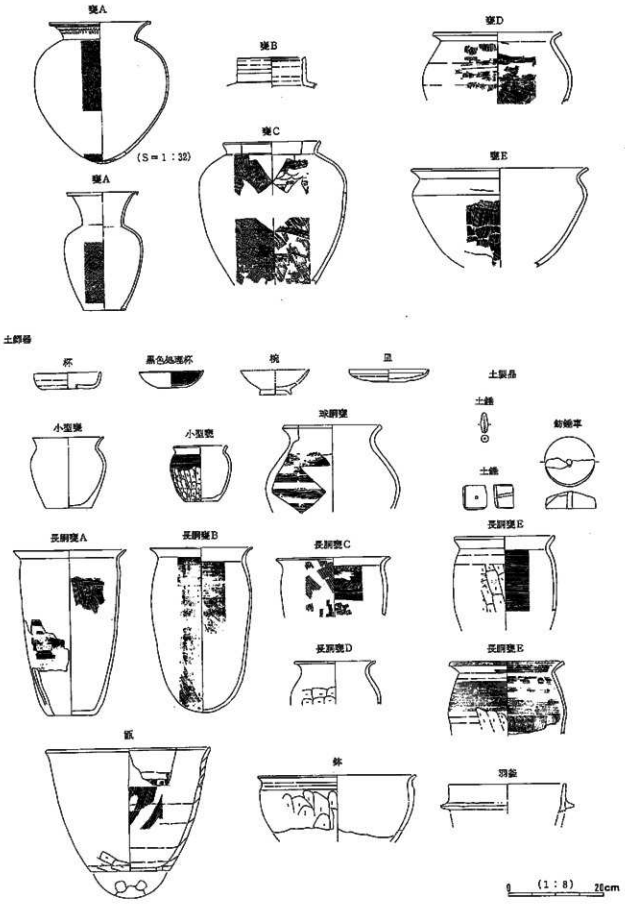
分類については先学諸氏の分類を踏まえおこない、名称の違いもあるため主な分類との比較を表に現した（第16表）。第320図・第321図とともに各器種の説明を行う。

第16表　須恵器の器種名比較表

本稿台帳	松本市内その1（小平1990）	上信越自動車道2（寺島1991）	美濃須衛古墳址群（斉藤1985）	尾張須恵器（城ヶ谷1992）	陶邑式須恵器の土師器（吉田1982）	陶邑（中村1981b）	平城京（奈文研1991）
杯A（相対）	杯A	杯A1	無台杯身	杯B	杯A	杯	杯A
杯A（逆台形）	杯A	杯A2	無台杯身	椀A		杯	杯A
杯B	杯B	高台杯A・B	有台杯身	杯C	杯B	壷杯	杯B
杯C				杯H			
椀A	椀A		無台椀		坏C		椀A
椀B	椀B	高台付B	有台椀	椀B	椀B？		椀B？
椀C					椀B？		杯L
皿A			皿	皿A		皿	
皿B	皿A		皿	盤A	皿C		皿A
皿C					皿C？		皿C
盤A		盤	有台杯身	皿B	皿B	盤	
盤B	盤		有台盤	盤B		盤	皿B
鉢A				鉢D	鉢A？		鉢A？
鉢B	鉢C		擂鉢	鉢C	擂鉢A		鉢F
鉢C					鉢C		
鉢D	鉢A			鉢B	鉢D		鉢D
高杯A			有蓋・無蓋高杯	高盤		高杯	高杯
高杯B					高杯A？		
高杯C	高杯			盤C			
高杯D							
高杯E	高杯			高杯			
壷A	横壷					杯蓋	
壷B	杯蓋B			壷B	壷A	杯蓋	杯B蓋
壷C				壷E		杯蓋	
壷D	杯蓋A			蓋A		杯蓋	
壷E				蓋A			
壷F				壷C			
鼎	鼎			鼎			
横瓶	横瓶			横瓶			横瓶
平瓶	平瓶			平瓶	平瓶	平瓶	平瓶子
長頸壷A	長頸壷B		合付長頸瓶	長頸瓶	瓶B？	長頸壷	壷K
長頸壷B	長頸壷A	長頸瓶	合付長頸瓶	長頸瓶	瓶L、瓶C？	長頸壷	壷L
長頸壷C	水瓶		細頸瓶	水瓶	瓶H	長頸壷	水瓶
無頸壷							
短頸壷A	短頸壷B		短頸壷	壷C	合子A？	小型壷	壷A
短頸壷B	短頸壷A	短頸壷		壷A	壷A、壷B	短頸壷	壷C
短頸壷C	短頸壷D	短頸壷				短頸壷	
短頸壷D	鉢A	広口甕			鉢D？	鉢・甕	壷Q
短頸壷E	短頸壷D	広口甕				短頸壷	
双耳壷			双耳瓶	双耳瓶	瓶M		壷N
凸帯付四耳壷	甕D	四耳壷					
甕A	甕A	甕	甕	甕A	甕B	甕	甕A
甕B	甕B		甕	甕C			甕C
甕C	甕C				甕A？		甕B
甕D	甕D						
甕E	甕E			甕D	甕D		甕E



第320図　奈良・平安時代の器種分類(1)



第321図　奈良・平安時代の器種分類(2)

(1) 須恵器

杯　A　無台のもの。
　　B　蓋Bとセットになる有台のもの。
　　C　蓋Eとセットになり、丸底で杯身中央部に稜があるもの。
蓋　A　リング形のツマミを有した蓋（椀蓋）。
　　B　宝珠形、擬宝珠形のツマミを有し、口縁端部が断面三角形を呈する蓋。（杯Bの蓋）
　　C　宝珠形、擬宝珠形のツマミを有し、口縁端部の折りが無いかほんの僅かである蓋。
　　D　口縁部に返しを有する蓋。ツマミは小さな宝珠形のものがみられる。
　　F　ツマミのない台形を呈する蓋。
　　E　合わせ杯蓋（杯Cとセットの蓋）。杯の形状を裏返したもの。
椀　A　無台で、口縁部を内湾させた椀。
　　B　有台で、外傾度が大きい椀。灰釉椀を模倣品したもの。
　　C　椀身に稜線や段がつく椀。佐波理椀を模倣したもの。
皿　A　丸底の円盤状で、口縁部を直立させたもの。
　　B　底部平らな円盤状で、口縁部を直立させたもの。
　　C　底部平らな円盤状で、口縁部を直立させ、口唇部を面取りしたもの。
盤　A　高台を有する杯Bを大型化にしたもの。
　　B　皿Bに高台をつけたもの。
高杯　A　皿Aに長脚をつけたもの。
　　B　大型な皿Cに長脚をつけたもの。
　　C　身の浅い杯Aに短脚をつけたもの。
　　D　杯Bに短脚をつけたもの。
　　E　深身の杯Aに短脚をつけたもの。
鉢　A　体部が丸みを帯びるボール鉢状のもの。
　　B　通称擂鉢。底部が分厚い円盤状で底部に数個の穿孔しない孔がみられもの。体部内面ザラザラしている特徴を持つ。
　　C　体部は逆台形で、口縁部が緩やかに開く浅鉢状のもの。
　　D　広口で頸部がくびれ、頸部下に最大径があるもの。口径に対し器高が低い。
瓶・平瓶・横瓶
無頸壺　口頸部の無い長頸壺Aの形態のもの。
長頸壺A　肩部イカリ肩で、体部との境目が「く」の字状になる長頸のもの。
　　B　体部球形か卵型に膨らむ長頸のもの。
　　C　頸部が細く、体部や頸部に数状の凹線がみられる小型の長頸のもの。
壺蓋　短頸壺Bとセットになる蓋。
短頸壺A　口頸部直立し、肩部はイカリ肩で体部との境目は「く」の字状を呈する小型短頸のもの。
　　B　口頸部が直立する短頸のもの。壺蓋とセットとなる。
　　C　口頸部が短く外反し、頸部でつぼまり、肩部がイカリ肩となる短頸のもの。
　　D　広口で頸部「く」の字状に屈曲し、体部の最大径と口径が大きさの近い短頸のもの。
　　E　短頸壺Cに形態類似するがこれより口頸部が長く外反し、体部が長い短頸のもの。
双耳壺　壺体部に耳状の把手が2ヶ所つくもの。

凸帯付四耳壺　　体部上半に凸帯が巡り、その突帯に耳状の突起が4ヶ所つくもの。耳状の突起には孔が開けられているものが多い。体部にはタタキ目が残るものが多い。

甑　　底部に楕円形あるいは円形の孔が数個みられる。

甕　A　口頸部の長い甕。口縁部がラッパ状に開くもの。頸部に有文のものと無文のものがある。

B　口頸部が直立する甕。

C　口頸部が短く、口縁部が大きく外反し、頸部が「く」の字状に屈曲する甕。口径は体部径より小さい。

D　口頸部が外反し、口径の大きい広口の甕で、口頸部が「S」字状になる。体部最大径が体部中央にある。

E　広口の甕Dに口頸部は類似し、体部は外傾が強い、浅鉢状で、器高が低い。体部最大径が体部上半にある。

硯

(2)　土師器

土師器には未処理と、黒色処理[註1]のものがみられる。黒色処理にも両面と内黒がみられる。

杯　　須恵器杯Aに形態が類似し、無台のものをいう。

椀　　高台付き逆台形の形態で、灰釉椀に形態が類似。

鉢　　ロクロ整形で、体部にタタキ目やヘラ削りのあるもの。口縁端部調整には、1)面取りやつまみ上げ調整のもの（北陸系）、2)回転ナデ調整のもの（北信系）の2通りがある。

小型甕　小型の甕で非ロクロ整形のものとロクロ整形のものがある。

球胴甕　胴部が球形の甕で、古墳期の影響を残すもの。

長胴甕A　非ロクロの平底と思われる長胴の甕（胴部ハケ調整[註2]である）[註3]。

B　非ロクロの砲弾形の長胴の甕（胴部ヘラ削り調整[註4]である）[註5]。

C　非ロクロの底部欠損のもので底部形態が明確でない長胴の甕。胴部調整は外面タタキ内面ハケ目調整である[註6]。

D　いわゆる武蔵型甕で、頸部下が横位ヘラ削り調整で胴下半部ヘラ削り調整する、器面を薄くした長胴甕。底部は小さな平底[註7]。

E　いわゆる北信甕で、形態は砲弾形であり、ロクロを利用している。外面胴下半部がヘラ削りやタタキ目調整され、内面や外面カキ目調整[註8]や回転ナデ調整[註9]されたもの[註10]。

口縁端部調整には、1)面取りや摘み上げ調整（北陸系）、2)回転ナデ（北信系）調整の2通りの調整がみられる。

羽釜　　口縁部下に鍔状の羽が一周巡る釜。

本報告書では奈良平安時代の土器について、以上の分類によって記述した。

註

（1）黒色処理とは黒色土器とも呼ばれ土師器の表面に炭素を吸着させたもの。

（2）ハケ調整とは板状の小口などを利用して器面の凸凹を取り器面を平らにしたり薄くしたりする調整。主に壺、甕の整形に用いられる。

（3）宮井氏の分類（宮井　1996）では、甕D（甲斐型の甕）にあたる。

（4）ヘラ削り調整とは回転を利用せず器面をヘラで削る調整。別名手持ちヘラ削り、静止ヘラ削りともいう。

（5）宮井氏の分類の甕A（北信型の甕）と甕B（東信型の甕）の中間形態にあたり、これらの甕の7世紀末から8世紀前半期の形態

である。

（6）宮井氏の分類にはない。

（7）宮井氏の分類では甕B（東信型の甕）にあたる。

（8）カキ目調整とは回転を利用して板状の小口などで器面を平らにする調整。細い条線がつき装飾的効果もある。

（9）回転ナデ調整ナデを回転を利用して行う調整で、別名ロクロナデ調整ともいう。

（10）宮井氏の分類では甕A（北信型の甕）にあたる。

2　高丘丘陵古窯址群の須恵器編年

(1)　高丘丘陵古窯址群を中心とした須恵器研究略史

1964年に大川清・金井汲次氏によって（大川清・金井汲次1964）茶臼峯古窯址と大久保古窯址について発掘報告がされた。これが高丘丘陵古窯址群最初の報告である。これらの窯跡の年代は8世紀の前半から9世紀の中葉の間に比定された。その後高丘丘陵古窯址群は相次いで報告された。1967年には長野県考古学会で安源寺の窯跡（長野県考古学会1967）、1971年に金井汲次氏・金井正彦氏らによって立ヶ花表山（金井汲次1971・1973）、次いで1973年に茶臼峯7号窯（金井正彦1973）などが報告された。

また1974年笹沢浩氏・原田勝美氏によって茶臼峯9号窯と茶臼峯6号窯（笹沢浩・原田勝美1974）が報告された。その報文では、茶臼峯9号窯は器種の組み合わせから陶邑TK217に相当するとして、7世紀前葉後半から中葉の時期とした。また大川氏らによって紹介された茶臼峯6号窯は、返りを有する壷と返りを有さない壺杯の併存は畿内藤原宮時代の須恵器に一般的にみられるとし、7世紀末葉頃のものとした。さらに、菅光寺平の須恵器生産は聖高原東麓古窯址群の松ノ山古窯址（6世紀前半）によって開窯され、7世紀中葉まで、不明な時期はあるが、茶臼峯9号窯以降断絶することなく須恵器生産が続けられたとした。また、長野県下の窯跡群の編年を行い、茶臼峯9号窯、6号窯が7世紀代に操業され、8世紀代は聳山東南麓支群1号窯、聖高原東麓古窯址群向原古窯址、小県郡依田窪古窯址群、岡谷市鬼戸窯跡群と共に大久保3号窯が操業され、そして遅れて松本市田溝池1号窯が開窯されたとした。高丘丘陵古窯址群は長野県古窯址操業年代の決定に大きく関与する重要な窯跡であることを指摘した。

1987年、服部啓史氏は、東国の8世紀前半における須恵器窯跡群における様相を窯跡数、操業期間、群形成の差から3類型に分類した（服部1987）。その中で高丘丘陵古窯址群はB類型（須恵器窯が数基から10基以上、多くは数十基になるもので長期間操業がみられるもの）に分類できるとし、B類型の窯跡群を「いずれも8世紀初頭、遅れても前半のいずれかの時期に開始され、ほぼ8世紀代を通して活動が続き、9世紀初頭に転機を向かえるものである。」とし、東国という広い視野から高丘丘陵古窯址群の性格を指摘した。

長野県考古学会による信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相のシンポジウムで、佐藤信之氏は北信地方の様相を発表している（佐藤1987）。土器のプロポーションの変化、製作技法に注目し、編年的配列をし、奈良時代を四期に分類している。その中で高丘丘陵古窯址群の茶臼峯9号窯を古墳時代終末期に位置付けている[註1]。

笹沢氏は1979年に世界陶磁全集（笹沢1979）で中部高地の須恵器について、1、移入期の須恵器（5世紀末～6世紀初頭）、2、生産開始の須恵器（6世紀前葉）、3、生産発展期の須恵器（7世紀中葉）、4須恵器生産の隆盛と衰退（9世紀～10世紀代）の4期に区分し、高丘丘陵古窯址群は3～4期に操業していたとしている。また1987年長野県考古学会のシンポジウムで笹沢氏は信濃における奈良時代を中心に県下を6地域に区分した土器編年を発表している（笹沢1987）。その中で高丘丘陵古窯址群の茶臼峯7号窯、7号窯は北信地域古墳時代V期新段階とした[註2]。翌年に笹沢氏は長野県史（笹沢1988a）で奈良時代から平

安時代までの須恵器や土師器編年を行い、茶臼峯9号窯は古墳時代Ⅴ期古段階とし、茶臼峯6号窯・7号窯を古墳時代Ⅴ期新段階としている。この中で、笹沢氏は高丘丘陵古窯址群の操業開始に触れ、古墳時代Ⅴ期に仏教が伝来し、寺院の建立に伴い、多量の瓦が必要となった結果、須恵器工人が瓦の生産に従事するようになる。長野県内における寺院建立の開始は古墳時代Ⅴ期後半で、高丘丘陵古窯址群においても瓦の生産と共に須恵器生産も開始されたとした。また笹沢氏は「須恵器窯の分布（笹沢1988b）」の中で「古墳時代末期から奈良時代前半期における須恵器生産地の新たなる出現は、これら地域が律令体制に組み込まれたものと思われる。」とし、高丘丘陵古窯址群の操業開始を政治的側面から評価している。

1995年花岡弘氏・西山克己氏は6～7世紀の土器様相の中で須恵器生産について触れている（花岡・西山1995）。須恵器の時期設定を陶邑編年（田辺1971）と飛鳥藤原編年（西1978）によるものとし、茶臼峯9号窯（善光寺平後期5期、7世紀前半）、茶臼峯6号窯（善光寺平後期6期、7世紀後半）と位置づけを行っている。また飛鳥藤原ⅠからⅣ期の須恵器が生産遺跡の中で混在するのは「…ある期間の生産活動は考えられるものの、この形式の幅が示すほどの時間幅ではなく、短期間における器種のバラエティーによるものと考えられる。」とした。つまり飛鳥藤原Ⅰ期からⅣ期にみられる蓋や杯のいろいろな形態がいままで消費遺跡で混在しているのは、一つの窯で色々なバリエーションのある杯や蓋をこの時期に短期間に生産していたのだとしている。(註3)

1994年清水山古窯跡の発掘報告が出され（中野市教育委員会1994a）、長野県埋蔵文化財センターが調査した窯の北西側にあたる3号窯と1号窯の灰原の遺物が掲載された。これら清水山古窯跡の遺物は8世紀前半とした。次いで1994年にはがまん渕1号窯の報告書が発行された（中野市教育委員会1994b）。がまん渕1号窯の遺物は7世紀末と編年付けられた。

このように1960年代から1970年代前半までの間に高丘丘陵古窯址群の多くの窯が発掘調査されたり、土取りなどによって破壊されたものが多いが、全容が公表されたものは少ない。研究史を概観すると茶臼峯9号窯はほぼ7世紀前葉後半から中葉期、茶臼峯6号窯、がまん渕1号窯は7世紀末葉（中野市教委.1994b）、清水山古窯跡（中野市教委.1994a）が8世紀前半という年代が与えられている。しかし清水山古窯跡以降の窯編年は漠然と窯跡が存在すると記されているものの、いままで明確な報告例がない。高丘丘陵古窯址群では糸切り技法の登場が平安時代（8世紀終末）という認識で扱われてきた。その結果高丘丘陵古窯址群では8世紀中葉から8世紀終末までの資料が不明瞭となってしまっている。この地域では8世紀中葉から末葉まで須恵器生産が中断するのであろうか。以下既出資料も含めて紹介し、編年的検討を加える。

註

（1）Ⅰ期（8世紀初頭）は杯底部ヘラオコシ（ヘラ切り）が一般的でケズリを施したものもみられ、蓋はかえりを持つものも僅かに存在するとした。窯跡として豊野町山ノ神1号窯を位置付けている。Ⅱ期（8世紀前半）は杯底部にヘラオコシ痕を明瞭に残し杯Bは大型で器高の高いものが出現し、蓋は口縁端部が下に向かって屈曲するようになるとした。菅山古窯址群、大田原古窯址群がこの期に創業されるとし、上日向3号窯をあげている。Ⅲ期（8世紀後半）は杯底部が平坦で底部の大きな箱型のものとなり、糸切りが出現する。杯Bも底部が平坦となる。蓋は器高が高くなり、天井部の湾曲が明瞭となる。また、口縁端部がくちばし状になるとしている。一方、土師器はロクロ使用杯・蓋が出現する。Ⅳ期（8世紀末～9世紀初頭）はヘラ切り技法がほとんどなくなり糸切り技法が主体となる。杯Bは法量にバラエティーがみられるようになるとしている。Ⅲ・Ⅳ期の窯の指摘はない。

（2）奈良時代Ⅰ期は豊野町山ノ神1号窯、Ⅱ期は更埴市上日向3号窯、平安時代Ⅰ期は牟礼村前高山西1号窯であるとした。東信地域平安時代Ⅰ期が北御牧村八重原1号窯が記載され、諏訪地域、上伊那地域では窯の記載はなく、下伊那地域ではⅡ期に宮洞3号窯の記載があげられている。

（3）同時期のものとして佐久市石附1号窯は佐久平後期6期（7世紀中頃）、石附7号窯は（佐久平後期7期、7世紀終末から8世紀初

頭）としている。

(2)　高丘丘陵古墳址群の概略

1　安源寺第1号墳（第330図34）
所在地　中野市安源寺宮裏584
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1965年
墳体構造　全長10m前後のトンネル式無段登墓
出土遺物　土師器小形仏器状鉢。須恵器（凹心円文）甕A、長頸壺、杯A（回転ヘラ切り）、壺B、把手
他
文献　中野市教　1967
2　栗林西原墳址群
所在地　中野市栗林西原92
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1979年
墳体構造　不明
出土遺物　須恵器杯A（回転糸切り）、杯B、壺B、甕破片、壺口縁
文献　1980、県史刊行会　1983
3　立ヶ花表山1号墳（第330図1）
所在地　中野市立ヶ花
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1970年
墳体構造　半地下式平墳
出土遺物　土師器長頸壺、須恵器甕破片
文献　金井　1971、1973、　中野市教　1995
4　立ヶ花表山2号墳（第330図2）
所在地　中野市立ヶ花
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1970年
墳体構造　半地下式登り窯（天井ドーム形）
文献　金井　1971、1973、　中野市教　1995
5・6　立ヶ花表山3号・4号墳（第330図3・4）
所在地　中野市立ヶ花表山
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1989
墳体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯A（回転糸切り）、杯B、高杯D、壺B、長頸壺B、短頸壺B、短頸壺D、凸帯付四耳壺、甕A。土師器皿A、小型甕D、長頸甕B
文献　中野市教　1995（立ヶ花墳跡と記載）
7　中原墳跡
所在地　中野市草間平野中原
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1984年
墳体構造　未報告
出土遺物　1995年度報告遺物：須恵器杯A（回転糸切り）、杯B、壺B、長頸壺、凸帯付四耳壺、短頸壺B、短頸壺D、甕A。土師器小型甕D、長頸壺
文献　長野県教　1953、中野市教　1995
8　がまん塚1号墳（第330図29）
所在地　中野市草間
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1993年
墳体構造　地下式無段登窯
出土遺物　須恵器杯A（回転ヘラ切り丸底）、壺D、鉢、横瓶、長頸壺、短頸壺、甕A
文献　中野市教　1994b、1995
9　西山墳跡（第330図30）
所在地　中野市草間
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1978
墳体構造　未報告
出土遺物　未報告
文献　金井文　1978
10　林畔墳跡
所在地　中野市草間林畔、中原
調査　未調査
所蔵者　高丘小学校
文献　なし
11　東龍田墳跡
所在地　中野市草間東池田
調査　未調査
所蔵者　中野市教育委員会
文献　なし
12　坂下墳跡
所在地　中野市草間五里原
調査　未調査
所蔵者　中野市総地公園課
墳体構造　地下式無段登り窯4基
文献　なし
13　上の山1号墳（第330図33）
所在地　中野市草間上の山1889－2
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1981
墳体構造　半地下式登り窯
出土遺物　須恵器杯A（回転糸切り）、杯B、壺B、鉢D、甕A、
文献　金井文　1981、中野市教　1996
14　大久保1号墳（第330図19）
所在地　中野市草間大久保1067
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1964
墳体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯A（回転ヘラ切り）、杯B、壺B、甕A、
文献　大川・金井　1964、中野市史編纂室　1981、中野市教　1995
15　大久保2号墳（第330図18）
所在地　中野市草間大久保1070－1

調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1964
窯体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器壷A、杯B、高杯脚
文献　大川・金井　1964、中野市史編纂室　1981、中野市教　1995

16　大久保3号窯（第330図16）
所在地　中野市草間大久保1144－イ
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1964
窯体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯A（回転ヘラ切り平底）、杯B，壷B、甕A、
文献　大川・金井　1964、中野市史編纂室　1981、中野市教　1995

17　大久保4号窯
所在地　中野市草間大久保1144－イ
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1964
窯体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯A（回転ヘラ切り平底）、壷B、甕A、甕C、短頸壷C
文献　大川・金井　1964、中野市史編纂室　1981、中野市教　1995

18　茶臼峯1号窯（第330図21）
所在地　中野市草間茶臼峯1063－1
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1963
窯体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯B（回転糸切り）、短頸壷D、高台付き壷底部
文献　大川・金井　1964、田川　1976、中野市史編纂室　1981
19　茶臼峯2号窯（第330図22）
所在地　中野市草間茶臼峯1063－1
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1963
窯体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯A（回転糸切り）、甕A、
文献　大川・金井　1964、田川　1976、中野市史編纂室　1981
20　茶臼峯3号窯（第330図23）
所在地　中野市草間茶臼峯1063－1
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1963
窯体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯A（回転糸切り）、杯B、壷B
文献　大川・金井　1964、田川　1976、中野市史編纂室　1981、中野市教　1995

21　茶臼峯4号窯（第330図20）
所在地　中野市草間茶臼峯1064－1
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1963
窯体構造　トンネル式無段登り窯？
出土遺物　須恵器甕点（茶臼峯6号窯遺物に類似）
文献　大川・金井　1964、田川　1976、中野市史編纂室　1981、中野市教　1995

22　茶臼峯5号窯（第330図26）
所在地　中野市草間茶臼峯1064－1
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1964
窯体構造　半地下式無段登り窯
出土遺物　須恵器杯B（回転糸切り、ヘラ描き「土」）、壷B、長頸壷B、短頸壷C、把手付杯壷、甕A。
土師質紡錘車状土製品。
文献　大川・金井　1964、田川　1976、中野市史編纂室　1981、中野市教　1995

23　茶臼峯6号窯（第330図25）
所在地　中野市草間茶臼峯1060－1
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1964
窯体構造　須恵器杯A（回転ヘラ切り丸底）、杯B、壷D、壷A、壷B、高杯E、長頸壷、壷壺、甕A、甕C、平瓶。
文献　大川・金井　1964、田川　1976、中野市史編纂室　1981、長野県史刊行会　1982、中野市教　1995

24　茶臼峯7号窯（第330図24）
所在地　中野市草間茶臼峯1063－13
調査主体　中野市教育委員会
調査年度　1971
窯体構造　須恵器　杯A（回転ヘラ切り丸底）、壷D、壷B、短頸壷C、甕A
文献　金井正 1973、中野市教　1996

25　茶臼峯8号窯
詳細不明　表採
文献　中野市教 1995

26　茶臼峯9号窯
調査不明
出土遺物　須恵器壷E、壷D、平瓶、椀、高杯E、甕A
文献　中野市史編纂室　1981、長野県史刊行会　1982

(3)　長野県内の窯跡出土の杯と壷について

奈良時代から平安時代にかけての窯跡遺物における須恵器型式編年の指標は、（1）形態、文様の外見、（2）製作技法、（3）形態の種類の組み合わせ（田辺1971）である。杯と壷は多く窯から出土し、量も多いので、検討材料として妥当である。そこで高丘丘陵古窯址群の杯と壷を編年的に検討する。

杯A・杯Bの形態と法量を窯跡ごとに図に示した（第332～335図）。図では底部の中心を0とし、右半分

のシルエットを示した。杯Bでは高台の付け根から測ったので中心部では、縦軸がマイナス値となるものも多い。蓋と杯の組み合わせなどの編年指標は陶邑古窯址群の須恵器編年(田辺1971)、平城編年(西1987)を用いることとする。

茶臼峯9号窯(第322図)ではTK217型式の蓋Eがみられ、蓋Dも存在し、杯A、杯Bの存在はない。この様な組み合わせを笹沢氏等(笹沢1988)は7世紀中葉の様相とし、高丘丘陵古窯址群最古の窯として紹介している。[註1]

TK46型式期の蓋Dは茶臼峯6号窯、8号窯[註2]、がまん淵1号窯、石附1号窯、同2号窯、同3号窯にみられ、そのうち茶臼峯6号窯では深身丸底の杯A1(第336図4)、がまん淵1号窯では丸底の杯A1が大小みられる(第336図5・6、第332図1)。陶邑でみられるような杯Bはみられない。

TK48型式期の退化型蓋Dは長野市磐山東南麓1号窯、更埴市向山古窯、豊野町山の神1号窯にみられるが、高丘丘陵古窯址群にはない。これらに伴う杯Aの形態[註3]は深身のものは底部が丸みを持ち(杯A1)、浅いものは回転ヘラ切り[註4]痕を残し底径の大きな箱型(杯A2)となっている(第333図1～4)。また、磐山東南麓1号窯、山の神1号窯では杯B[註5](第335図1・3)が出土している。豊野町山の神1号窯では蓋A、蓋Bも混在している。

次のMT21型式期では、蓋Dが姿を消し蓋Bとセットの杯Bが出土する。沢田鍋土1号窯、2号窯、1号灰原はこれらの杯蓋セットを持つ。沢田鍋土2号窯は杯A底部に丸みがあり(杯A1)(第332図3)、口縁部は外反している。沢田鍋土1号窯の杯A(第332図4)は身の浅い平底箱型(杯A2)である。杯Bは1号窯も2号窯(第334図3)も丸底の杯腰部に高台を付けた外傾のつよいもの(杯B2)がみられる。また杯A底部の腰部[註6]が屈曲する丸底(杯A1)のものが立ヶ花表山2号窯(第332図2)と、県内の更埴市上日向3号窯、松本市田溝池1号窯(第333図5・6)でみられる。立ヶ花表山2号窯の杯Bは杯身底部が丸く垂れ下がるもの(杯B1)である。

清水山1号窯では、杯Aは杯A1と杯A2の形態が混在している(第332図6)。磐山東南麓1号窯、立ヶ花表山2号窯に類似する形態の杯A1などがあり、大きさも形態もあまり一定しない。杯Bは箱型の浅身もの(杯B2)と、腰部に丸みのある底部の垂れ下がるもの(杯B1)がみられる(第334図6)。蓋は、蓋Aが少数であり大半が蓋Bの偏平なもの(蓋B1[註7])とやや天井部の高いのもの(蓋B2[註7])である。

清水山2号窯、同3号窯、池田端2号窯、同3号窯(第332図7～9)の杯Aは、清水山1号窯のように口径が大きなものが多いが、後者より若干底径が小さくなり平底のもの(杯A2)が多くみられる。これらの窯の蓋は大半が蓋B2である。

大久保3号窯(第332図12)、池田端1号窯(第332図11)では、底径が小さく平底で外傾する杯A3がみられる。

牛出1号窯(第332図13)、2号灰原、3号灰原では、杯Aは回転糸切り技法[註8]の杯Aであり、大久保3号窯や池田端1号窯のヘラ切り技法の杯A3形態に類似する。しかし後者より底径が小さいものが多く、外傾が強い(杯A4)。杯B(第334図12・13)は杯B3で杯身の浅いものと深いものとの2種類のやや安定した法量差がみられる。蓋は大半が蓋B3[註7]である。回転糸切り技法が導入されるとほとんどの蓋BはB3形態となる。

また、高丘丘陵古窯址群の中原窯跡、上の山1号窯、立ヶ花表山3・4号窯、茶臼峯5号窯は牛出古窯(第332図13、第334図12・13)よりも杯A4(第332図15～17)や杯B3(第334図14～16)の法量や形態が安定する。その他、県内の窯跡では御牧村八重原1号窯、飯田市宮洞1号窯、飯田市御殿田1号窯の杯Aの法量が安定し(第333図6～10)、杯B(第335図6～8)では法量分化が明確になる。

池田端6号窯(第332図18)、同7号窯では杯Aの大きさがほぼ一定であり、底径も小型化し、杯A4の形

態も安定する。底径の小型化した杯A4を多く出土する窯跡としては、豊科町菖蒲平1号窯、牟礼村前高山西1号窯、豊科町中ノ沢8号窯、四賀村ムジナカワ1号窯（第333図11～15）などがみられる。これらの窯跡では杯Bは、地域により形態差がみられ法量も窯跡ごとに若干異なる（第335図9～12）。中ノ沢8号窯の杯Bは他の窯跡の箱型（杯B3）よりも腰部が丸みを帯びるものと、ムジナカワ1号窯の杯Bに類似する逆台形（杯B4）が出土している。杯B4は灰釉陶器の椀の形態に類似する。

以上のように、杯Aは丸底（杯A1）から平底（杯A2）へ、底径の大きなもの（杯A2）から底径の小さなもの（杯A3・杯A4）へという変化をたどることができる。大久保3号窯と池田端1号窯の杯Aのうち浅身ものは底径が大きい（杯A2）が、深身のものは底径が小さく（杯A3）、牛出古窯の杯Aに形態が類似する。大久保3号窯、池田端1号窯では底部切り離しがヘラ切り技法であり、牛出古窯では糸切り技法である。杯Aの深身のものでは底部がヘラ切り技法（杯A3）と糸切り技法（杯A4）のいずれかを用いるかに関わらず、底径と形態に大きな違いがみられないものもある。

一方牛出古窯遺跡の2号住居址と15号住居址において、回転ヘラ切り技法と静止糸切り技法[註3]と回転糸切り技法の杯の混在がみられる。三種の技法の使用段階では併存していたものと思われる。しかし高丘丘陵古窯址群ではヘラ切り技法と糸切り技法の同一窯での混在はみられない。したがってヘラ切り技法の断絶と糸切り技法の採用との間に時間的間隔は存在せず、窯の操業は継続していた可能性が強い。

以上のように高丘丘陵古窯址群における生産は、技法においても形態においても断絶無く続いていたということができる。

註

（1）佐久市石附7号窯も蓋Eと蓋Dが共伴している（佐久市教.1980）。

（2）茶臼峯7号窯は蓋Dがあると掲載されているが（長野県史刊行会1982）、中野市教育委員会に残されている資料（中野市教.1995）と報告書（金井正彦1973）には蓋Dの掲載がなく、曖昧なため掲載を避けた。

（3）杯Aの分類基準は、形態を重視し、底部切り離し技法を取り混ぜて分類をした。

杯A1　底部は丸底かやや丸底で、深身で外傾する形態。底部切り離しは回転ヘラ切り技法で、底部調整が回転ヘラ削り、ヘラ削り、板ヘラナデ調整のものなどがある。

杯A2　底径が大きく、平底であり、外傾度が少ない浅身の箱型形態。底部切り離しは回転ヘラ切り技法が多く、静止糸切り技法、回転糸切り技法のものが若干みられる場合がある。底部ヘラ切り未調整かナデ調整、板ヘラナデ調整である。

杯A3　平底で外傾する逆台形の形態。底部切り離しは回転ヘラ切り技法である。杯A4に類似する形態であるが、4より底径が大きいものが多い。

杯A4　平底で外傾が強い逆台形の形態である。底部切り離しは、回転糸切り技法である。

（4）回転ヘラ切りあるいはヘラ切り技法とはロクロからヘラを差し込んで回転を利用して切り離す技法。

（5）杯Bの分類基準は形態を重視し、底部切り離し技法を取り合わせた分類をした。

杯B1　高台が杯底部外周付近に付き、高台が底部外周につけられ、杯底部が垂れ下がり、中には高台下まで垂れ下がるもの。底部は回転ヘラ切り技法で、回転ヘラ削り調整が行われているものが主である。

杯B2　高台が杯底部の内側につくもの。杯底部は平底で箱型形態である。杯底径が杯A3よりも大きく、高台は杯B1に比べ底部外周より内側につく。杯底部が回転ヘラ切り技法で、回転ヘラ削り調整されているものが主である。

杯B3　箱型の杯身に高台をつけたもの。底部回転糸切り技法で、底部糸調整か回転ヘラ削り調整されている。杯底径が杯B2よりも小さく、したがって高台径も小さいものが多い。

杯B4　逆台形の杯身に高台をつけたもの。底径は小さい。底部は回転糸切り技法で、糸調整のもの、回転ヘラ削り調整のものなどがある。（灰釉椀に形態類似）

（6）杯底部とは底部と杯身の境目の山がる部分

（7）壺Bは4通りの形態に分類される。

壺B1　口縁が短く断面三角形で、天井部が偏平。

壺B2　壺B1より天井部が高く、口縁断面三角形の鉢。口縁の折り目の陵は若干不明瞭。

壺B3　口縁が長く、折り目の稜が明瞭であり、天井部との境目に沈み込みがみられる壺。

壺B4　天井部が非常に高く球形であり、口縁部はB3形態である（土器例窯跡の壺にみられる）。

（8）回転糸切り技法とはロクロの回転を利用して糸で切り離す技法。

（9）静止糸切り技法とは回転を利用せずロクロ挽きした杯などを糸で切り離す技法。

(4)　高丘丘陵古窯址群の編年

本報告書の各遺跡から出土した須恵器の形態や製作技術は順に変化しているが、本遺跡群だけではそれらを汎日本的に編年するデータがない。そこで他の編年基準をもつ窯跡と対比することにより高丘丘陵古窯址群の編年基準を求めた。対比する窯跡群は陶邑古窯址群（第331図12）、猿投古窯址群（第331図13）、美濃須衛古窯址群（第331図14）、湖西古窯址群（第331図15）（斎藤他1994）である。陶邑古窯址群では田辺編年（田辺1971）と中村編年（中村1994）があり若干の相違がみられる[註1]。従来笹沢氏等（笹沢1988a、笹沢・原田1974）が行った高丘丘陵古窯址群の編年基準は田辺編年を用いており、ここでも田辺編年と平城編年（西1987）を基本とし、また他の基準とする窯跡もそれぞれの編年的段階をそのまま用いることとする。

前項の杯壺の検討結果に加え、県内既出資料も編年的に再検討してみたい。ただ、従来知られている資料には、出土状況が明確でないものが多く、また、高丘丘陵古窯址群の既出資料には、同一窯と報告されているものの中に別の窯からの混入品が存在する可能性もある。

長野県での最古の窯跡は聖高原東鷲古窯址群（第331図3）の松の山窯跡である。出土した窯跡遺物は甕、杯、壺E、短頸壺、甕Aである。陶邑古窯址群TK47型式の窯跡資料と遺物の様相が一致しておりこの時期の窯である。その後長野県内での窯跡は高丘丘陵古窯址群の茶臼峯9号窯（笹沢・原田1974）の操業開始までの間の窯跡は県内では今のところ発見されていない。

第1期（第332図）

杯C、壺Eを供伴する窯をこの期とした。この窯跡群の中で最古の窯跡群と思われる茶臼峯9号窯では杯C、壺Eがみられ、壺Dの存在が認められる。そのほか古墳時代の様相を残す甕、平瓶、杯身が深い高杯E、内面に同心円文の当て具痕の残る長頸の甕Aがみられる（第1表）。

茶臼峯9号窯でみられるような壺Dは陶邑古窯址群ではTK217型式が初源である。TK217型式では壺Dと壺E、杯Cセットがみられ、後続型式のTK46型式の段階では壺Eと杯Cのセットは消滅しており、TK217型式期と茶臼峯9号窯は同時期と思われる。中村編年では第II型式第6小期（壺E）と第III型式第1小期（壺D）にあたる[註2]。これらの様相から茶臼峯9号窯は壺Eと壺Dが供存する時期7世紀前葉から中葉の窯跡と思われる。

菖山古窯址群の中にはこの時期の窯跡が存在することが記載されている（牟礼町教委1992）。しかし、県内佐久市石附7号窯（佐久市教委.1980）は壺Eと壺Dと壺B1が混在して出土しておりこの時期より後続段階の時期と思われる。

第2期（第332図）

壺Dを出土した窯跡をこの期とした。この期は2段階に区分することができる。

第1段階　この段階に相当する高丘丘陵古窯址群の窯は茶臼峯6号窯（中野市史編1981、中野市教委

第17表　長野県内窯跡出土器種の時期別比較表

時期	遺跡名	遺構名	杯A1	杯A2	杯A3	杯A4	杯B1	杯B2	杯B3	杯B4	壺E	壺D	壺A	壺C	壺B1	壺B2	壺B3	壺B4	壺B?	壺F	鉢	平瓶	横瓶	高杯	凸帯付四耳壺	備考
1期	茶臼峯窯跡	9号窯										○	○								○	○		○		杯C、壺A(丸底)
1期?	石影窯跡	7号窯	○									○			○											長頸壺、短頸壺、甕A(丸底)
2第1段階	がまん淵	1号窯	○																							
2第1段階	向山窯跡		○									○		○												短頸壺D
2第1段階	石影窯跡	1号窯	○ ?									○														鉢、甕(丸底)
2第1段階	石影窯跡	2号窯										○									○		○	○		甕、鉢B
2第1段階	石影窯跡	3号窯										○														
2第1段階	茶臼峯窯跡	5号窯	○									○										○		○		長頸壺、甕A、
2第1段階	茶臼峯窯跡	8号窯		?			○					○			○						○			○		広口壺、甕
2第1.3段階?	石影窯跡	4号窯																						○		
2第2段階	茶臼峯窯跡	7号窯	○	?								○		○								○	○			甕A・C
2第2段階	豊野山の神	1号窯	○				○					○	○	○	○									○		短頸壺B、甕E・A
2第2段階	信山東割板屏	1号窯	○				?							○	○											
3期1段階	宮脇窯跡	3号窯	○				○									○										皿B
3第1段階	上三角窯跡	3号窯	○				○							○		○								○		短頸壺D
3第1段階	大久保窯跡	2号窯					○						○											○		
3第1段階	沢田鉄工	1号沢窯	○	○			○								○								○	○		鉢、甕、壺多数、魂
3第1段階	沢田鉄工	1号窯		○			○								○								○			
3第1段階	沢田鉄工	2号窯	○				○																			甕
3第1段階	立ヶ花遺跡	2号窯	○	○			○	○ ?							○								○	○		
3第1段階?	安源寺	1号窯	○													○										椀、長頸壺、甕
3第1段階・5末	田端地古窯址		○			○			○	○							○									
3第2段階	清水山窯跡	1号窯	○	○			○						○	○	○	○							○	○		
3第2段階	大久保窯跡	1号窯	○	○				○							○											
3第3段階	清水山窯跡	2号窯	○	○	○		○	○								○							○	○		
3第3段階	清水山窯跡	3号窯			○		○	○								○				○			○	○		
3第3段階	馬田鍋窯跡	2号窯					○	○															○			杯B三角高台
3第3段階	馬田鍋窯跡	5号窯			○			○								○							○			杯B三角高台
3第3段階?	そり畑窯跡			○												○										甕A
3第3段階?	久神山の神窯	3号窯		○	○			○								○										長頸壺A、甕A・D
3第4段階	大久保窯跡	3号窯			○			○								○										長頸壺A
3第4段階	大久保窯跡	4号窯			○											○										短頸壺C、甕A
3第4段階	馬田鍋窯跡	1号窯			○		○	○								○							○			
4期1段階	牛出古窯	1号窯		○		○			○								○									
4期1段階	栗林西原	1号窯				○				○							○									甕A
4第2段階	宮脇窯跡	1号窯				○			○								○									
4第2段階	御殿川					○			○	○							○									長頸壺、甕A
4第2段階	上の山窯跡				○	○			○								○								○	長頸壺、短頸壺B、C、鉢形
4第2段階	茶臼峯窯跡	1号窯				○			○																	短頸壺C、甕A
4第2段階	茶臼峯窯跡	2号窯				?			○																	甕A
4第2段階	茶臼峯窯跡	3号窯				○			○								○									甕A(平底)
4第2段階	茶臼峯窯跡	5号窯				○			○								○									長頸壺B、短頸壺C、甕A(平底)
4第2段階	中原窯跡					○			○								○									
4第2段階	土居洞窯跡	1号窯				○			○									○	○					○		短頸壺C、甕(平底)
4第2段階	八重原	1号窯				○			○								○								○	
4第2段階	平畑上の山窯跡	1号窯				○			○								○	○								短頸壺D
4第2段階	平畑上の山窯跡	2号窯							○																	
4第2段階	立ヶ花遺跡	1・4号窯				○			○								○							○	○	
4期3段階?	田端遺跡	1号窯				○											3 ○									甕(丸・平底)
5期	ムツナガ窯跡	1号窯				○				○							○									長頸壺B
5期	塩上廃跡	1号窯				○			○								○								○	甕A
5期	宮高山古窯跡					○			○	○							○									長頸壺B
5期	宮高山古窯跡	1号窯				○			○	○															○	甕A
5期	沼田鍋窯跡	6号窯				○			?																○	
5期	沼田鍋窯跡	7号窯				○			?								?								○	
5期	中の沢窯跡	24号窯				○				○							○									長頸壺B、甕A
5期	中の沢窯跡	8号窯				○				○							○									瓦
5期	梨木沢	1号窯				○			○	○							○									
5期?	蒼柴平	1号窯				○																			○	皿B(灰釉板做型)、長頸壺B、短頸壺C、甕A

時期区分	高丘丘陵古墳址群	磯山古墳址群	依田古墳址群	御岳ケ原・八重原古墳址群	塩高原東古墳址群	大口沢古墳址群	芥子坊主山墳址群	浅間墳址群	大矢沢古墳址群	四賀村反町遺跡	飯田市内古墳址群	田辺陶邑編年	中村陶邑編年	猿投古墳址群	美濃須衛古墳址群	畿西古墳址群
					松ノ山古墳跡											
第1期	茶臼塚9号墳	○										III－TK217型式	II-6、III—1		III前	
第2期 第1段階	茶臼塚5・7・8号墳、がまん洞1号墳	○		石附1・2・3号墳								III-TK46型式	III-2	III—2新	III後	III-3後
第2期 第2段階		磯山東南藤枝群1号墳、豊野町山の神1号墳	宮山古墳跡									III-TK48型式	III-3～IV-1			
第3期 第1段階	沢田鍋土1・2号墳・1号灰原、立ケ花表山2号墳、安源寺墳											III・TM21型式	IV—1	III—3	IV—1前	IV—1～2
第3期 第2段階	清水山1号墳、大久保2号墳											(KM16)	IV—1	III—4	IV—1後	
第3期 第3段階	洪田端2・5号墳、清水山2・3号墳　大久保1号墳		丸子町山ノ神3号墳					宮沢墳跡			宮洞3号墳		IV-2		IV—2	IV—2～V—1
第3期 第4段階	大久保3号墳、池田端1号墳						日滝池古墳						IV—3	III—4		
第4期 第1段階	牛出古墳1号墳													IV—1	IV—3～	
第4期 第2段階	茶臼塚5号墳、立ケ花表山3・4号墳、中原古墳跡、上の山古墳跡	平出上の山1号墳	原山墳跡				田滝1号墳		大矢沢1号墳		宮洞1号墳		IV—4	IV—2		
第5期	池田端6・7号墳	前高山西1号墳		八重原1号墳		富士平1号墳	中の沢8号墳			ムジナカワ1号墳	土器洞1号墳、御殿田1号墳	IV－TM83	V—1	IV—4	IV—3後	VI—1

第18表　長野県内墳墓群編年表

1995)、同8号窯（古段階）（中野市教委.1995)、がまん洲1号窯（中野市教委.1994b、1995）である。杯C、蓋Eが姿を消し、宝珠形ツマミを持つ蓋Dが主流となる。杯Aは小型の杯A1[註3]がみられるようになる。この時期にも古墳期の様相を残す瓶、平瓶が存在するが、がまん洲1号窯では瓶はみられない。茶臼峯6号窯や8号窯よりがまん洲1号窯は後出する可能性もある。その他に内面に同心円文の当て具痕の残る甕Aが見られる。皿Aや杯Bなども新たな器種として加わる。

佐久市石附1号、2号、3号窯（佐久市教委1980）がこの段階のものと思われる。

第2段階　第1段階の特徴に加え、口縁を折り曲げた口縁端部断面三角形の蓋B1が新たに登場する。高丘丘陵古窯址群にはこの段階の窯跡は発見されていない。しかし千曲川対岸の長野市聳山東南麓支群1号窯では、蓋の口縁部の内側に短い返りのような凸帯を巡らせている退化型蓋Dがみられる。更埴市向山古窯址（上水内郡刊1976）と豊野町山の神1号窯（岩野・桐原1965)、佐久市石附7号窯（佐久市教委1980）では蓋B1の口縁端部断面が三角形のものがみられ、この段階では退化型蓋Dと口縁断面形が三角形の蓋B1が並存する。また蓋Bとセットになる杯Bが登場する。杯Bは底部回転ヘラ削り調整[註4]で高台は低く杯外周に取り付けられ、杯底部が高台よりも垂れ下がるもの（杯B2）が多くみられる。前段階からある瓶、内面同心円文のみられる甕A、高杯E、平瓶がみられ、新たに高杯A、B、C、長頸壺、広口壺、短頸壺等の器種が加わる。

蓋D、蓋Bの混在の様相から第2期は陶邑窯（第Ⅲ期）TK48型式相当である。蓋D主流の高丘丘陵古窯址群第2期第1段階が中村陶邑編年第Ⅲ型式第2段階に、蓋D、蓋Bの併存する第2段階陶邑第Ⅲ型式第3段階と第Ⅳ型式第1段階に相当すると思われる。[註5]

第3期

杯Aがヘラ切り技法で切り離され、平底化していく要素の多い窯跡をこの期とした。前時期の古墳時代副葬品である瓶や平瓶、そして蓋Dが消滅し、杯Bとセットとなる蓋Bが主流となる。杯Aも第2期よりも口径が大きく、杯身が浅くなり平底にちかい形態杯A2へと変化し、その変化にともなって外傾度が増し底径が小型化し、箱型から逆台形杯A3へと変化する。甕Aの内面当て具痕は、同心円文が消滅し、当て具痕が擦り消されたり無文化する。

この第3期は杯Aの形態変化で4段階に区分した。

第1段階（第322・323図）　丸みの残る底部で外傾が強い杯A1と、やや平らな底部で口径と底径に差の少ない箱型杯A2の出土量が多い窯跡をこの段階とした。窯跡としては沢田鍋土1号窯、2号窯、1号灰原、立ヶ花裘山2号窯（第332図2～5）（中野市史編1981、中野市教委1995）があげられる。

杯Aは第2期より口径の大きいものが多くなり、杯Bも身が浅いものが多くなり、口径も大きくなる。杯B底部の回転ヘラ削り調整は行われるが、底部は厚みを持ったまま高台が底部外周に取り付けられ、高台よりも底部が下がる杯B1が多い。高台は、低く断面の小さいものが多い。蓋Dは消滅し、蓋B口縁断面三角形部分は前段階と同じで屈曲が少なく、天井部偏平な形態の蓋B（蓋B1）（沢田鍋土1号窯、立ヶ花裘山2号窯）や天井部が高く口縁部の屈曲が明瞭でない蓋B（蓋B2）（沢田鍋土1号灰原）の混在してみられる。ツマミも小さな宝珠形のものは消滅し、偏平なもの、擬宝珠形のものが主となる。このように、この段階では、杯Aや杯Bや蓋Bなどに形態や大きさが多様である。

高杯は脚が長いものと、短いものが混在する。この他に前段階までみられなかった皿A、鉢A、盤B、高杯C、金属器模倣品等の器種が増えている。美濃須衛古窯址群[註6]の影響を受けたと思われる皿B、盤A、高杯C（沢田鍋土1号灰原）（第323図）もみられ、器種の多様化が窺える。沢田鍋土窯跡、立ヶ花裘山2号窯の杯、盤、皿類（第322・323図）は静岡県湖西遺跡群（東笠子第44地点）[註7]、8世紀初頭の美濃須衛窯の第Ⅳ期第1小期前半[註8]などのものと類似する。また屋代遺跡群第四水田対応層の遺物（8世紀

初頭）（長野県埴文1996）にも類似する。

その他の特徴としては、平瓶にかわる横瓶の発達、聚の消滅と長頸壺の発達、甕内面の当て具痕である同心円文の消失がみられる。通称摺り鉢等の鉢類、各種の壺類、各種の甕類等も多様に製作されている。

また、円面硯（沢田鍋土１号灰原）の存在やヘラ描き記号の他に、ヘラ描き文字が（沢田鍋土１号窯の「井」印、１号灰原「大」印）みられるようになることは、国郡など律令機構との関わりを窺わせるようにも思われる。

第２段階（第324・325図）　杯Ａは、杯Ａ２類の中でも浅い平底のものと若干丸みのある底部のもので、口径と底径に差の少ない箱型にちかいものが多く伴出する窯跡（第324・325図、第332図６）をこの段階とした。清水山１号窯、同１号灰原[註9]がこの段階の窯と思われる。

この段階では陶邑古窯址群（KM16）にみられような壺Ａや椀Ｃのセットがみられる。椀Ｃのなかには佐波理椀の形態（巽1985）と同類のもの（第173図98・99）が清水山1号灰原でみられる。また壺Ｂは杯Ｂの大きさに従ってセットで作られるようになる。壺Ｂのツマミの形態、天井部の高さは前段階のものと変わらない（壺Ｂ１・壺Ｂ２）。杯Ｂは前段階同様底部外周に高台を取り付けたもの（杯Ｂ２）が多いが、前段階よりも底部の回転ヘラ削りが丁寧に行われ、底の器厚が薄くなる傾向がみられる。前段階以上に器種が多く、大きさが多様であり、この古窯址群における須恵器生産の最盛期を窺わせる。

このような様相を持つ清水山１号窯、同１号灰原は、杯Ａ・杯Ｂ・皿・蓋・高杯などにヘラ描き文字「井」や「高井」が付され、無頸壺には「佐玖郷」のヘラ描きが付されている。清水山１号窯は美濃須衛窯老洞１号窯の「美濃国」刻印（岐阜市教委1981）と同様、郡名のヘラ描きなど官営窯的性格を帯びている。

このようにこの段階の特徴は前段階以上に器種（盤・杯・皿・高杯・椀・鉢類・長頸壺・横瓶・短頸壺・甕類と金属器模倣品の椀・壺）の増加と大きさの多様化があげられる。須恵器生産が一挙に増加した様相は、老洞１号窯の美濃須衛第Ⅳ期第１小期後半（８世紀前半）の様相に類似する。

第３段階（第325図下段～第326図）　この段階は浅身の杯Ａ２が減小し、外傾する逆台形ちかい形態の深身平底となる杯Ａ３を伴出する窯跡をこの段階とする（第332図７～９）。この段階の窯としては池田端２号窯、同５号窯、清水山２号窯、同３号窯、大久保１号窯（中野市史編1981）がみられる。

杯Ｂ２は杯Ａ３の外傾度が増したと同様外傾度が増し、高台より底部が激しく垂れ下がりはみ出すものはなくなる（第334図７～10）。この段階で高丘丘陵古窯址群では、杯Ｂの高台断面形が前段階までと同様に方形を呈するものが多いが、中には断面三角形になるものが多く加わるのが特徴である。

前段階よりも焼成される器種は若干少なくなり、壺類類の大きさの違いも少なくなりはじめる。器種は杯Ａ、杯Ｂ、高杯Ａ、皿、長頸壺Ａ、横瓶、甕類、円面硯などがみられる。壺Ａの底部が平底風になる。前段階の金属器指向傾向が薄らぎ、この段階ではヘラ描き文字・記号が減少する。

また池田端２号窯では布目瓦も生産され、瓦陶兼用窯である。高丘丘陵古窯址群では布目瓦が焼かれている窯は池田端２号窯、４号窯、７号窯でしか確認されていない[註10]。

清水山３号窯にはツマミの無い壺Ｆがみられる。この形態の壺は湖西窯址群（斎藤・後藤1994）に多くみられる。東笠子44地点Ⅶ号窯（８世紀中頃）灰原、同36地点Ⅵ号窯（９世紀初頭）、同24地点窯跡（９世紀前半）などにみられる。東笠子44地点以外の同36地点と同24地点の遺物は回転糸切り技法の杯が出土している。壺Ｆは湖西窯址群では湖西第Ⅵ期（９世紀初頭）の指標となっている。また北陸地方の石川県戸津９号窯、同10号窯、同11号窯（９世紀後半、望月1992）、富山県上末釜谷３号窯、同４号窯（９～10世紀）（富山県埴文1989）においても壺Ｆは出土する。清水山3号窯の壺Ｆはヘラ切り技法を持つ窯跡の出土品であり、東笠子Ⅶ号窯の出土遺物に技法的に近似する。ヘラ切り技法を持つ窯出土の壺Ｆの類例を待ちたい。

第4段階（第327図上段）　杯Aが、平底、逆台形（杯A３）の形態となり、大きさも安定する窯跡をこの段階とする（第332図11・12）。大久保３号窯（中野市史編1981）池田端１号窯がこの段階の窯跡と思われる。第３期の中でもこの段階になると高丘丘陵古窯址群では須恵器生産遺跡の数が急激に減少する段階である。

杯Aは平底が主流であり、回転ヘラ切り面が残りやや凸面を残すもの（底部未調整）や回転ヘラ削り調整し底部を平らにしているものもみられる。深身の底径は若干小さくなり、外傾度が増し逆台形（杯A３）となる。大きさも安定し身がやや深めのものが多くなり、杯身のロクロ痕の凹凸が顕著に残るようになる。この段階から横瓶が急減し、円面硯も高丘丘陵古窯址群では生産されなくなる。[0011]

以上のように高丘丘陵古窯址群第3期前葉は蓋Dが消滅し杯B・蓋Bのセットが主の様相である、陶邑古窯址群TM21型式段階の様相と一致する[0012]。高丘丘陵古窯址群第3期前葉から中頃では窯の数が爆発的に増大する。器種の爆発的増加、大きさの多様化がみられる。そして仏具、金属器の模倣品、硯等の主には官公庁用・寺用と思われる器種の増加みられる。しかし第3期終末頃になると、ヘラ切り技法から糸切り技法へと生産技術交代期と思われる窯跡数の急減と器種の減少がみられる。

第４期

須恵器生産に回転糸切り技法が導入され、杯A（杯A４）の底部径が6cm以上のものが多く生産される窯跡の一群をこの期とする。牛出１号窯、１号灰原、３号灰原、茶臼峯１号窯、３号窯、５号窯　立ヶ花表山３・４号古窯（中野市教委1995）、中原古窯址（中野市教委1995）、上の山古窯址（中野市教委1995）である。北信地方のその他の窯は誓山古窯址群牟礼村平出上の山古窯址（牟礼村1992）などがこの期の窯跡と思われる。

この期から杯底部の切り離しが回転糸切りが主流となり、器種の形態変化がみられる。第４期の窯跡で、杯Aの大きさと形態が整わないものが多い窯跡を第１段階、杯Aの大きさと形態が整ったものが多い窯跡を第２段階とした。

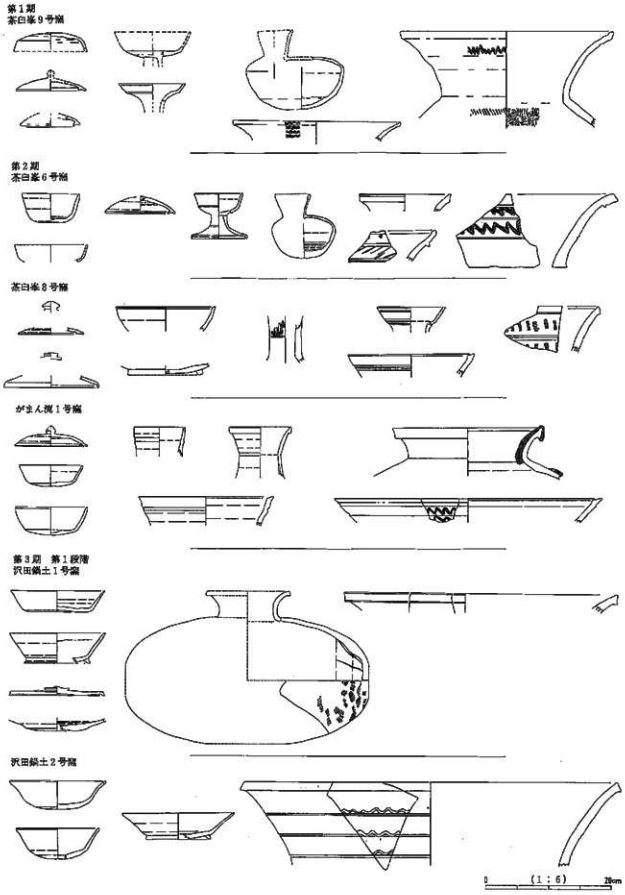
第１段階（第327図中段）　牛出１号窯、同１号灰原、同3号灰原がこの段階のものと思われる。これらの窯跡の杯A４は第２段階のものに比べると大きさが安定していない。また形態も若干パラツキがみられる（第332図13、第277図１～33、第278図１～４）。

金属器や磁器を模倣した三（獣）足壺（牛出古窯３号灰原）や信州特有の凸帯付四耳壺、透かしのある高杯D（牛出３号灰原）など全段階になかった器種が増加する。またヘラ描き文字「大」（牛出１号窯、３号灰原）、や記号「卅」、「×」（牛出１号窯、３号灰原）が、この段階から再びみられるようになる。

牛出３号灰原出土の獣足形脚の例は、尾北の篠岡81号窯（愛知教委1983）（猿投窯第IV期第１小期）美濃須衛窯稲田山13号窯（各務原市1981）（第IV期第３小期）、静岡東笠子43号窯（斎藤・後藤1995）などにみられ、８世紀中葉から９世紀とされるものである。

第４期に多い凸帯付四耳壺の初現は、８世紀初頭の老洞２号窯（岐阜市教1981）、稲田山（須衛21－25号）窯跡群（岐阜市教委1981）、そして中野市沢田鍋土１号灰原（第123図137）にみられる。小型で体部球形である。この形態は8世紀初頭の平城京出土（平城京左京二条十三坊）須恵器釜（巣1985）に耳部分が付いた形態と思われる。しかしその後姿を消し、８世紀の中葉より９世紀にかけて、大型化した胴部の長い凸帯付四耳壺が長野県を中心（笹沢1986）に山梨県（出月1994）などで多く発見される。８世紀中葉から９世紀にかけての凸帯付四耳壺出土の生産遺跡としては、佐久市八重原１号窯（坂詰1982）、同８号窯（坂詰1963）、牟礼村前高山北２号窯（笹沢1986）、同西１号窯（笹沢1988a）、中野市立ヶ花表山３・４号窯（中野市教委1995）、中原窯跡（中野市教委1995）、牛出古窯３号灰原、池田端６号窯、同７号窯、新潟県佐渡地方小泊窯跡群（坂井他1992）である。長野県北部と佐渡地方を中心に短期間生産された器種と思われる。

脚に透かしのある高杯（第278図14）は、古墳期にその初現はあるがその後姿を消し、８世紀中頃から10



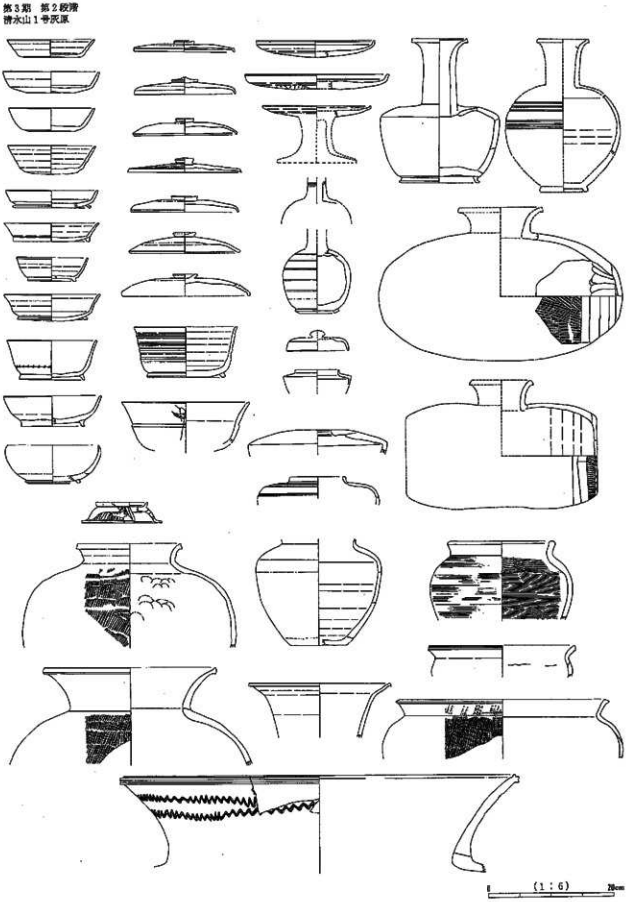
第322図　高丘丘陵古墳址群出土遺物(1)

沢田橋土1号灰原

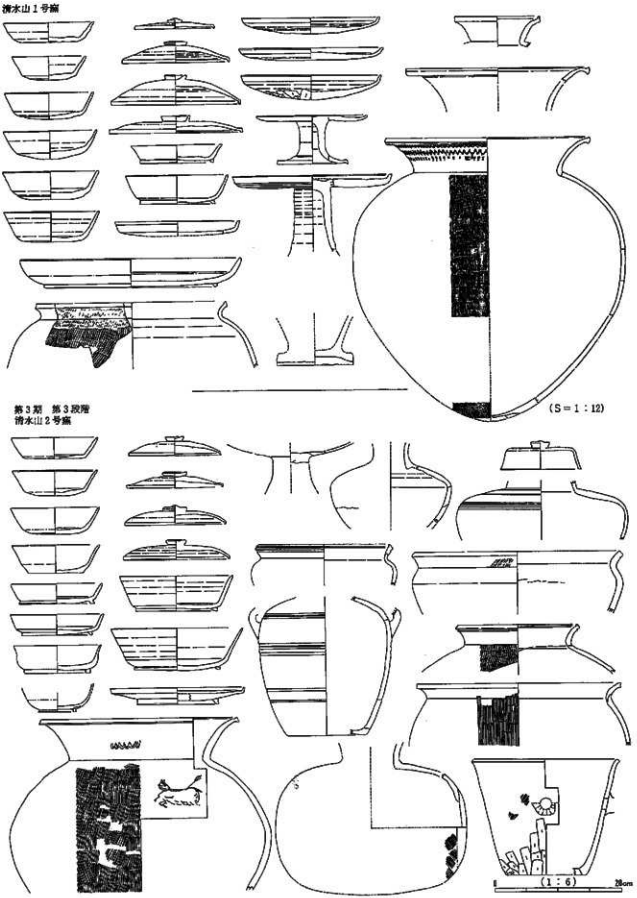
立ヶ花浪山2号窯

(1：6)　20cm

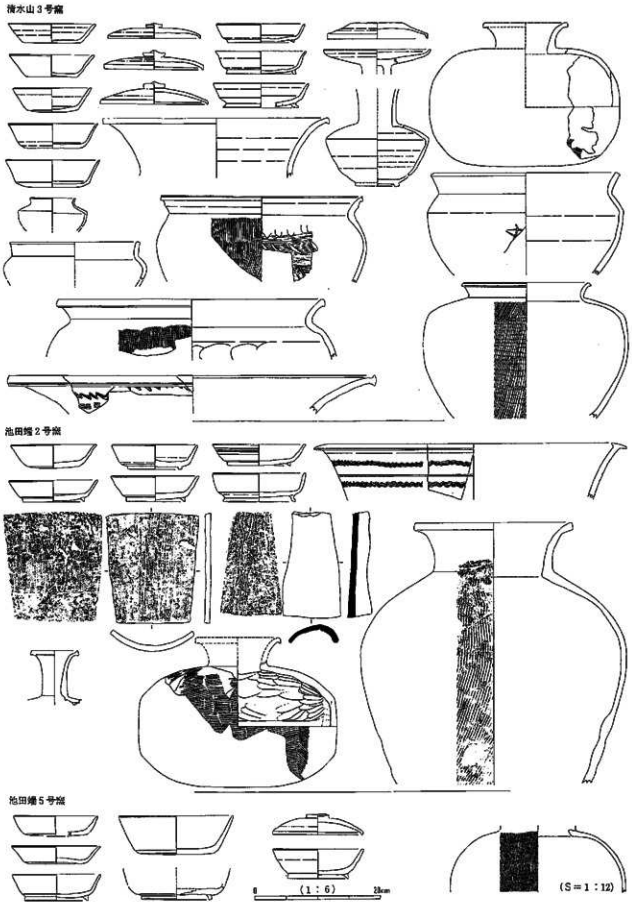
第323図　高丘丘陵古墳址群出土遺物(2)



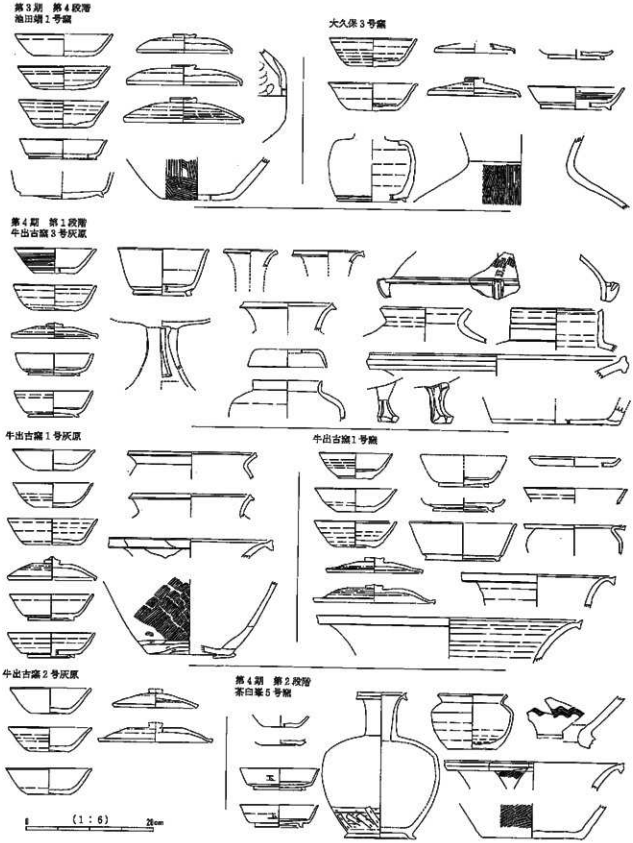
第324図　高丘陵古墳址群出土遺物(3)



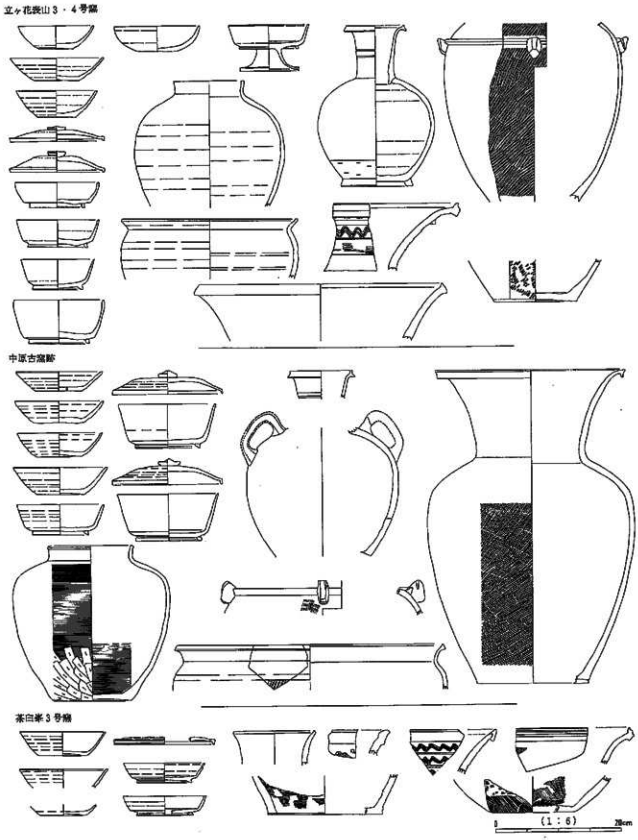
第325図　高丘丘陵古墳址群出土遺物(4)



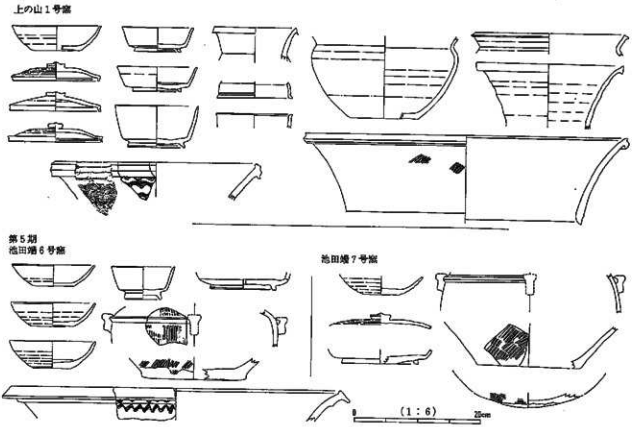
第326図　高丘丘陵古窯址群出土遺物(5)



第327図　高丘丘陵古墳址群出土遺物(6)



第328図　高丘丘陵古窯址群出土遺物(7)



第329図　高丘丘陵古窯址群出土遺物(8)

世紀までの美濃須衛窯の影響[註112]を受け中野市牛出古窯址3号灰原で再出現している。

第2段階（第327図下段～第329図上段）　この段階の高丘丘陵古窯址群の杯A4は、回転糸切り未調整か糸切り後ナデ調整[註114]のものが多くみられるが、同時期の窯と思われる千曲川対岸の牟礼村平出上の山1号窯（牟礼村教委1992）では、回転糸切り後底部をヘラ削り[註115]しているものが多く混在する。

また、この前段階同様杯Bは底部糸切りが未調整のもの、底部外周ヘラ削りするもの、底部回転ヘラ削りするものなどがみられる。高台は杯底部の内側に取り付けられている。そして前段階同様壷Bは口縁の折り目が明瞭で、天井部との境目が沈み込むものもあり、天井部の回転ヘラ削りされた部分が平らとなるもの（壷B3）が多くなる。

牛出古窯址の住居内で発見された高杯Dの生産遺跡として現在確認できるのは、中野市立ヶ花表山3・4号窯（第336図140）のみである。高杯Dの類例は、長野市田牧居帰遺跡24号溝検出面（長野市教委1993b)、更埴市上ノ田遺跡15号溝（更埴市教委1983）で知られるのみである。

この段階の長頸壷は口縁端部が摘み上げられたような形態が多くなる（第337図83)。長頸壷Aは消滅し、体部が球形にちかい形態の長頸壷Bとなる。長頸壷の製作技法のわかる牟礼村平出上の山1号窯、立ヶ花表山3・4号窯群の長頸壷は二段構成の製作技法（第181図1）である[註116]。また甕Aは概ね平底となる。

杯の様相などから（第333図7～12）長野県内では塩尻市富蒲沢窯跡（塩尻市教委1991)、北御牧村八重原1号窯（坂詰1982)、飯田市宮洞1号窯（遠那1963)、飯田市御殿田1号窯（下伊那歴研1981)、豊科町富蒲平1号窯（笹沢1988a)、飯田市土器淵窯跡（笹沢1988a）が同時期の窯と思われる。

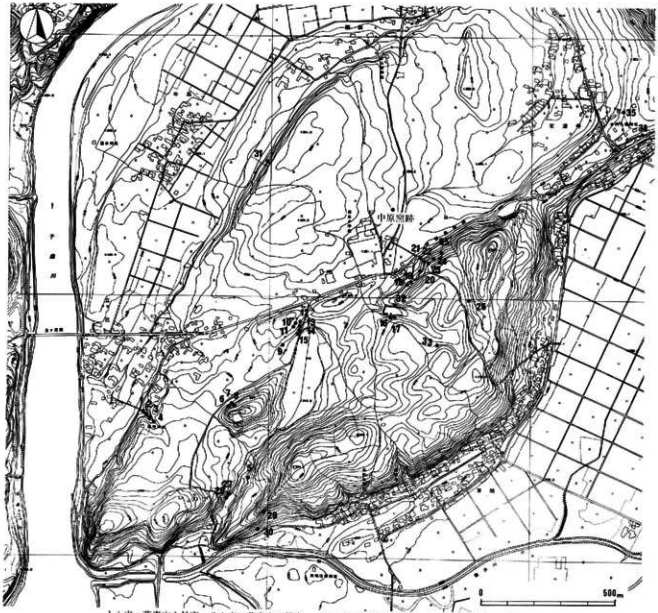
第5期

この期の杯Aは、回転糸切り技法による切り離しで底部径が6cm以下で法量が一定のものが多くみられる

窯跡である。池田端６号窯、７号窯がこの期の窯跡と思われる。

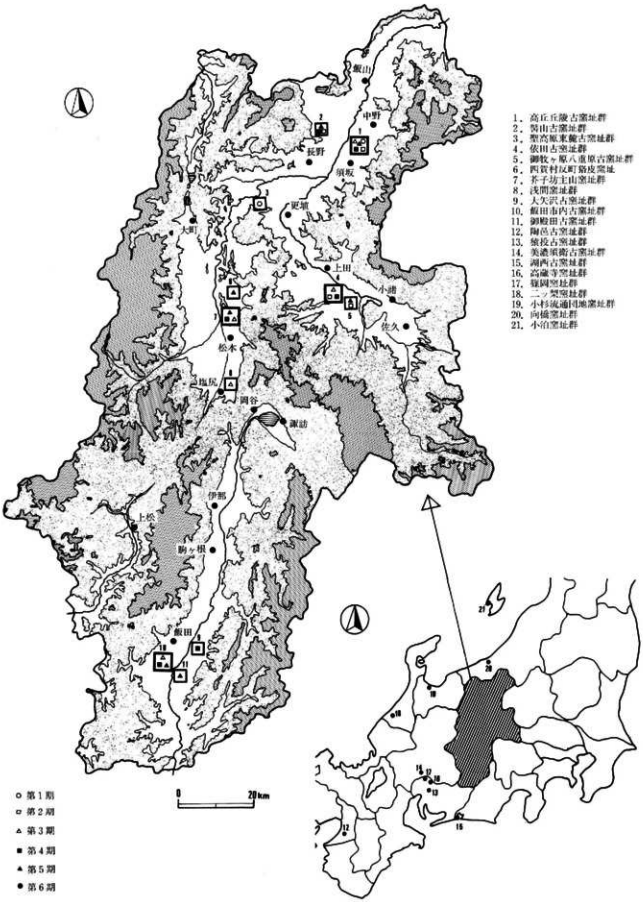
杯Ａは回転糸切り離し技法で未調整である。杯Ａ（杯Ａ４）の底部は前段階よりも更に小さくなり（底径６cm以下）外傾度が増し、器高が低く、法量が一定化してくる。杯側面のロクロ痕は鮮明となる[注17]。杯Ｂは回転糸切り技法で外周ヘラ削りである。高台径は縮小傾向にある。

この時期の北信地方の窯は池田端６号窯、同７号窯（第332図18、第334図17）のほか髻山古窯址群の牟礼村前高山西１号窯（第333図13、第335図10）などがあげられるが、窯跡数も減少し、杯類が須恵器生産のほとんどを占めるようになる。杯Ｂは法量分化が明確化する。甕Ａは前段階同様の平底である[注18]。

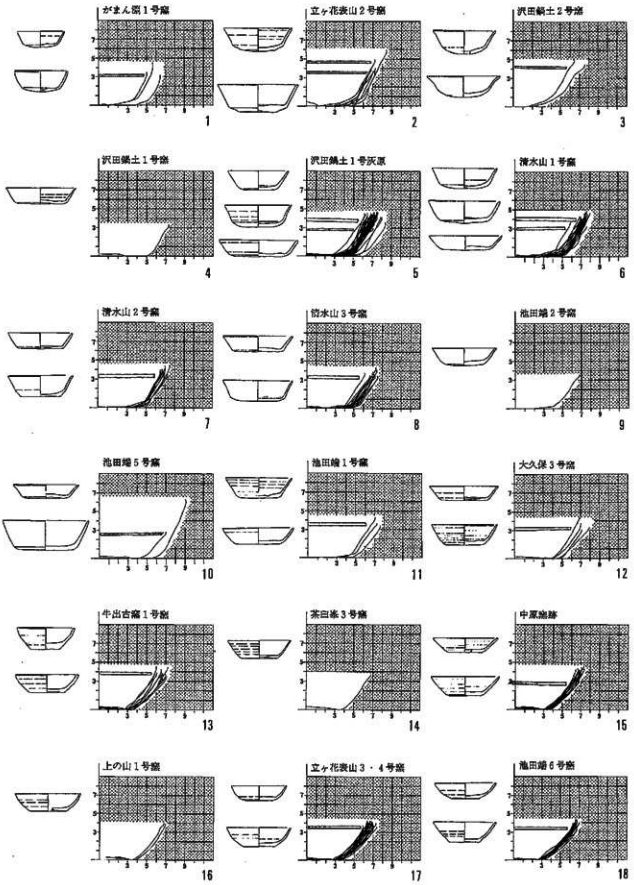


1：立ヶ花表山１号窯　2：立ヶ花表山２号窯　3：立ヶ花表山３号窯　4：立ヶ花表山４号窯
5：沢田鍋土１号灰原　6：清水山３号窯　7：清水山１号窯　8：清水山２号窯
9：池田端５号窯　10：池田端４号窯　11：池田端３号窯　12：池田端７号窯
13：池田端１号窯　14：池田端２号窯　15：池田端６号窯　16：大久保３号窯
17：大久保４号窯　18：大久保２号窯　19：大久保１号窯　20：茶臼峯４号窯
21：茶臼峯１号窯　22：茶臼峯２号窯　23：茶臼峯３号窯　24：茶臼峯７号窯
25：茶臼峯６号窯　26：茶臼峯５号窯　27：沢田鍋土１号窯　28：沢田鍋土２号窯
29：がまん洞１号窯　30：西山１号窯（仮称）　31：牛出１号窯　32：大久保５号窯（仮称）
33：上の山１号窯　34：安源寺１号窯　35：安源寺２号窯
以上は調査報告されている窯跡である。（30・32を除く）

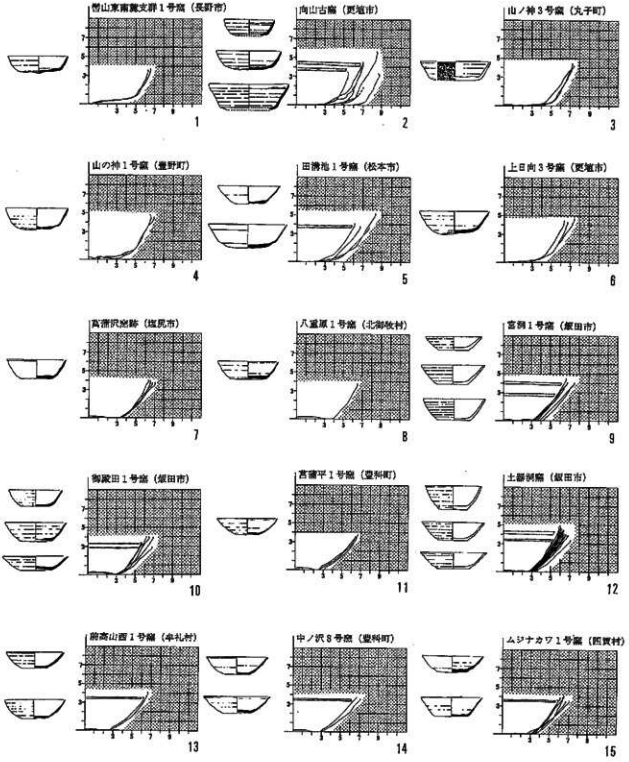
第330図　高丘丘陵古窯址群窯跡分布図



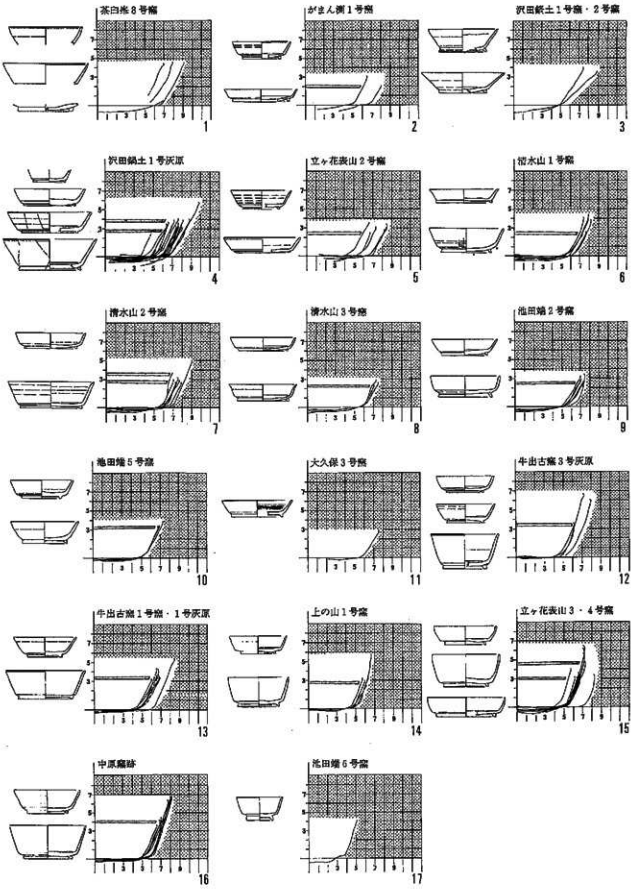
第331図　主な須恵器窯の分布



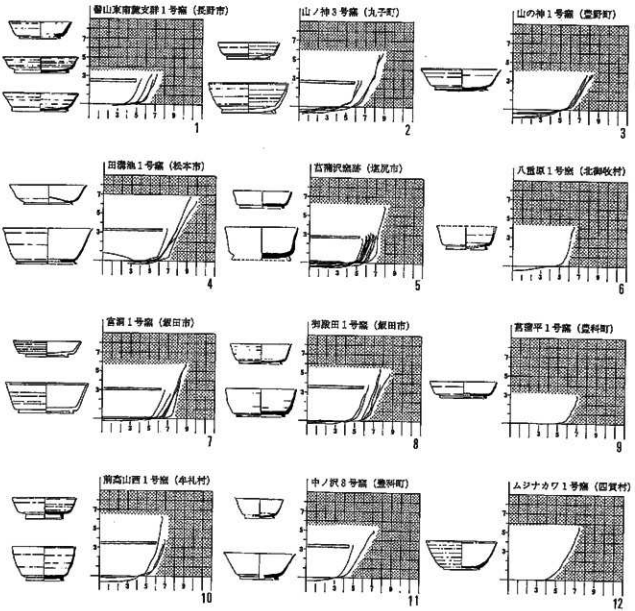
第332図　須恵器坏A形態と法量変化(1)（高丘丘陵古窯址群）



第333図　須恵器坏A形態と法量変化(2)（県内古窯址）



第334図　須恵器坏B形態と法量変化(1)（高丘丘陵古窯址群）



第335図　須恵器坏B形態と法量変化(2)（県内古窯址）

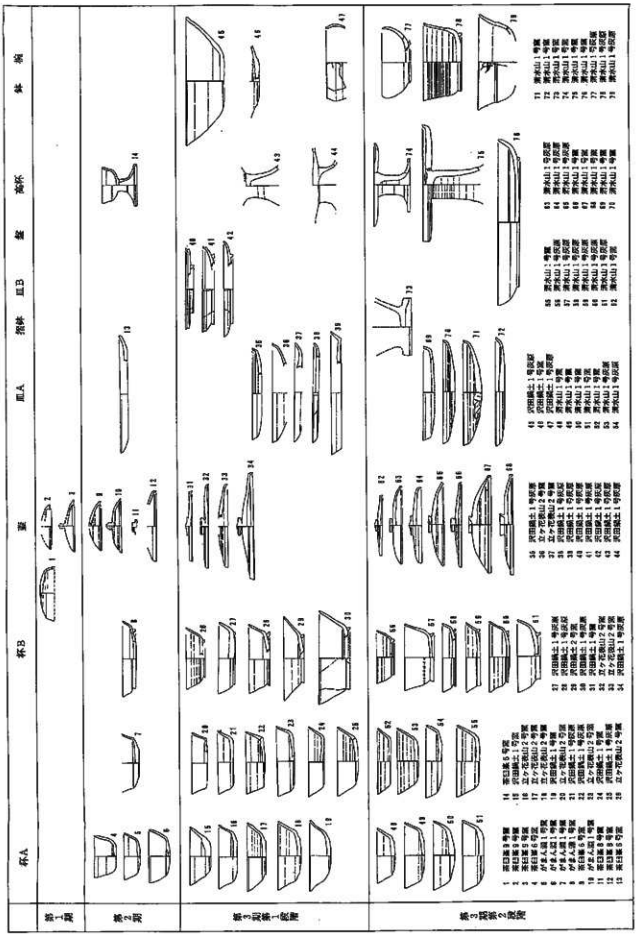
北信地方では須恵器生産の衰えもあり、底部糸切り技法による生産を細々と続けていたものと思われる。そして北信地方では須恵器に代わる土師器が主流となる。つまりロクロ挽きの黒色処理した土師坏が登場しはじめ、甕、壺類の須恵器生産が減り、長胴甕や小型甕、鉢類といった土師器が大半をしめるようになる。

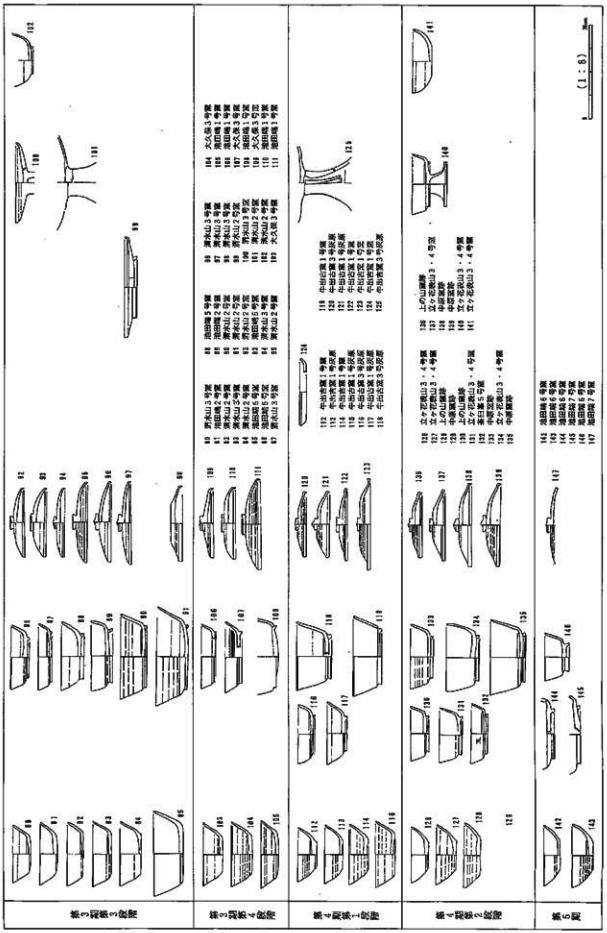
杯の様相から長野県内の同時期と思われる窯跡は豊科町中の沢8号窯（笹沢1988a）、四賀村ムジナカワ1号窯（笹沢1988a）（第333図14・15、第335図12）などがみられる。

第6期

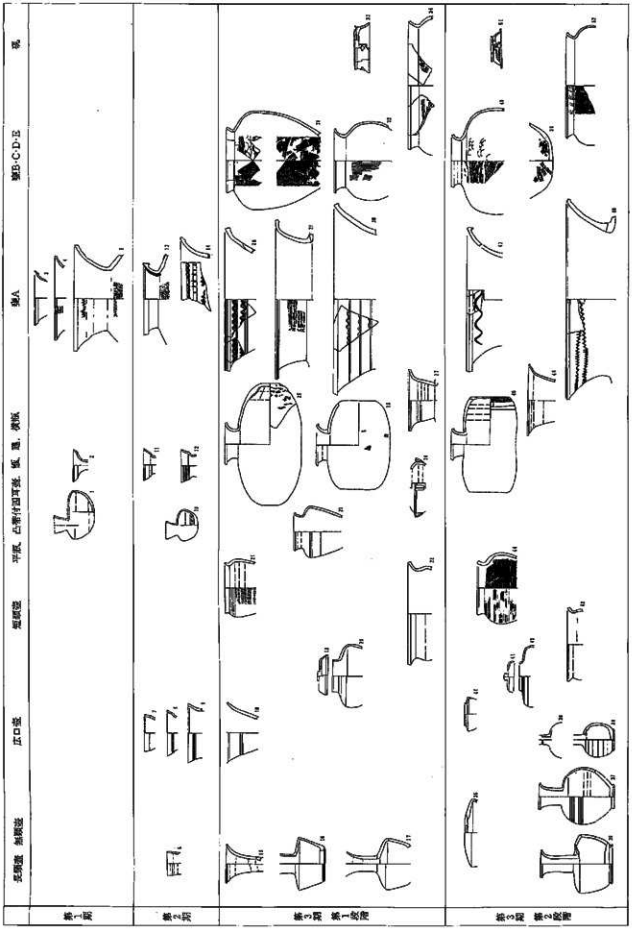
北信地方では現在この時期以降の窯が発見されておらず、この時期から全く須恵器生産が衰退してしまう。猿投窯跡群では灰釉陶器の本格的な生産が始まり、須恵器窯の需要が無くなってきた時期と思われる。

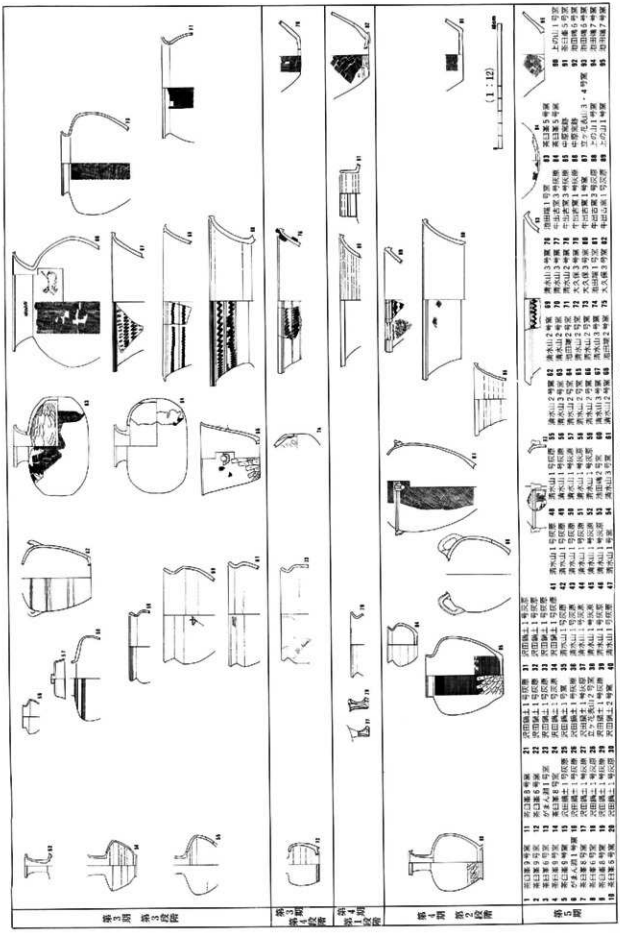
この様に高丘丘陵古窯址群では地点（支群）を変えながら、7世紀中葉から間断無く9世紀前葉まで約


第一期
第二期
第三期 第一段階
第三期 第二段階
杯A
杯B
皿A
皿B
鉢
高杯
蓋
体部



第335図　高丘丘陵古墳群群出土須恵器(1)


長頸壺　無頸壺
広口壺
短頸壺
平底、凸帯付平底、鉢、皿、蓋
後入
第B・C・D・E
底
縄の譜
縄の譜
縄の譜　縄の変遷
縄の譜　縄の変遷



第337図　高丘丘陵古墳址群変遷図(2)

一世紀半続いていたものと思われる[註18]。高丘丘陵古窯址群は律令制の浸透期に発達し律令体制の衰退と共に消えた生産地といえる。また、東信濃の須恵器生産は、古墳時代末葉に高丘丘陵古窯址群など千曲川水系において生産を本格化する。そして千曲川対岸の磐山古窯址群と上流の北佐久郡御牧上古窯址群などもほぼ同時期に操業を開始し、徐々に中・南信地方に生産地を拡大するが、律令体制の衰退と灰釉陶器の生産拡大により、須恵器生産は９世紀前半期には役割を終えたものと思われる。

註

（1）田辺氏は型式について「ある時間的空間的な限定を持つ一群の土器を一型式としてとらえる。」「編年作業の中へ、製作技法、形態、組み合わせの三つの視点で特徴をとらえる具体的方法を持ち込み型式編年の前提である各型式認定を果たそうとするものである。」と述べている。中村氏は、田辺氏の型式設定について「…特定の窯名を持って型式名とし、それらの窯のみでなく他のすべての同一型式遺物までに及ぶとする発想が（中略）各期に細かな型式設定がされている。」とし、中村氏の型式に対する考え方は「…型式は杯蓋を中心とする形態の変化と器種の組み合わせによって区分されるものであり、段階は型式を構成する各期種にみる細かな形態変化を示す。型式・段階はともに遺構たる窯跡の検討によって得た時間的様移を前提に設定した編別区分であり、単に工人集団によって生じる形の違や手法の差は区分対象とはせず、同一段階に属するとみられる同一器種については、類形という語を用いて分類を行っている。」として、田辺氏との違いを述べている。TK217型式の蓋と杯の共伴を中村氏はⅡ型式第６小期と第Ⅲ型式第１小期に分類している。

（2）後投編年では岩崎17号窯古段階（後投窯第Ⅲ期第２小期古）で蓋Ｅと蓋Ｄが伴い、美濃須衛窯（第Ⅲ期）では須衛65号窯が蓋Ｅと蓋Ｄが伴う。

（3）都城の土器集成では杯Ｇ。

（4）美濃須衛第Ⅲ期後半期の各務原市頭加5号窯の様相に近似する。後投窯では第Ⅲ期第２小期後半が相当する。後投窯では従来の器種蓋Ｅ、蓋Ｄと器高の高い丸底の杯Ａ、新たな器種蓋Ｂが登場する。蓋の返りは後半になると退化したものとなり、この期には長野県では蓋Ｅは消失するという相違がみられる。

（5）回転ヘラ削り調整とは回転を利用してヘラで削る調整である。

（6）斎藤1995参照。

（7）後藤1995参照。

（8）斎藤・後藤1995参照。須衛９号窯。

（9）大久保2号窯もこの段階と思われる（中野市史編，1981）

（10）がまん洞窯跡の灰原と思われる中に布目瓦が混入している（中野市教　1995）。この布目瓦は池田遺２号窯の布目瓦に類似する特徴を持っており、がまん洞窯跡に持ち込まれたものと思われる。

（11）この時期後投窯では第Ⅳ期第１小期の時期よりヘラ切り技法は残るものの糸切り技法が普遍化してくる（後投窯第Ⅳ期第１小期）。その後灰釉陶器の生産が開始される。鳴海32号窯（後投窯第Ⅳ期第２小期）では逆台形の杯に高台が付けられたような高台付き椀がみられ、美濃須衛窯（第Ⅳ期第２小期）では杯Ａに大型品がみられなくなり底部が平坦となり、杯身が直線的に立ち上がる箱型となり高丘丘陵古窯址との相違がみられる。

（12）中村編年では陶邑第Ⅳ型式第１段階から第２段階（８世紀前半）にあたる。

（13）高杯の脚に長方形の透孔を入れるものは美濃須衛古窯址群の磐田山古窯址に多く、８世紀の中頃以後10世紀までみられる。

（14）ナデ調整とは回転を利用せず器面を指、布、皮などで撫で、凸凹をなくす調整技法である。ナデ調整の中でも板ヘラ（板状工具）ナデ調整のように工具痕をはっきり残すものがある。板状の小口（板状工具）などを利用し、器面を平らにする。ハケ目のようにみえるがハケ目よりも器面に対してかなり小口を寝かせる角度で整形しており、ナデのような効果をもたせている。主に杯Ａ底部の調整に用いられており、ヘラ切りによる凸凹を１－２回のナデで平にする効果があったものと思われる。清水山窯跡で多くみられた。

（15）ヘラ削り調整は回転を利用せずヘラで器面を削り、薄く調整したり、器面の凸凹を調整する技法である。

(16) 8世紀中葉の猿投では前段階から糸切り技法が普遍化し、法量分化の多様性がみられなくなり、長頸壺の三段構成のものの他に二段構成のものが出現する（岩崎25号窯、猿投窯IV期第1小期）。鳴海32号窯（猿投窯IV期第2小期）では瓜始灰釉のようなものもみられるようになる。しかし奈良須恵器では糸切り技法は例外的であり、最後まで篦切り技法が一般的である。稲田山窯12、13号窯（奈良須恵器IV期第3小期後半9世紀初頭）では杯類を中心とする量産化に伴う技術的退化・粗雑化が認められる。各部位の様式化や装飾過多盛行している。

(17) 回転数が上がったためと思われる。

(18) この時期である猿投窯IV期第4小期（岩崎45窯）9世紀初頭の猿投窯の特徴は三（鈴）足壺などがなくなり、杯類が主体となり、杯Bは高台が少し高くなる。杯壺の量も減り、長頸壺は二段構成のものが主となり、灰釉陶器の生産が始まる。また奈良須恵器では底部ヘラ切り技法を踏襲し独自の様相を作り上げている。

(19) 現在報告されている高丘丘陵古窯址群は約45基であるが、金井汲次氏によると高丘丘陵古窯址群は100基以上（破壊されたものを含めて）存在していたものと思われるというご教示を頂いている。

3　奈良時代のヘラ描き資料について

清水山1号窯、1号灰原に多くみられるヘラ描き「井」印は「高井」と記す資料の存在により「高井郡」の井を省略して記したものと思われる。郡を明らかにして須恵器を官庁や寺院に納める必要があったものと思われる。

ではこれらの「井」の字はどんな筆順で記されたものであろうか。現在の「井」の字は、二本の横棒を上そして下、次に縦棒を左そして右の順番に引く。これらのヘラ描き記号の筆順の観察結果は第6章の出土遺物図版の「井」の字の部分に記した。

なお「井」印の資料は1号窯、1号灰原のみでなく2号窯、3号窯からも出土しているが出土層位からも1号窯の製品の可能性があり分析の中に含めた。

筆順は以下のように分類される。

1パターン：現在と同じ横縦二本ずつを引くもの（1号窯－41、42、43、80、81、82、85、86、87、89、90、91、92、94、95、97、101、102、103、104、111、112、113、114、130、131、133、134、135、137、138、139、140、141、142、144、159、160、161、162、163、165、166、167、168、169、171。2号窯－60、62、64、67、70、71、73。3号窯－55。1号灰原－63、93、94、95、96。1号窯－128「高井」）

2aパターン：横縦横縦を交互に引くもの（1号窯－41、170、172。2号窯－63）

2bパターン：縦横縦横を交互に引くもの（3号窯－68。1号灰原－101）

3aパターン：縦横横縦に引くもの（1号窯－100、173）

3bパターン：横縦縦横に引くもの（1号窯－129「高井」）

どちらが縦線か横線かはっきりしない場合があり、2aと2b又は3aと3bの区別は明確ではなく、3パターンの筆順に大別される。ほとんどの「井」の字は現在と同じ筆順1パターンである。

次に1パターンの筆跡についてみると大きく2タイプに分けられる。1類は湾曲線や非平行線でヘラで描かれた文字のもの（第338図1～7、23）、2類が二本の直線的なヘラの線で描かれているもの（第338図8～18、25）である。1類の23は、長い平行線を引いた後、短い平行線を書く前に描き損じた線を消さずに残したものと思われる。2類の25は短い平行線のヘラの繊維が二重線となったものである。

筆跡1類と器種の関係はどうであろうか（第338図参照）。2の沈線内には繊維束がはっきり認められる。このような繊維束がはっきりするものに「高井」の文字がある（第149図128）。しかし「高井」はヘラというよりも細い繊維束を束ねたような工具で描かれている。1と2は1号窯の皿Aの底部ヘラ削りのものに多くみられる。3はリング状のツマミを持つ蓋Aにみられ（第172図63・64、第148図103）、後から描かれ

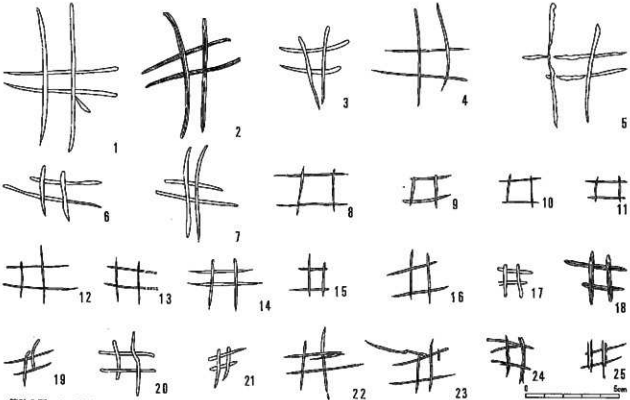
た二本線が短く“抜く”部分が狭まっている。4は1号窯の壺Bに多くみられる。5は1号窯の杯A底部にみられる。6は杯B（第172図95・96）にみられるもので、後から描かれる二本線が短く平行な線である。7は1号窯の壺A（第148図102）にみられ、2の筆跡にも類似する。

筆跡2類の8は回転ヘラ削りされた1号窯のⅢAにみられる。また1号窯の壺B（第148図94）や甕B（第150図144）に類似するものがみられる。9は8や10の形態に類似するが、工具がやや太めである。10は2号窯の杯B（第159図61・66・70・73）底部中央にみられる。11も10に類似し、始めの二本線の間隔が狭い。13は2号窯の杯B（第159図）に多くみられる。8に類似する12、14、16は高杯A（第151図）にみられる。12は始めの二本が長く、14は工具がやや太めであり、始めの二本線の間隔が狭く、16は四本線がほぼ同じ長さのである。15は8に類似するが後の二本線の間隔が狭くなっており、1号窯壺C（第147図80）と1号窯杯B（第148図112・113）にみられる。17は工具が太く1号窯の杯A（第146図42）にみられる。18は1号窯の壺Bにみられ、2に類似する工具が使われたものと思われ太い。19は1号灰原の椀Cにみられ、1号窯の杯Bにも類似するものがある（第148図114）。

次に筆順2・3パターンの器種との対応関係を見ると、筆順2bパターンである20は3号窯甕底部、筆順2aパターンである21は1・2号窯高杯B（第148・152図）に記されている。22は筆順3a又は3bパターンで1号窯の壺B（第148図）と「高井」とヘラ描きされたⅢA（第149図）にみられる形態である。

その他24は12と類似する高杯A（第151図170）にみられる。25は2号窯の杯B（第159図60）で、13のヘラが割れた状態で描かれたものと思われる。

このように特徴の似ているヘラ描き記号は同一器種に施される傾向がみられる。また、ⅢAは底部を回転ヘラ削りする技法とヘラ削りする技法の2種類があり、底部調整の差が「井」印の筆跡の差と一致する。



筆跡Ⅰ類　1. SY01−142　2. SY01−138　3. SW01−63　4. SY01−89　5. SY01−43　6. SW01−95　7. SY01−102
筆跡Ⅱ類　8. SY01−134　9. SY01−95　10. SY02−70　11. SY02−71　12. SY01−169　13. SY02−64　14. SY01−171
15. SY01−80　16. SY01−168　17. SY01−42　18. SY01−97　23. SY01−159　25. SY03−60
筆跡Ⅲ類　19. SW01−101　20. SY03−68　21. SY02−63　22. SY01−100　24. SY01−170

第338図　清水山窯跡「井」印のヘラ描きの分類

高杯Aは器の形態に個体差がなく、ヘラ描きも同一人物によるものと考えられるほど均一である。蓋Aではつまみのリング形態の違いによって3と7というようにヘラ描き筆跡が異っている。また器種が異なるもので同類の筆跡がみられるものがある。1パターン2類の筆跡に複数の器種にわたるものが多いが、同一人物によるものか判断しにくい。

筆跡と筆順から「井」印を分類し、1号窯の須恵器製作に関わった工人数を推定できる。筆順で5分類され、筆順パターンでは2種類の筆跡が確認されることから、最低6人の工人が存在することになる。その他にも若干の筆跡の相違がみられ、個々の筆跡鑑定は無理であるが1つの窯には少なくとも6人以上の職人が須恵器の製作に携わっていることが理解された。

4　窯跡の構造について

(1) **窯体の規模**　第19表に窯跡の全長と焼成部の最大幅を示した。全長は前庭部を含めた長さを示す。焼成部の残存状況は窯によって異なっており、必ずしも本来の窯体の規模を示してはいないが、概して、古い段階の窯が大きいという傾向は認められる。その中で清水山窯跡が突出して大きいことが伺われる。同時期の窯跡は全貌がつかめるものが少なく即断はできないが、10mを越えるものは他には見られないことから、清水山窯跡は他と区別される窯の性格を考慮しなければならない。

(2) **窯体の構造**　本報告書で取り上げた窯跡は池田端4号窯を除いてすべて半地下式の登り窯である。牛出1号窯では見られなかったものの、登り窯の多くは焼成部に舟底状ピットを有する。また、清水山2号窯、池田端2号旧窯では焼成部に段が認められ、他の窯跡と異なった構造を示す。これらの窯の前庭部には溝が認められ、清水山2号窯では溝の上に甕の破片が伏せられていた。池田端5号窯にも同様な溝が認められ、いずれも3期3段階の窯である。この他に池田端6号・7号窯の前庭部に溝が認められ、7号窯の溝は平瓦で覆われていた。これらの溝の機能は不明であるが、清水山2号窯・池田端2号窯では最終焼成時には溝はすでに床下に埋没しており機能していなかったことが確認された。

清水山1～3号窯では燃焼部壁又は焼成部壁に石を用いており、他の窯跡と異なった構造を示す。清水山窯跡の地山には窯体内に用いられた石と同じものが含まれており、他の窯跡の地山には石が見られなかったことから、壁面に石を用いる構造は地山に利用できる石を含むか否かの立地条件に左右されたものと思われる。窯壁に石を用いる例は中野市茶臼峯6号窯（大川・金井1964）、上水内郡牟礼村前高山北2号窯（上水内郡誌刊行会1976）、塩尻市菖蒲沢窯跡（塩尻市教育委員会1991）などに見られる。

各窯の窯壁の中に天井部を支える骨組みの痕跡と思われる管状の空洞が認められるものが出土した。採取された資料からは骨組み全体の構造を知

第19表　高丘丘陵古窯址群の窯の規模

時期区分	窯跡名	遺構全長 (m)	焼成部幅 (m)	焼成部傾斜角度	備考
2期1段階	茶臼峯6号窯	8.5	1.7	22°	トンネル式無段登窯
〃	茶臼峯7号窯	8.2	1.2	32°	半地下式無段登窯
〃	がまん洲1号窯	4.2	1.25	15°	トンネル式？
3期1段階	沢田舗土1号窯	8.32	不明	25°	不明
3期1段階	安源寺1号窯	7.6	1.45	23°	トンネル式無段登窯
3期2段階	清水山1号窯	14.10	1.46	28.5°	半地下式無段登窯
3期3段階	清水山2号窯	10.80	1.36	28°	半地下式有段登窯
〃	清水山3号窯	11.68	1.36	27°	半地下式無段 旧窯体は幅1.6m
〃	池田端2号窯	8.12	1.12	24°	半地下式有段登窯 旧窯体は幅1.3m
〃	大久保1号窯	3	1	10°	半地下式無段登窯
3期4段階	大久保3号窯	4.6	1.5	25°	半地下式無段登窯
3期	大久保4号窯	5	1.3	28°	半地下式無段登窯
4期1段階	牛出古窯1号窯	7.50	0.95	27°	半地下式無段登窯
4期2段階	茶臼峯5号窯	6	1.2	29°	半地下式無段登窯
5期	池田端6号窯	7.50	1.10	29°	半地下式無段登窯
〃	池田端7号窯	4.90	(0.8)	29°	半地下式無段登窯

るには至らなかったが、遺存状況の良好な清水山1号窯と牛出1号窯の窯滓を第339図に示した。網掛けで示した部分が骨組みの痕跡で、斜線はガラス質になった壁面を示し、1・3では複数の壁面が観察される。空洞の直径は2～4cmのものが多く、細いものは1.3cm、太いものは4.5cmのものがある。また、池田端2号窯では窯壁の裏側に直径3～4cmの直立した炭化材が5ヶ所確認された。これらは地山に埋め込まれた骨組み材と思われ、その間隔は狭い所で40cmである。これに対し、清水山1号の窯滓資料（第339図1・2）では骨組み材の縦の間隔は約20cm、横方向は約10cmを測り、骨組みの間隔が狭く強固な構造であったと推定される。窯体の規模と遺存状況も考慮しなければならないが、清水山1号窯は窯滓が他の窯に比べ多く出土しており（第20表）、他の窯よりも重厚につくられていた可能性が高い。なお、窯滓の総重量には焼台として用いられたものも含まれている。

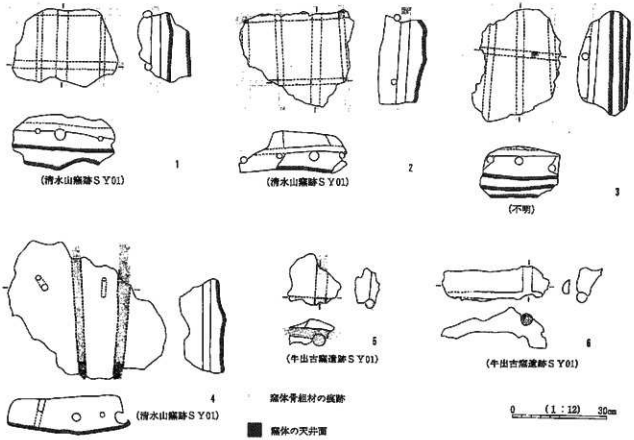
第20表　窯滓の出土量

遺跡名	遺構名	窯滓総重量(kg)	焼台数(窯壁部片がついた部材)
沢田鍋土遺跡	1号灰原	530	363
池田端窯跡	1号窯	10	1
〃	2号窯	113	0
〃	6号窯	118	5
〃	7号窯	125	0
〃	1・2号灰原	80	2
清水山窯跡	1号窯	940	34
〃	2号窯	340	18
〃	3号窯	355	3
〃	灰原	158	99
牛出古窯遺跡	1号窯	284	35
〃	1～3号灰原	188	140

5　高丘丘陵古窯址群の須恵器生産

(1)　各窯跡の器種組成

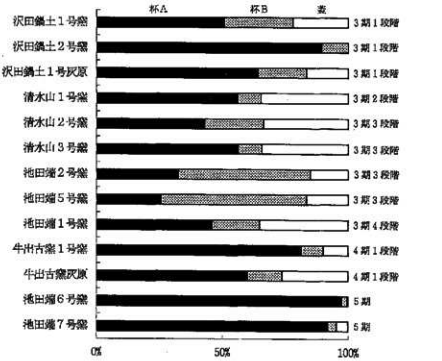
各遺構の器種組成を第21表に、杯A・杯B・杯蓋の組成率を第340図に示した。数値は遺構内から出土し



第339図　骨組材の痕跡を残す窯体

た須恵器の口縁部（杯は底部）の残存率を累積加算したものである。すなわち、器種ごとに分類した口縁部（底部）破片について、分母を32としてその残存率を測定し、分子の合計を32で割った数値である。これらの数値の小数点以下を切り上げた窯数が各遺構の最小限に見積もった個体数であり、実際に遺跡に残された個体数とは異なるものの、これらの数値は遺跡に残された各器種の構成比を示すと考えられる。しかしながら、窯跡により実際の須恵器生産数と遺跡に残された数との比率がいずれの窯跡においても一定であるとは限らず、また、同一窯内で焼かれた須恵器でも器種によって破損率が異なることは予想され、ここに示された器種構成比が各窯で生産された製品全体の器種構成比とは必ずしも一致しないことは承知しておかなければならない。同様の理由から、数量の差も生産量を反映するものとは必ずしもいえない。また、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の灰原では壺・甕の計測ができなかったので数値を示していない。

まず、清水山1号窯の器種組成が特異であることが伺われる。他の窯跡では杯A・杯B・杯蓋・壺・甕を主体としており、その他の器種は極少数、もしくは無



第340図　窯跡杯・蓋の組成率

第21表　須恵器の遺構別器種組成

遺構名	時期	杯A（底部）	杯B（底部）	杯蓋	壺	甕	高杯	盤	皿	横瓶	椀A	椀B	椀C	鉢	円面硯
池田端1号窯	3期4段階	6.88	2.81	5.28	0	0	0	0	0	+	0	0	0	0	0
池田端2号窯	3期3段階	8.00	12.97	3.72	0.16	0.91	0	0	0	+	0	0	0	0	0
池田端5号窯	3期3段階	2.13	4.78	1.38	0	+	0	0	0	0	0	0	0	0	0
池田端6号窯	5期	54.78	1.22	0.19	0.19	0.41	0	0	0	0	0	0	0	0	0
池田端7号窯	5期	6.09	0.22	0.31	+	0.06	0	0	0	0	0	0	0	0	0
池田端2号灰原	3期・5期	36.91	14.97	12.72	1.50	3.56	0	0	0.50	0	0	0	0	0	+
清水山1号窯	3期2段階	87.94	14.28	54.45	0.94	2.22	15.61	1.75	21.38	0.50	0	0	0	+	0
清水山2号窯	3期3段階	37.33	20.31	29.28	1.31	8.70	+	0.06	0	1.03	0	0.06	0	0.22	0
清水山3号窯	3期3段階	49.25	8.06	30.06	0.63	5.59	0.19	0	0	+	0	0	0	0.12	0
清水山灰原	3期	41.81	21.81	63.74	18.88	15.94	0.47	0	3.69	4.72	0	0.75	1.53	0	0.39
沢田鍋土1号窯	3期1段階	0.41	0.22	0.18	0.21	0.03	0	0	0	0	0	0	0	0	0
沢田鍋土2号窯	3期1段階	1.34	0.16	0	0	0.03	0	0	0	0	0	0	0	0	0
沢田鍋土1号灰原	3期1段階	217.34	65.53	56.56	*	*	*	0.81	0.96	*	*	0	0	0.40	0.68
牛出古窯1号窯	4期1段階	48.78	5.25	5.97	0.47	0.94	0	0	+	0	0	0	0	0	0
牛出古窯灰原	4期1段階	14.22	3.25	6.28	*	*	+	0	0	0	0	0	0	0	0
牛出古窯住居跡（SB14を除く）	4期	30.66	17.72	36.78	6.50	2.63	0.34	0	+	0	1.06	0	0	0	0

＊は存在するが計測していないもの、＋は胴部破片が確認されるもの、数値は残存率の累積加算数

いが、清水山1号窯では高杯・盤・皿などが多く認められる。また、皿に3種類の法量が認められること、口径35cm前後の大型の盤が見られることなど他の窯跡では見られない特徴である。

次に、杯と杯蓋の比率を比較すると、清水山1号・3号窯では杯蓋に比べ杯Bが極端に少ない。清水山2号窯においても杯Bが杯蓋より少ない。杯Bよりも蓋の方が極端に多い窯は他の窯跡群には見られず、この組成比は特異である。この数値が生産数を反映したものと仮定すると、杯蓋は杯Bのみとセットになるとは考え難く、杯Aとセットになる場合もあり得る。清水山1号が窯の構造と器種組成で他の窯と区別され、2号・3号窯とともに蓋が杯Bよりも多い事実は、清水山窯跡の須恵器生産が他の窯跡とは異なった需給関係の下で行われたことを示していると考えられよう。

また、池田端2号窯・5号窯では杯Bが杯Aよりも多く、かつ、杯Bの高台が断面三角形であるという他の窯跡とは異なった特徴を持っている。特に、池田端2号窯の杯Bは側面に板状工具による浅い条線がつく特徴的な器面調整である。ちなみに、三角形の高台は沢田端土1号・2号にもわずかに見られる。

時期別に器種組成を見ると、杯では新しい段階ほど杯Bが少なくなり杯Aの割合が増加し、5期の池田端6号・7号窯では杯Bが殆ど見られなくなる。また、3期の窯では少数ではあるが横瓶、円面硯が見られるものの、4期以降には見られなくなる。また、皿、高杯などは4期までは見られるものの、5期には今のところ確認されない。集落跡での器種組成の変遷は普光寺平では今のところ明確にされてはいないが、松本平の集落跡の器種組成とを見ると(小平1990)、4期・5期以降の時期にも円面硯・横瓶・皿・高杯が須恵器の器種組成の中に含まれている。資料となる窯跡数が少ないため今後の資料の蓄積が必要であるが、4期もしくは5期において器種構成に変化が見られ、高丘丘陵窯址群の生産体制に何らかの変化があったものと予想される。さらに、立ヶ花表山3号・同4号、中原窯跡などの公表された資料を見る限りにおいて、その画期は4期1段階と4期2段階の間にあると予想される。今回の調査報告では1期と2期の窯跡は無いが、これまでの報告された資料を見る限り、2期1段階と3期1段階の間にも器種組成において変化が認められ、高丘丘陵古窯址群では確認されていない2期2段階の器種組成を千曲川の対岸の善山古窯址群の器種組成で代用すると、その画期は2期1段階と2期2段階の間となる。高丘丘陵窯址群では器種組成において2つの画期があり、松本平の集落跡の器種組成の変遷と対比すると、2期における画期は集落跡とパラレルな変化であり、4期における画期は集落跡の変遷とは異なった変化である、という仮説を提示しておきたい。今後、高丘丘陵古窯址群の主な供給先と思われる普光寺平の集落跡での器種組成変化を明らかにしなければならないが、後者の画期の背景には小県郡から筑摩郡への国府の移転が関わっていたのではないかと考えている。通説では信濃の国府は9世紀後半までに筑摩郡に移転したとされるが、高丘丘陵古窯址群の器種組成における画期はさらに古く8世紀末から9世紀前半の時期にあたる。仮説の上に成り立つ推定であり、今後須恵器研究が進む中で再度検討したい。

(2)　奈良時代前半の須恵器生産について

本報告書で報告した窯跡は奈良時代前半期のものが多い。ここでは、特に特徴的な清水山1号窯と池田端2号窯を取り上げ、奈良時代前半期の須恵器及び瓦生産について考えてみたい。

清水山1号窯は窯の構造と出土遺物とが他の窯跡に比べ特異である。窯の構造については前項のとおり規模が際立って大きく、出土遺物では高杯、皿A、盤Aなど他の窯跡では殆ど見られない器種が多数出土した。また、盤A・高杯Bなどの特殊な器種は官衙・寺院などでの出土が予想されるが、管見に触れる限り清水山1号窯で焼かれたと思われるものは普光寺平では今のところ出土例を見ない。また、多量に出土した「井」のヘラ描きの中には「高井」と記されたものが2点出土していることから、清水山1号窯から出土した「井」は高井郡を示す蓋然性が高い。さらに、筆跡の分類から最低6人の工人の手によるものと推定され、「井」の書き順は様々で、誤った書き順のものも見られる。このことから、これらの記号を書い

た工人は文字を書く知識がなかったと推定される。2点の「高井」のヘラ描きも筆跡と工具が異なっておりそれぞれ別工人によるものと判断され、「たかい」とは読めるものの、字体は稚拙で、当鼓期には見られない文字であり[注1]、文字を知らない工人が「高井」の文字を真似て写したものと思われる。郡名を略して一文字で示す場合、先頭の文字を使用することが多いが、文字を知らない工人に「高」と書かせるよりも画数の少ない「井」の文字を選択したと考えると、「井」が高井郡を示すとする仮説と矛盾しない。

ヘラ描きについては、①各窯ごとに供用された記号とする窯印説、②窯の共同使用関係によって生じる工人の仕訳や識別に共するための記号とする説、③発注者の要請による記号とする説、④有蓋器種のセット関係を明らかにするなど製作技術に関連させる説、などにまとめられている(中村1977)。清水山1号窯の事例を上記の仮説と比較検討すると、沢田鍋土・茶臼峯などの窯跡で「×」・「一」などのヘラ描きは見られるものの、清水山1号窯のように多量にしかも全器種に及ぶ例はなく、また他の窯跡からも「井」印が出土することから①説は否定される。次に、同一窯内において複数の工人により、しかも一種類の記号が描かれていることから②説は否定される。さらに、有蓋器種以外のすべての器種に「井」印が認められることから④説も否定される。すなわち清水山1号窯の「井」印は、発注者の要請により高井郡を示すために記された記号であると理解できる。

以上のことから導き出される仮説は、郡名が記された須恵器は郡以上の組織すなわち国単位の組織での使用が予定されたもので、その発注者もしくは生産主体者は郡を統括するものであり、清水山1号窯は官窯的性格であったと考えられる。近接する清水山2号・3号窯も規模、主軸方向などから同じ生産主体者の窯であったと予想される。

池田端2号窯は須恵器窯の後瓦窯に転用された窯である。同窯で焼かれた須恵器から瓦を焼いた年代は8世紀の第2四半期と推定される。現在のところ信濃国分寺および国分尼寺出土の瓦の中には池田端2号窯の瓦は見られないようである[注2]。国分寺の建立年代は明らかではないが、「国分寺建立の詔」が天平13年(741年)であり、本窯跡の操業はこの国分寺建立の詔が発せられた前後の時期に当たる。ちなみに、国分寺出土の瓦や国分寺の瓦を焼いたとされる土井ノ入窯跡・国分寺瓦窯などの瓦に比べ全般的にやや小さい印象を受けるが、統計的な比較は行っていないので客観的データを示すことはできない。池田端2号窯の瓦は平瓦のみで軒瓦が出土していないため、信貴地遺跡出土の瓦との対比は難しいが、縄目のタタキ、布目の細かさ、狭端部の帯状の圧痕などの特徴から、須坂市左顕寺遺跡出土の平瓦(神津1932、興津1969、関1995)に類似する[注3]。牛出古窯遺跡、がまん淵遺跡などでも池田端2号窯の平瓦と類似したものが出土しているが、これらは竈の芯材に用いられるなど二次的な転用である。左顕寺遺跡では礎石などの建物跡は確認されていが、多量の瓦が出土したと報告されており、寺院跡である蓋然性が高い[注4]。左顕寺遺跡の瓦が池田端窯跡で焼かれたものとすると、左顕寺遺跡に8世紀前半に寺院が存在したことになる。この寺院に関する資料がないためその性格に言及するのは難しいが、文献にも見られない寺院であることから豪族の私寺である可能性が高く、その瓦を焼いた池田端2号窯は官窯ではなかったと位置付けたい。

以上のように清水山1号と池田端2号窯は若干の時期差はあるものの、この2つの窯跡の存在は近接した地区に官窯と非官窯が併存していたことを示していると理解できる。このように、地理的に区分される窯址群内に須恵器生産における二重構造の存在を仮説として提示しておきたい。しかしながら、高丘丘陵古窯跡群において官窯と非官窯を区別することが、当時の須恵器生産体制の中で妥当な区分であるか否かは明確にされていない。信貴地遺跡における須恵器生産地の究明と、各窯跡における編年研究とが現段階の須恵器研究の課題である。高丘丘陵さらには信濃の須恵器生産体制の解明にはこの基礎的な研究の蓄積が必要であり、いくらかでも今後の研究に本報告が役立つことを期待する。

(3)「佐玖郡」銘の無頸壺について

清水山窯跡1号灰原から「佐玖郡」とヘラ描きされた無頸壺が出土した（第173図107・巻頭図版）。この文字は焼成前に刻まれたもので、前述の「高井」と比べ筆順も正しく字体も達筆であり、文字を書き慣れた人によるものと思われる。これまでのところ、佐久の郡名は『三代実録』の貞観八年（886年）二月二日の条に記されたのが初見とされている。伴出する須恵器から無頸壺の年代は8世紀前半と推定され、佐久の郡名を記した文字資料としては最古のものであり、「玖」の字が用いられた例はなく、古くは「佐玖郡」と記されていたことを伺わせる。この無頸壺は希な器種で他に例を知らない。なお、清水山窯跡が所在する地域は高井郡と考えられており、佐玖郡との間には埴科郡と小県郡があり、千曲川を約80km上流に遡ったところに佐玖郡が所在する。

さて、この「佐玖郡」の郡名を記した須恵器が何故清水山窯跡に出土したかを考えなければならない。上記の「高井」の例のごとく佐玖郡からの発注により高丘丘陵で須恵器を焼いたとするには疑問が残る。すなわち、文字資料は灰原から出土したものであり、出土位置と類似する胎土のものがあることから1号窯で焼かれた可能性は高いものの、無頸壺は窯跡内から1点も出土せず、「佐玖郡」銘の須恵器が清水山窯跡で焼かれたものであるとは断定できない。さらに、佐久郡内には同時期の須恵器窯が存在すると言われており、高丘丘陵で佐玖郡と記された須恵器を焼く必然性が認められない。なお、蛍光X線分析による16の元素の定量分析を行った結果では、佐玖郡銘の須恵器は清水山窯跡の領域内に入っており、管見に触れる限りこの器種の他地域での出土例は見られず、高丘丘陵以外の地域よりもたらされた可能性を示すデータも無い。現段階ではこれ以上の資料批判はできず、今後の同器種の出土例の増加を待って検討していく必要があろう。

須恵器生産の研究は、集落跡出土の須恵器の産地同定を進めることにより、さらにその実体が明らかになると思われるが、現在のところ、窯址群単位の須恵器の識別ができる段階にはきていない。今後、各窯址群ごとの基礎データの蓄積と検討が必要であり、型式学的検討と胎土分析が産地同定の方法として欠かせないものとなろう。高丘丘陵古窯址群においても蛍光X線分析による16の元素の定量分析により、南安曇郡豊科町上ノ山窯跡と埴科郡坂城町土井ノ入窯跡との比較を行った結果、土井ノ入窯跡は高丘丘陵古窯址群の領域内に入ってしまい区別できなかったものの、豊科町上ノ山窯跡は高丘丘陵古窯址群の領域とは区別され、胎土分析による産地の識別の可能性を示唆している。この分析の詳しい報告は平成9年度刊行の『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告14－中野市その3・豊田村』に掲載する。なお、この分析にあたり豊科町教育委員会・同町東山遺跡調査会・須坂市教育委員会・上田市立信濃国分寺資料館より資料提供のご協力を頂いた。

註

1　和田　寧氏のご教示による。

2　信濃国分寺資料館学芸員倉沢正幸氏のご教示による。池田端2号窯の平瓦は狭端部に幅約9cmの帯状の圧痕が特徴的であり、他と区別される。

3　池田端2号窯、左願寺遺跡、土井ノ入窯跡、信濃国分寺瓦窯出土の瓦の蛍光X線分析による16の元素の定量分析を行った結果、池田端2号と左願寺遺跡を他の2遺跡から分離できるデータは得られず、左岸寺遺跡と池田端2号窯の瓦が、同一のものであるとは特定できなかった。なお、以下の胎土分析は例パレオ・ラボの藤根久氏に委託し、分析結果の報告は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告14－中野市その3・豊田村』（平成9年度刊行）に掲載する。

4　左願寺遺跡は扇状地上の平坦な地形に立地し、遺跡内から多量の須恵器・土師器が出土したと伝えられている。また、確認はしていないが、遺跡地に隣接した果樹園より仏像が出土したとの伝承がある。

引用・参考文献

愛知県教育委員会　1957　『愛知県猿投山西南麓古窯址群』

愛知県教育委員会　1958　『愛知県猿投山西南麓古窯址群』

愛知県教育委員会　1959　『愛知県猿投山西南麓古窯址群』

愛知県教育委員会　1961　『愛知県猿投山西南麓古窯址群』

青木和明　1987　調査のまとめ－平安時代の土器様相について－　『三輪遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第20集　長野市教育委員会

岩野見司　横原健　1965　長野県上水内郡豊野町山の神窯跡の調査　『長野県考古学会誌』第2号

上田市立信濃国分寺資料館　1986　図録『信濃出土の土器に書かれた文字』

大川清　宮下真理　1966　長野県小県郡依田の窯跡　『信濃』18－12

大川清　金井汲次　1964　長野県中野市草間窯窯遺跡　『信濃』16－11

奥津正朔　1969　「須坂市北小河原左願寺の古瓦」『高井』10

上水内郡刊行会　1976　『上水内郡誌』歴史編

各務原市教育委員会　1981『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』

各務原市教育委員会　1984　『美濃須衛古窯跡資料調査報告書』

岐阜市教育委員会　1981　『名古屋古窯跡群発掘調査報告書』

金井汲次　1969　長野県中野市草間窯窯遺跡　『日本考古学会年報』17号

金井汲次　1971　表山古窯址　『長野県考古学会誌』10

金井汲次　1973　中野市立ヶ花表山古窯址調査　『高井』24

金井汲次　1982　草間古窯址群　『長野県史』考古史料編（二）

金井正彦　1973　中野市草間茶臼峯第七号窯址調査　『高井』25

金井文司　1978　中野市安源寺・草間出土の弥生遺物について　『高井』42

金井文司　1981　「上の山第1号窯」　『立ヶ花城跡窯集発掘調査報告書』中野市教育委員会中部電力株式会社長野支店

河西清光　1966　松本市田沢中の沢古窯址の調査　『信濃』17－9

河西清光　1982　田沢・山田窯跡群　『長野県史』考古史料編（三）

北野博司　1993　横瓶あれこれ　『北陸古代研究』第3号

北野博司　1996　古代北陸の煮炊具　『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究研究会

桐原健　1988　須恵器窯跡　『長野県史』考古史料編　（四）

更埴市教育委員会　1983　「上の田遺跡」　『横沢遺跡群Ⅰ』

更埴市教育委員会　1986　『五輪堂遺跡Ⅲ』

更埴市教育委員会　1987　『馬口遺跡Ⅱ』

神津　猛　1932　「左願寺の古瓦」『信濃』Ⅰ　1－8

古代の土器研究会編　1994　『古代の土器3　畿域の土器集成』

小平和夫　1990　「第3章第5節古代の土器」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4『－松本市内その1－鎗輪線』

後藤健一　1984　『静岡県湖西市青平窯跡・新古古窯窯跡発掘調査報告書昭和58年度』湖西市教育委員会発行

後藤健一　1989　湖西古窯跡群出土の須恵器と甕『静岡県の窯窯遺跡』静岡県教育委員会

後藤健一　1990　「吉美中村遺跡」遺記

後藤健一　1992　7．参考となる古窯址『湖西一宮工業団地内遺跡発掘報告書平成3年度』湖西市文化財調査報告第29集

後藤健一　1994　窯式の終焉　『地域と考古学』向坂鋼二還暦記念論集

後藤健一　1995　Ⅱ東海東部第3章　主要窯跡と須恵器『須恵器集成図録第3巻東Ｂ本編Ⅰ』雄山閣出版

小林謙弥　1993　所謂「北信型の甕」について　『宮の上遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会

小森俊寛　1982　「概説」　『古代の土器研究1都城の土器集』古代の土器研究会

斎藤孝正　1994　『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3　施釉陶器－』　古代の土器研究会

斎藤孝正　1987　猪投窯跡成立期の様相　『名古屋大学文学部研究論集86（史学）』

斎藤孝正　1995　Ⅰ東海西部第3章窯跡と出土遺物『須恵器集成図録』第3巻東日本編1

斎藤孝正　後藤健一編　1995『須恵器集成図録』第3巻東日本編1

坂井秀弥　1988a　「律令期の須恵器系譜－越後西南部における二つの系譜をめぐって－」　『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集

坂井秀弥　1988b　越後佐渡の古代土器－8－10世紀を中心にして－「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」報告編　石川考古学研究会　北陸古代土器

坂井秀弥　1989a　越後・佐渡における古代手工業生産の展開　『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

坂井秀弥　1989b　北陸型土師器長甕の製作技法『新潟県考古学談話会会報』3　新潟県考古学談話会

坂井秀弥　1991　越後魚沼地方の群馬系須恵器　『北陸古代峠研究』創刊号

坂井秀弥　1993　長野県飯山市平安期佐渡産須恵器・越後系土師器　『北陸古代土器研究』3

坂井秀弥　1994　古代北日本の土器と生産　『北陸古代研究』4

坂井秀弥・鶴間正昭・寺日真爽　1991 佐渡の須恵器　『新潟考古』第2号

坂井秀弥・山本肇・田中靖　1992　新潟県八幡林遺跡出土土器と長岡市須恵器窯跡資料－幾考紀年名資料と北陸・東海系須恵器－『北陸古代研究』第2号

坂城町教育委員会　1993　『宮の上遺跡Ⅱ』7号住

坂詰秀一　1966　信濃における古墳跡の諸問題（1）　『立正考古』25

坂詰秀一　1963　北佐久郡八重原の製陶所跡　『信濃考古学会誌』1－1

坂詰秀一　1963　八重原第八号製陶址発掘調査報告　『信濃』1、2－5

坂詰秀一　1963　北佐久郡八重原第八号窯址の発掘遺物　『信濃』1、3－7

坂詰秀一　1963　北佐久郡の考古学的調査

佐久市教育委員会　1980　「佐久市石附遺跡発掘調査報告書」

佐久市教育委員会　1991　『石附窯跡群Ⅲ』

笹沢浩　1976　「第四様式期の生活」「第五様式期の生活」『上水内郡誌』歴史編

笹沢浩　1979　東海・中部地方・北陸の須恵器－中部高地　『世界陶磁全集』2日本古代

笹沢浩　1982　松ノ山窯跡　『長野県史』考古史料編（二）

笹沢浩　1986　凸帯文四耳壺考　『長野県考古学会誌』51

笹沢浩　1987　信濃における奈良時代を中心とした土器編年　『長野県考古学会誌』55、56号

笹沢浩　1988a　古代の土器　『長野県史』考古史料編（四）

笹沢浩　1988b　須恵器窯の分布　『長野県史』考古史料編（四）

笹沢浩　原田勝美 1974 長野県下出土の須恵器（上）、（下）　『信濃』26－9、26－11

佐藤信之　1987　北信地方の様相　『長野県考古学会誌』55、56

塩尻市教育委員会　1991　『高溝沢窯跡発掘調査報告書』

信濃史料刊行会　1956　『信濃史料』第一巻（上・下）

信濃史料刊行会　1956　『信濃考古総覧』（上・下）

下伊那歴史考古学研究所　1979　『信濃土器須窯跡』

下伊那歴史考古学研究所　1981　『信濃御殿田』

諏訪郷郷土　1969　長野県松本市岡田地区田溝池における須恵器窯跡の調査　『信濃』21－12

遠部真周　1963　朝林宮須恵器窯跡発掘略報　『伊部』1963年－12号

遠部藤麻呂　1980　信濃における窯跡出土の須恵器とその編年的目安　『朝臣制窯跡』下伊部研究所

遠部藤麻呂　1981　第3章第2節　遺物　「駒沢新町遺跡」『協谷古墳群　長礼山古墳群　駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集　長野市教育委員会長野市遺跡調査会

城ケ谷和広　1984　「7・8世紀における須恵器生産に関する一考察」『考古学雑誌』70－2

関　孝一　1996　「須坂市の左願寺遺跡について」「高井」113

高橋一敏　1990『静岡県湖西市青崎中村遺跡平成元年度』湖西市文化財調査報告書第25集

田川幸生　1976　茶臼峯遺跡　『日本考古学年報』27

冀孫一郎　1965　陶磁No236（原始・古代編）『日本の美術』12　至文堂

田辺昭三　1992　「都城の土器集成」刊行によせて　『古代の土器4都城の土器集成』　古代土器研究会編

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

田辺昭三　1971　『須恵器大成』

堤　隆　1998　十二遺跡における土器様相　『十二遺跡』御代田町教育委員会

堤　隆　1989　前田遺跡出土遺物について　『前田遺跡』

鶴間正昭　1996　小山窯（多摩ニュータウンNo.342遺跡1号窯）の成立をめぐって　『東京都埋蔵文化財センター研究論集XV』東京都埋蔵文化財センター

出越茂和　1995　Ⅲ北陸第3章窯跡と出土遺物『須恵器集成図録』第3巻東日本1

出月洋文　1994　平安時代須恵器の流通の一様相－山梨県における「凸帯付き四耳壺」を中心に－　「山梨考古学論集Ⅲ」山梨考古学協会発行

寺島俊郎　1991　栗毛板遺跡群C地区　5分析（1）古墳時代末から平安時代の遺物　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2－佐久市内そ2－』

戸倉町教育委員会　1993　『三島平遺跡Ⅱ』13号住

鳥羽英継　1996　「第二章第二節　各水田対応原出土土器」　『長野県歴代遺跡群出土木簡』　長野県埋蔵文化財センター

直井雅尚　1996　信濃における奈良平安時代の土師器甕について　「鉄と甕　そのデザイン」第4回東海考古学フォーラム

中島庄一　1994　第Ⅲ章栗林遺跡第6節5遺物『土師炭焼遺構の土器』『一長野県中野市内一栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19

中嶋豊晴　河西清光　1965　松本市田川古窯址の調査　「信濃」16－4

中村浩　1977　須恵器生産に関する一試考－和泉陶邑窯における陶工組織について－考古学雑誌63－1

中村浩　1980　『須恵器』考古学ライブラリー5　ニューサイエンス社

中村浩　1981a　須恵器生産の諸問題－地方窯跡成立に関する一試考－　『考古学雑誌』67－1

中村浩　1981b　『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房

中村浩　1985　『古代窯業史の研究』柏書房

中村浩道　1993　「平城京と須恵器」　『季刊考古学』第42号

中村浩編　1994　『須恵器集成図録』第1巻近畿編

中野市教育委員会　1967　『安源寺』

中野市教育委員会　1979　『安源寺Ⅱ』安源寺遺跡第三次発掘調査報告書

中野市史編纂室　1981　『中野市誌』歴史編上

中野市教育委員会　1981　『立ヶ花城跡等緊急発掘調査報告書』

中野市教育委員会　1994a　『清水山古窯跡発掘調査報告書』

中野市教育委員会　1994b　『がまん洞遺跡』

中野市教育委員会　1995　『長野県中野市安源寺遺跡（中野市西部デイサービスセンター建設地内）発掘調査報告書』
長野県考古学会　1967　「中野市安源寺遺跡」『海戸・安源寺』
長野県史刊行会　1982　『長野県史』　考古資料編
長野県埋蔵文化財センター　1994　『栗林遺跡　七瀬遺跡』
長野市教育委員会　長野市遺跡調査会　1978　『塩崎遺跡群』長野市の埋蔵文化財第4集
長野市教育委員会、長野市遺跡調査会　1980　『四ッ屋遺跡・御岡遺跡・塩崎遺跡』長野市の埋蔵文化財第9集
長野市教育委員会、長野市遺跡調査会　1986　『浅川扇状地遺跡群』－牟礼バイパスB・C・D地点－
長野市教育委員会　長野市遺跡調査会　1987　『殿屋敷遺跡　『塩崎遺跡群V　殿屋敷遺跡』長野市の埋蔵文化財第35集
長野市遺跡調査会　1989　『石川条理遺跡（4）』長野市の埋蔵文化財第34集
長野市教育委員会　1989　『篠ノ井遺跡群II』第35集
長野市教育委員会　1990　『屋地遺跡II』長野市の埋蔵文化財第36集
長野市教育委員会　1991a　『塩崎遺跡群（6）石川条理遺跡（5）』　長野市の埋蔵文化財第39集
長野市教育委員会　1991b　『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集
長野市教育委員会　1991c　『田中神遺跡II』長野市の埋蔵文化財第42集
長野市教育委員会　1992　『二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・滑節遺跡』　長野市の埋蔵文化財第47集
長野市教育委員会　1993a　『松原遺跡II』長野市の埋蔵文化財第51集
長野市教育委員会　1993b　『田牧居滑遺跡』長野市の埋蔵文化財第52集
長野市教育委員会　1993c　『新沢新町II』長野市の埋蔵文化財第53集
西　弘海　1978　「VB土器の時期区分と型式化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II　奈良国立文化財研究所
西　弘海　1987　『土器様式の成立とその背景』真陽社
服部哲史　1986　豊科町上ノ山・宮畑平廃跡群について　『信濃考古』97
服部哲史　1987　東国における奈良時代前半の須恵器生産とその意義　『信濃』39－7
花岡弘　西山克己　1995　信州の6世紀・7世紀の土師様相　『東国土器研究』第4号
原　明芳　1994　信濃の施釉陶器　『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3　施釉陶器－』　古代の土器研究会
広瀬和雄　1986　中世への胎動　『岩波講座日本考古学』6　変化と画期
福島邦男　1986　御牧原台地・八豆原台地に於る窯址研究の推移　『長野県考古学会誌』51
丸子町誌刊行会　1992　奈良・平安時代　『丸子町誌』歴史編上　歴史資料編
水口由紀子　1991　武蔵国における中世成立期の煮炊小考『埼玉考古学論集』創立10周年記念論文集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
牟礼村教育委員会　1992　『平出上ノ山遺跡』1号窯、2号窯　『平出遺跡群発掘調査報告書』
矢口忠良　1968　更埴市桑原地区太田原向山古窯出土の須恵器　『信濃』20－7
山田真一　1994　長野県における古窯跡研究－研究の視点とその推移－　『中部高地の考古学』IV　長野県考古学会
吉田恵二　1982　『延喜式』所載の土器陶器　『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集　平凡社
吉田恵二　1986　須恵器以降の窯業生産　『岩波講座日本の考古学』3　生産と流通
米山一敬・泰崎稔他　1978　『更級・埴科地方誌』第二巻
更埴史談　1996　第3編古代　第3章奈良・平安時代のくらし　『更埴市史』
望月史談編纂室　1994　第二編古代　第5節御牧原・八豆原の須恵器生産　『望月町誌』
渡辺博人　1988『奥信濃須恵器の須恵器生産－飛鳥・白鳳の時代を中心として－　『古代文化』40－6

遺物観察表

遺物観察表凡例

1．遺物の器種分類の基準は第9章に記述した。

2．弥生時代後期・古墳時代前期遺物観察表の色調・胎土欄の記号は以下の通りである。

色調　A：褐色～にぶい赤褐色　B：橙色～淡橙色　D：暗褐色～黒褐色　E：赤褐色

胎土　1：石英・長石など直径1mm以上の大粒の鉱物を多量に含み、鉄分が酸化した褐色の粒が見られる。

2：石英・長石など直径1mm以下の小粒の鉱物を多量に含み、鉄分が酸化した褐色粒が見られる。特に雲母が多く見られるものを②とした。

3：石英・長石などの鉱物粒の他に、鉄分が酸化した褐色の粒子が多量に含まれるもの。

4：石英・長石など直径1mm以下の小粒の鉱物を多量に含み、褐色の粒子は見られない。特に雲母が多く見られるものを④とした。

5：石英・長石など直径1mm以上の大粒の鉱物を多量に含み、褐色の粒子は見られない。

6：鉱物粒があまり含まれず、洗練された胎土。

3．弥生・平安時代の須恵器・土師器観察表では、残存率の数字は32分の1の倍数を示し、2は2/32を示す。また、焼きひずみが激しいものは、できるだけ焼きひずみを修正し本来の形状を想定し図定した。なお、杯B・蓋の器高A・Bは以下のように測定し、他の器種にいずれかの欄に器高の数値を記載した。

杯B：器高Aは高台を除いた杯部のみの数値。器高Bは高台を含めた数値。

蓋　：器高Aはつまみ部を除いた数値。器高Bはつまみ部を含めた数値。

4．整理Noは遺物に黄色で記注しており、実測図番号と一致する。

旧石器時代遺物観察表

がまん洞遺跡旧石器時代石器観察表

注記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No.
FL07 Na1		砕片	安山岩b	IV.	0.8	1.4	0.3	0.5		
GE20 Na3		剥片	安山岩	IV.クラック	-2.8	3	0.9	7.6		
GF18 Na1		剥片	安山岩	IV.クラック	1.7	2.5	0.8	2.7		
GF19 Na1		砕片	安山岩？	IV.クラック	1.7	2.3	1.4	7		
GF19 Na2				IV.クラック	2.3	1.7	0.9	3.8		
GF19 Na3		剥片	黒曜石	IV.クラック	1.7	1.6	0.3	0.6		
GF20 Na1		砕片	安山岩	IV.クラック	1	1.4	0.6	0.9		
GF20 Na2		剥片	メノウ	IV.クラック	2	1.2	0.4	0.8		
GF20 Na3		剥片	頁岩	IV.クラック	1.9	-1.6	0.6	1.1	汚れ	
GF20 Na4	第43図-6	長片	頁岩	IV.クラック	3	2.9	0.9	3.8		3214
GF20 Na5		砕片	安山岩	IV.クラック	1.5	1.2	0.5	0.8		
GF20 Na6		剥片	頁岩	IV.	1.5	2.1	0.4	1.2	節理面有り	
GG18 Na1		剥片	？	IV.クラック	1.2	1.5	0.8	1.5		
GG19 Na1		剥片(?)		IV.クラック	1.9	4.3	1.6	7.3		
GG19 Na2	第43図-3	基部加工尖頭石器	頁岩	IV.クラック	5.3	2.55	1.25	13.6		3242
GG19 Na3		剥片	頁岩	IV.クラック	1.5	1.4	0.6	1		
GG19 Na4		剥片	安山岩	IV.クラック	3	3.1	1	11.9		
GG19 Na5		剥片	メノウ	IV.クラック	0.8	1.6	0.4	0.4		
GG20 Na1		剥片	安山岩	IV.クラック	1.9	1.8	0.6	2		
GG20 Na2		剥片	？	IV.	1.1	0.9	0.2	0.2		
GG20 Na3		砕片	頁岩	IV.	1.2	0.8	0.3	0.3		
GG20 Na4		剥片	頁岩	IV.	2.4	2	0.6	1.8		
GG20 Na5		砕片	安山岩b	IV.クラック	0.4	0.7	0.2	0.1		
GH18 Na1		剥片	チャート	IV.クラック	1.5	2	0.7	1.7	自然面有り	
GH18 Na2		剥片	黒曜石	IV.クラック	4.3	1.7	1.6	9.2		
GH19 Na1		剥片	珪質頁岩	IV.クラック	1.1	1.7	0.2	0.4		
GH19 Na2		剥片	チャート	IV.クラック	1.1	0.9	0.1	0.3		
GH19 Na3		剥片	珪質頁岩	IV.クラック	1.1	1	0.2	0.2		
GI17 Na1		剥片	メノウ	IV.クラック	2.9	3	1.3	9.9	自然面有り	
GI17 Na2		剥片	メノウ	IV.クラック	1.3	2	0.3	0.5		
GI19 Na1		砕片	安山岩b	IV.クラック	0.6	0.8	0.1	0.1		
GI19 Na2		砕片	安山岩b	IV.クラック	0.6	1.4	0.2	0.3		
LE04 Na1	第46図-34	剥片	頁岩	IV.クラック	5.5	4.9	1.2	27.9	接合資料1	3208

がまん洞遺跡旧石器時代石器観察表

注記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No.
LE04 No2	第45図-26	剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	6.7	5.4	2.3	63.2	自然面有り	3231
LE04 No3	第44図-20	砕片	安山岩	Ⅲ.	3.4	5.6	1.2	20.2		3232
LE04 No3		剥片	安山岩	Ⅲ.	2.2	2	0.5	1.4		3232
LE04 No3		剥片	安山岩	Ⅲ.	1.2	3	1.1	4.5		3232
LE04 No4		剥片	安山岩b	Ⅲ.	1.3	1.7	0.4	0.7		
LE04 No5	第49図-51	剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	3.55	4.05	2.3	30.2		3233
LE04 No6		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	2.6	1.6	0.8	2.3		
LE04 No7		剥片	頁岩	Ⅲ.	-0.9	1.8	0.9	1.2	折れ	
LE04 No8		剥片	頁岩	Ⅲ.	4.8	4.4	1.3	13.8	節理面有り	
LE04 No9		剥片		Ⅲ.	0.6	0.9	0.3	0.1		
LE04 No10		砕片	頁岩	Ⅳ.クラック	1.3	1.4	0.4	0.5		
LE04 No11		剥片	安山岩b	Ⅳ.クラック	1.3	1.7	0.4	0.8		
LE05 No2		砕片	黒曜石	Ⅲ.	0.6	0.7	0.12	0.1	2個有り	
LE05 No2		砕片	黒曜石	Ⅲ.	0.8	0.8	0.12	0.1		
LE05 No3		剥片	黒曜石	Ⅳ.	1.1	1.6	0.3	0.6		
LE05 No1		砕片	頁岩	Ⅳ.	0.7	0.9	0.4	0.2		
LF03 No1		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.9	1.5	0.7	1.4		
LF03 No2	第44図-21	剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	4.15	6.8	1.5	40		3234
LF03 No3		剥片	安山岩c	Ⅳ.クラック	3.5	2.4	1	9.9	礫片？	
LF03 No4		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	2.7	2.8	0.7	3.7		
LF03 No5		剥片	？	Ⅳ.クラック	1.55	2.7	0.42	2.1		
LF03 No6		砕片	黒曜石	Ⅳ.	0.7	0.9	0.2	0.1		
LF03 No7		砕片	頁岩	Ⅳ.	1.1	0.7	0.2	0.2		
LF03 No8		剥片	頁岩	Ⅳ.	1.8	1.8	0.5	1.5		
LF03 No9		剥片？	安山岩c	Ⅳ.クラック	1	1.2	0.26	0.3	礫片か？	
LF03 No10	第47図-42	剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	4.3	2.8	1.2	8.1	接合資料3	3212
LF03 No11		砕片	頁岩	Ⅳ.クラック	1.3	1.2	0.3	0.4		
LF03 No12		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	2.2	1.3	0.7	1.6		
LF03 No13		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	2.5	2	1.1	3.3		
LF04 No1	第45図-28	剥片	安山岩	Ⅳ.	6	3.8	2.1	29.2		3235
LF04 No1	第43図-11	剥片	頁岩	Ⅳ.	4.4	3.3	0.95	11.1		3217
LF04 No2	第48図-50	石核	頁岩	Ⅳ.	6.5	7.9	3.2	139.5		3202
LF04 No3		砕片	安山岩	Ⅳ.	1.6	1.9	0.3	0.9		
LF04 No4		剥片	頁岩	Ⅳ.	2.3	3.4	0.5	1.9		
LF04 No4		剥片	頁岩	Ⅳ.	-3.5	-2.7	1.5	11.6	節理面有り　折れ	
LF04 No5	第46図-38	剥片	頁岩	Ⅳ.	5.7	2.9	3.3	43.2	接合資料2	3210
LF04 No6	第48図-49	剥片	頁岩	Ⅳ.	6	5.3	2	65.2		3204
LF04 No7		剥片	頁岩	Ⅳ.	-1.6	2.7	0.7	3.2	折れ	
LF04 No10		剥片	頁岩	Ⅳ.	-1.8	5	1.6	9.2	折れ	
LF04 No11	第43図-2	基部加工尖頭器	頁岩	Ⅳ.クラック	5.7	4.8	1.4	23.4	節理面有り	3216
LF04 No12		砕片	頁岩	Ⅳ.	1.9	0.9	0.3	0.5	2個有り	
LF04 No12	第48図-47	石核	頁岩	Ⅳ.	4	5.5	2.25	42.5		3215
LF04 No13		砕片	安山岩b	Ⅳ.クラック	1.1	0.8	0.3	0.3		
LF04 No14	第45図-27	剥片	安山岩	Ⅳ.	5.9	5.5	2.5	51.5	自然面有り	3236
LF04 No14		剥片	頁岩	Ⅳ.	2.2	3.1	1.2	3.4	風化の度合いから旧石器でない	
LF04 No15		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	0.7	0.9	0.1	0.1		
LF04 No16		剥片	安山岩	Ⅲ.	2	2.8	0.8	3.8		
LF04 No17		剥片	頁岩	Ⅳ.	3.9	2	0.9	4.2		
LF04 No18	第44図-19	剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	6.2	4.75	2.1	50.3		3209
LF04 No19		剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	3.4	4.3	0.9	10.8	自然面有り	
LF04 No20	第45図-25	剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	6	5	2.5	65.6		3237
LF04 No21		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	1.5	1.8	0.3	0.8		
LF04 No22		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	0.9	0.8	0.4	0.2		
LF04 No23		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	2.4	2.4	0.6	2.7		
LF04 No24		砕片	頁岩	Ⅳ.クラック	1.7	0.6	0.4	0.4		
LF04 No25	第46図-37	石核	頁岩	Ⅳ.クラック	5.5	4.5	2.5	55	接合資料2	3210
LF04 No26		砕片	安山岩b	Ⅲ.	1	1.4	0.3	0.4		
LF05 No1	第44図-14	剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	4.1	4	1.5	18.1	自然面有り	3248
LF05 No2		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	3.5	2	1.3	5.4		

がまん洞遺跡旧石器時代石器観察表

注記番号	図版番号	器種名	石 材	層 位	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量g	備 考	整理No.
LF05 No3	第44図-22	剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	4.9	7.2	1.9	66.4	自然面が打面	3238
LF05 No4		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	2.5	3	0.6	2.7		
LF05 No5	第45図-30	剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	3.8	3	1.3	10.6	LG-5 No3と接合 自然面有り 欠損	3247
LF05 No6	第43図-13	剥片	頁岩	Ⅳ.	-2.4	4.5	0.8	7.1	折れ	3219
LF05 No7	第49図-53	石核	頁岩	Ⅳ.クラック	3.4	4.1	2.4	24.9		3218
LF05 No8		剥片	黒曜石	Ⅲ.	1.2	1.1	0.25	0.2		
LF05 No9		剥片	黒曜石							
LF05 No11		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	-2.2	-4.2	0.5	5.3	折れ	
LF06 No1		剥片？	黒曜石	Ⅳ.	1.3	0.9	0.3	0.6		
LF06 No2		剥片	黒曜石	Ⅳ.	1.1	1.7	0.3	0.6		
LF05 No3		剥片	安山岩b	Ⅳ.	2.1	1.8	0.6	2.4		
LF05 No4		砕片	安山岩	Ⅳ.	1.4	2	0.7	1.7		
LF05 No5	第48図-48	石核	頁岩	Ⅳ.クラック	4.5	6.1	4.7	127.3		3201
LG01 No1		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.7	1.2	0.4	0.8	自然面有り	
LG02 No2		砕片	安山岩b	Ⅳ.クラック	1.2	1.5	0.2	0.4		
LG02 No3		砕片	メノウ	Ⅳ.クラック	1.3	0.9	0.3	0.5		
LG02 No4		剥片	安山岩b	Ⅳ.クラック	1.6	1.8	0.3	0.7		
LG02 No5		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.4	0.7	0.4	0.3		
LG03 No1		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.7	1.6	0.6	1.4		
LG03 No2	第45図-29	剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	3.7	4.6	0.8	12.2		3244
LG03 No3		剥片	頁岩	Ⅳ.	2	2.2	0.8	2.5		
LG03 No4		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	0.9	1.1	0.3	0.4		
LG03 No5		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.6	1.7	0.8	1.7		
LG03 No6		砕片	流紋岩？	Ⅳ.クラック	1.9	2.3	0.7	3		
LG03 No7	第43図-10	砕片	頁岩	Ⅳ.クラック	2.2	2.6	1.1	9		3220
LG03 No8		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.4	1.4	0.4	0.7		
LG03 No9		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	1.6	1.9	0.8	1.8		
LG03 No11		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	0.7	1.1	0.2	0.2		
LG03 No12		剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	3.6	2.1	1.4	8.2	自然面有り	
LG03 No13		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.3	1	0.3	0.4		
LG03 No14		砕片	頁岩	Ⅳ.	0.6	1	0.3	0.2		
LG03 No15		砕片	頁岩	Ⅳ.クラック	1.5	0.7	0.4	0.4		
LG03 No16	第43図-7	剥片	頁岩	Ⅳ.	3.3	2.7	1	6.7		3221
LG03 No17		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.4	1.3	0.5	0.4		
LG03 No18		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.5	1.7	0.8	1.6		
LG03 No19		砕片	安山岩	Ⅳ.	1	1.9	0.7	1.2		
LG03 No20	第44図-23	剥片	安山岩	Ⅳ.	3.9	5.25	1.25	22.6	自然面打面	3239
LG03 No21		剥片	黒曜石	Ⅳ.	1.2	1.2	0.6	0.4		
LG04一括	第48図-46	石核	頁岩	Ⅲ.	3.6	6.8	3.5	95.8	自然面有り	3203
LG04一括	第45図-24	剥片	安山岩	Ⅲ.	-3.5	4.8	1.4	19.9	折れ	3241
LG04一括		剥片	頁岩	Ⅲ.	2.3	3.1	1.2	3.4		
LG04一括	第47図-44	剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	5.2	6.2	2.1	39.9	接合資料4	3205
LG04 No1	第44図-18	スクレイパー	頁岩	Ⅳ.	4.5	6.7	2.45	46	自然面有り	3222
LG04 No2		剥片	頁岩	Ⅳ.	-3.2	-1.5	1.4	3.8	折れ	
LG04 No3		剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.5	2	0.6	1.7		
LG04 No4		砕片	頁岩	Ⅳ.クラック	1	1.7	0.3	0.5		
LG04 No5		剥片	珪質頁岩	Ⅳ.	0.8	1.2	0.4	0.3		
LG04 No6		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.3	1.8	0.4	1		
LG04 No7		剥片	頁岩	Ⅳ.	1.7	2.1	0.8	2		
LG04 No8		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.9	1.3	0.9	2.3		
LG04 No9		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.1	1.3	1.5	0.7		
LG04 No10		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	-1.3	1.7	0.4	1.1	折れ	
LG04 No12		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.1	1.7	0.6	1		
LG04 No14		剥片	頁岩b	Ⅳ.クラック	0.7	1.1	0.3	0.3		
LG04 No15		剥片	頁岩b	Ⅳ.クラック	4.7	3.5	1.3	19.8		
LG04 No16	第44図-17	剥片	頁岩	Ⅳ.クラック	2.8	4.7	1.1	10.1		3223
LG04 No17		剥片	頁岩	Ⅳ.	2.3	2.3	0.8	2.5		
LG04 No18		剥片	頁岩	Ⅳ.	2	2.8	0.4	1.8		
LG04 No19	第45図-32	剥片	チャート	Ⅳ.	2	1.3	0.6	1.8		3246

がまん洞遺跡旧石器時代石器観察表

注記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No.
LG04 No20		剥片	頁岩	IV.	1.4	2.1	0.5	1		
LG04 No21		剥片	メノウ	IV.	2.2	1.1	0.4	0.9	自然面有り	
LG04 No21		剥片	安山岩	IV.	2.1	3.4	1.2	6		
LG04 No22		剥片	頁岩	IV.	3.4	-3.4	0.6	4.7	折れ	
LG04 No23		剥片	頁岩	IV.クラック	1.8	3.9	0.5	3		
LG04 No24		剥片	安山岩	IV.	2.5	1.5	0.6	2.4		
LG04 No25		剥片	頁岩	IV.	-2.2	-1.7	0.7	2.5	折れ	
LG04 No26		砕片	安山岩	IV.クラック	1.6	1.2	0.5	0.9		
LG04 No27		砕片	安山岩	IV.	3.5	3	1	12.7		
LG04 No28	第43図-8	砕片	頁岩	IV.クラック	3.5	3.65	1.2	12.1		3224
LG04 No29	第49図-54	石核	安山岩	IV.クラック	4.65	6.35	3.2	80.5	自然面有り	3240
LG04 No30		剥片	頁岩	IV.	1.8	2	0.6	1.6		
LG04 No31		砕片	安山岩	IV.クラック	1.1	1.7	0.4	0.8		
LG04 No32		砕片	頁岩	IV.	1.2	1.7	0.4	0.8		
LG04 No33	第47図-41	剥片	頁岩	IV.	6.6	2.9	1.1	14.9	接合資料3　自然面有り	3212
LG04 No34	第49図-52	石核	安山岩	IV.	6.2	5.55	6	220	自然面有り	3207
LG04 No35		剥片	頁岩	IV.	2	3.2	1	4.2		
LG04 No36		砕片	安山岩	IV.クラック	1.4	0.6	0.4	0.4		
LG04 No37		砕片	頁岩	IV.クラック	0.9	1.8	0.3	0.5		
LG04 No38	第44図-15	剥片	頁岩	IV.	5.1	4.75	1.4	14.3		3226
LG04 No39		剥片	安山岩	IV.	3.7	2.7	1.1	9.6	自然面有り	
LG04 No40	第43図-9	剥片	頁岩	IV.	4.2	4.2	1.2	14.8		3225
LG04 No41	第44図-16	剥片	頁岩	IV.	5	7.25	2.5	54.9		3206
LG04 No42		砕片	安山岩	IV.	1	1.2	0.5	0.6		
LG04 No43		砕片	安山岩	IV.クラック	1	1.1	0.4	0.4		
LG04 No44		剥片	頁岩	IV.クラック	2.8	2.2	0.8	2.8		
LG04 No45		剥片	チャート	IV.クラック	0.9	1.6	0.6	0.7		
LG04 No46		剥片	安山岩	IV.	3	3.5	1.4	10.3	自然面有り	
LG04 No47	第45図-31	剥片	安山岩	IV.	3.9	3.4	0.9	11.6		3245
LG04 No48		剥片	安山岩	IV.	1.6	2	0.7	1.7		
LG04 No50		砕片	安山岩	IV.クラック	1.3	0.9	0.5	0.6		
LG05 No1		砕片	頁岩	IV.	1.4	0.9	0.5	0.4		
LG05 No1		剥片	頁岩	IV.	0.6	1	0.3	0.2		
LG05 No3		砕片	安山岩	IV.	-1.1	1.3	0.7	0.7	折れ	
LG05 No3		剥片	安山岩	IV.	1.5	2.4	0.8	2.3		
LG05 No4		砕片	安山岩	IV.	1.3	2	0.7	1.6		
LG05 No5		砕片	安山岩	IV.	1.6	1.8	0.5	1.6		
LG05 No6		剥片	安山岩	IV.	1.9	2	0.7	2.4		
LG05 No6		剥片	安山岩	IV.	1.9	2.7	0.8	3.6		
LG05 No7		剥片	チャート	IV.クラック	2	1.9	0.6	1.9	自然面有り	
LG05 No8		砕片	安山岩	IV.	-1.3	-1.6	0.5	1	折れ	
LG05 No9	第43図-1	へら形石器	?	IV.	8.3	4.2	1.6	47.1		3227
LG05 No10		砕片	黒曜石	IV.クラック	0.9	0.6	0.1	0.1		
LG05 No11		砕片	安山岩	IV.クラック	0.9	1.1	0.3	0.3		
LG05 No12		石核	安山岩	IV.	3.8	3.5	2.2	24.6		3243
LG05 No13		剥片	安山岩	IV.クラック					LG05 No6と接合　自然面有り　欠損	3247
LG05 No14		砕片	頁岩	IV.	1	1.4	0.3	0.4		
LG05 No15		砕片	安山岩	IV.	0.9	0.9	0.3	0.3		
LG05 No16		剥片	頁岩	IV.クラック	1.6	1.5	0.3	0.7		
LG05 No17		剥片	頁岩	IV.クラック	-1.2	-1.9	0.5	0.9	折れ	
LG05 No18		砕片	安山岩	IV.	1	1.5	0.4	0.4		
LG05 No19		砕片	安山岩	IV.クラック	1.1	1.1	0.5	0.4		
LG05 No20		砕片	安山岩	IV.	2	2.2	0.6	1.8		
LG05 No21		砕片	頁岩	IV.	0.9	1.6	0.3	0.3		
LG05 No22	第43図-4	剥片	頁岩	IV.	6.1	5.8	1.9	34.3		3228
LG05 No23		砕片	安山岩	IV.クラック	1.7	1.4	0.3	0.9		
LG05 No24		砕片	安山岩	IV.	1.1	1.1	0.4	0.5		
LG05 No1		砕片	安山岩	IV.クラック	1.7	1.1	0.7	1.3		
LG05 No1		剥片	黒曜石	IV.クラック	1	1.6	0.4	0.6		

がまん湯遺跡旧石器時代石器観察表

注記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No
LG05 No2		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.1	0.6	0.2	0.1		
LG06 No3		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1.3	0.8	0.2	0.2		
LG06 No4		砕片	安山岩b	Ⅳ.クラック	0.9	2.2	0.2	0.4		
LG06 No5		砕片	安山岩b	Ⅳ.クラック	1	1.6	0.2	0.4		
LG06 No5		剥片	安山岩b		5.6	5	1	26.7		
LG07 No1		砕片	黒曜石	Ⅳ.	0.6	0.5	0.1	0.1		
LG07 No3		砕片	安山岩b	Ⅳ.	0.6	1.1	0.1	0.1		
LH02 No1		剥片	黒曜石	Ⅳ.クラック	0.9	1.5	0.6	0.7		
LH02 No2		砕片	安山岩	Ⅳ.クラック	1.2	2	0.9	2.4		
LH02 No3		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	1	0.6	0.1	0.1		
LH03 No1		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	0.8	1.2	0.3	0.3		
LH03 No2		砕片	安山岩b	Ⅳ.クラック	1	1.3	0.3	0.4		
LH03 No3		砕片	黒曜石	Ⅳ.クラック	0.8	1.1	0.2	0.1		
LH03 No4		砕片	黒曜石	Ⅳ.	1.1	0.8	0.2	0.2		
LH03 No5		剥片	安山岩	Ⅳ.クラック	2.6	3.8	1.8	13.9		
LH04 No1	第47図-45	剥片	頁岩	Ⅳ.	4.4	3.8	1.3	23	接合資料4	3205
LH04 No2		砕片	安山岩		-0.8	-1.4	0.4	0.3	折れ	
LH04 No3		剥片	メノウ		1.1	1.3	0.3	0.4		
LH05 No1	第43図-5	剥片	頁岩	Ⅳ.	-4.6	2.8	1.05	10.3	欠損（ガジリ）	3229
LH05 No1		剥片	頁岩	Ⅳ.	1.7	1.3	0.2	0.5		
ブロック 1		剥片	頁岩	Ⅳ.	6.1	3.3	1.2	17.2		
SA01 No4	第50図-53	尖頭加工剥離剥片石器	安山岩	覆土	2.8	3.8	0.9	9.3		3254
SB04 No1		剥片	安山岩	覆土	2.2	2.7	1.3	7.6		
SB04 No12		剥片	安山岩	覆土	3.5	2.6	0.9	6.7		
SD01 No4	第50図-65	斜軸尖頭器	頁岩	覆三	4.7	6.1	1.3	32.3		3256
SD01 No74		剥片	頁岩	覆土	6.1	2.7	1.7	20.4		
SD01 No77	第50図-58	一側縁加工石器	頁岩	覆土	8.8	4.3	2.0	55.3		3037
SD01 No81	第50図-59	尖頭器状石器	安山岩	覆土	8.2	4.2	2.6	75.4		3166
SD01 No103	第50図-60	掌刃石器	頁岩	覆土	4.2	5.5	1.8	35.5		3251
SD01 No172		剥片	頁岩	覆土	2.9	6	0.9	12.7		
SD01 No177		剥石核？	黒曜石	覆土	2.5	2.2	1.6	8.4		3098
SK01 No4	第50図-68	剥片	頁岩	覆土	2.4	6.2	1	12.2		3213
SK01 No4		剥片	頁岩	覆土	3	4.1	1	10.1		
SK01 No4		剥片	頁岩	覆土	2.6	2.7	0.6	3.8		
SK03 No4		剥片	頁岩	覆土	4.1	7.3	3.6	54.2		3211
SQ01	第50図-66	剥片	頁岩	覆土	4.2	5.7	1.8	34.5		3257
SQ01		剥片	安山岩	覆土	4.5	2.6	12.4	12.4		
SQ01		剥片	黒曜石	覆土	3.7	1.5	1.3	5.1		3249
SQ01 No25		剥片	頁岩	覆土	4.4	6.3	1.1	28.9		
SQ01 No36		剥片	安山岩	覆土	5.5	3.6	1.7	21.1		
SQ01 No40	第50図-63	基部加工剥片	頁岩	覆土	3.5	3.5	1.1	10.2		3253
SQ01 No40		剥片	黒曜石	覆土	5.4	1.3	0.8	3.4		3250
SQ01 No58		剥片	頁岩	覆土	5.1	4	1.3	24.2		
SQ01 No83	第50図-67	剥片	頁岩	覆土	4.3	5.6	1.5	31.1		3258
SQ01 No84		剥片	安山岩	覆土	3.7	9	0.9	7.4		
SQ01 No85	第50図-61	斜軸尖頭器	頁岩	覆土	4.6	5.6	1	24.1		3252
SQ01 No107		剥片	頁岩	覆土	4.7	2	0.7	6.4		
SX01 No13		剥片	頁岩	覆土	3.3	6.8	2.1	54.2		
SX01 No5		剥片	安山岩	覆土	4	2.9	1	11.5		
SX01 No6		剥片	安山岩	覆土	4	5	0.9	14.9		
SX01 No9	第47図-40	剥片	頁岩	覆土	[illegible]	3.1	1.3	14.4	接合資料3　調査時の折れ	3212
検出面No5		剥片	安山岩	覆土	2.5	4.2	0.8	8.4		
検出面No18	第50図-64	斜軸尖頭器	頁岩		4.9	3.9	1.1	16.1		3255
検出面No29		剥片	頁岩		5	4.9	2.7	64.7		
検出面No32	第43図-12	剥片	頁岩		4	3.4	1.5	17.2		3230

沢田鍋土遺跡旧石器時代観察表

注記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No.
L-3 No.11	第81図-1	細石刃	黒曜石	V層	2.75	1	0.3	0.5		3416
L-2 No.2	第81図-2	細石刃	黒曜石	V層	3	0.7	0.5	0.5		3402
L-3 No.24	第81図-3	細石刃	黒曜石	V層	2.5	0.7	0.3	0.3	自然面有り	3429
L-3 No.1	第81図-4	細石刃	珪質頁岩	V層	1.85	0.9	0.25	0.3		3406
L-2 No.5	第81図-5	細石刃	黒曜石	V層		0.6	0.25		欠損	3405
L-8 No.3	第81図-6	細石刃	黒曜石	V層	1.95	0.75	0.3	0.3	自然面有り	3446
L-3 No.28	第81図-7	細石刃	黒曜石	V層	1.85	0.7	0.35	0.4	ガジリ有り	3433
L-3 No.30	第81図-8	細石刃	黒曜石	V層	2.1	1.05	0.3	0.6	自然面有り　使用痕	3435
L-8 No.1	第81図-9	細石刃	黒曜石	V層	1.4	0.7	0.2	0.1	欠損　被熱？	3444
L-2 No.4	第81図-10	細石刃	黒曜石	V層	1.6	0.6	0.2	0.2		3404
L-3 No.36	第81図-11	二次加工剥片	チャート	不明	2.4	1.45	0.7	2.4	出土地点不明	3441
L-3 No.35	第81図-12	スクレイパー		V層	4.8	4.25	2.4	27.8	自然面有り　L-3 No.38と接合　No.404	3440
L-3 No.19	第81図-13	スクレイパー	頁岩	V層	8.1	5.5	2.3	98.3	自然面有り　L-3 No.35と接合	3424
L-9 No.19	第81図-14	スクレイパー接合例	頁岩	V層						3424
L-3 No.15	第82図-15	スクレイパー	頁岩	V層	7.7	5.5	1.85	74.2	自然面有り	3420
L-3 No.32	第82図-16	スクレイパー	珪質頁岩？	V層	10.3	2.8	1.7	23.2		3437
L-3 No.4	第82図-17	スクレイパー	頁岩	V層	7.7	4.6	1.65	50.8		3409
S D05	第82図-18	スクレイパー	珪質頁岩	攪乱土	7.55	2.6	1.3	26.7	調査区壁セクション	3453
S D05 溝	第82図-19	スクレイパー		溝覆土	8.7	6.25	2.5	161.3	自然面有り	3452
表採	第83図-20	スクレイパー		表土	11.5	4.45	2.25	96.2	自然面有り　ブロック1付近表採	3455
S D05	第83図-21	スクレイパー	頁岩	溝覆土	11.9	4.7	1.9	73.7		3454
L-8 No.3	第83図-22	剥片	頁岩	V層	2.9	3.7	1.95	10.9		3447
L-3 No.20	第83図-23	剥片	頁岩	V層	2.85	4.5	1.8	19.5	自然面有り	3425
L-8 No.3	第83図-24	剥片	頁岩	V層	2.6	2.9	1.2	5.8	自然面有り	3447
L-3 No.8	第83図-25	剥片	頁岩	V層	4.3	1.7	1.15	6.6	自然面有り	3413
L-3 No.16	第83図-26	剥片	珪質頁岩	V層	5.5	1.4	0.75	3.3		3421
L-8 No.5	第83図-27	剥片	頁岩？	V層	3.15	1.5	0.9	3.2		3449
L-3 No.29	第83図-28	剥片	安山岩	V層	1.55	2.4	0.5	1.4		3434
L-8 No.4	第83図-29	剥片	安山岩	V層	1.95	2.8	0.6	2.2		3448
L-3 No.6	第84図-30	剥片	黒曜石	V層	2.65	3.4	1	5.4	ガジリ有り　自然面を打面にする	3411
L-3 No.3	第84図-31	剥片	黒曜石	V層	3.55	2.4	0.9	4.3		3408
L-2 No.1	第84図-32	剥片	黒曜石	V層	2.8	1.8	0.8	1.3		3401
L-3 No.10	第84図-33	剥片	黒曜石	V層	2.15	1.6	0.5	1		3415
L-3 No.12	第84図-34	板片	黒曜石	V層	3.1	2.6	0.7	3.6		3417
L-3 No.5	第84図-35	板片	黒曜石	V層	2.9	1.7	0.7	1.7		3410
L-8 No.7	第84図-36	剥片	珪質頁岩	V層	3	1.9	0.9	1.7		3451
L-3 No.9	第84図-37	板片	黒曜石	V層	2.4	1.1	1.1	5.2		3414
L-3 No.2	第84図-38	剥片	黒曜石	V層	3	2.5	0.7	1.7		3407
L-3 No.25	第84図-39	剥片	黒曜石	V層	1.5	1.8	0.35	0.5	欠損	3430
L-3 No.23	第84図-40	剥片	黒曜石	V層	1.5	1.3	0.55	0.6		3428
L-2 No.3	41	剥片	黒曜石	V層	1.25	1.5	0.3	0.4		3403
L-3 No.7	42	剥片	頁岩	V層	2.8	2.1	0.35	1.1	自然面有り	3412
L-3 No.13	43	細石刃？	黒曜石	V層	—	0.8	0.2		欠損	
L-3 No.14	44	剥片	頁岩	V層	2.1	1.65	0.7	1.6		3419
L-3 No.16	45	剥片	珪質頁岩	V層	2.3	1.9	0.55	2		3421
L-3 No.17	46	剥片	黒曜石	V層	1.9	1.7	0.5	1.3	欠損　被熱？	
L-3 No.18	47	砕片	珪質頁岩？	V層	0.5	0.9	0.15	0.1		
L-3 No.21	48	砕片		V層	1.1	1.3	0.5	0.6		
L-3 No.22	49	細石刃？	黒曜石	V層	1	0.4	0.1	0.1	欠損	
L-3 No.26	50	剥片	珪質頁岩	V層	1.3	0.4	0.2	0.1		
L-3 No.27	51	砕片	黒曜石	V層	1.4	0.9	0.2	0.2		3432
L-3 No.33	52	砕片	安山岩	V層	0.8	1.7	0.3	0.3		
L-3 No.33	53	砕片	安山岩	V層	0.9	1.3	0.2	0.2		
L-3 No.34	54	板片		V層	1.8	3.1	0.6	2.3	自然面有り	
L-8 No.2	55	板片	安山岩	V層	1.3	2.2	0.3	0.7		
L-8 No.6	56	剥片	安山岩	V層	2	3.3	0.7	6		

牛出古窯遺跡旧石器時代石器観察表

ブロック名	注記番号	図版番号	器種名	石材	層	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No.
ブロック1	SQ05 №1	第244図-1	剥離石斧未製品	蛇紋岩	IV層	10.9	6.05	3.2	250.5		3041
ブロック1	SQ05 №2		剥片	黒曜石	IV層	1.6	2.6	1.4	4.6		
ブロック1	SQ05 №3	第245図-5	剥片	黒曜石	IV層	3.8	3.5	1.8	19.4	自然面打面	3037
ブロック1	SQ05 №4		剥片	蛇紋岩	IV層	5.2	2.7	0.9	11.5		
ブロック1	SQ05 №5		礫	花崗岩	IV層	3.6	3.1	1.4	18.4	SQ05№12 と接合	
ブロック1	SQ05 №6		礫		IV層	18.8	11.1	9.2	2500		
ブロック1	SQ05 №7	第245図-6	剥片	安山岩	IV層	3.3	4	1	12.5		3039
ブロック1	SQ05 №8	第244図-2	石核	砂岩	IV層	6.95	7.2	3.2	148.1		3035
ブロック1	SQ05 №9		原石？	チャート	IV層	3.5	4.8	3	65.8		
ブロック1	SQ05 №11		剥片	流紋岩	IV層	3.1	2.1	0.9	2.5		
ブロック1	SQ05 №12		礫	花崗岩	IV層	12	7.5	4.5	438.5	SQ05№5と接合	
ブロック1	SQ05 №12		剥片	流紋岩	IV層	1	1.1	0.4	0.4		
ブロック1	SQ05 №13-14	第244図-3	石核	流紋岩	IV層	5.4	4.8	2.5	50	№13.14.2個接合	3034
ブロック1	SQ05 №16		剥片	流紋岩	IV層	1.3	1.2	0.4	0.7		
ブロック1	SQ05 №17		礫	花崗岩	IV層	5.2	6.1	1.6	50.7		
ブロック1	SQ05 №18	第245図-8	剥片	安山岩	IV層	1.75	3.5	0.6	3	自然面有り	3040
ブロック1	SQ05 №19		礫		IV層	19.4	11.7	10.3	2400		
ブロック1	SQ05 №20	第245図-4	石核	めのう	IV層	3.7	4.7	4.2	73		3036
ブロック1	SQ05 №21	第245図-7	二次加工剥片	黒曜石	IV層	2.1	3.05	0.8	3.5		3038
ブロック1	SQ05 №22		剥片	チャート	IV層	1.9	1	0.6	1.4	自然面有り	
ブロック1	SQ05 №24		石核	チャート	IV層	3.6	2.8	2.2	23.4	機核	
ブロック1	SQ05 №25		剥片？	チャート	IV層	3.7	2.4	1.7	15.4	自然面有り	
ブロック1	SQ05 №24		礫		IV層	18.2	9.3	5.3	830		
ブロック2	SQ06 №3		剥片	頁岩	I層	4.5	3.1	1.3	12	自然面有り	
ブロック2	SQ06 №4		剥片	安山岩	IV層	3.9	2.9	1.3	9.8		
ブロック2	SQ06 №5		石核	チャート	IV層	5.5	4.9	3	89.9	自然面有り　接合資料1.	
ブロック2	SQ06 №6		剥片	チャート	IV層	3.9	5.1	2.6	41.1	自然面有り　接合資料1.	
ブロック2	SQ06 №7		剥片	珪質頁岩	IV層	2.1	2	0.6	3		
ブロック2	SQ06 №8		剥片	珪質頁岩	IV層	2.1	2.4	0.6	2.2		
ブロック2	SQ06 №9		剥片	チャート	IV層	1	0.5	0.3	0.1		
ブロック2	SQ06 №10		剥片	チャート	IV層	1.9	1.2	0.4	0.7		
ブロック2	SQ06 №11		剥片	チャート	IV層	2.8	1.9	1.8	9.8		
ブロック2	SQ06 №12		剥片	チャート	IV層	0.6	0.9	0.3	0.1		
ブロック2	SQ06 №13		剥片	チャート	IV層	2.5	3.8	1.4	7.6	自然面有り　接合資料1.	
ブロック2	SQ06 №14		剥片	チャート	IV層	1.9	2	0.4	1.6		
ブロック2	SQ06 №15		剥片	チャート	IV層	1.8	2.1	0.5	1.8		
ブロック2	SQ06 №16		剥片	チャート	IV層	2.7	2.3	1	2.3		
ブロック2	SQ06 №17		剥片	珪質頁岩	IV層	2.1	2.6	0.5	2.7	自然面有り	
ブロック2	SQ06 №28		剥片	チャート	IV層	2.7	2.4	1	4.4		
ブロック3	SQ07 №82		礫		IV層	8.3	5.8	4.2	210		
ブロック3	SQ07 №83		礫	安山岩	IV層	8.8	5.7	4.7	310		
ブロック3	SQ07 №84	第247図-28	石核	流紋岩	IV層	5.05	8.2	4.5	122.2		3033
ブロック3	SQ07 №85		剥片	流紋岩	IV層	2.6	1.9	1	3.9		
ブロック3	SQ07 №86	第247図-27	彩片	蛇紋岩	IV層	2.7	5.2	1.5	11.8		3043
ブロック3	SQ07 №93		礫	花崗岩	IV層	8.8	5.3	4.8	290		
ブロック4	SQ07 №23		剥片	黒曜石	IV層	1.2	2.3	0.8	1.1	ガジリ痕	
ブロック4	SQ07 №24		砕片	蛇紋岩	IV層	1.6	1	0.1	0.3		
ブロック4	SQ07 №24		砕片	蛇紋岩	IV層	0.6	1.2	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 №25	第246図-15	石核	黒曜石	IV層	2.3	2.5	1	3.9	自然面有り	3045
ブロック4	SQ07 №26		砕片	黒曜石	IV層	0.8	1.1	0.3	0.2		
ブロック4	SQ07 №27	第247図-23	剥片	黒曜石	IV層	3.85	3.2	0.5	5.3		3056
ブロック4	SQ07 №28		剥片	黒曜石	IV層	2.2	2.2	1.3	5.1	折れ、自然面有り	
ブロック4	SQ07 №28		剥片	蛇紋岩	IV層	2.1	0.9	0.3	0.6	磨製斧有り、磨製石斧の欠損破片	
ブロック4	SQ07 №29	第246図-21	石核	黒曜石	IV層	1.9	3.3	1.1	5		3049
ブロック4	SQ07 №30	第246図-2	スクレイパー	黒曜石	IV層	3.2	3.3	1.4	9.6	自然面が打面	3048
ブロック4	SQ07 №30		砕片	黒曜石	IV層	0.8	1	0.5	0.3		
ブロック4	SQ07 №30		砕片	黒曜石	IV層	1	0.7	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 №33		礫		IV層	12.8	11.2	8.5	2200		
ブロック4	SQ07 №34		礫		IV層	23.5	15	12.1	5700		

牛出古窯遺跡旧石器時代石器類属表

ブロック名	注記番号	図版番号	器種名	石材	層	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No.
ブロック4	SQ07 No36		砕片	蛇紋岩	IV層	1	0.9	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No37		砕片	蛇紋岩	IV層	1	0.6	0.3	0.2	研磨面有り	
ブロック4	SQ07 No40		剥片	黒曜石	IV層	1.4	0.7	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No41		砕片	蛇紋岩	IV層	1	0.9	0.1	0.1	研磨面有り	
ブロック4	SQ07 No42		剥片	黒曜石	IV層	2.9	2.7	0.7	3.6	自然面有り	
ブロック4	SQ07 No43		剥片	黒曜石	IV層	1.8	1.8	0.7	1.6		
ブロック4	SQ07 No44		剥片	蛇紋岩	IV層	0.7	1.3	0.2	0.3	研磨面有り	
ブロック4	SQ07 No45	第246図-16	剥片	黒曜石	IV層	2.4	2.4	1	4.6	自然面有り	3053
ブロック4	SQ07 No46	第247図-22	剥片	黒曜石	IV層	3.15	3.6	1.1	7.5	自然面有り	3054
ブロック4	SQ07 No47		砕片	黒曜石	IV層	1	1	0.3	0.2		
ブロック4	SQ07 No48		剥片	黒曜石	IV層	2.6	1.4	0.4	1.2		
ブロック4	SQ07 No49		砕片	蛇紋岩	IV層	1.1	1	0.3	0.4		
ブロック4	SQ07 No50		砕片	黒曜石	IV層	0.4	1	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No50		砕片	黒曜石	IV層	0.5	0.7	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No51		剥片	黒曜石	IV層	2	1.2	0.4	0.6		
ブロック4	SQ07 No52		石核	黒曜石	IV層	2.6	2.5	1.6	6.1	自然面有り	
ブロック4	SQ07 No53	第246図-13	微細鋸のある剥片	黒曜石	IV層	1.8	2.2	0.45	1.2		3051
ブロック4	SQ07 No54		剥片	蛇紋岩	IV層	1.4	2.2	0.7	1.7		
ブロック4	SQ07 No55		剥片	蛇紋岩	IV層	2	2.2	0.3	1.4	研磨面有り、磨製石斧の欠損破片？	
ブロック4	SQ07 No56		砕片	黒曜石	IV層	1	0.8	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 No56		砕片	黒曜石	IV層	0.5	0.8	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No57		剥片	蛇紋岩	IV層	1.8	4.2	0.6	5.5	研磨面有り、磨製石斧の欠損破片？	
ブロック4	SQ07 No58		砕片	黒曜石	IV層	0.9	0.8	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 No59		石核	黒曜石	IV層	2.2	1.9	1	2.8	折れ、残核	
ブロック4	SQ07 No60	第246図-20	石核	黒曜石	IV層	2.5	2.4	1.1	7	自然面有り	3047
ブロック4	SQ07 No61		砕片	黒曜石	IV層	0.9	0.7	0.4	0.2		
ブロック4	SQ07 No62		剥片	鉄石英	IV層	1.1	1.9	0.6	1.1		
ブロック4	SQ07 No63		剥片	蛇紋岩	IV層	3.8	1.5	0.6	4.1	研磨面有り、磨製石斧の欠損破片	
ブロック4	SQ07 No64		砕片	黒曜石	IV層	0.9	0.6	0.9	0.8	被熱？	
ブロック4	SQ07 No66		砕片	蛇紋岩	IV層	0.7	0.4	0.2	0.1	2点	
ブロック4	SQ07 No68		砕片	黒曜石	IV層	1.7	0.3	0.3	0.1		
ブロック4	SQ07 No69		砕片	黒曜石	IV層	0.9	0.6	0.9	0.1		
ブロック4	SQ07 No70	第246図-17	石核	黒曜石	IV層	3.35	2.25	1.5	9.1	自然面有り	3046
ブロック4	SQ07 No71		砕片	黒曜石	IV層	1.1	0.9	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No72	第246図-11	台形様石器	黒曜石	IV層	3.1	1.95	0.6	2.4		3067
ブロック4	SQ07 No73		剥片	鉄石英	IV層	2.2	1.5	0.4	1.4		
ブロック4	SQ07 No74		砕片	黒曜石	IV層	1	0.7	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No75		砕片	蛇紋岩	IV層	0.9	0.6	0.4	0.2		
ブロック4	SQ07 No76		砕片	黒曜石	I層	1.6	1.3	0.2	0.6		
ブロック4	SQ07 No77		剥片	蛇紋岩	IV層	3.8	2	0.5	4.2	研磨面有り、磨製石斧の欠損破片	
ブロック4	SQ07 No77		砕片	蛇紋岩	IV層	0.7	0.4	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 No78		砕片	蛇紋岩	IV層	1.4	0.6	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No79		砕片	蛇紋岩	IV層	1.7	0.6	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No80		剥片	蛇紋岩	IV層	2.8	1.1	0.3	0.9	研磨面有り、磨製石斧の欠損破片	
ブロック4	SQ07 No81	第247図-24	剥片	黒曜石	IV層	1.7	2.9	0.5	2.3		3050
ブロック4	SQ07 No87		礫	安山岩	IV層	8.2	4.4	3.3	150		
ブロック4	SQ07 No88		剥片	黒曜石	IV層	1.6	2.6	0.5	1.2		
ブロック4	SQ07 No89		剥片	黒曜石	IV層	3.2	1.6	0.5	1.3		
ブロック4	SQ07 No90	第246図-14	石核	黒曜石	IV層	3.15	4.05	0.8	8.1	剥片剥材	3055
ブロック4	SQ07 No91	第246図-18	石核	黒曜石	IV層	2.9	2.4	0.9	4.9	自然面有り、折れ、ガジリ	3062
ブロック4	SQ07 No92		剥片	黒曜石	IV層	1.5	2.6	0.7	2.1		
ブロック4	SQ07 No94	第247図-25	剥片	黒曜石	IV層	2.45	4.1	0.6	3.6	ガジリ痕	3059
ブロック4	SQ07 No95		剥片	黒曜石	IV層	3.2	2.8	1.5	13.5		
ブロック5	SQ07 No1		剥片	流紋岩	IV層	1.7	1	0.5	0.8		
ブロック5	SQ07 No2		剥片	流紋岩	IV層	2.9	2	1.1	7	折れ	
ブロック5	SQ07 No3		剥片	安山岩	IV層	2.3	2.7	0.9	5.4		
ブロック5	SQ07 No4		剥片	流紋岩	IV層	1.8	1	0.8	0.9	自然面有り	
ブロック5	SQ07 No4		砕片	流紋岩	IV層	0.6	1.2	0.3	0.1	同種	
ブロック5	SQ07 No4		砕片	流紋岩	IV層	0.5	0.8	0.3	0.1	同種	

牛出古墳遺跡旧石器時代石器観察表

ブロック名	芒記番号	図版番号	器種名	石材	層	長さ㎝	幅㎝	厚さ㎝	重量g	備考	整理No.
ブロック5	SQ07 No5		礫	安山岩	IV層	14	11.7	13.5	2100		
ブロック5	SQ07 No6		剥片	流紋岩	IV層	1.6	1.5	0.7	1.1		
ブロック5	SQ07 No7		剥片	鉄石英	IV層	1.2	2.2	0.4	0.9		
ブロック5	SQ07 No8		剥片	鉄石英	IV層	2.7	2.9	1.9	8.5		
ブロック5	SQ07 No9		剥片	鉄石英	IV層	3.9	4.2	1.4	20.5		
ブロック5	SQ07 No10		剥片	鉄石英	IV層	2.6	1.3	0.9	2	折れ	
ブロック5	SQ07 No11		剥片	鉄石英	IV層	3.5	5.9	2.6	44.7		
ブロック5	SQ07 No12	第247図-26	剥片	安山岩	IV層	2.4	4.45	0.5	5.4	自然面有り	3044
ブロック5	SQ07 No13		剥片	黒曜石	IV層	1.7	4.8	1.3	10.6	折れ	
ブロック5	SQ07 No14		剥片	鉄石英	IV層	1.3	3.2	0.8	2.2		
ブロック5	SQ07 No15		剥片	鉄石英	IV層	2.8	2.3	0.5	2.9		
ブロック5	SQ07 No16	第246図-9	磨製石斧	蛇紋岩	II層	5.85	2.4	1.65	19.6		3042
ブロック5	SQ07 No17		石核	チャート	IV層	6	4.6	4.2	134	自然面有り、剥床礫	
ブロック5	SQ07 No18		剥片	鉄石英	IV層	4	4.7	1.6	31.9	自然面有り	
ブロック5	SQ07 No19	第246図-10	台形様石器	黒曜石	IV層	2.45	1.5	0.55	1.5		3058
ブロック5	SQ07 No20	第246図-19	石核	チャート	IV層	5.3	4.5	3.4	84.4	自然面有り	3031
ブロック5	SQ07 No21		剥片？	？	IV層	3	2.5	1	2.9		
ブロック5	SQ07 No22		剥片	チャート	IV層	2.9	1.8	0.9	5.2		
ブロック5	SQ07 No32		礫		IV層	19.9	9.9	11.3	2400		
ブロック6	SQ08 No1		剥片	黒曜石	IV層	1.6	1.5	0.7	1.2		
ブロック6	SQ08 No2		剥片	黒曜石	IV層	1.2	1.8	0.4	0.7		
ブロック6	SQ08 No3		剥片	黒曜石	IV層	1.3	1.9	0.6	0.9		

弥生時代後期・古墳時代前期遺物観察表

がまん洞遺跡弥生時代土器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径cm	底径cm	器高cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第61図-1	SB01	底		6.7		不明	不明	DE	②	(1/1)	1099	
第61図-2	SB01	高杯3	20			赤彩	赤彩	B	2	1/6	1125	高杯B か
第61図-3	SB01	高杯				ハケメ	杯、ハケメ→ナデ	C	4	(1/8)	1145	
第61図-4	SB01	鉢C	20			ミガキ	ミガキ	BE	6	1/8	1065	鉄分沈着あり
第63図-1	SB02・04	壺A 1？	33.9			赤彩	赤彩	B	2	1/8	1100	底部か
第63図-2	SB04	壺A				T字文、赤彩	ハケメ→ナデ	A	4	1/6	1073	
第63図-3	SB04	甕A？	18			ミガキ	ミガキ	D	2	1/4	1074	胴に波状文か？
第63図-4	SB02・04	底		5.9		ミガキ	ミガキ	DE	②	(3/4)	1101	
第63図-5	SB04	底		10		ミガキ	不明	B	2	(1/1)	1075	
第63図-6	SB02・04	底		13.6		ミガキ	ナデ→ナデ	B	2	3/3	1067	底部か？
第63図-7	SB02・04	高杯				赤彩	杯、赤彩		4	(1/1)	1102	
第63図-8	SB04	台付壺A 1	8.1	5.4	12.2	櫛描波状文、鍵状文	不明	DE	2	1/1	1077	鉄分多い
第63図-9	SB04	片口鉢A	8.7	6	9.6	ミガキ？	ミガキ	BD	2	1/1	1078	
第63図-10	SB04	鉢	14.3	3.4	6.8	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ		2	1/2	1072	
第63図-11	SB02・04	鉢		6.2		赤彩、ミガキ	赤彩	B	6	(3/4)	1103	
第63図-12	SB04	有孔鉢	16.2	4	6.7	不明	ミガキ	A	2	1/1	1079	底部穿孔
第64図-1	SB03	壺F				不明	不明	BD	2		1071	
第64図-2	SB03	甕A				櫛描波状文、鍵状文(6条)					1069	
第64図-3	SB03	底		6		不明	不明	B	③	(3/4)	1104	
第64図-4	SB03	底		6.1		不明	不明	AD	2	1/1	1068	焼成後穿孔か？
第64図-5	SB03	有孔鉢		2.8		不明	ミガキ？	BD	2	1/1	1070	焼成前穿孔
第65図-1	SA01 (pit2)	ミニチュア	7.8	3.1	3.5	ナデ	ナデ	D	2	1/1	1064	
第65図-2	SA2 (pit18)	高杯A				赤彩、ミガキ	杯、ハケメ？	B	2	(1/1)	1063	三角孔(4単位)
第67図-1	SD01	壺F	13.1			ミガキ	ミガキ	B	②	1/4	1043	受石多い
第67図-2	SD01	壺A2又は3	24			ミガキ	ナデD	AD	4	1/2	1005	赤彩無し
第67図-3	SD01	壺A 2	20			ミガキ、櫛描直線文	ミガキ？	AD	4	1/4	1066	赤彩なし、石英多い
第67図-4	SD01	壺A 1	23.9			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	②	2/8	1116	高杯か？
第67図-5	SD01	壺A 1	20			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	2/8	1119	

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第67図-6	SD01	壺A 1	19.9			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	4	1/8	1166	石英多い
第67図-7	SD01	壺A 1	14			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	4	1/8	1120	
第67図-8	SD01	壺A 1	22			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	②	1/6	1117	
第67図-9	SD01	壺A 2	43.5			赤彩、ミガキ、T字文、口縁波文	赤彩、ミガキ	B	2	1/2	1129	
第67図-10	SD01	壺A 2	21			ミガキ	ミガキ	B	2	1/4	1167	赤彩なし
第67図-11	SD01	壺A 2	15.9			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ	B	②	1/4	1162	
第67図-12	SD01	壺A 2	38			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ	B	④	1/8	1055	
第67図-13	SD01	壺A 2	26.7			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/8	1174	
第67図-14	SD01	壺A 2	35.8			赤彩、ミガキ？口唇波状文	赤彩、ミガキ？	A	2	1/8	1168	
第67図-15	SD01	壺A 2	31			赤彩、ミガキ、口唇波状文？	赤彩、調整不明	B	②	1/8	1163	石英多い
第67図-16	SD01	壺A 2	27.7			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ	B	②	1/8	1160	
第67図-17	SD01	壺A 2	32.1			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/3	1164	
第67図-18	SD01	壺A 2	27.1			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ？	A	4	1/2	1052	
第68図-19	SD01	壺A 2	32			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/8	1175	
第68図-20	SD01	広口短頸壺	17.6			ナデ、簾状文？	赤彩、ミガキ	B	6	1/10	1197	表面赤彩無し
第68図-21	SD01	壺A 2	34.1			赤彩、ミガキ、口唇波状文	赤彩、ミガキ	B E	4	1/6	1173	石英多い
第68図-22	SD01	壺A 3	19			赤彩、ミガキ、口縁波状文	ミガキ	B	②	1/6	1158	
第68図-23	SD01	壺A 3	31.9			赤彩、ミガキ、口縁波状文	赤彩、ミガキ	B	4	1/8	1172	石英多い
第68図-24	SD01	壺A 3	28			赤彩、調整不明、口縁波状文	赤彩、調整不明	B	4	1/6	1170	
第68図-25	SD01	壺A 3	30.1			赤彩、ミガキ、二段波状文	赤彩、ミガキ	A	②	1/8	1171	
第68図-26	SD01	壺A 3	36			赤彩、ミガキ、1段波状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/8	1169	
第68図-27	SD01	壺A 胴				T字文、ボタン状足付（胴突）	ナデorミガキ	B	②	(1/4)	1149	撥拡(9条)
第68図-28	SD01	壺A 胴				赤彩、T字文、ボタン状貼付	ハケメ、ナデD	B	4	(1/4)	1148	
第68図-29	SD01	壺A 胴				ハケメ→ミガキ	ナデD	A	④	(1/3)	1050	
第68図-30	SD01	壺A 胴		7.4		赤彩、ミガキ	ナデ	A B	4	(1/1)	1037	
第68図-31	SD01	壺A 胴		5		赤彩、ミガキ、胴下ミガキ	ナデD	A	②	(1/1)	1048	
第68図-32	SD01	広口短頸壺	20.9	11.4	27.7	赤彩		(B)	2	1/2	1036	ミガキ
第69図-33	SD01	壺A 1 ?	29			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	④	1/4	1118	発泡
第69図-34	SD01	広口短頸壺	14.4			赤彩、ミガキ、簾状文(8cm8条)	口縁部赤彩ミガキ		2	1/6	1198	
第69図-35	SD01	広口短頸壺	15.9			赤彩、調整不明	赤彩、ミガキ		4	1/8	1139	施成前穿孔
第69図-36	SD01	広口短頸壺	22.9			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	D	2	1/8	1140	施成前穿孔
第69図-37	SD01	広口短頸壺	18.2			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	D	4	1/3	1138	施成前穿孔、突起
第69図-38	SD01	広口短頸壺	18.9			赤彩、ミガキ	ミガキ	B	4	3/4	1041	施成前穿孔
第69図-39	SD01	甕A 1	11.2	4.2	10.8	櫛描波状文←簾状文(7条)	ミガキ	D	②	(1/10)	1039	
第69図-40	SD01	甕A 2	12.3	5.6	15.9	簾状文(10条) →波状文	ミガキ？	A	2	1/4	1045	
第69図-41	SD01	甕A 1	12	3.9	13	簾状文(6?条) 、波状文	ミガキ	D E	4	1/1	1046	口唇部不明瞭
第69図-42	SD01	甕A 1	22			簾状文(9条)→櫛描波状文	ミガキ	A	4	1/6	1057	
第69図-43	SD01	甕A 1	20.7			簾状文、櫛描波状文	不明	A D	②	1/4	1054	
第69図-44	SD01	壺A 1	16			簾状文→波状文(6条?)	ミガキ	A	②	1/4	1006	
第69図-45	SD01	壺A 1	10.8			簾状文→波状文(9条)	ミガキ	A D	②	1/1	1004	
第69図-46	SD01	甕A 2	34.8	12.5	51.8	簾状文(10条) →波状文	ナデD、ミガキ				1038	
第69図-47	SD01	甕A 2	17.6			簾状文(8条)→櫛描波状文	ミガキ	D	②	1/4	1058	
第69図-48	SD01	甕A 2	13.4			櫛描波状文、簾状文(5条)	ミガキ？	A D	②	1/1	1047	
第69図-49	SD01	甕A 2	19.6			櫛描波状文←簾状文(8条)	ミガキ	A	②	1/3	1009	
第70図-50	SD01	甕A 2	14.6	5.6	16.3	簾状文(9条) →波状文→ミガキ	ミガキ	D	④	3/4	1044	
第70図-51	SD01	甕A 4	21.8			櫛描波状文(6条)	ハケメ	D	④	1/4	1200	
第70図-52	SD01	甕A 4	20.8			櫛描波状文←簾状文(5条)	ハケメ→ナデ、ミガキ	B		5/6	1035	
第70図-53	SD01	甕C				櫛描波状文、ハケメ	ミガキ	A	②		1115	
第70図-54	SD01	甕A		3.6		簾状文・波状文、ミガキ	ミガキ	B	2	(3/4)	1040	
第70図-55	SD01	甕A		5.6		ミガキ	ミガキ	D	4	1/1	1059	
第70図-56	SD01	甕A		5.6		ミガキ	ミガキ	A	④	(1/1)	1060	
第70図-57	SD01	甕B		3.6		櫛描斜走直線文	ミガキ	C D	6	(1/1)	1003	
第70図-58	SD01	甕A		5		簾状文、波状文	ミガキ	D E	2	(1/1)	1002	
第70図-59	SD01	台付甕A 1	8.8	5.95	11.4	簾状文、波状文	ミガキ	D E	2	1/1	1007	
第70図-60	SD01	台付甕A 2	12.6			櫛描波状文、ミガキ(6条)	ミガキ	D E	②	5/6	1007	
第70図-61	SD01	台付甕				ミガキ	ミガキ	A D	②	(1/1)	1091	脚接合痕
第70図-62	SD01	台付甕？				ミガキ	ミガキ	A	②	(1/1)	1021	高杯か
第70図-63	SD01	鉢か？				不明	不明	E	②	(1/2)	1030	
第70図-64	SD01	鉢か				ミガキ	ミガキ、脚、ハケ	B C	②	(1/1)	1033	
第70図-65	SD01	台付鉢		6.8		ミガキ	不明	B	②	(1/2)	1092	
第70図-66	SD01	台付鉢		7.1		ミガキ	底不明、原底ナデ	B	②	(1/1)	1022	
第70図-67	SD01	台付鉢		7.6		ハケ→ミガキ	不明	A	②	(3/4)	1088	
第70図-68	SD01	台付鉢		7.7		不明	不明	B D	②	(1/1)	1089	
第70図-69	SD01	台付鉢		9.2		ミガキ	剥離ミガキ	D	4	(1/1)	1090	
第70図-70	SD01	台付鉢		6.4		不明	剥離ナデ	E	②	(1/1)	1090	

がまん洞遺跡弥生時代土器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第70図-7	SD01	合形壺		6.85		ミガキ	調底ミガキ	E		(1/1)	1015	
第70図-72	SD01	合形壺？		9.8		ミガキ	ナデD	B	②	(1/1)	1087	高杯か？
第70図-73	SD01	合形壺		7.6		ミガキ	調部底、ナデD	A	②	(1/1)	1093	
第70図-74	SD01	高杯A	18.7			沈彫	赤彩	D	2	1/8	1131	
第70図-75	SD01	高杯A？	18								1161	
第70図-76	SD01	高杯A	27.1			沈彫	赤彩		②	(1/1)	1049	
第70図-77	SD01	高杯A	21.5			ミガキ	赤彩、ミガキ	B	②	1/4	1124	突起
第70図-78	SD01	高杯A	23.8			沈彫	不明（赤彩？）	B	1	1/6	1122	
第70図-79	SD01	高杯A	24			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	1/6	1123	
第70図-80	SD01	高杯A	22.3			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	1/6	1121	突起
第70図-81	SD01	高杯B	16			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	②	1/8	1136	鉢形土器か
第70図-82	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ		②	(1/1)	1024	
第70図-83	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	脚ナデ、脚部接合でないもの	B	②	(1/1)	1013	
第70図-84	SD01	高杯				赤彩	赤彩		②	(1/1)	1028	
第70図-85	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	脚ナデ	B	2	(1/1)	1023	
第70図-86	SD01	高杯		10.9		赤彩、ミガキ	脚ナデ				1017	
第70図-87	SD01	高杯				赤彩	ナデD	B	2		1068	絞成－後穿孔
第70図-88	SD01	高杯				ミガキ？	不明	A	②	(1/4)	1032	
第70図-89	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	脚ナデ	B	②	(1/1)	1014	
第71図-90	SD01	高杯		11.6		赤彩、ミガキ	脚、不明	B	②	(1/1)	1011	
第71図-91	SD01	高杯		11.7		赤彩？ミガキ	脚底ミガキ、脚ナデ	B	②	(1/1)	1016	
第71図-92	SD01	高杯		13.9		赤彩、ミガキ	脚、ハケ→ナデ	B	②	(1/1)	1010	
第71図-93	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	脚ナデ、脚底部、粗い	A	②	(1/1)	1018	
第71図-94	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	②	(1/1)	1019	
第71図-95	SD01	高杯				赤彩	不明		2	(1/8)	1031	
第71図-96	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	脚ナデ	B	②	(1/1)	1012	接合部ナデD
第71図-97	SD01	高杯				赤彩	赤彩？	B	②	(1/1)	1029	
第71図-98	SD01	高杯				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ		②	(1/1)	1026	
第71図-99	SD01	鉢形土器B	15.4	4.4	6.5	貫通不明、ミガキ？	ミガキ	B	2	1/2	1063	
第71図-100	SD01	鉢形土器A	16.8	6.2	6.5	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	②	1/4	1052	突起
第71図-101	SD01	鉢形土器A	20	5.6	8.8	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	1/1	1042	
第71図-102	SD01	鉢形土器C				ミガキ	ミガキ	A	6	(1/6)	1177	
第71図-103	SD01	鉢形土器C				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	5	1/4	1095	石英多い、102に粘土瓶底
第71図-104	SD01	広口壺頸部？				赤彩、ミガキ、鋸状文	ミガキ	A	2	(1/4)	1133	
第71図-105	SD01	底部		7.2		ミガキ	ミガキ	A D	④	(3/4)	1199	底部穿孔（焼成前）
第71図-106	SD01	底		6		ナデ	ハケメ	B D	4	(1/1)	1134	
第71図-107	SD01	ミニチュア壺				T字文、鋸状文、ボタン状文、刺突、沈彫		A D	2	1/4	1094	ナデ
第71図-108	SD01	小型土器D				ケズリ→ナデ	ナデD、ナデ	A D	②	1/2	1137	
第71図-109	SD01	壺形土器				不明	不明	E	②	(1/-)	1027	
第71図-110	SD01	壺形		10.4		ハケ→ナデ	ナデ	A	2	(1/4)	1034	
第71図-111	SD01	高杯		14		ナデ	ハケメ	B			1196	
第71図-112	SD01	高杯？		10.8		ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	A	②	1/4	1132	脚？
第71図-113	SD01	高杯		8.75		赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ		5	(1/2)	1025	石英多い
第71図-114	SD01	壺A				T字文、ボタン状付け	ナデ	A	4		1153	櫛描(8又は9条)
第71図-115	SD01	壺A				T字文、ボタン状付け	ハケB	B	4		1151	
第71図-116	SD01	壺A				T字文、ボタン状付け(刺突)、鋸状文	ナデD	A	④		1157	赤彩
第71図-117	SD01	甕B				鋸状文→波状文、櫛描斜走直線文	ミガキ	B	2		1189	
第71図-118	SD01	甕B				鋸状文→櫛描直線文、波状文	ミガキ	A	2		1186	
第71図-119	SD01	甕B				櫛描斜走直線文、波状文	ナデD、ミガキ	B D	2		1192	
第71図-120	SD01	甕B				櫛描斜走直線文	ミガキ	A E	4		1191	
第71図-121	SD01	甕A 3				櫛描波状文、鋸状文？	不明	A	②	1/7	1202	
第71図-122	SD01	甕A 3				櫛描波状文	ミガキ	D	④	1/8	1203	
第71図-123	SD01	甕A 4				櫛描波状文	ミガキ	C	④	1/16	1201	
第71図-124	SD01	甕B				櫛描斜走直線文	ミガキ	B	④		1195	弥生中期？
第71図-125	SD01	甕B				口縁波状、櫛描斜走直線文	ミガキ	D			1190	弥生中期
第71図-126	SD01	甕				口縁部、LR縄文		A	4		1182	弥生中期
第71図-127	SD01	甕				ナデ、口縁部波状具による刺突	ナデ	B	2		1194	弥生中期？
第71図-128	SD01	壺				連弧文、櫛描線文(RL)	不明	D	4		1184	弥生中期
第72図-1	SQ01	壺A 3	24.1			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ		2	1/8	1176	
第72図-2	SQ01	底		5		赤彩、ミガキ	ハケメ	B D	2	(1/1)	1112	
第72図-3	SQ01	壺Z				ミガキ、櫛描文	ナデ	A	2	(1/4)	1178	
第72図-4	SQ01	底		8.4		不明	ナデD→ナデ	A	4	(1/2)	1114	
第72図-5	SQ01	有孔鉢形土器		4		ミガキ	ミガキ	A	②	(1/-)	1111	
第72図-6	SQ01	底		5.4		ナデ	ナデ	D	4	(1/-)	1110	絞成前底部穿孔
第72図-7	SQ01	合付壺				ミガキ	ミガキ	B	2	(1/1)	1107	

がまん洞遺跡弥生時代土器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第72図-8	SQ01	高杯A	25			赤彩、ミガキ?	赤彩、ミガキ	A	②	1/4	1126	
第72図-9	SQ01	高杯A	24.6			赤彩	赤彩	B	④	1/4	1127	口縁部突起
第72図-10	SQ01	高杯		5.7		赤彩、ミガキ	脚、ナデ	B	2	(1/1)	1108	
第72図-11	SQ01	高杯		8.5		赤彩、ミガキ	ナデD	A	4	(1/3)	1113	
第72図-12	SQ01	高杯				赤彩	不明	B	4	(1/1)	1109	
第72図-13	SQ01	高杯				赤彩、ミガキ	ナデ	B	2	1/1	1130	Z
第72図-14	SQ01	甕E 2	20			口縁ナデ、頸ハケメ	ハケメ	C	4	1/10	1144	
第72図-15	SQ01	壺I ?	12.2			ナデD	ナデD	B	4	1/5	1141	高杯脚か?
第72図-16	SQ01	甕A I ?				ハケメ→櫛描波状文(4条)	ミガキ	A	6	1/10	1143	
第72図-17	SQ01	壺A				T字文、蕨状文、ボタン状貼付文	ナデ	D	4		1150	SD02
第72図-18	SQ01	壺A				T字文、ボタン状貼付	ナデD	A	4		1156	SD02
第72図-19	SQ01	壺A				T字文、ボタン状貼付、蕨状文	ナデD	A D	②		1155	
第72図-20	SQ01	壺A				T字文、ボタン状貼付、赤彩	不明	B	②		1152	櫛描(7条)
第72図-21	SQ01	甕A 4				櫛描波状文	不明	A	2	1/10	1205	石英多い
第72図-22	SQ01	甕A 4				櫛描波状文	ミガキ	B	2	1/10	1204	
第72図-23	SQ01	甕B				櫛描斜走直線文→蕨状文	ナデD、ミガキ	B	②		1188	
第72図-24	SQ01	壺B				櫛描斜走直線文	ミガキ	D	6		1187	
第72図-25	SQ01	壺B				櫛描斜走直線文	ミガキ	A D	2		1185	
第75図-1	SX01	壺1	18.5			赤彩、ミガキ、櫛描直線文	口縁赤彩、頸部不明	B C	2	1/2	1083	鉄分粒多い
第75図-2	SX01	壺A				赤彩、ミガキ	不明				1085	
第75図-3	SX01	底		7.5		ミガキ	ハケメ	A D	2	(1/2)	1084	壺か?
第75図-4	SX01	高杯	14			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ				1128	
第75図-5	SX01	高杯		12.4		赤彩、ミガキ	ハケメ	C	2	(3/4)	1082	
第75図-6	SX01	高杯				ミガキ	ナデ	B	4	(1/1)	1081	円孔(3単位)
第75図-7	SX01	高杯				赤彩、ミガキ	脚不明	B	2	(1/1)	1080	石英多い

沢田鎧土遺跡古墳時代土師器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第106図-1	不明	壺A				ミガキ、赤彩、櫛描直線文、蕨状文	ナデ	A	4		1267	
第106図-2	SX26	壺C				ナデ	不明	B	2	1/4	1126	
第106図-3	不明	壺D	23.2			ハケメ→ナデ	ナデ	A	1	1/8	1243	
第106図-4	SK45	壺G	19.4					C	2	(1/1)	1165	1164と同一個体?
第106図-5	SX12	壺J	16.3			ハケメ→ナデ	ナデD	A D	4	1/4	1193	1045と同一個体?
第106図-6	SX12	壺J	15.4			ナデ	ハケメB	B	4	1/4	1045	
第106図-7	SX12	壺K	12.5			ナデ(タテ)、口縁ハケメ→ナデ	ハケメ、口縁ナデ	A D	1	1/3	1189	
第106図-8	SX24A	壺B3	17.7			ミガキ	ミガキ	A	6	1/6	1098	NO.1110と同一個体
第106図-9	SX36	壺				ミガキ	不明、接合痕	B	2	(1/4)	1156	
第106図-10	SX12	壺Z				赤彩ミガキ	ナデ又はミガキ			(1/4)	1040	
第106図-11	SX12	甕Z	12			ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	C	2	1/6	1032	
第106図-12	S D12	壺				ナデ	不明、輪積痕	A D	4	(1/3)	1001	
第106図-13	SX24	小型土器A	11.4	2	9.8	ナデ	ナデ	D E	2	1/4	1102	
第106図-14	SX29	小型土器A	9.4			一部ハケメ→ケズリ、口縁ナデ	不明、接合痕	B	2	1/3	1145	
第106図-15	SX29	小型土器A		4.7		不明	ハケメ→ナデ	B	2	1/1	1127	
第106図-16	不明	小型土器C		0.8		ハケメ→ナデ	不明	A		(1/3)	1240	
第106図-17	SX06	小型土器D	10.8			不明	不明	A	2	1/4	1009	
第106図-18	SX13	広口短頸壺		5.8		赤彩	不明	C D	4		1075	
第106図-19	SX12	広口短頸壺		5.4		ミガキ→赤彩	ミガキ	C	2		1031	
第106図-20	SX05	甕A 2	17.6			櫛描波状文、蕨状文?口縁部不明	ナデorミガキ	A	1	1/4	1219	焼ムラが可能性あり、石英多い、各器種部不明
第106図-21	不明	甕A				櫛描波状文(7本)	ナデ又はミガキ	B	2	(1/6)	1241	厚さ5.5mm~7.5mm
第106図-22	SX13	甕A				櫛描波状文	不明	D	4		1072	
第106図-23	SX12	甕A				櫛描波状文→ミガキ	ミガキ	B	2	(1/3)	1261	
第106図-24	SX05	壺A				櫛描波状文	ミガキ?	D E	2		1015	二次焼成
第106図-25	SX12	壺A 2	14.8			櫛描波状文、擬状文	ミガキ	A D	4	1/4	1205	
第106図-26	SX12	壺A 2	14.5			櫛描波状文	ナデ、指圧痕	A E	4	1/4	1191	
第106図-27	SX12	壺A 2	13.3			櫛描波状文、蕨状文(5条)	ナデ?	A D	4	1/8	1199	厚さ7.0~8.5mm
第107図-28	SX05	壺A 4	15.2			ナデ→櫛描文	ナデ	B	2	1/8	1022	
第107図-29	SX16	壺A ?				ナデ?	ナデ	B	4		1082	
第107図-30	SX13	壺B	21			櫛描斜走直線文→口唇蕨状文	ミガキ	A	2	1/6	1073	
第107図-31	SX05	壺B				ナデ→櫛描斜走直線文	ハケメ→ミガキ	C D	2	(1/3)	1218	
第107図-32	SX12	壺B	24.3			櫛描直線文	ミガキ	C	4	1/8	1202	
第107図-33	SX12	壺D1	16.1			縦凹線文	ナデ	D	2	1/30	1046	

沢田鉄土遺跡古墳時代土師器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第107図-34	SX12	甕D1	14			不明	不明	B	2	1/1	1172	
第107図-35	SX12	甕D1	24.5			擬匡線文？	ナデ	A	2	1/8	1262	
第107図-36	SX12	甕D1	16.9			擬匡線文	ナデ	D	2	1/10	1059	
第107図-37	SK45	甕D1	14.9			擬匡線文	不明	B	6	1/8	1182	砂土、鉄分粒有？
第107図-38	SX05	甕D2	16			ナデ	ナデ	AD	4	1/8	1216	
第107図-39	SX12	甕E2	16.5			ハケメ	不明	A	2	1/2	1039	
第107図-40	SX29	甕E	14.2	1.6		ニ線胴上半不明、一部ナデ	不明	B	1	1/3	1147	
第107図-41	SX04	甕E1	16.1			ハケメ→ナデ	ナデ	A	1	1/2	1008	
第107図-42	SX12	甕E1	17			ハケメ	不明	B	2	3/4	1034	
第107図-43	SX05	甕E1？	20			不明	不明	B	5	1/2	1217	時期不明、平安か？
第107図-44	SK49	甕E1	18			ハケメ、口縁ナデ	口縁ハケメ、胴ハケメ→ナデ	A	2	1/2	1160	外面黒色付着物
第107図-45	SX01	甕E2	28			ハケメ→ミガキ	ナデ	D	1	3/4	1004	
第107図-46	SX24	甕E2	20.4			ハケメ	ナデ	AD	2	1/4	1104	
第107図-47	SX24 E	甕E2	17.7			口縁ナデ、胴浅いハケメ		D	2	1/6	1112	
第108図-48	VII C21	甕E3	19.8			ハケメ、ニ線ハケメ→ナデ	口縁ハケメ→ナデ、胴ナデ	AD	4	1/4	1238	
第108図-49	SX12	甕E3	16.8			口縁ナデ、胴ハケメ、黒色付着物	ナデ	DE	4	1/3	1178	
第108図-50	SX29 B	甕E3	24.6			口縁ハケメ→ナデ、胴ハケメ	口縁ハケメ→ミガキ	D	2	1/3	1129	
第108図-51	SX12	甕E3	19.5			ナデ	ハケメB→ナデ	A	2	1/2	1234	
第108図-52	VII B25	甕E2？	16.2			ナデ	ハケメ、口縁ナデ	A	2	1/6	1233	
第108図-53	SK47	甕E4	14.7			口縁ナデ、胴ハケメ	不明	D	4	(1/8)	1166	
第108図-54	SX12	甕E5	12.9			ハケメ	口縁ナデ→胴ハケメ	D	4	1/2	1266	
第108図-55	SX12	甕E	15.4			ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	B	2	1/4	1176	厚さ4.0～4.5mm
第108図-56	SX12	甕E？	18.2			不明	不明	AB	4	1/4	1190	薄い
第108図-57	SX24	甕E2	15.5			口縁ハケメ、胴ナデ	ナデ	BD	2	1/4	1106	
第108図-58	SX24	甕E2？				ハケメ	ハケメ→ナデ	B	2	1/3	1231	
第108図-59	SX24	甕E3	14.7			ケズリ→ナデ	口縁ナデ、胴ナデC	AD	4	1/4	1100	
第108図-60	SX09	甕E？	18.6			ナデ	不明	E	2	1/8	1024	時期不明
第108図-61	SX09	甕E？	16.1			ナデ	不明	BC	1	1/8	1023	
第108図-62	SX12	甕E？	13.9			ナデ、指頭圧痕	ナデ	A	2	1/5	1204	
第108図-63	SX29 B	甕E？	17.9			口縁ナデ	不明	B	1	1/6	1132	
第108図-64	SX24	甕E？	19.3			ハケメ→ナデ（ナデD）	ハケメ→ナデ（ナデD）	A	2	1/6	1230	
第108図-65	SX24 E	甕E	20			ハケメ、口縁ハケメ→ナデ	口縁ハケメ→ナデ、胴ナデ	A	2	3/4	1109	
第108図-66	SX30	甕E	15			ハケメ、口縁ナデD	ナデD	AD	2	3/4	1153	厚さ3～4mm
第108図-67	SX09	甕Ga				ケズリ、胴上部ナデ	ナデ	AD	2		1026	炭化物付着
第108図-68	SX05	甕Ga	17			口縁ナデ、ケズリ	不明	B	2		1013	
第108図-69	SX23	甕Gb	16.4			ナデD（浅いハケメか）	ナデ	A	2	1/3	1090	
第108図-70	SX34	甕G2	14.6			口縁ナデ、胴部ナデD	ナデ、胴部はさと痕	B	2	1/6	1236	
第108図-71	SX12	甕G2	17.6			口縁ナデ、胴ナデD	口縁ハケ、ナデD	A	2	1/4	1184	
第108図-72	SX12	甕G7	22			ナデ	ナデ	A	2	1/4	1042	
第109図-73	SX12	甕G2	18			ナデD	口縁ハケメ、胴ナデはミガキ	A	2	1/4	1065	
第109図-74	SX20	甕G2	17.8			ナデD	口縁ナデ、胴ケズリ→ナデ	A	2	1/8	1089	
第109図-75	SX12	甕H1	15.4			ハケメB	不明	B	2	1/1	1035	
第109図-76	SX12	甕H2	15.9			タタキ	ナデ	A	1	1/8	1177	
第109図-77	SX12	甕H				タタキ	ナデ	A	4	(1/10)	1263	
第109図-78	SX12（内台）	甕H1	16.2	3	18.6	ハケメB	ナデ、口縁ハケメB	BE	1	1/1	1097	
第109図-79	SX12	甕H				タタキ	ナデ	D	4		1285	
第109図-80	SX12	甕H2	18.2			ハケメB、口縁ナデ	ハケメB、口縁ナデ	AD	5	1/4	1043	
第109図-81	SX12	甕J1	16.3			ハケメ（口唇ナデ）	口縁ハケメ、胴ミガキ	BD	4	1/2	1053	
第109図-82	SX12	甕J1	16.5			ハケメ→ナデ	不明	A	2	1/6	1080	
第109図-83	SX12	甕J2	17.3			ハケメ→ナデ	ナデ	A	2	1/6	1200	
第109図-84	SX30	甕J				ハケメ	不明	AD	2	(1/6)	1152	
第109図-85	SX12	甕J2	16			口縁ナデ、胴ハケ（又はナデ）	ナデ又はミガキ	A	2	1/3	1170	
第109図-86	SX12	甕J2	12.6	4.8	15.5	ハケメ、口縁ナデ	ハケメB	DE	2	1/1	1096	甕J1か？
第109図-87	SX12	甕J2				ハケメ、ナデ	胴下部ナデ、他不明	AE	2	1/2	1171	
第109図-88	SX05	甕J2	20.4			浅いハケメ、口唇ナデ	ハケメ→ナデ	A	4	1/5	1214	
第109図-89	SX12	甕J2	16.1			ハケメ（口縁ナデ）	ハケメ→ナデ	B	5	1/3	1044	
第109図-90	SX05	甕J2	14.4			ハケメ、口縁部ハケメ後ナデ	ミガキ	DE	2	1/3	1012	二次焼成
第109図-91	SX12	甕J2	16			口縁ナデ、胴ハケメ	ミガキ	A	2	(1/4)	1264	
第109図-92	SX12	甕J2	12.9			口縁ナデ、胴ハケメ	ナデD	B	2	1/6	1201	
第109図-93	SX12	甕J2	15.2			口縁ナデ、胴ハケメ	ナデ	A	4	1/6	1061	
第110図-94	SX23	甕K	18.5	4		口縁ナデB	ナデ	D	2	1/6	1093	
第110図-95	SX12	甕K	14.7			ナデ	ミガキ	AE	4	3/4	1168	
第110図-96	SX12	甕K	15.2			口縁ナデ、胴部ケズリ	ナデ又はミガキ	DE	4	1/3	1062	
第110図-97	SX12	甕K	14.8			口縁ナデ、胴ケズリ→ナデ	ナデ	DE	2	(1/4)	1169	
第110図-98	SK45	甕K？	20			ナデD	ナデD	B	6	(1/8)	1183	

沢田鎮土遺跡古墳時代土師器鉢棄表

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第110図-99	SX23	甕L	16.9	6.2		ハケ、口縁ナデ	ハケ→ナデ	CE	2	1/6	1092	
第110図-100	SX12	壺L	18			ハケメ	口縁ナデ、胴不明	AB	2	3/4	1066	
第110図-101	SX12	壺L	17.6			不明	不明	A	2	1/6	1174	
第110図-102	SX09	壺M	18			口縁ナデ、口唇部細沈線	口縁ナデ	A	4	1/6	1029	
第110図-103	SX05	甕？	14.3			ナデ、口縁沈線	不明	C	2	1/6	1215	
第110図-104	不明	合付甕		8.6		ハケメ	ハケメ→ナデ	B	2	(1/1)	1260	
第110図-105	SX15	合付甕				ハケメ	不明	E	1		1081	S字口縁甕の脚か？
第110図-106	SX12	合付甕				ミガキ	不明	B	2	(1/3)	1065	
第110図-107	SX13	合付甕		7.3		不明	不明	DE	1		1069	
第110図-108	SX12	合付甕		7.8		ハケメ	ハケメ	AE	4		1052	
第110図-109	SX25	合付壺				ハケメ	不明	C	2	(1/1)	1123	S字口縁甕？
第110図-110	SX12	合付甕				不明	ミガキ	A	4		1033	
第110図-111	不明	合付甕		11		不明	ミガキ	DE	1	(1/2)	1256	
第110図-112	SX01	底部		6.8		ミガキ	ナデ又はミガキ	AD	4		1078	
第110図-113	SX05	底部		7.2		ミガキ	ミガキ	AD	2		1019	内面に黒色付着物
第110図-114	SX12	底部		7.2		ハケメ、黒色付着物	ナデ	AD	2	(1/2)	1175	
第110図-115	SX24 J	底部		5.7		ケズリ→ミガキ	ミガキ	A	4		1120	
第110図-116	SX20	底部		5.7		ハケメ、調下半ケズリ	ナデ	DE	2		1157	
第110図-117	SX12	底部		5.2		ハケメ	ミガキ	AE	4	(1/1)	1056	
第110図-118	SX24 G	底部		4		ハケメ	不明	A	1		1117	外、炭化物付着
第110図-119	VWC01	底部		8.2		ハケメ、指圧痕	不明、黒色付着物	A	2	(1/1)	1194	甕
第111図-120	SX12	底部		5.9		ハケメ	不明	BD	2		1037	
第111図-121	SX24 F	底部		5.2		ハケメ(底面ハケメ)	ナデ	B	2		1111	
第111図-122	SX12	底部		3		ミガキ	ハケメ→ミガキ	C	4	(1/1)	1047	
第111図-123	SX29	底部		2.5		不明	不明	AD	①	1/1	1135	
第111図-124	SX24	底部		5		ケズリ→ナデ	ナデ	A	4		1101	
第111図-125	SX12	底部		5.8		ケズリ	ナデ	DE	4	(1/1)	1208	
第111図-126	不明	底部		5.3		ケズリ→ナデ	ナデ	AD	4	(1/3)	1239	
第111図-127	SX12	底部		6		ケズリ	ナデ	DE	4	(3/4)	1203	
第111図-128	SX15	底部		6.5		不明	不明	A	2		1080	
第111図-129	SX12	底部		4.1		ナデ	ナデ	AD	2		1221	
第111図-130	SX01	底部		6		(ハケメ)→ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	D	2		1006	
第111図-131	SX29	底部		5		ハケメB又はタタキ	ハケメ→ナデ	B	2	1/1	1138	壺
第111図-132	SX35	底部		7.2		不明	不明	B	6	(1/1)	1159	
第111図-133	SX19	底部		6		ハケメ	ナデ?	C	2		1087	
第111図-134	SX12	底部		5		ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	A	2	(1/2)	1196	壺
第111図-135	SX24D	底部	18.2			ナデ	不明	CD	1		1099	壺
第111図-136	SX12	底部	7.3			不明	不明	B	2	(1/2)	1211	
第111図-137	不明	底部		7.1		ナデD	ナデ	C	1	(1/1)	1247	
第111図-138	SX13	底部		3.6		ナデ	ナデ	CD	1		1070	
第111図-139	SX09	底部		6.6				D	4		1028	
第111図-140	SX12	底部		5		ミガキ	不明	B	2		1064	
第111図-141	SX12	底部		4.5		ハケメ→ケズリ	ハケメ・ナデD	ED	1	(1/1)	1181	
第111図-142	SX24 E	底部		6		ハケメ→粗いミガキ	ハケメ→ナデ	A	6		1110	NO.1066と同一個体？
第111図-143	SX12	高杯B	17.4					C	4	(3/4)	1030	
第111図-144	SX35	高杯C	14.4			ミガキ	ミガキ	B	2	(1/8)	1259	
第111図-145	不明	高杯C	24			ミガキ	ミガキ	D	6	(1/2)	1258	脚土、暗色の紋分他がみられる
第111図-146	SX26	高杯C	22.6			ミガキ	ミガキ	AB	2	1/4	1124	
第111図-147	不明	高杯C				暗部結合→ハケメ→ミガキ or ナデ	不明	A	1	(1/1)	1250	
第111図-148	SX30	高杯C				不明	不明	B	6	(1/4)	1150	脚土に暗色の紋分がみられる
第111図-149	不明	高杯D	14			ミガキ、赤彩？	ミガキ、赤彩	C	4	3/4	1254	
第111図-150	SX29	高杯				赤彩、調整不明	不明	D	2		1130	
第111図-151	SX12	高杯				赤彩	不明		2	(1/1)	1058	
第111図-152	SX12	高杯		18		ミガキ、赤彩	ナデ		4	(1/4)	1054	円孔が不明瞭
第111図-153	SX23	高杯A？				赤彩、ミガキ	ナデ	C	4		1095	
第111図-154	SX05	高杯？		10		ミガキ	ハケメ→ナデ	B	2		1018	
第111図-155	SX12	鉢型土器B	12.5	5	5.4	不明	不明	B	4	1/1	1067	
第111図-156	不明	内斜口縁鉢				不明	ミガキ	DE	2	(1/1)	1255	

牛出古墳遺跡古墳時代土師器観察表

図版番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第250図-1	SB03	壺H	17.4			ケズリ？→ミガキ	ナデD	B	2	1/1	1036	
第250図-2	SB03	壺A				赤彩、ミガキ、面倒直線文	赤彩、ミガキ	B	4	1/1	1126	
第250図-3	SB03	壺B2？		6.6		ハケメ	ナデ？	AD	2	(1/1)	1146	1049と同一個体か
第250図-4	SB03	甕J2	16.9	5.4	21.3	ハケメ、胴下部ナデ	ナデ	D	2?	1/2	1037	
第250図-5	SB03	甕J2？	11.2			ハケメ、口縁ナデ	ハケメ、ロ縁、胴ナデ	D	4	1/6	1032	
第250図-6	SB03	小型土器D	8.			口縁ナデ、胴ケズリ	ナデ	A	②	1/4	1125	
第250図-7	SB03	小型土器C	6			赤彩、ミガキ	口縁赤彩、ミガキ、胴ナデ	B	4?	2/4	1123	
第250図-8	SB03	底部		5.6		ケズリ→ナデ	ナデ	B	②	(2/6)	1035	厚さ4.5~5.0mm
第250図-9	SB03	鉢B	9.6	11.2	9.6	ミガキ	杯ミガキ、脚不明	B	2	2/1	1033	3次
第250図-10	SB03・04	高杯E	17	20	11.5	ミガキ、口縁ナデ	ミガキ	B	2イ	1/6	1129	脚部以外見しているので復定
第250図-11	SB03	高杯F	18.9	11.3		ミガキ、口縁ナデ	ミガキ、口縁ナデ脚部無	A	2	1/6	1132	
第250図-12	SB03	高杯B？				ナデ？	ミガキ？	B	④	(1/1)	1127	
第250図-13	SB03	高杯		13.3		ハケメ→ミガキ	ハケメ→ナデ	A	4	(1/6)	1128	
第250図-14	SB03	高杯		12.8		ハケメ→ミガキ	ナデ	A	②	(1/3)	1034	
第250図-15	SB03	高杯		8.2		赤彩、ミガキ	ナデ	D	②	(1/1)	1031	4次
第250図-16	SB03	高杯		6		ハケメ	ハケメ→ナデ	C	6	1/2	1124	
第252図-1	SB04	壺底	6			ナデ、口巻細沈線		B	4	1/4	1067	
第252図-2	SB04	小形土器3	10			ナデ	ナデ、ナデD	D	4?	1/6	1130	
第252図-3	SB04	小形土器C	7.6			ナデツケ	ナデ、ナデD	AD	4	1/2	1068	手づくね？
第252図-4	SB04	甕J2	16.9	5.8	21.5	ハケメ	口縁ハケメ、頸部ナデ、胴ナデ	D	2?	1/1	1063	厚さ4.0~5.5mm、壺か？
第252図-5	SB04	甕J2	16.4			口縁ナデ、頸部ハケメ	ハケメ	D	4?	1/2	1066	
第252図-6	SB04	甕J1	19.1			ナデD	ナデ	AD	4?	2/2	1071	
第252図-7	SB04	甕J1	13	4.5	17.2	口縁ナデ、胴ハケメ・ケズリ→ナデ	コ縁ナデ、胴ナデD	D	2?	2/1	1065	厚さ5.5~7.0mm
第252図-8	SB04	甕J1？	14.2	6	14.2	口縁ナデ、胴ハケ→ミガキ・ナデ	胴ナデD	AD	2?	2/2	1064	厚さ3.5~6.5mm
第252図-9	SB04	高杯2		14		赤彩、ミガキ	ナデ、ナデD	B	4イ	(1/1)	1070	4次
第252図-10	SB04	高杯3		12.7		ミガキ	ナデ	D	4?	1/3	1069	3次
第255図-1	SB05	壺B3	16.8			ナデ(又はミガキ)	ナデ(又はミガキ)	D	②?	3/4	1011	NO.1021と同一個体か？
第255図-2	SB05	壺B2	23.6			口縁ハケメ(ナデ)→ナデ、胴ナデ	口縁ハケメ(ナデ)→ナデ、胴下端	D	④?	3/4	1008	NO.1022と同一個体か？
第255図-3	SB05	底部		6		ケズリ→ミガキ又はナデ	ナデ	BD	2?	(1/1)	1021	厚さ4.0~5.0mm、NO.1011と同一個体か？
第255図-4	SB05	底部		6.2		ケズリ、ナデ	ナデ	AD	2?	(1/1)	1022	厚さ4.0~5.0mm、NO.1008と同一個体か？
第255図-5	SB05	底部		6		ミガキ、頸上、赤彩	ナデD？	BD	2?	(3/4)	1019	厚さ5.0~5.5mm
第255図-6	SB05	壺B3	20.3	7.6	35	ミガキ、口縁ナデ	口縁、ナデ	B	3イ	3/4	1028	厚さ6.0~7.0mm
第255図-7	SB05	壺B2	15.8			不明	ナデD	B	②イ	1/2	1010	
第255図-8	SB05	壺B	16.4			ハケメ	ナデ	A	4イ	1/4	1012	
第255図-9	SB05	壺I	16	8.2		ハケメ	ナデ、ミガキ、口縁ハケメ	BC	4イ	3/4	1005	厚さ5.5~6.6mm
第255図-10	SB05	壺H	12.4	6	20.5	ケズリ→ミガキ、黒色化合物	ナデ？ケ(又はケズリ)	A	4イ	1/1	1002	厚さ3.5~8.5mm
第256図-1	SB05	壺H	11.2	7	17.3	ケズリ→ミガキ、黒色化合物	ナデD、口縁ナデ	BD	4イ	1/1	1004	
第256図-2	SB05	甕K？				ナデ	ケズリ、ナデ	A	2?	(1/1)	1024	厚さ4.0~5.0mm
第256図-3	SB05	壺A3	13.2			簾状文(3条)→波状文、二段波状文	ミガキ	D	4?	1/1	1015	厚さ4.5~5.0mm
第256図-4	SB05	壺A3	16.7			波状文(8条)→波状文	ケズリ→ナデ	D	4?	1/1	1014	口縁部及び内面、外面は3~4.5mm調整
第256図-5	SB05	甕I	16.8	5.95	20.9	ナデD、底部ナデD	ナデ(又はミガキ)	AD	4?	(1/1)	1016	口縁部及び内面、外面は4.5~5.5mm
第256図-6	SB05	甕I	25			ナデD、(又はハケメ)	ナデ	DE	2?	1/1	1027	
第256図-7	SB05	甕J2	22.3			口縁ナデ、胴ハケ	口縁ナデ、胴ハケ	B	2?	3/4	1025	
第256図-8	SB05	甕I？		5.8		ナデD、底部ナデ	ナデ	BE	2?	(1/2)	1023	厚さ4.0~4.5mm
第256図-9	SB05	底部		5.6		ハケメ	ナデ	AD	2?	(1/1)	1020	壺か甕か底面剥離
第256図-10	SB05	底部		6.6		ハケメ、ナデ(又はミガキ)	ナデ	D	2?	(2/2)	1026	石英多い
第256図-11	SB05	高杯B2	18.4			赤彩、ミガキ？	赤彩、ミガキ？			1/1	1007	
第256図-12	SB05	高杯B2	21.2			ミガキ	ミガキ	AD	2イ	1/1	1003	
第256図-13	SB05	器台C	9.6			ハケメ→ミガキ	杯ミガキ、胴ナデ	AB	②イ	1/1	1009	3次
第256図-14	SB05	台付壺脚		8.4		不明	ミガキ	DE	2?	(2/2)	1006	
第256図-15	SB05	高杯脚4		8		ミガキ	ナデ	B	2イ	(3/4)	1112	
第256図-16	SB05	小形土器B		5		赤彩、ミガキ、黒色化合物	ナデ、ナデD	BE	4イ	(2/1)	1018	
第256図-17	SB05	有孔鉢形	12.6	4	6.6	ミガキ	ミガキ	A	2イ	5/6	1017	焼成前穿孔
第256図-18	SB05	鉢形土器	13.8	4.4	6.2	ケズリ、ミガキ	ミガキ	B	2イ	(3/4)	1030	壺か杯か？
第256図-19	SB05	鉢形土器	16.4	3.6	6	ナデ	ナデ(ケズリ(又はミガキ))	AD	4?	3/4	1002	厚さ4.0~5.0mm
第260図-1	SB06	壺B2		5.2		ナデ	ナデ、指頭圧痕	D	4?	(1/4)	1111	厚さ4.5~5.0mm
第260図-2	SB06	壺B2	21			ハケメ→ミガキ	ハケメ→ナデ	A	②イ	1/1	1049	1146と同一個体か
第260図-3	SB06	底部(壺H)		5.2		ナデ、ミガキ	ナデ、ナデD	AD	2?	(3/4)	1046	厚さ4.5~5.0mm
第260図-4	SB06	小形土器C	7.9	3	8.8	口縁ナデ、胴下ケズリ	二段ナデ、胴下ケズリ	A	2イ	1/1	1041	
第260図-5	SB06	小形土器C				ナデ	口縁ミガキ、胴ナデ	A	4?	(1/4)	1131	
第260図-6	SB06	甕K	18.6			ナデ	ナデ	AD	2?	3/4	1044	
第260図-7	SB06	甕Gb				ナデD	ナデD(ケズリ→ナデ)	AE	4?	(1/2)	1050	厚さ4.5~5.5mm全体的に歪い
第260図-8	SB06	甕A		7		波状文→ミガキ	ナデ、ミガキ？	AE	4イ	(1/3)	1042	外側黒色付着物
第260図-9	SB06	台付壺A1	11	7.4	12.6	簾状文(7条)→波状文、ミガキ、胴ハケメ	胴ナデ、胴ナデD	AD	2?	1/1	1048	
第260図-10	SB06	台付壺脚		11.4		胴ナデツケ、胴ナデ	胴ナデ、胴ナデD	AD	2?	(1/3)	1047	

牛出古墳遺跡古墳時代土師器観察表

区原番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第260図-11	SB06	高杯B1	22.2	14.6	14.4	ミガキ、胴ハケメ→ミガキ	杯ミガキ、脚ハケメ	CD	①イ	3/4	1045	3次、厚さ4.0~5.0mm-穿孔部
第260図-12	SB06	高杯A2		16.6		赤彩、ミガキ	ナデ	A	4ア	1/3	1051	5.0~6.5mm(脚)、3次
第260図-13	SB06	高杯B1	21.2			赤彩、ミガキ?	赤彩、ミガキ?		4ア	1/4	1052	厚さ3.5~4.0mm
第260図-14	SB06	高杯4		13.6		不明(ナデorミガキ)	ナデ	B	2	1/4	1038	4次？又は3次
第260図-15	SB06	高杯F				ミガキ	ナデ	A	4イ	(1/1)	1043	
第260図-16	SB06	鉢台A	9.7	11	7.5	ミガキ	ナデ	AD	2ア	1/1	1040	4次
第260図-17	SB06	鉢台D		9.6		赤彩、ミガキ	指頭圧、ミガキ、脚ナデ	AE	4ア	1/2	1039	3次
第262図-1	SB07	甕N	11	4.4	12	ナデ	ミガキ、ナデD、口縁ナデ	AD	4イ	(1/1)	1054	厚さ4.5~5.0mm
第262図-2	SB07	甕J1	16.2			ハケメ、口縁ナデ	ナデD、ナデ	AD	2イ	1/2	1056	外面黒色指圧痕、厚さ4.0~5.0mm
第262図-3	SB07	高杯B1	21.2	16.1	14.7	赤彩、ミガキ	杯赤彩、脚ハケメ	B	2イ	3/4	1110	三角透かし、3次、
第262図-4	SB07	高杯2		9.6		赤彩、ミガキ	杯赤彩、脚ナデ	B	①ア	(1/2)	1055	4次又は3次
第262図-5	SB07	壺Z	11			不明、口縁に能登様	不明	BD	2	1/6	1113	
第262図-6	SB07	八形土器D	7.8	3.4	7.6	ケズリ、口縁ナデD	ナデ、口縁ナデD	A	2	1/1	1059	2次、統成前穿孔
第264図-1	SB08	甕A4	19.8			鋸状文←鋸状文	ミガキ	BD	①ア	1/4	1091	
第264図-2	SB08	甕A4	17.3			鋸状文(7条) →鋸状文	ミガキ	D	4ア	1/6	1092	
第264図-3	SB08	台付甕				ハケメ	ナデ	DE	2ア	(1/3)	1115	
第264図-4	SB08	高杯B1	19.8			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B		1/4	1062	
第264図-5	SB08	高杯F	25			ミガキ	ミガキ	B	2イ	3/4	1060	3次
第264図-6	SB08	鉢台C	10.5	12.1	10.7	ミガキ(ていねい)	指ミガキ、脚ナデ又はミガキ	B	2イ	5/6	1057	3次
第264図-7	SB08	鉢台B	9.2	10.8	7.8	ミガキ	不明	AD	2イ	1/1	1058	3次
第264図-8	SB08	鉢台				ハケメ→ミガキ	杯ミガキ、脚ハケメ	B	①イ	(1/1)	1114	
第264図-9	SB08	二脚						B	2	1/1	1061	重さ290g、穴直径1.4cm
第267図-1	SB09	甕B1	21	6	32.6	ハケメ→ナデ(口縁)、ボタン状貼付(底部)	口縁ハケメ、底ミガキ、脚ナデ→ハケメ	BD	2イ	1/1	1073	
第267図-2	SB09	底部(壺A)		5.5		ハケメ→ミガキ、赤彩	ハケメ	AB	2ア	(1/1)	1074	
第267図-3	SB09	壺B				ミガキ	ナデ	AB	①イ	(3/4)	1076	
第267図-4	SB09	甕J1	17.9			ハケメ、ケズリ	ケズリ、ミガキ、ナデD	BE	3	1/1	1077	
第267図-5	SB09	甕J2	19.2			ハケメ、口縁ナデ	ハケメ→ナデ	D	①ア	1/1	1072	
第267図-6	SB09	台付甕脚		10		ハケメ	ナデ(又はミガキ)	DE	2ア	(1/2)	1075	厚さ4.5~6.0mm
第267図-7	SB09	高杯E	18.4			ミガキ	ミガキ	A	2イ	1/6	1147	
第267図-8	SB09	高杯2		12.6		ミガキ	ナデ(杯)、脚部接合痕(不明)	BD	①イ	1/1	1078	脚端部内に3箇所、3次、脚部1箇所
第267図-9	SB09	鉢台				ハケメ→ミガキ	ミガキ	A	④イ	(3/4)	1116	4次
第267図-10	SB09	土製品				赤彩	赤彩				1117	
第270図-1	SB10	壺A7				T字文、鋸状文、ボタン状貼付	ナデ	AD	①ア	(1/4)	1133	7条、厚さ4.5~5.5mm
第270図-2	SB10	壺A3				赤彩、ミガキ、口縁波状文	赤彩、ミガキ	B	4イ		1121	
第270図-3	SB10	甕A4	17.9			櫛描波状文、鋸状文	ミガキ	DE	①ア	1/3	1097	
第270図-4	SB10	甕A4	20.2			櫛描波状文	ミガキ	AD	2イ	1/2	1098	
第270図-5	SB10	甕A4	27.2	9.2	38	鋸状文→鋸状文間に斜線文、ミガキ	ミガキ	ADE	4ア	3/4	1099	強元時土器表面剥落
第270図-6	SB10	甕J1	16.1			ハケメ、口縁ナデ	ハケメ→ナデ	D	2ア	1/4	1122	1056に類似
第270図-7	SB10	甕L	19.2			ハケ→ナデ	ナデ、ナデD	A	5イ	1/2	1119	
第270図-8	SB10	高杯F	13.8	10	8.7	ミガキ	杯ミガキ、脚ナデ	A	①ア	1/6	1096	脚杯は別個体か
第270図-9	SB10	高杯4		11.2		(ハケメ)→ミガキ	杯ミガキ、脚ハケメ→ナデ	B	2イ	(1/2)	1095	
第270図-10	SB10	高杯4		7.6		ミガキ、赤彩、黒斑しなり穴あり	ハケメ、指圧ナデ	B	4イ	(1/1)	1118	4次
第270図-11	SB10	底部		4		不明	ナデ	A	4イ	(1/2)	1120	
第272図-1	ED14	甕K?	20.4			口縁ナデD、調ケズリ	口縁ナデ(調ナデD)orナズリ	C	2イ	1/4	1104	厚さ4.5~5.0mm
第272図-2	EJ02	甕J1	21.1			ハケメ→ナデ	ハケメ→口縁ナデ	A	4イ	1/6	1137	
第272図-3	DS19	甕J1	20.6			ハケメ、口縁ナデ、色付雲母	ナデ	BD	2イ	1/4	1107	1056に類似
第272図-4	ED13	小形土器B				ナデ	AD	4ア	1/6	1138	1130と同一個体か	
第272図-5	ED13	底部		7.8		ミガキ	ハケメ	AE	2イ	(5/6)	1109	
第272図-6	EK05	甕K	13			ナデ	ナデ	A	4イ	1/4	1140	
第272図-7	EC14	小形土器C	7.6			指頭圧痕、輪状痕	ナデ	A	4イ	1/4	1139	粗編なつくり
第272図-8	EF05	壺形二器	4			粗いナデ、一部ハケメ	粗いナデ	B	①イ	(1/2)	1102	
第272図-9	ED14	高杯B2	21.2			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2イ	1/3	1101	
第272図-10	DT18	高杯				ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	C	④イ	(1/2)	1100	厚さ4.5~5.5mm、3次
第272図-11	EE04	高杯2		11.8		赤彩、ミガキ	ハケメ、ナデ	BE	2イ	(1/2)	1103	3次
第272図-12	EC14	高杯				ミガキ	杯ミガキ	B	2イ	(1/1)	1136	5次？
第272図-13	EE14	高杯				ミガキ	ミガキ	A	①イ	(1/1)	1134	厚さ4.5~5.5mm
第272図-14	ED14	高杯				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ			(1/4)	1141	
第272図-15	EH12	高杯				赤彩、ミガキ	杯、赤彩、ミガキ、脚不明	B	4イ	(1/2)	1135	
第272図-16	EG08	高杯4		10.6		ハケメ→ミガキ	脚、ハケメ→ナデ	B	①イ	(1/1)	1106	3次
第272図-17	ED17	高杯				ミガキ	ナデ	B	4イ	(1/1)	1105	3次
第272図-18	ED06	台付甕		9.5		ハケメ→ミガキ	調ミガキ?脚ミガキ	A	①イ	(1/1)	1108	脚
第272図-19	EK05	甕B				櫛描直線文（縦羽状）	ハケメ→ナデ	D	4イ		1143	
第272図-20	ES03	甕B				ハケメ→ヘラ描直線文（縦羽状）					1142	
第272図-21	TT03	甕B				櫛描直線文（縦羽状）	ナデ	D	4イ		1144	
第272図-22	EC14	壺A				T字文、ボタン状貼付	ミガキ	B	①イ		1145	

奈良・平安時代遺物観察表

沢田鍋土遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	実測図	実測図	整理番号	備考
第115図-1	SB01	杯A	14.7	9.6		4.8	底部調整不明		灰白	甘く軟質	床面	2	9	254	
第 〃 図-2	SB01	杯A	14				回転ナデ		明黄色	甘く軟質	炭化、柱跡P1	8		265	
第 〃 図-3	SB01	杯A	15.6				回転ナデ		黄白色	やや甘く軟質	包含層	6		256	
第 〃 図-4	SB01	杯A		6.5			底部ヘラ切り未調整		黄灰色	やや甘く軟質	フク土		10	253	
第 〃 図-5	SB01	杯A	17.2	10.2		4.25	「井」印、底部ヘラ切り未調整		灰白色	やや甘く軟質	包含層内	1	7	252	
第 〃 図-6	SB01	杯A	14	8.2		3.6	底部ヘラ削り、体部横ヘラ描き	口	黄・橙	良好			7	251	
第 〃 図-7	SB01	杯A	15	11		4.05	底部ヘラ削り、内面ヘラ削り		灰	良好	フク土	1.5	5	255	
第 〃 図-8	SB01	蓋B	14.9				回転ナデ		橙色	やや甘く軟質	炭面、検出面	5.5		265	
第 〃 図-9	SB01	蓋B	19.8				回転ナデ		灰色	良好	検出面	1		264	
第 〃 図-10	SB01	長頸壺					回転ナデ		黒褐色	良好	包含層			262	
第 〃 図-11	SB01	甕C？	18.9				回転ナデ		灰色	良好	フク土	5		258	口縁部
第 〃 図-12	SB01	土師器鍋C	24				頸部下に外面ハケ		橙色	良好	フク土	2		268	
第 〃 図-13	SB01	甕A		6			外面タタキ		灰	良好	床面		11	257	底部
第 〃 図-14	SB01	土師小型鍋	24				外面不明、内面回転ナデ		橙色	やや甘く軟質	フク土	6		270	
第 〃 図-15	SB01	土師長頸鍋C	30.1				内面ナデ、ハケ後ヨコハケ、外面タタキ		橙色	良好	炭化、検出面 フク土	13		271	
第115図-1	SB02	土師長頸鍋C	24				内面ナデ、ハケ後ヨコハケ、外面タタキ		赤褐色	良好		16		274	
第 〃 図-2	SB02	土師長頸鍋C	22.3				内面上部ヨコハケ、下部タテハケ、外面タタキハケ		赤褐色	良好	カマドそで部分	18		275	
第 〃 図-3	SB02	土師長頸鍋C	37				内面上部ヨコハケ、下部タテハケ、外面タテハケ後一部ヨコハケとナデ		赤褐色	良好	フク土			272	
第 〃 図-4	SB02	土師甑					内面タテハケ		赤褐色	やや甘く軟質	フク土			273	
第118図-1	SY01	杯A	14.6	9.4		3.4	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好緻密	SX3：-33	0.5	13	204	
第 〃 図-2	SY01, 02	蓋B	15		0.8	1.4	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		6		232	
第 〃 図-3	SY01	杯B	14.8	10.2		4.9	底部亘転ヘラ削り		灰	良好		11	7	205	
第 〃 図-4	SY01	短頸壺B	13.6				回転ナデ		灰	良好緻密		7		234	
第 〃 図-5	SY01	皿？					底部ヘラ削り	井	灰	良好				233	
第 〃 図-6	SY01	鍋A	47.8				回転ナデ		灰	良好緻密		1		235	
第 〃 図-7	SY01	横杵					体部外面タタキ、スリケシ、体部内面刷毛ナデ		灰	良好				231	
第118図-1	SY02	杯A	12.8	8		5	底部不明瞭（ヘラ切り？）未調整		灰	良好		7	11	202	
第 〃 図-2	SY02	杯A	15	8		4.5	底部ヘラ切り未調整		灰白	やや甘く軟質		0.5	32	201	
第 〃 図-3	SY02	杯B	14.7	10		4.4	底部回転ヘラ削り		灰	良好		1	5	203	
第 〃 図-4	SY02	蓋A	18.4				外面沈線後櫛描波状文		灰色	やや甘く軟質	検出面	1		200	
第120図-1	SW01	杯A	14			3	底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰	良好	C層	1	16	20	
第 〃 図-2	SW01	杯A	13.4	9		3.4	底部ヘラ切り後ナデ		灰	やや甘く軟質	B層・C層上面	3	8	28	
第 〃 図-3	SW01	杯A	14.2	9.8		3.5	底部不明瞭		灰白	やや甘く軟質	C層被下部	10	32	1	
第 〃 図-4	SW01	杯A	16.6	9.8		3.4	底部不明瞭		灰	良好	A層上面、B層上面	9	11	5	
第 〃 図-5	SW01	杯A	12.2	6.2		4	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好緻密	砂礫層	2	17	30	
第 〃 図-6	SW01	杯A	14.4	6.4		3.9	底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰白	良好	B－1層	5	17	14	
第 〃 図-7	SW01	杯A	12.4	4.4		4.4	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好	C層	1	19	61	
第 〃 図-8	SW01	杯A	15.4	8.6		4.1	底部ヘラ切り後ナデ		灰白	甘く軟質	A層	3	14	62	
第 〃 図-9	SW01	杯A	12.8	7.5		3.8	底部ヘラ切り後中央部板ヘラナデ		灰白	良好	炭化ハネ層・B－1層	6	17	18	
第 〃 図-10	SW01	杯A	12.8	6.6		4.6	底部ヘラ切り後板ヘラナデ		明黄色	良好	C層被下部	4	32	52	
第 〃 図-11	SW01	杯A	13	6		4.1	底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰白	良好	炭層・C層上面	9	8	6	
第 〃 図-12	SW01	杯A	12.4			4.5	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好	炭化ハネ層・下部炭・C層上面	8	32	4	
第 〃 図-13	SW01	杯A	12.6			4.2	底部不明瞭（ヘラ切り後不明）		黄褐色	甘く軟質	炭化ハネ層下に多い	3	32	67	
第 〃 図-14	SW01	杯A	13.8	9.8		4.5	底部ヘラ切り後ナデ		灰	やや甘く軟質	C層被下部	4	12	65	
第 〃 図-15	SW01	杯A	13.8	4.4		4.4	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好	C層	14	21	70	
第 〃 図-16	SW01	杯A	14	3.4		4.1	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好	砂礫層	1	7	25	
第 〃 図-17	SW01	杯A	14.4			4.4	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好	炭層（炭化物層）焼成トレンチ	18	17	3	
第 〃 図-18	SW01	杯A	14	7.4		4.5	底部ヘラ切り後ナデ		灰白	やや甘く軟質	炭層（炭化物層）	10	32	13	
第 〃 図-19	SW01	杯A	14.8	8.4		4.1	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好緻密	C層	13	17	2	
第 〃 図-20	SW01	杯A	14.4	6		4.7	底部ヘラ切り後ナデ		黄褐色	やや甘く軟質	C層	10	11	53	
第 〃 図-21	SW01	杯A	14.8	5		4.6	底部ヘラ切り		灰白	やや甘く軟質	C層被下部	10	11	68	
第 〃 図-22	SW01	杯A	14.4	6.4		4.4	底部ヘラ切り後ナデ		灰白	やや甘く軟質	A層1	3	8	26	内面に一箇所人名墨書
第 〃 図-23	SW01	杯A	14.8	6.2		4.3	底部ヘラ切り後ナデ		灰白	良好	C層下部	9	18	72	
第 〃 図-24	SW01	杯A	15.8	7		4.1	底部不明瞭（ヘラ削り後ナデ）		灰白	良好	A層1	9	6	10	
第 〃 図-25	SW01	杯A	12.8				底部欠損	井	灰	良好緻密	A層上面	3		35	
第 〃 図-26	SW01	杯A					底部不明瞭	井	灰	良好	炭層（上層は多い）	7		34	

沢田鎮土遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	器高C(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎成	層位	出現時期(B)中(C)後(D)古	遺構番号	備考
第120図-27	SW01	杯A	14					底部欠損	井	灰	良好		2	36	
第#図-28	SW01	杯A	13.8	7.6			4.4	底部ヘラ切り後板ヘラナデ	×刷毛ナデ	暗褐色	良好	北区C, 砂礫層	2	15 245	
第#図-29	SW01	杯A	12.6	6.4			4.8	底部ヘラ切り後ナデ	×刷毛ナデ	灰	良好	C層最下層	12	20 8	猫体付着
第#図-30	SW01	杯A		5.4				底部ヘラ切り後ナデ	×刷毛ナデ	灰	良好	砂礫層		11 46	
第#図-31	SW01	杯A		6				底部板ヘラナデ	×刷毛ナデ	灰	良好	C層上部		8 44	猫体付着
第#図-32	SW01	杯A		2.4				底部ヘラ切り後ナデ	×刷毛ナデ	灰白	やや甘く軟質	C層上部		3 37	
第#図-33	SW01	杯A		9				底部ナデ	>	灰	良好緻密	CP－1最下部		9 38	
第#図-34	SW01	杯A		6				底部ヘラ切り	×？	灰白	良好	C層下部		9 32	
第#図-35	SW01	杯A						底部ヘラ切り後ナデ	×	灰	良好	7ａ層		8 41	
第#図-36	SW01	杯A		4.8				底部ヘラ切り後ナデ	×	灰白	やや甘く軟質	C層		16 40	
第#図-37	SW01	杯A		8				底部ヘラ切り後板ヘラナデ	×	灰白	やや甘く軟質	C層		7 206	
第#図-38	SW01	杯A		8.6				底部ヘラ切り	×	灰	良好	砂礫層		42	
第#図-39	SW01	杯A	14.4	3.8			4.6	底部ヘラ切り後板ヘラナデ	線状束	灰	良好	砂礫層	6	8 11	
第#図-40	SW01	杯A						底部板ヘラナデ	—	灰	良好	5ｂそう		8 45	
第#図-41	SW01	杯A		8				底部ナデ	—	灰	良好	灰原上層		5 207	
第#図-42	SW01	杯A	13.6	8			2.8	底部ヘラ切り後ナデ	—	灰	良好	C層	8	20 54	内面Hi 口縁内Hi 底部F.4外周3.8
第#図-43	SW01	杯A	13.6					杯と杯重ね焼き		灰	良好	7ｂ層, 砂礫層	5	209	内面Hi 口縁内Hi 口縁外Hi 2
第#図-44	SW01	杯A		13				置ね焼き(底部に焼台付痕？)		灰	良好	C層下部		32 55	底部付台 二次重ね
第#図-45	SW01	杯A		6.8				底部ヘラ切り後ヘラ削り(放射状)		灰白	良好	CP－1最下部		32 50	ヘラ削り後の放射状の痕跡
第121図-46	SW01	蓋						天井部回転ヘラ削り大ヘラ描きあり	大	灰	やや甘く軟質	灰原上層上面		39	
第#図-47	SW01	蓋B	15.6		2.3	2.8		天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好	7ａ層	7	103	
第#図-48	SW01	蓋B	15.6		2.5	3		天井部回転ヘラ削り		灰	良好緻密	６－２層 C層最下部	18	113	
第#図-49	SW01	蓋B	16		1.5	2.4		天井部回転ヘラ削り		灰	良好緻密	灰原(遺構)上層	10	104	
第#図-50	SW01	蓋B	16.8		2.4	3.2		天井部回転ヘラ削り		灰白	やや甘く軟質	灰原一括	11	105	
第#図-51	SW01	蓋B	16		2	2.8		天井部回転ヘラ削り		灰白	良好	C層	3	108	
第#図-52	SW01	蓋B	17.8		1.7	2.4		天井部回転ヘラ削り		灰白	良好	砂礫	3	112	
第#図-53	SW01	蓋B						天井部回転ヘラ削り,つまみ部偏平		灰白	良好	A層		115	
第#図-54	SW01	杯B	14	10	3.9	3.9		底部回転ヘラ削り		暗褐色	良好緻密		5	12 82	
第#図-55	SW01	杯B	14.4	10.8	4.5	4.5		底部回転ヘラ削り		灰	良好緻密	砂礫層	4	12 92	
第#図-56	SW01	杯B	14.8			4.1		底部回転ヘラ削り		灰白	良好	南区D, C層	5	5 100	
第#図-57	SW01	杯B	17	6	3.2	3.2		底部回転ヘラ削り		灰	良好	灰原(シルト)層(すこ前)	2	15 75	重ね焼(２枚)
第#図-58	SW01	杯B		7				底部回転ヘラ削り		灰	良好緻密	C層下部		13 81	
第#図-59	SW01	杯B	13	8	2.7	3.2		底部回転ヘラ削り		灰	良好	セッション第２層	4	8 76	
第#図-60	SW01	杯B	12.8	8.8	3.6	4.1		底部回転ヘラ削り		灰白	良好	7ａ層	4	9 85	内面付着金属補修?
第#図-61	SW01	杯B	12.8	8	3.4	3.6		底部回転ヘラ削り		灰	良好緻密	C層上部北区A	2	4 99	
第#図-62	SW01	杯B	13.4	10	3.8	4		底部回転ヘラ削り		灰	良好緻密	A層上面	1	8 77	
第#図-63	SW01	杯B	16.2	12	3.2	3.5		底部回転ヘラ削り		暗褐色	良好	Ｂ－１層	2	6 96	
第#図-64	SW01	杯B	15	11	3.4	3.5		底部回転ヘラ削り		灰	良好	7ａ層	5	10 80	
第#図-65	SW01	杯B	16.2	10.8	3.5	3.9		底部回転ヘラ削り		灰	良好緻密	灰原シルト層	4	8 90	
第#図-66	SW01	杯B	14.4	11	3.6	4		底部回転ヘラ削り		暗褐色	やや甘く軟質	砂礫層	14	12 96	
第#図-67	SW01	杯B	16.2	11.2	3.9	4.4		底部回転ヘラ削り		灰白	やや甘く軟質	C層	14	14 84	
第#図-68	SW01	杯B	15	12	3.7	4		底部回転ヘラ削り		灰	良好	C層下部	6	14 86	
第#図-69	SW01	杯B	15.6	11	4.7	4.9		底部回転ヘラ削り		黄褐色	やや甘く軟質	灰原一括砂礫層	1	14 88	
第#図-70	SW01	杯B	17.6	12	4.1	4.5		底部回転ヘラ削り		灰白	やや甘く軟質	砂礫層	2	5 93	
第#図-71	SW01	蓋B	23.4		2.5	3.7		天井部回転ヘラ削り		暗褐色	やや甘く軟質	北区D, C層上部	22		102
第#図-72	SW01	杯B	18					底部欠損(口縁下に凹線あり)		灰	良好緻密	灰色砂層中		9	
第#図-73	SW01	杯B	18.8					底部欠損(口縁下に凹線あり)		灰白	良好	第２－１層(表土)	3	4 91	
第#図-74	SW01	杯B	19.8					底部回転ヘラ削り		灰白	良好	C層下部	2	87	
第#図-75	SW01	皿A	20.8	16.6			1.2	回転ナデ		灰	良好	７ｃ層	2	155	
第#図-76	SW01	皿A	19.6					口縁部一内面回転ナデ,底部不明瞭		灰	やや甘く軟質	砂礫層	3	156	
第#図-77	SW01	皿A	16.8	15			1.6	底部回転ヘラ削り		灰	良好	南区D C層	3	3 280	
第#図-78	SW01	皿A	20.8	14			2.2	底部回転ヘラ削り		赤褐色	やや甘く軟質	C層	2	3 157	
第#図-79	SW01	皿A	19.4	9			2	底部回転ヘラ削り後回転ナデ		灰	良好	６－５－５層	11	210	
第#図-80	SW01	皿A		6				底部回転ヘラ削り		灰	良好	５ｃ, ｄ層		30 173	
第#図-81	SW01	皿B	21.8	20			2.7	底部回転ヘラ削り		灰	良好	第２層(表土)北区	3	3 153	
第#図-82	SW01	皿B	25.8	23			2.2	底部回転ヘラ削り		灰	やや甘く軟質	C層, C層下部	7	7 154	
第#図-83	SW01	鉢A	17.4	13.8	1.4	1.8		底部回転ヘラ削り		灰	良好	A C層	4	18 159	
第#図-84	SW01	鉢A	20	14.4		2		底部欠損		灰	良好		2	4 158	

沢田鎮土遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 A(cm)	器高 B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	遺構検出面 /20	遺構確認面 /20	整理番号	備考
第121図-85	SW01	鉢B	17	13.6	5.6	2	底部回転ヘラ削り		灰白	良好	土師器トレンチ内	5	8	247	
第 〃 図-86	SW01	鉢B	17	9.8		1.8	底部欠損		灰	良好	C層	3	4	163	
第 〃 図-87	SW01	鉢B	18.8	16		1.7	底部回転ヘラ削り		灰	良好	C層	4	4	161	糠体付着
第 〃 図-88	SW01	鉢B	18	13.6	2.2	3	底部欠損		灰白	やや甘(軟質)	御堂A ベルト7a層	3	3	246	
第 〃 図-89	SW01	鉢B	18	14.6		2.5	底部欠損		灰	良好	C層	4	4	162	
第 〃 図-90	SW01	鉢B		16.4			底部回転ヘラ削り		灰	良好	C層		3	160	
第 〃 図-91	SW01	瓶杯C					杯部外面回転ヘラ削り、内・外面回転ナデ		灰	良好	7 a 層			149	
第 〃 図-92	SW01	瓶杯C					底部外面回転ヘラ削り、内・外面回転ナデ		灰白	やや甘(軟質)	浜色シルト層			151	
第 〃 図-93	SW01	瓶杯A					胴部と杯部接合のための誤差を炊沈編あり		黄褐色	D	5 ラ層			152	あて具痕有り
第 〃 図-94	SW01	瓶杯C					天井部回転ヘラ削り		灰	やや甘(軟質)	C層上部			148	
第122図-95	SW01	瓶杯C？		9.6			胴部外面回転ナデ、胴部内面ナデ		灰	良好(軟質)	5 ラ層		5	165	胴部
第 〃 図-96	SW01	瓶台？		8.8			回転ナデ		暗褐色	良好	1号窯		14	166	
第 〃 図-97	SW01	瓶C	26	10		7.4	胴部破損ヘラ削り、表面ヘラ削り、体部外面ヘラ削り、内面回転ナデ		灰	良好	C層直下面	13	14	172	
第 〃 図-98	SW01	横瓶	12				口頸部宜転ナデ		灰	良好(軟質)	御堂A、C層上部、御堂A、C層上部	29		144	
第 〃 図-99	SW01	横瓶	13				回転ナデ		灰	良好(軟質)	御堂D、C層	8		222	口頸部自然釉
第 〃 図-100	SW01	横瓶	12				口頸部回転ナデ、体部外面不規則ケズリ		灰	良好(軟質)	C層	7		146	
第 〃 図-101	SW01	横瓶	12				口頸部匠転ナデ、体部外面タタキ		灰	良好(軟質)	B層、C層上部	2		145	
第 〃 図-102	SW01	横瓶	11.6				口頸部一内面回転ナデ、体部外面タタキ		灰	良好(軟質)	C層	13		147	自然釉有り
第 〃 図-103	SW01	横瓶	14.4				口頸部外面タタキスリケシ、内面回転ナデ		灰	良好(軟質)	御堂A トレンチ北、C層	11		223	口頸部
第 〃 図-104	SW01	横瓶					口頸部ヨコナデ、体部外面不規則ケズリあり、胴部内面回転ナデ		灰	良好(軟質)	北区砂礫層			218	
第 〃 図-105	SW01	横瓶	12.2				体部外面タタキ後宜転ヘラ削り、口頸部一内面回転ナデ		灰	良好(軟質)	南区D、C層		12	211	体部巻合部
第 〃 図-106	SW01	横瓶	12				底部外面タタキ後回転ヘラ削り、体部内・外面回転ナデ		灰	良好(軟質)	砂礫層			143	自然釉有り
第 〃 図-107	SW01	横瓶					体部外面タタキ、内面ナデ、あて具痕あり		灰	良好(軟質)	北区C砂礫層			217	体部(底部)自然釉
第 〃 図-108	SW01	横瓶					底叢部ケズリタキ、内面ナデ、あて具痕あり		灰	良好(軟質)	南区(底付近層)			215	体部(底叢部)
第 〃 図-109	SW01	横瓶					底部部ナデ、体部外面回転ヘラ削り、体部内面指頭痕あり		灰	良好(軟質)	北区D、C層上部			213	体部(底叢部)
第 〃 図-110	SW01	横瓶					底叢部不明瞭		黒褐色	良好(軟質)	北区7 3砂礫層			216	体部(底叢部)自然釉
第122図-111	SW01	長頸壺A	10				内・外面回転ナデ		黒褐色	良好	砂礫層		32	137	
第 〃 図-112	SW01	長頸壺A	12.4				内・外面回転ナデ		灰	良好(軟質)	御堂A ベルト7a層、C層		30	139	
第 〃 図-113	SW01	長頸壺A					口頸部外面回転ナデ後ナデ、体部外面回転ヘラ削り		灰白	やや甘(軟質)	北区C層、御堂A ベルト7a層、C層			221	口頸部体部
第 〃 図-114	SW01	長頸壺A					外面タタキスリケシ、内面匠転ナデ		灰	良好	浜色シルト層			136	
第 〃 図-115	SW01	長頸壺A					外面タタキスリケシ、内面匠転ナデ		灰	良好	砂質土層			135	
第 〃 図-116	SW01	長頸壺A					体下部ケズリ後ヘラ削り、体上部外面ナデタキスリケシ、内面匠転ナデ		灰	良好(軟質)	7 a層C層、御堂A			133	
第 〃 図-117	SW01	長頸壺A		13.6			底部欠損、内・外面回転ナデ		黒褐色	良好	C層、C層上部		5	134	
第 〃 図-118	SW01	長頸壺A	9.4				底二段目に刻ヘラ状ケズリ痕跡の為部あり、体下部外面一部第一ヘラ削り、内面回転ナデ		灰	やや甘(軟質)	北区A、C層上部、御堂A ベルト7a層			228	
第 〃 図-119	SW01	長頸壺A		10.2			内・外面回転ナデ、底部欠損		灰	良好(軟質)	C層下部		1	130	自然釉有り
第 〃 図-120	SW01	長頸壺B		10			底部欠損、胴部破損ヘラ削り、底部内面ナデ、体部内・外面回転ナデ		灰	良好	6 一A層		16	131	糠体付着
第 〃 図-121	SW01	広口壺？					宜転ナデ		灰	良好	御堂A ベルト7a層、御堂A、C層上部			220	口頸部自然釉あり
第 〃 図-122	SW01	壺蓋	12				天井部回転ヘラ削り		灰	やや甘(軟質)	C層上部3			123	
第 〃 図-123	SW01	壺蓋	10.8		2.8	3.5	天井部回転ヘラ削り		灰	やや甘(軟質)	C層		7	121	
第 〃 図-124	SW01	壺蓋	11.8			2.3	天井部不明瞭(ヘラ削り？)内・外面回転ナデ		灰	良好	6 一A層		6	170	
第 〃 図-125	SW01	壺蓋	13				天井部回転ヘラ削り		黒褐色	良好	灰原		1	122	自然釉有り
第 〃 図-126	SW01	壺蓋	12.8			3.4	天井部左右円ヘラ、沈線あり		灰	良好	浜色シルト層		22	244	7(御堂)あり(御堂)あり
第 〃 図-127	SW01	短頸壺B	11				内・外面回転ナデ		灰	良好(軟質)	C層最下層		10	127	整理番号132と接合
第 〃 図-128	SW01	短頸壺B	10.4				回転ナデ		灰	良好	灰原		3	224	糠体付着
第 〃 図-129	SW01	短頸壺B	10				内・外面回転ナデ、外面筋状の条線あり		灰	良好(軟質)	6 一A層		9	128	沈線
第 〃 図-130	SW01	短頸壺B	11.6				内面回転ナデ、外面タタキスリケシ		灰	良好(軟質)	C層、7 a層、5ラ層		32	124	
第 〃 図-131	SW01	短頸壺C	15.2				内面回転ナデ、外面タタキスリケシ		灰	良好	A層上面		8	125	
第 〃 図-132	SW01	短頸壺C	15.6				内面宜転ナデ、胴部一肩部外面タタキ(ナデ)後回転ヘラナデ(ケズリ)ヘラ		黒褐色	良好	A層上面		7	126	
第 〃 図-133	SW01	無頸壺E	11				回転ナデ		灰	良好(軟質)	御堂A、C層上部、御堂A、C層上部		4	225	自然釉
第 〃 図-134	SW01	短頸壺E	14				外面タタキスリケシ、内面回転ナデ		灰	良好	御堂A、C層上部、7 3砂礫層		9	226	
第 〃 図-135	SW01	無頸壺E	12.4				回転ナデ		灰	良好(軟質)	御堂A、C層上部、7 3砂礫層		8	236	
第 〃 図-136	SW01	短頸壺E	12.6				外面不明瞭、内面ナデ		灰	良好(軟質)	御堂A ベルト6a上部		9	142	自然釉有り
第 〃 図-137	SW01	合形付耳壺					耳部へ向け削り痕あり、内、外面ヨコナデ		灰	良好	C層上面6一3			208	
第124図-138	SW01	壺C	14.8				外面回転ナデ、内面刷毛ナデ(縦状工具痕)		灰	良好	C層		32	141	自然釉有り
第 〃 図-139	SW01	甕C	21				外面タタキスリケシ、口頸部回転ナデ、内面ナデ		灰白	やや甘(軟質)	砂礫層		13	180	
第 〃 図-140	SW01	甕C	19.6				口頸部一肩部外面ヨコナデ、内面ナデ、体部外面タタキ		赤褐色	良好	5ラ層、C層最下層		6	175	
第 〃 図-141	SW01	甕C	20				口頸部ヨコナデ、体部外面タタキ後ヨコナデ、体上部内面ハケ目、その下部はナデ、底下部はヘラケズリ		暗褐色	良好	C層上面		4	174	
第 〃 図-142	SW01	甕D	31.8				回転ナデ		灰	良好	砂礫層		6	177	

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(Mm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	出土位置(X=m/Y=m/Z=m)	実測番号	備考
第124図-143	SW01	甕D	36				口縁部～内面回転ナデ,体部外面タタキスリケシ		灰	良好			178	
第 * 図-144	SW01	甕D	38				外面タタキスリケシ,内面ハケ目後ヨコナデ		灰	良好	砂礫層	3	176	口縁部に1条の凹線
第 * 図-145	SW01	甕D	48				外面タタキスリケシ,内面ハケ目後ヨコナデ(同心円)		灰	良好	砂礫層	2	177	
第 * 図-146	SW01	甕A	19.4				内・外面回転ナデ		灰白	良好	排土	8	164	
第 * 図-147	SW01	甕A	25.2				外面タタキスリケシ,内面ヨコナデ		灰	良好	砂礫層	3	193	
第 * 図-148	SW01	甕A	28				回転ナデ		灰	良好	砂礫層	10	196	
第 * 図-149	SW01	甕A	26				回転ナデ	井	灰	良好	砂礫層	10	195	
第125図-150	SW01	甕A	29.6				回転ナデ		黒褐色	良好	表土層	7	237	
第 * 図-151	SW01	甕A	34				外面タタキスリケシ,内面ヨコナデ		灰	やや甘	黒色粘土層	2	194	
第 * 図-152	SW01	甕A	30.8				回転ナデ		灰	良好	C層砂下部	9	198	
第 * 図-153	SW01	甕A					口縁部外反回転ナデ,口縁部内面回転ナデ,体部外面タタキ,内面当て具痕(同心円)残る		灰	良好	SW.C,C下部		192	
第 * 図-154	SW01	甕A	33.5				回転ナデ		灰	やや甘	C層砂下部	4	197	
第 * 図-155	SW01	甕A	44				口縁部外反タタキスリケシ,内面回転ナデあり,底あり		灰	良好	C層砂礫層	4	183	
第 * 図-156	SW01	甕A	49.4				口縁部タタキスリケシ,内至ヨコナデ		黒褐色	良好	砂礫層	5	219	口縁部自然釉
第 * 図-157	SW01	甕A	48				口縁部外反タタキスリケシ,内面回転ナデ		灰	良好	C層砂下部	8	182	
第 * 図-158	SW01	甕A	58.6				口縁部櫛描波状紋上位線,内面回転ナデ		灰	良好	砂礫層,C層	2	190	
第126図-159	SW01	甕A	50				口縁部沈線後櫛描波状紋		灰白	やや甘(軟質)	C層,灰層	5	185	
第 * 図-160	SW01	甕A	53				口縁部櫛描波状紋上位線,内至ヨコナデ		灰	良好(軟質)	C層上部	8	186	
第 * 図-161	SW01	甕A	43				口縁部/櫛描波状紋,上位線,内面ヨコナデ		灰	良好	C～E層下部,灰層,石層	5	184	自然釉有り
第 * 図-162	SW01	甕A	45				口縁部下部櫛描波状紋,体部外面タタキ,内面ヨコナデ		灰	良好	砂礫層,C層,E層	10	238	
第 * 図-163	SW01	甕A	45				口縁部外反櫛描波状紋,口縁部内面ヨコナデ,体内面タタキ,胎土内面ナデ		灰	良好	砂礫層,下部,C層	4	187	
第127図-164	SW01	甕A	62				口縁部櫛描波状紋上位線,内面回転ナデ		黒褐色	良好	SW.シルト層	1	188	
第 * 図-165	SW01	甕A	63				口縁部沈線後櫛描波状紋,内面回転ナデ		灰	良好	灰層	2	189	
第 * 図-166	SW01	甕A					口縁部櫛描波状紋,胴部一つ穴,内面回転ナデ		灰	良好	C層砂下部		191	
第 * 図-167	SW01	甕					体部外面ヘラ描きあり	あり	灰	良好	表土層,SW.C,E,灰層,砂礫層		248	底部ヘラ描き
第 * 図-168	SW01	甕A		3			外面不明瞭,内面ハケ		黄褐色	良好	C層上層,灰層上層	7	199	丸底
第 * 図-169	SW01	円筒埴	14	15.5		5	回転ナデ+字形透かしあり		灰	良好(軟質)	表土A層上層,灰層,C層	4	241	透かしあり(内口径11.4)
第 * 図-170	SW01,表土	円筒埴		14.8			回転ナデ後ヘラによる切込み,逆しあり		灰	良好	C層下部		240	
第 * 図-171	SW01	円筒埴	10.8				不明瞭(回転ナデ?)		灰	やや甘(軟質)	トレンチ内,A,C層	7	239	内径6.8
第 * 図-172	SW01	円筒埴	14				回転ナデ		黒褐色	良好(軟質)		3	243	-8.6
第 * 図-173	SW01	円筒埴	12.4				回転ナデ		灰	良好(軟質)	ベタ層,表土,シルト,E,灰層,土上層	8	242	(内口径10.0)
第 * 図-174	SW01	椀?					口縁下に凹線が廻る		黄褐色	やや甘(軟質)			309	
第 * 図-175	SW01	椀?					口縁下に凹線が廻る		灰白色	良好			310	
第 * 図-176	SW01	椀?					口縁下に凹線が廻る		灰	良好			311	
第 * 図-177	SW01	土師器鉢D	17				口縁部ヨコナデ,体部外面ヘラ磨き,体～底内面ハケ		灰	良好	灰層一括	7	227	
写真図版P.26	SW01	杯A	13.6	7		4.6	底部ヘラ切り		灰	良好	灰色砂層中	7	14	19
写真図版P.26	SW01	皿	18.4				天井部面転ヘラ削り,匹線が廻る		灰	良好	灰色砂層中	6	110	
第128図-1	遺構外	杯A					底部ヘラ切り後ヘラ状工具によるナデ		橙色	やや甘(軟質)			316	
第 * 図-2	遺構外	杯A					底部ヘラ切り後ヘラ工具によるナデ		橙色	やや甘(軟質)			314	
第 * 図-3	遺構外	杯A					底部ヘラ切り後ナデ	一	橙色	D			317	
第 * 図-4	遺構外	杯A					底部ヘラ切り後ヘラ工具によるナデ		橙色				315	
第 * 図-5	遺構外	杯A	14.4	4.6		4	底部ヘラ切り後ヘラナデ		淡黄褐	良好		2	32	278
第 * 図-6	SF02	杯A					杯身面転ナデ		黄褐色	良好			297	
第 * 図-7	遺構外	杯B					杯身底部面転ヘラ削り			やや甘(軟質)			318	
第 * 図-8	SF02	蓋B					天井部2/3回転ヘラ削り		灰	良好(軟質)			296	
第 * 図-9	遺構外	蓋B	15.4			2.85	天井部回転ヘラ削り		灰	良好(軟質)		8	281	
第 * 図-10	SF02	蓋B					天井部2/3面転ヘラ削り		黄灰色	良好(軟質)			295	
第 * 図-11	遺構外	蓋B	16				天井部面転ヘラ削り		灰白	やや甘(軟質)		4	290	
第 * 図-12	SD10	長頸瓶C	3.8				宣転ナデ		灰	良好(軟質)		4	293	
第 * 図-13	遺構外	長頸瓶A	7.2				宣転ナデ		灰	良好(軟質)		32	284	
第 * 図-14	SD10	鉢B	16.6				底部欠損		灰	良好(軟質)		8	294	
第 * 図-15	遺構外	長頸壺A	8.1				回転ナデ		灰	良好(軟質)	フク土	9	288	
第 * 図-16	遺構外	土師小型壺					外面回転ナデ,内面カキ		橙色	良好			298	
第 * 図-17	遺構外	土師小型壺					外面体部ハケによるカキ		赤褐色	やや甘(軟質)			308	胴部中位に1条の沈線
第 * 図-18	遺構外	土師小型壺		8.8			外面ヘラ削り		淡黄橙	やや甘(軟質)		13	283	
第 * 図-19	遺構外	土師器鉢B		8			底部ヘラ削り,内至,体部外面回転ナデ		黄褐色	やや甘(軟質)			287	
第 * 図-20	SD02	土師器鉢B	18.6				体部内面ハケ後ヨコナデ,口縁部ヨコナデ		黄褐色	D		6	291	
第 * 図-21	遺構外	土師長頸壺C	19.2				内面ハケ,口縁部外反ナデ,体部外面ハケ		黄褐色	D		2	279	

沢田鍋土遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎土	焼成	層位	出土位置	出土層位	整理番号	備考
第129図-22	遺構外	土師器坏類C	24				不明瞭		黄褐色		甘く	軟質		9	282	
第 ″ 図-23	遺構外	土師器坏類C					体上部外面不明瞭(ハケ)		黄褐色		甘く	軟質	丸底面底		285	
第 ″ 図-24	遺構外	土師器坏類B					外面タタキ、内面ハケ		黄褐色		やや甘く	軟質	フク土		286	
第 ″ 図-25	SD13	須恵器瓶類					外面タタキスリケシ、内面ハケ		黄褐色		甘く	軟質	1層		292	
第 ″ 図-26	遺構外	土師器鍋類		6.0			外面ハケ		黄褐色		やや甘く	軟質			280	

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器高(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎土	焼成	層位	出土位置	出土層位	整理番号	備考
第146図-1	SY01	杯A	杯A	13.2	6.4	2.8		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色・灰色	良好、緻密	甘く	軟質	黄口部7層	5	14	175
第 ″ 図-2	SY01	杯A	杯A	13.6	6.0	3.05		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色・灰色	良好	甘く	軟質	⑤区6層	5	8	177
第 ″ 図-3	SY01	杯A	杯A	15	9	2.9		底部不明瞭		黒褐色・黒褐色	良好	セダンヤーベルトが入る			5	9	133
第 ″ 図-4	SY01	杯A	杯A	14.3	8.6	3.15		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(一方向)		暗黒褐・褐色	甘く	軟質	床直		15	32	100
第 ″ 図-5	SY01	杯A	杯A	14	8.6	3.1		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		暗黒褐・暗黒褐	良好	甘く	軟質	床直	8	14	85
第 ″ 図-6	SY01	杯A	杯A	15.2	10.6	3.2		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(一方向)		暗黒褐・暗黒褐	良好、緻密	甘く	軟質	床直	1	15	87
第 ″ 図-7	SY01	杯A	杯A	16	11	3.2		底部ヘラ切り		灰色・灰色	良好	甘く	軟質	8層	7	12	143
第 ″ 図-8	SY01	杯A	杯A	14.47	8.6	3.4		底部不明瞭(ヘラ削り?)		黒褐色・暗黒	良好	甘く	軟質	C層	9	15	509
第 ″ 図-9	SY01	杯A	杯A	11.8	6.5	3.7		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		暗黒褐・暗黒褐	良好	甘く	軟質	8層底直下	8	25	140
第 ″ 図-10	SY01	杯A	杯A	14	8	3.6		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(一方向)		暗色・暗色	やや甘く	軟質	床直(4層下面)		8	10	135
第 ″ 図-11	SY01	杯A	杯A	14.6	8.6	3.7		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(多方向)		黒褐色・暗色	甘く	軟質	黄口部7層 セダンヤーベルト		26.5	32	99
第 ″ 図-12	SY01	杯A	杯A	14.2	10	3.5		底部不明瞭(ヘラ切り?)		暗色・灰色	やや甘く	軟質	Pit 2		2	11	139
第 ″ 図-13	SY01	杯A	杯A	14	9	3.4		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(多方向)		暗色・暗色	甘く	軟質	床直		4	20	97
第 ″ 図-14	SY01	杯A	杯A	14.7	9.5	3.6		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(一方向)		暗色・暗色	やや甘く	軟質	4層下部SD01ノ東ポケット入る		18	12	137
第 ″ 図-15	SY01	杯A	杯A	15	10.6	3.5		底部欠損		黒褐色・暗色	良好、緻密	甘く	軟質	赤色底ピット下層	6	7	123
第 ″ 図-16	SY01	杯A	杯A	15	10	3.6		底部不明瞭		暗褐色・暗色	良好、緻密	甘く	軟質	赤色底ピット下層	8	6	142
第 ″ 図-17	SY01	杯A	杯A	15.6	10	3.6		底部ナデ		暗色・暗色	甘く	軟質	C層		7	16	811
第 ″ 図-18	SY01	杯A	杯A	15.2	9.2	4		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		暗色・暗色	甘く	軟質	4層下部 セダンヤーベルトが入る		20	32	92	木葉痕
第 ″ 図-19	SY01	杯A	杯A	15	9.6	3.8		底部ヘラ切り後ヘラナデ		暗色・暗色	甘く	軟質	4層下部		29	18	131
第 ″ 図-20	SY01	杯A	杯A	15	9.8	3.65		底部ヘラ切り後ヘラナデ		暗色・暗色	甘く	軟質	床直(4層下面)		13	30	129
第 ″ 図-21	SY01	杯A	杯A	14.4	8.4	3.9		底部板状工具痕		暗色・暗色	甘く	軟質			18	32	108
第 ″ 図-22	SY01	杯A	杯A	14	8.2	4.3		底部ヘラ切り後ナデ(板状工具痕)		暗色・暗色	やや甘く	軟質	4層下部	東ポケット	18	32	111
第 ″ 図-23	SY01	杯A	杯A	13.6	10	4.3		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(一方向)		暗色・暗色	甘く	軟質	⑤又上層		16	32	91
第 ″ 図-24	SY01	杯A	杯A	13.7	8.4	3.9		底部ヘラ切り後ナデ		暗褐色・暗色	やや甘く	軟質	床直		9	10	134
第 ″ 図-25	SY01	杯A	杯A	15	7	4		底部ヘラ切り		暗褐色・暗褐色	甘く	軟質	セダンヤーベルト		6	7	145
第 ″ 図-26	SY01	杯A	杯A	14.6	8	4		底部ナデ(板状工具痕)		暗色・暗色	甘く	軟質	4層下部		30	32	101
第 ″ 図-27	SY01	杯A	杯A	14.4	7.2	4.2		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		暗褐色・暗褐色	良好、緻密	甘く	軟質		3	4	141
第 ″ 図-28	SY01	杯A	杯A	15	2	4		底部ヘラ切り後板目痕(一方)		暗色・暗色	やや甘く	軟質	C層		23	32	812
第 ″ 図-29	SY01	杯A	杯A	15.2	10.4	4.2		底部ヘラ切り後板目痕(一方)		暗色・暗色	甘く	軟質	C層		21	32	816
第 ″ 図-30	SY01	杯A	杯A	14.2	7.4	4.4		底部不明瞭(板ヘラナデ?)		暗色・暗色	甘く	軟質	C層		22	28	814
第 ″ 図-31	SY01	杯A	杯A	14.7	10.6	4.3		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		暗色・暗色	甘く	軟質	4層下部		10	32	94
第 ″ 図-32	SY01	杯A	杯A	15	8.4	4.45		底部ヘラ切り後ナデ		暗褐色・暗褐色	良好				10	9	138
第 ″ 図-33	SY01	杯A	杯A	14.9	9.6	4.7		底部ヘラ切り後ヘラナデ(一方向)		暗色・暗色	やや甘く	軟質	4層下部		26	32	85
第 ″ 図-34	SY01	杯A	杯A	17.1	9.8	4.5		底部ヘラ切り後ヘラナデ(一方向)		暗色・暗色	甘く	軟質	床直		31	32	88
第 ″ 図-35	SY01	杯A	杯A	15.4	8.6	4.6		底部不明瞭		暗色・暗色	甘く	軟質	床直		32	32	106
第 ″ 図-36	SY01	杯A	杯A	15	8.4	4.7		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		暗色・暗色	甘く	軟質			29	32	126
第 ″ 図-37	SY01	杯A	杯A	15	10	4.4		底部ヘラ切り(中央部板状工具痕)		暗色・暗色	甘く	軟質	暗褐土層、暗褐土層		9	28	110
第 ″ 図-38	SY01	杯A	杯A	15.2	10.4	4.4		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		暗色・暗色	甘く	軟質	4層下面		15	19	93
第 ″ 図-39	SY01	杯A	杯A	15	9.8	4.7		底部ヘラ切り後中央部板目痕		暗色・暗色	甘く	軟質	C層		24	32	822
第 ″ 図-40	SY01	杯A	杯A	14	8.4	3.75		底部不明瞭	—	暗色・暗色	甘く	軟質	暗褐土層、暗褐土層		32	21	144
第 ″ 図-41	SY01	杯A	杯A	15	8.6	4.1		底部ヘラ切り後板目痕(ナデ)	井	暗色・暗色	やや甘く	軟質	4層下部		23	32	102
第 ″ 図-42	SY01	杯A			8.8			底部ヘラ切り後ヘラナデ	井	暗色・暗色	やや甘く	軟質	4層下部			32	146
第 ″ 図-43	SY01	杯A	杯A	15.2	8.8	4		底部ヘラ切り後ヘラナデ	井	暗色・暗色	甘く	軟質			9	32	132
第 ″ 図-44	SY01	杯A	杯A	14.8	9.2	4.5		底部ヘラ切り後板ヘラナデ(多方向)	井	暗色・暗色	甘く	軟質	4層下部		26	32	98
第 ″ 図-45	SY01	杯A			8.6			底部ヘラ切り後板ヘラナデ	井	暗色・暗色	甘く	軟質	⑤区6層		0	17	90
第 ″ 図-46	SY01	杯A	杯A	14.6	10.6	4.65		底部ヘラ切り(中央部板状工具痕)	井?	暗色・暗色	甘く	軟質	C層		31	32	820
第147図-47	SY01	蓋C		12.7		1.8		天井部回転ヘラ削り		暗褐色・暗褐色	良好、緻密	セダンヤーベルト			2		125
第 ″ 図-48	SY01	蓋C		12.3		2.2		天井部回転ヘラ削り		暗色・暗色	良好	甘く	軟質	床直上	14		113
第 ″ 図-49	SY01	蓋C		13.4		2.1		天井部回転ヘラ削り		暗色・暗色	良好		4層下部		20		62

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	取構名	番号	種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ記号	色調	胎土	層位	出土位置	遺物番号	備考
第147図-50	SY01	蓋B		15.2	2.2			天井部回転ヘラ削り		明黄色・明褐色	良好、緻密	4層下部	15	119	
第 〃 図-51	SY01	蓋B		15.6	2.8			天井部回転ヘラ削り		明黄色・明褐色	良好		32	68	猪体付着
第 〃 図-52	SY01	蓋B		15.4	3.3			天井部回転ヘラ削り		明黄色・明褐色	良好、緻密	4層下面	8	83	
第 〃 図-53	SY01	蓋B		16.4	2.55			天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	Pit 2	22	59	
第 〃 図-54	SY01	蓋B		16	2.75			天井部回転ヘラ削り		明黄色・明褐色	良好、緻密	4層下部	9	68	
第 〃 図-55	SY01	蓋B		16.4	2.6			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密		11	153	
第 〃 図-56	SY01	蓋B		16.1	2.5			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密	床直	2	127	
第 〃 図-57	SY01	蓋B		16.2	2.9			天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好、緻密	床直	5	117	
第 〃 図-58	SY01	蓋B		16.4	2.7			天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	床直、床下	26	74	
第 〃 図-59	SY01	蓋B		16.6	2.5			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密	床下	12	116	
第 〃 図-60	SY01	蓋B		16.6	2.8			天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好、緻密	4層下部	14	113	
第 〃 図-61	SY01	蓋B		17	3.4			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密	床直	2	121	
第 〃 図-62	SY01	蓋B		16.6	2.5			天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好、緻密	南東エリア(4層下部)	5	64	
第 〃 図-63	SY01	蓋B		16.8	2.35			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密	ドゲアンジュール ドドエーエ8層	3	72	
第 〃 図-64	SY01	蓋B		18	3.25			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密	床直	12	82	
第 〃 図-65	SY01	蓋B		18	3.1			天井部回転ヘラ削り		暗黄・明褐	良好	4層下部、4層下面	13	56	
第 〃 図-66	SY01	蓋B		16.2	3.45			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密	床下	6	115	
第 〃 図-67	SY01	蓋B		15.5	2.7			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好、緻密	ドゲアンジュール アエエエ8層	4	81	重ね焼の痕跡
第 〃 図-68	SY01	蓋B		17.6	2.4			天井部回転ヘラ削り		赤褐色・明褐色	やや甘く(緻密)	ドゲアンジュール アエエエ8層	12	70	
第 〃 図-69	SY01	蓋B		16	1.85			天井部回転ヘラ削り		灰色	良好、緻密	床下	14	78	猪体多し(SK02)
第 〃 図-70	SY01	蓋B		16	2.1			天井部回転ヘラ削り		赤褐色・明褐色	良好、緻密	静ゴミSY01又は23	9	120	
第 〃 図-71	SY01	蓋B		16.3	2.15			天井部回転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好	ドゲアンジュール トドエーエ8層	15	63	
第 〃 図-72	SY01	蓋B		16.3	2.2			天井部回転ヘラ削り		赤褐色・暗色	良好	ドゲアンジュール トドエ4層下部	10	80	
第 〃 図-73	SY01	蓋B		16.4	2.1			天井部巡転ヘラ削り		赤褐色・暗色	良好	4層下部	15	75	
第 〃 図-74	SY01	蓋B		17	1.8			天井部巡転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好	南エリア(ドゲアンジュール エ1-エ14層下部)	22	65	
第 〃 図-75	SY01	蓋B		17	2			天井部巡転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好	4層下部	7	118	
第 〃 図-76	SY01	蓋B		16.4	1.7			天井部巡転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	南東エリア(ドゲアンジュール エ1-エ8層)8層下	11	73	
第 〃 図-77	SY01	蓋B		16.8	2.4			天井部巡転ヘラ削り		明褐色・明褐色	良好	4層下面	17	76	
第 〃 図-78	SY01	蓋B		17.8	1.7			天井部巡転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	4層下面	13	114	
第 〃 図-79	SY01	蓋B		17.8	2.35			天井部巡転ヘラ削り		暗色・暗色	良好	床直、床下	17	69	
第 〃 図-80	SY01	蓋C		13.4	2.1			天井部巡転ヘラ削り	井	明褐色・暗色	良好	4層下部	16	160	
第 〃 図-81	SY01	蓋B		16.4				天井部巡転ヘラ削り	井	明褐色・暗色	良好、緻密	4層下部	16	162	
第 〃 図-82	SY01	蓋B		17.2				天井部巡転ヘラ削り	井	明黄色・明褐色	良好、緻密	4層下部	6	57	
第 〃 図-83	SY01	蓋B		18.2	3.25			天井部回転ヘラ削り 後ナデ	井	暗色・暗色	甘く 軟質	⑥区3層直下	7	71	
第 〃 図-84	SY01	蓋B		18.2	2.95			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好、緻密	床直又は床下	20	84	
第 〃 図-85	SY01	蓋B		15	2.8			天井部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好、緻密	床直	19	161	
第 〃 図-86	SY01	蓋B		15.7	3.1			天井部回転ヘラ削り	井	灰色・暗色	良好	床直	4	165	
第 〃 図-87	SY01	蓋B		16	2.5			天井部回転ヘラ削り	井	灰色・暗色	良好	4層下部・表面	11	159	
第 〃 図-88	SY01	蓋B		16.8				天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好、緻密		12	182	
第148図-89	SY01	蓋B		15.8	2.2			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好	4層下部・⑥区3層	17	157	
第 〃 図-90	SY01	蓋B		16.8	2			天井部回転ヘラ削り	井	暗色・暗色	やや甘く(緻密)	⑥区5層下部	14	67	
第 〃 図-91	SY01	蓋B		17.2	2.45			天井部回転ヘラ削り	井	暗色・暗色	良好	4層下部	8	77	
第 〃 図-92	SY01	蓋B		17	1.4			天井部回転ヘラ削り	井	赤褐色・明褐	良好、緻密	床直	10	154	
第 〃 図-93	SY01	蓋B		17				天井部回転ヘラ削り	井	明黄・明褐色	良好	4層下部	14	163	
第 〃 図-94	SY01	蓋B		17	1.9			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐	良好	6層	6	158	
第 〃 図-95	SY01	蓋B		16.8	2			天井部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好、緻密	6層上面	20	79	
第 〃 図-96	SY01	蓋B						天井部回転ヘラ削り	井	暗色・暗色	良好	6層上面		164	
第 〃 図-97	SY01	蓋B		16.8	2.75			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好、緻密	6層上面	32	155	
第 〃 図-98	SY01	蓋B		16.4				天井部回転ヘラ削り	井	暗黄・明褐色	良好	ドゲアンジュール エ1-エ8層表面直下	13	176	
第 〃 図-99	SY01	蓋B		17				天井部回転ヘラ削り	井	暗色・暗色	良好	床下(5m層)	5	201	
第 〃 図-100	SY01	蓋B		16.9	2.3			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好		13	156	
第 〃 図-101	SY01	蓋B		15.5	2.2			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好、緻密		11	150	
第 〃 図-102	SY01	蓋A		21.2	3.4			天井部回転ヘラ削り	井		やや甘く(緻密)	4・6・7層	27	61	
第 〃 図-103	SY01	蓋A		20.4	4.7			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好	床直⑥区	17	60	
第 〃 図-104	SY01	蓋A		21	2.7			天井部回転ヘラ削り	井	明褐色・明褐色	良好	床下	14	58	
第 〃 図-105	SY01	杯B		14.4	11.4 2.3	2.9		底部回転ヘラ削り		灰色・黄灰色	良好	床下	18	18	4
第 〃 図-106	SY01	杯B		15.2	11.8 2.6	3.1		底部巡転ヘラ削り		黄色・明黄色	良好	床直	9	24	2
第 〃 図-107	SY01	杯B		18.6	14.1 2.9	3.6		底部巡転ヘラ削り		明黄色・明色	良好	床直	10	15	5

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	出土位置(X)	出土位置(Y)	整理番号	備考
第14図2-108	SY01	杯B	15	11.4	3.7	4.4	底部回転ヘラ削り		灰色・暗黒色	良好	4層下部・床下？	12	12	3	
第#59-109	SY01	杯B	15.8	10	4	4.8	底部回転ヘラ削り		明黒色・灰色	やや甘く軟質	床直・4層下部	9	32	6	
第#59-110	SY01	杯B	16.2	11.2	3.9	4.8	底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	床直	9	9	8	
第#59-111	SY01	杯B	14.8	9.8	4	4.8	底部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好	4層下部	21	22	9	
第#59-112	SY01	杯B		11.4			底部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好	6層上面	0	24	10	
第#59-113	SY01	杯B	16.2	12	3.9	4.6	底部回転ヘラ削り	井	暗黒・暗色	甘く軟質	表下，4層上面，4層下部	17	32	7	
第#59-114	SY01	杯B	15.6	10.6	4.4	5.2	底部回転ヘラ削り	井	明黒色・灰色	良好	床下？	32	21	1	
第14図2-115	SY01	皿A	19.5				底部回転ヘラ削り		明黒色・灰色	良好，緻密	床直	16		33	
第#52-116	SY01	皿A	22.2		2.25		底部回転ヘラ削り		明黒色・灰色	良好，緻密	表土，4層中部，セクションベルトA-B	12		32	
第#52-117	SY01	皿A	22		2.1		底部回転ヘラ削り		明黒色・灰色	良好，緻密	4層下面	13		37	
第#52-118	SY01	皿A	22		2.5		底部回転ヘラ削り		明黒色・灰色	良好，緻密		15		40	
第#52-119	SY01	皿A	21.7		2.5		底部ヘラ削り（一方向）		明黒色・明黒色	良好，緻密		6		35	
第#52-120	SY01	皿A	22.6		2.5		底部回転ヘラ削り		明黒色・明色	良好	床直⑥区3層	13		30	
第#52-121	SY01	皿A	19.6				底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	セクションベルト，トレーチ6層直下面	7		12	
第#52-122	SY01	皿A	22.2		2.9		底部ヘラ削り（縦横方向）		灰色・灰色	良好，緻密	3層	11		18	
第#52-123	SY01	皿A	22		2.5		底部ヘラ削り（縦横方向）		暗黒色・暗黒色	良好	4層下部	9		22	
第#52-124	SY01	皿A	22.6		2.7		底部ヘラ削り（一方向）		黒褐色・明色	良好，緻密		10		26	
第#52-125	SY01	皿A	22		3.7		底部ヘラ削り（縦横方向）		明黒色・暗黒色	良好	床直	10		36	
第#52-126	SY01	皿A	21.2				底部ヘラ削り		灰黒色・明黒色	良好，緻密	⑤区6層	8		38	
第#52-127	SY01	皿A	23		3.2		底部ヘラ削り（一方向）		灰色色・暗色	良好	4層下部	15		15	
第#52-128	SY01	皿A	22.7		2		底部ヘラ削り（一方向）	高井		良好	床直4層	23		34	
第#52-129	SY01	皿A	22				底部ヘラ削り	高井	明黒色・暗黒色	良好，緻密	床直	14		193	
第#52-130	SY01	皿A	19.9		1.6		底部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好，緻密	床直	16		25	
第#52-131	SY01	皿A	19.2		2.05		底部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好	床直・4層下部		32	11	
第#52-132	SY01	皿A	20.4		2.1		底部回転ヘラ削り	井	明黒色・明黒色	良好，緻密	床直	16		39	
第#52-133	SY01	皿A	20		2.1		底部回転ヘラ削り	井	明黒色・灰色	良好，緻密	床直	13		31	
第#52-134	SY01	皿A	21.4		2		底部回転ヘラ削り	井	明黒色・明黒色	良好，緻密	床直6層上面	30		43	
第#52-135	SY01	皿A	20		2.1		底部回転ヘラ削り	井	赤褐色・明黒色	良好，緻密	4層下部・床下	17		28	
第#52-136	SY01	皿A	19.6		2.7		底部回転ヘラ削り	井	灰褐色・明黒色	良好，緻密	床直	16		41	
第#52-137	SY01	皿A	21		3.25		底部ヘラ削り（多方向）	井	赤褐色・明黒色	良好	床直	15		27	
第15図2-138	SY01	皿A	22.8		3		底部ヘラ削り（一方向）	井	灰色・灰色	良好	床下	16		13	
第#52-139	SY01	皿A	22.6		2.25		底部ヘラ削り（一方向）	井	灰色・灰色	良好，緻密	表土，セクションベルト，4層下部	17		16	
第#52-140	SY01	皿A	22		2.6		底部ヘラ削り（一方向）	井	暗色・灰色	良好	セクションベルト，トレーチ1層	3		24	
第#52-141	SY01	皿A	22		2.6		底部ヘラ削り（縦横方向）	井	明黒色・明黒色	良好	4層下部	24		29	
第#52-142	SY01	皿A	22.2		3.9		底部ヘラ削り（一方向）	井	明黒色・明色	良好	床直	17		29	
第#52-143	SY01	皿C	19.6				底部回転ヘラ削り		明黒色・暗色	良好	⑥区3層	5		53	
第#52-144	SY01	鉢A	35	27.2		4.6	底部回転ヘラ削り	井	暗色・暗色	やや甘く軟質	表土，4層下部，4層下面	17		20	218
第#52-145	SY01	盤A	34	24.4		2.6	底部回転ヘラ削り		灰色・灰白	緻好，緻密	4層下部	12		11	214
第#52-146	SY01	盤A	34				底部回転ヘラ削り		暗色・暗色	良好	明黒色セクションベルト，4層	9			212
第#52-147	SY01	盤A	34	26.2		3.8	底部回転ヘラ削り		明暗色・赤褐色	やや甘く軟質	6層	8		7	216
第#52-148	SY01	盤A	34	26		3.6	底部回転ヘラ削り		暗色・暗色	良好	床下	10		10	210
第15図2-149	SY01	高杯A	17.6				底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好，緻密	4層下部	14		171	
第#52-150	SY01	高杯A	18				底部回転ヘラ削り		赤褐色・明色	良好，緻密	床直	14		188	
第#52-151	SY01	高杯A	17				底部回転ヘラ削り		明黒色・明色	良好	床下	12		196	
第#52-152	SY01	高杯A	17.6		1.5		底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	4層下部セクションベルト，トレーチ6層	15		14	
第#52-153	SY01	高杯A	17.8				底部回転ヘラ削り		暗色・暗色	良好，緻密	床直	14		42	
第#52-154	SY01	高杯A	19		0.95		底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	⑥区6層	8		19	
第#52-155	SY01	高杯A	18.4				底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好，緻密	床直	11		192	
第#52-156	SY01	高杯A	17				底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好，緻密	床直	11		178	
第#52-157	SY01	高杯A	18				底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	⑤区3層	12		21	
第#52-158	SY01	高杯A	17				底部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好	床直9M区左	13		190	
第#52-159	SY01	高杯A	18.6				底部回転ヘラ削り	井	明黒色・明色	良好，緻密		11		169	
第#52-160	SY01	高杯A	17.2				底部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好，緻密	6層上面	14		167	
第#52-161	SY01	高杯A	17.3				底部回転ヘラ削り	井	明黒色・明色	良好，緻密	床直・床下	16		206	
第#52-162	SY01	高杯A	18.2				底部回転ヘラ削り	井	赤褐色・赤色	良好，緻密	4層下部	14		184	
第#52-163	SY01	高杯A	18				底部回転ヘラ削り	井	明黒色・明黒色	良好	床直	13		180	
第#52-164	SY01	高杯A	18				底部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好	床下	7		198	
第#52-165	SY01	高杯A	17.9				底部回転ヘラ削り	井	赤褐色・赤褐色	良好	⑤区6層	4		17	

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	胎土	口径(実測値)(mm)	底径(実測値)(mm)	整理番号	備考
第151図-166	SY01	高杯A	18				底部回転ヘラ削り	非	灰色・灰色	良好	密度・Ⅰ区4層	5		186	
第 # 図-167	SY01	高杯A	18				底部欠損	非	灰色・灰色	良好	⑥区床直	4		200	
第 # 図-168	SY01	高杯A	17.8				底部回転ヘラ削り	非	明黄白・明黄白	良好、緻密	密度・4層下部	23		194	
第 # 図-169	SY01	高杯A					底部回転ヘラ削り	非	灰色・灰色	良好	⑥区6層			204	
第 # 図-170	SY01	高杯A	17.6				底部回転ヘラ削り	非	明黄白・明黄白	良好、緻密	密度・第7・8層下層	27		208	
第 # 図-171	SY01	高杯A	17.4				底部回転ヘラ削り	非	灰色・灰色	良好	ロ縁・盛土第12層	18		174	
第152図-172	SY01	高杯B	26.4		2			非			1層(アンダーコート)、2層(表土)、3層(中層)、4層(下層)、5層(下層)、6層(下層)、7層(下層)、8層(下層)、9層(下層)	32		52	
第 # 図-173	SY01	高杯B	25		2		底部回転ヘラ削り	非	明黄白・明黄白	良好、緻密		37		44	
第 # 図-174	SY01	高杯B	25.2		2.1		底部回転ヘラ削り		明黄白・明黄白	良好、緻密	床直	15		51	
第 # 図-175	SY01	高杯B	21.6				底部回転ヘラ削り		明黄白・明黄白	良好	⑥区6層			236	
第 # 図-176	SY01	鉢D(スリ鉢)		12			底部回転ヘラ削り、底部つめ形列あり		明黄白・明黄白	良好	焚口付近		11	848	
第 # 図-177	SY01	横甕	10.9				口頸部ナデ		明黄白・黒褐色	良好、緻密	モデジョンベル7.5YR6/4	3		191	
第 # 図-178	SY01	横甕	14				口頸部ナデ		灰色・灰色	良好、緻密	Pit2	7		187	
第 # 図-179	SY01	横甕	13.6				口頸部ナデ		明黄白・明黄白	良好、緻密	モデジョンベル7.5YR6/4	6		189	
第 # 図-180	SY01	壺D	27.5				口頸部ケタキスリケシ、体部外面 ケタキ、内面ケズリ痕あり		明黄白・明黄白	良好	モデジョンベル7.5YR7/3	3		47	
第 # 図-181	SY01	壺D	30.2				口頸部ケタキスリケシ、体部外面 ケタキ		明黄白・明黄白	良好、緻密	焚口付近	4		46	
第 # 図-182	SY01	甕B	33.9				口頸部ケタキスリケシ、体部外面 ケタキ、内面強制痕あり		灰色・灰色	甘く軟質	焚口付近	6		48	
第 # 図-183	SY01	甕A	28.8				口頸ヨコナデ		オリーブ黒7.5Y3/2、オリーブ黒7.5Y3/2	良好、緻密	Pit2	7		55	
第153図-184	SY01	甕A	44.5				口頸部櫛形波状紋		明黄白・明黄白	良好、緻密	1層(アンダーコート)、2層(表土)、3層(中層)、4層(下層)、5層(下層)、6層(下層)、7層(下層)、8層(下層)、9層(下層)	1		45	
第 # 図-185	SY01	甕A	48.2				口頸部沈線後櫛描波状紋		黒褐色・黒褐色	良好、緻密	モデジョンベル7.5YR6/4	2		227	
第 # 図-186	SY01	甕A	45.4				口頸部櫛描波状紋 櫛畜一ツ紋		明黄白・明黄白	良好、緻密	焚口トレンチ	3		224	
第 # 図-187	SY01	甕A	45.6				口頸部櫛描波状紋 櫛畜一ツ紋		明黄白・オリーブ黒	良好、緻密	Pit2	1		226	
第 # 図-188	SY01	甕A	54.8				口頸部櫛描波状紋 櫛畜一ツ紋		明黄白・明黄白	良好、緻密		3		225	
第 # 図-189	SY01、SY02	甕A	52.4				口頸部櫛描波状紋		黒褐色・明黄白	良好、緻密	SY01は1層、表土層、SY02は2層、表土	4		229	内面ケズリ(内側)
第154図-190	SY01、SY02	甕A	63.8				口頸部櫛描波状紋 櫛畜一ツ紋		灰色・灰色	やや甘く軟質	第二	8		230	第142図参照
第158図-1	SY02	杯A	13.4	8.4	3.3		底部ヘラ切り後ナデ			甘く軟質	C層	26	29	237	
第 # 図-2	SY02	杯A	16	10	3		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			良好、緻密	B層	9	17	244	
第 # 図-3	SY02	杯A	13.6	9.6	3.4		底部ヘラ切り			良好	B層	8	13.5	578	
第 # 図-4	SY02	杯A	13.8	9.8	3.4		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			甘く軟質	C層	10	14	250	
第 # 図-5	SY02	杯A	13.8	9.2	3.4		底部不明瞭			甘く軟質	C層	17	2	239	
第 # 図-6	SY02	杯A	14	8.6	3.6		底部ヘラ切り			やや甘く軟質	C層	20	31	581	
第 # 図-7	SY02	杯A	13	8	3.9		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			甘く軟質		3	32	241	
第 # 図-8	SY02	杯A	13	9	3.7		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			甘く軟質	C層	19	28	242	
第 # 図-9	SY02	杯A	13	9.6	3.8		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			甘く軟質	C層	7	16	247	
第 # 図-10	SY02	杯A	13.8	9.4	3.8		底部ヘラ切り			良好	染成部床直	16.5	21	579	
第 # 図-11	SY02	杯A	14.6	9.5	3.7		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			良好	C層	9	12	251	
第 # 図-12	SY02	杯A	13.8	5.1	4.3		底部ヘラ切り			良好	B層	14	13	576	火棒(内側)
第 # 図-13	SY02	杯A	12.8	8.8	4		底部不明瞭			甘く軟質	C層	2	9	577	
第 # 図-14	SY02	杯A	13.2	9	3.9		底部ヘラ切り			良好	B層	17.5	32	574	
第 # 図-15	SY02	杯A	13	7.8	4.2		底部ヘラ切り			良好		4	14	252	
第 # 図-16	SY02	杯A	13.4	6.4	4.2		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			良好、緻密		7	9	249	
第 # 図-17	SY02	杯A	14.6	10.4	4.2		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			良好		10		257	
第 # 図-18	SY02	杯A	14	7.4	4.2		底部ヘラ切り			甘く軟質	C層	20	32	238	
第 # 図-19	SY02	杯A	14	8.2	4.5		底部ヘラ切り			甘く軟質	C層	2	13	253	
第 # 図-20	SY02	杯A	15	8	4.4		底部ヘラ切り後板ヘラナデ			甘く軟質	B層	16	16	248	
第 # 図-21	SY02	杯A	14	8.6	4.5		底部不明瞭			甘く軟質	C層	10	20	240	
第 # 図-22	SY02	杯A	15.2	8	3.7		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色・灰色	甘く軟質	B層	16	16	246	
第 # 図-23	SY02	杯A	15.8	6.2	4.6		底部ヘラ切り			甘く軟質	紙金部床直、C層	16	1	258	
第 # 図-24	SY02	杯A	16.4	8	4.4		底部ヘラ切り			甘く軟質	C層	5	29	243	
第 # 図-25	SY02	杯A	13.4	7.2	4.8		底部不明瞭			やや甘く軟質	C層	12	12	580	
第 # 図-26	SY02	杯A	13.8	9.2	4.8		底部ヘラ切り			やや甘く軟質	B層	9	15	575	
第 # 図-27	SY02	杯A	13.8	7.8	4.1		底部不明瞭	×		良好	C層	1	32	582	
第 # 図-28	SY02	杯A	13	5.5		4.8	底部不明瞭			甘く軟質	C層	6	17	563	
第 # 図-29	SY02	蓋B	16			1.6	天井部回転ヘラ削り		明黄白・明黄白	良好	染成部床直	4		277	
第 # 図-30	SY02	蓋B	15.8			1.7	天井部回転ヘラ削り		明黄白・明黄白	良好、緻密		6		586	
第 # 図-31	SY02	蓋B	15.2			2.5	天井部耳転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	C層	11		602	
第 # 図-32	SY02	蓋B	15			2.4	天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好		10		266	
第 # 図-33	SY02	蓋B	15.8			2.3	天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	C層	3		595	

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ記号	色調	胎成	層位	出土位置X/30	出土位置Y/30	整理番号	備考
第158図-34	SY02	壺B	16.8		2.3		天井部回転ヘラ削り		橙色・灰白色	良好	C層	9		262	
第＃図-35	SY02	壺B	14.4		3	1	天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好、緻密	B層			594	
第＃図-36	SY02	壺B	15.6		2.9		天井部回転ヘラ削り		橙黄色・灰色	良好	C層	8		276	
第＃図-37	SY02	壺B	15.6		2.8		天井部回転ヘラ削り		橙黄色・灰色	良好	C層	18		265	
第＃図-38	SY02	壺B	15.4		3		天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	C層	6		585	
第＃図-39	SY02	壺B	16		2.3		天井部回転ヘラ削り		橙黄色・橙色	良好	C層	2		264	
第＃図-40	SY02	壺B	16.4		2.5		天井部回転ヘラ削り		黄白色・橙色	良好	C層	11		596	
第＃図-41	SY02	壺B	16.4		2.8		天井部回転ヘラ削り		橙黄色・橙黄色	良好	B層	5		273	
第＃図-42	SY02	壺B	16		2.9		天井部回転ヘラ削り		橙色・橙色	甘く軟質	C層	2		272	
第＃図-43	SY02	壺B	17		3.1		天井部回転ヘラ削り		橙色・橙色	甘く軟質	C層	2		274	
第＃図-44	SY02	壺B	17		2.9		天井部回転ヘラ削り		黄褐色・灰色	やや甘く軟質	焼成部床直	22		259	
第＃図-45	SY02	壺B	16		3.2		天井部回転ヘラ削り		灰褐色・灰褐色	良好、緻密	C層	13.5		599	
第＃図-46	SY02	壺B	16.2		3.2		天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	B層	12		268	
第＃図-47	SY02	壺B	20.4		1.9		天井部回転ヘラ削り		褐黄色・褐黄色	良好	焼成部床直	14		598	
第＃図-48	SY02	壺B	17.8		2		天井部回転ヘラ削り		橙色・橙色	やや甘く軟質	C層	4		263	
第159図-49	SY02	杯B	14.6	11.6	3.4		底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	やや甘く軟質		17	14	281	
第＃図-50	SY02	杯B	14.8	11.2	3.4		底部回転ヘラ削り		赤褐色・灰色	良好		13	19	280	
第＃図-51	SY02	杯B	15.6	12	2.8	3.2	底部回転ヘラ削り		褐黄色・褐黄色	良好	焼成部床直	23	32	547	
第＃図-52	SY02	杯B	15.2				底部欠損			やや甘く軟質	C層	9		254	
第＃図-53	SY02	杯B	15	11	3.6		底部ヘラ切り		橙色・橙色	良好	C層	17	15	554	
第＃図-54	SY02	杯B	15.6	13	3	3.5	底部欠損		褐黄色・褐黄色	良好、緻密	A・B層	12		313	
第＃図-55	SY02	杯B	14	10.6	3.5		底部五転ヘラ削り			やや甘く軟質		15	9	548	
第＃図-56	SY02	杯B	15	10.2	3.1	3.6	底部回転ヘラ削り		橙色・橙色	良好	B層	11	19	549	
第＃図-57	SY02	杯B	16				底部欠損			甘く軟質	C層	8		255	
第＃図-58	SY02	杯B	13.8	12		3.9	底部ヘラ切り			甘く軟質		9	12	246	
第＃図-59	SY02	杯B	18	13	5.6		底部回転ヘラ削り		褐黄色・明黄色	良好、緻密	焼成部床直	17	19	282	
第＃図-60	SY02	杯B		11.6			底部回転ヘラ削り	井	黒褐色・橙色	良好	C層		16	279	
第＃図-61	SY02	杯B		10.9			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質	A・B層		12	314	
第＃図-62	SY02	杯B		7.6			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質			10	561	
第＃図-63	SY02	杯B		11.2			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	良好			14	556	
第＃図-64	SY02	杯B		10.2			底部回転ヘラ削り	井	黒褐色・明黄	良好、緻密			10	550	
第＃図-65	SY02	杯B		7			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質			6	557	
第＃図-66	SY02	杯B		10			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質	B層		21	562	
第＃図-67	SY02	杯B		9.2			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質	C層		11	558	
第＃図-68	SY02	杯B		10.8			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質			7	559	
第＃図-69	SY02	杯B		9.5			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質	B層		5	560	
第＃図-70	SY02	杯B		11			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質	C層		21	555	脚部分
第＃図-71	SY02	椀B		5.8			底部回転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質			12	563	
第＃図-72	SY02	椀C	19.2				体部内、外面回転ナデ		明黄色・明黄色	良好、緻密	焼成部床直	9		283	
第＃図-73	SY02	椀C	20.8	13.4	6.2	6.6	底部五転ヘラ削り	井	橙色・橙色	やや甘く軟質	C層	2	14	546	
第＃図-74	SY02	鉢B	21	12.8	1.7	2.6	底部五転ヘラ削り		灰色・灰色	やや甘く軟質		2	13	573	
第＃図-75	SY02	交形					脚部のみ残存		橙色・橙黄色	良好				582	
第160図-76	SY02	横瓶	12.1				口頸部基部ナデ(縦方向)		灰色・灰色	良好、緻密		15		570	
第＃図-77	SY02	横瓶	11.9				口頸部ヨコナデ		灰色・灰色	良好、緻密	C層	18		321	瓶？
第＃図-78	SY02	横瓶					体部外面タタキ、体部内面一部ハケ		明黄色・明黄色	良好、緻密				556	
第＃図-79	SY02	横瓶					体部外面タタキ、底部周辺部五転ヘラ削り、底部ヘラ切り		明黄色・明黄色	良好、緻密				555	
第＃図-80	SY02	長頸壺A					肩部ナデ(板状工具痕)笠上部ナデ		灰色・灰色	良好				554	
第＃図-81	SY02	長頸壺A		14.6			底部回転ヘラ削り、体下部外面回転ヘラ削り後ナデ		白色・明黄色	良好、緻密	C層		9	312	
第＃図-82	SY02	長耳壺		12			体部タタキスリケシ、平行沈線2条あり		明黄色・明黄色	良好、緻密	C層		10	319	
第＃図-83	SY02	壺底部		13			体下部外面ヘラ削り、底部欠損		明黄色・灰色	良好				320	
第＃図-84	SY02	壺蓋	12.8		4.5		天井部五転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好、緻密	C層		11	572	
第＃図-85	SY02	提瓶壺B	29.3				肩部鉢状の沈線が2～3条あり		灰白色・灰色	良好、緻密	C層			318	口頸は欠失部位
第＃図-86	SY02	提瓶壺C	21				口頸部ヨコナデ		橙色・橙色	やや甘く軟質	C層		5	308	
第＃図-87	SY02	提瓶壺C		20.6			口頸部～体部ヨコナデ		灰色・灰色	やや甘く軟質	焼成部床直			564	
第＃図-88	SY02	壺C	19.6				二頸部タキスリケシ、体部外面タタキ		明黄色・明黄色	良好、緻密	A層		6	301	
第＃図-89	SY02	壺C		19			口頸部回転ナデ、体部外面タタキスリケシ		黄褐色・黄褐色	良好、緻密	B層		8.5	565	
第161図-90	SY02	壺B	21.2				口頸部ヨコナデ		灰色・灰色	やや甘く軟質	C層		3	309	
第＃図-91	SY02	壺B	32.4				口頸部～体部外面ヨコナデ、体外面タタキスリケシ		黄褐色・黄褐色	良好、緻密	C層		5	299	

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	胎土	焼成部床面	図版番号	備考
第161図-92	SY02	甕D	21.7				□頸部タタキスリケシ 体部外面タタキ		灰色/灰色	良好	C層		4	293
第 # 図-93	SY02	甕D	28.5				□頸部ヨコナデ 体部外面タタキ		灰色/灰色	やや甘(軟質)	C層		5	289
第 # 図-94	SY02	甕D	32				□頸部～体部外面 タタキスリケシ		黒褐色/赤色	やや甘(軟質)	C層		2	284
第 # 図-95	SY02	甕D	31.5				□頸部外面タタキスリケシ、頸部内面ナデ 口縁部内面ヨコナデ		赤褐色/赤色	良好、緻密			2	288
第 # 図-96	SY02	甕D	44.8				□頸部～体部外面タタキスリケシ 体部内面指頭痕		灰褐色/灰褐色	良好	焼成部床面		5	297
第 # 図-97	SY02	甕D	31.4				二頸部タタキスリケシ 体部外面タタキ		黒色/灰褐色	やや甘(軟質)			2	311 丸底
第 # 図-98	SY02	甕D	32				□頸部～体部外面タタキスリケシ 内面ヨコナデ		灰色/灰色	やや甘(軟質)	B層		5	290 丸底
第 # 図-99	SY02	甕D	34				□頸部～体部外面タタキスリケシ		褐色/褐色	良好	焼成部床面		6	302 丸底
第 # 図-100	SY02	甕D	36				□頸部～体部外面タタキスリケシ		暗色/暗色	やや甘(軟質)	C層		4	292
第 # 図-101	SY02 ほか	甕	19.2	12.4			底部切り離し、ヘラ削り、内面ヨコナデ 口縁部内面ヨコナデ、体部に波状文、底部外面ヘラ削り		灰色/灰色	良好、緻密	C層		15	776
第162図-102	SY02	甕A	30.8				口縁部タタキスリケシ、口縁部 体部外面タタキ 体部内面指頭痕	あり	明褐色/赤褐色	良好、緻密	A層		11	325
第 # -103	SY02	壺形手					把手部タタキ後ヘラ削り後ナデ		赤褐色	良好、緻密	C層			316
第 # 図-104	SY02	甕A	61.8				□頸部櫛描波状紋、櫛歯一ツ紋		明赤/明赤	良好	C層		7	285
第 # 図-105	SY02	甕A底部		10.8			丸底外面タタキ、底部内面ナデ		灰色/灰色	良好	C層			322
第 # 図-106	SY02	甕A底部		10.8			丸底外面タタキ、底部内面ナデ		灰色/灰色	やや甘(軟質)	C層			323
第 # 図-107	SY02	甕A底部		10			丸底外面タタキ、底部内面ナデ		灰色/灰色	やや甘(軟質)	C層			354
第 # 図-108	SY02	甕A	55				□頸部櫛描波状紋、体部外面タタキ		明褐色/明褐色	良好	B層		7	326
第166図-1	SY03	杯A	14.9	10.6	3.1		底部ヘラ切り		赤褐色/赤褐色	良好	C層		17	18 347
第 # 図-2	SY03	杯A	14	8.8	3.55		底部ヘラ切り後ナデ		赤褐色/赤褐色	良好、緻密	C層		18	23 340
第 # 図-3	SY03	杯A	13.5	8	3.5		底部ヘラ切り		赤褐色/赤褐色	良好	焼成部床面		22	32 337
第 # 図-4	SY03	杯A	14.1	10.2	3.6		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		赤褐色/赤褐色	やや甘(軟質)	B層		32	32 343
第 # 図-5	SY03	杯A	13.3	8	3.3		底部ヘラ切り		赤褐色/赤褐色	良好	焼成部床面		28	32 344
第 # 図-6	SY03	杯A	12.2	4.2	3.8		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		赤褐色/赤褐色	良好	表土		7	22 533
第 # 図-7	SY03	杯A	15	10.2	3.4		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		赤褐色/赤褐色	良好	C層		19	20 338
第 # 図-8	SY03	杯A	13.6	8.2	3.5		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		赤褐色/赤褐色	良好	焼成部床面		29	35 336
第 # 図-9	SY03	杯A	13.9	10	3.6		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色/暗色	良好	焼成部床面・C層		14	32 363
第 # 図-10	SY03	杯A	14.2	9	3.9		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色/灰色	良好	C層		20	32 361
第 # 図-11	SY03	杯A	14.5	10.2	3.5		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色/灰色	やや甘(軟質)	C層		6	27 352
第 # 図-12	SY03	杯A	13.6	8.6	3.5		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		赤褐色/赤褐色	良好	C層		9	16 348
第 # 図-13	SY03	杯A	13.7	9.2			底部ヘラ切り		赤褐色/赤褐色	良好	C層		13	11 349
第 # 図-14	SY03	杯A	14	9	4.2		底部ヘラ切り後ナデ		赤褐色/赤褐色	良好	C層		12	13 350
第 # 図-15	SY03	杯A	14	9.2	4.8		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		赤褐色/赤褐色	良好	焼成部床面・C層		28	32 339
第 # 図-16	SY03	杯A	14.4	5.9	3.55		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		赤褐色/赤褐色	良好	焼成部床面		22	32 335
第 # 図-17	SY03	杯A	14.3	6.8	3.85		底部ヘラ切り		赤褐色/赤褐色	良好	焼成部床面・B層		32	32 341
第 # 図-18	SY03	杯A	15	10.7	4.1		底部ヘラ切り		赤褐色/赤褐色	やや甘(軟質)	C層		31	30 345
第 # 図-19	SY03	杯A	15	9.2	4.1		底部ヘラ切り		赤褐色/赤褐色	やや甘(軟質)	C層		4	25 346
第 # 図-20	SY03	杯A	14.8	6.9	4.35		底部ヘラ切り後ナデ		赤褐色/赤褐色	やや甘(軟質)	C層		9	16 342
第 # 図-21	SY03	蓋B	15.2		1.75		天井部回転ヘラ削り		明褐色/明褐色	良好、緻密	C層		29	371
第 # 図-22	SY03	蓋B	15.6		1.6		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	焼成部床面		24	364
第 # 図-23	SY03	蓋B	15.5		2.4		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	C層		29	380
第 # 図-24	SY03	蓋B	14.6		2.5		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	C層		30	372
第 # 図-25	SY03	蓋B	15.4		2.5		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	B層		32	375
第 # 図-26	SY03	蓋B	16		2.5		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	B・C層		27	361
第 # 図-27	SY03	蓋B	15.2		2.5		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	A層		13	532
第 # 図-28	SY03	蓋B	16.4		2.4		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	C層		6	366
第 # 図-29	SY03	蓋B	14.7		2.7		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	埋土		3	536
第 # 図-30	SY03	蓋B	15.2		3.1		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	A層		12	540
第 # 図-31	SY03	蓋B	15.9		2.4		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	C層		22	357
第 # 図-32	SY03	蓋B	16		2.35		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	焼成部床面・C層		21	373
第 # 図-33	SY03	蓋B	17.6		3		天井部回転ヘラ削り		赤褐色/赤褐色	良好、緻密	A層		5	535
第 # 図-34	SY03	蓋B	17.1		2.3		天井部回転ヘラ削り		明褐色/明褐色	良好、緻密	B・C層		16	359
第 # 図-35	SY03	蓋B	15		3		天井部回転ヘラ削り		明褐色/明褐色	良好、緻密	C層		11	362
第 # 図-36	SY03	蓋B	15.4		2.2		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	B・C層		20	369
第 # 図-37	SY03	蓋B	15.8		2.6		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	C層		19	356
第 # 図-38	SY03	蓋B	15.8		2.6		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	焼成部床面・B層		32	377
第 # 図-39	SY03	蓋B	15.8		3		天井部回転ヘラ削り		明褐色/明褐色	良好、緻密	B・C層		32	374
第 # 図-40	SY03	蓋B	14.5				天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	埋土		10	541
第 # 図-41	SY03	蓋B	15.6		2.7		天井部回転ヘラ削り		明褐色/赤褐色	良好、緻密	焼成部床面・C層		25	379

清水山麓跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	胎土	出土位置(X20)	出土位置(Y20)	整理番号	備考
第165図-42	SY03	壺B	15.5		2.95		天井部回転ヘラ削り		口縁部-明黒色	良好、緻密	焼成部密度-C層	18		363	
第9図-43	SY03	壺B	16.3		3		天井部回転ヘラ削り		明黒色-暗黒色	良好、緻密	明黒色粒-A・C層	32		358	
第9図-44	SY03	壺B	14.8		2.7		天井部回転ヘラ削り		口縁部-暗黒色	良好、緻密	A・B層	3		530	
第9図-45	SY03	壺B	16.2		3.2		天井部回転ヘラ削り		明黒色-暗黒色	良好、緻密	C層	28		370	
第9図-46	SY03	壺B	15.6		3		天井部回転ヘラ削り		明黒色-灰色	良好、緻密	B層	32		376	
第9図-47	SY03	壺B	16.3		3		天井部回転ヘラ削り		暗黒色-暗黒色	良好、緻密	C層	25		378	
第9図-48	SY03	壺B	16.8		2.4		天井部回転ヘラ削り	井	灰色-灰色	良好、緻密	長土	8		542	摘みなし
第9図-49	SY03	壺B	17.8		2.8		天井部回転ヘラ削り		明黒色-暗黒色	良好、緻密	C層	3		368	
第9図-50	SY03	壺B	17		3.1		天井部回転ヘラ削り		明黒色-暗黒色	良好、緻密	A・B・C層	32		360	
第167図-51	SY03	杯B	14.1	10.6	2.4	2.85	底部回転ヘラ削り		赤褐色-赤褐色	良好、緻密	焼成部密度	21	32	382	
第9図-52	SY03	杯B	14.6	11.2	2.9	3.7	底部回転ヘラ削り		口縁部-赤褐色	良好、緻密	C層	19	32	381	
第9図-53	SY03	杯B	15	11.8	2.75	3.2	底部回転ヘラ削り		口縁部-土褐色	良好、緻密	A層	12	19	384	
第9図-54	SY03	杯B	15.2	11.5	3.3	3.9	底部回転ヘラ削り		明黒-明黒色	良好	C層	10	14	383	
第9図-55	SY03	杯B		9.4			底部回転ヘラ削り	井	暗色-暗色	良好	4区床下		9	551	
第9図-56	SY03	壺E	16		2.5		天井部ツマミなし、つめあとあり(ヘラケズリ?)後ナデ		灰色-灰色	良好	焼成部床直	6		828	
第9図-57	SY03	高杯A	16.5				底部回転ヘラ削り後回転ナデ	井	明黒色-明黒	良好	C層	6		537	
第9図-58	SY03	短頸壺A	6.8				体上部外面カキメ		口縁部-明黒色	良好、緻密	C層	5		688	
第9図-59	SY03	長頸壺A					底部穴拠、肩部一体部内外面回転ナデ		明黒-明黒色	良好、緻密	焼成部床直			534	
第9図-60	SY03	横瓶					不明瞭			良好				857	SW01と接合
第9図-61	SY03	横瓶					体部外面タタキスリケシ	井?	灰色-灰色	良好、緻密	長土			569	
第9図-62	SY03	短頸壺B	20.4				ヨコナデ		暗色-暗色	やや甘く軟質	C層	4		392	
第9図-63	SY03	甕A	24.1				口縁部タタキスリケシ		口縁部-赤褐色	良好、緻密	C層	5		393	
第9図-64	SY03	鉢D	28.6				体部外面タタキスリケシ		暗色-暗色	良好	A層	4		389	
第9図-65	SY03	甕D	27.4				体部外面タタキスリケシ、体部内面ハケ		赤褐色-明黒色	良好、緻密	B層	2		396	
第9図-66	SY03	鉢D	30				体部外面タタキスリケシ(ヘラ状工具による)	井?	暗色-暗色	やや甘く軟質	C層	9		388	
第9図-67	SY03	甕D	32				体部外面タタキスリケシ、体部内面ハケ、口縁部都内面ヘラ削り、口縁部外面タタキスリケシ		赤褐色-赤褐色	良好、緻密	B・C層	24		355	
第9図-68	SY03	甕		14.6			体部外面タタキスリケシ、底部ヘラ削り	井	暗色-暗色	やや甘く軟質	黒褐色土?	9		545	
第168図-69	SY03	甕C	20.7				体部外面タタキスリケシ		暗色-暗色	やや甘く軟質	C層	5		390	
第9図-70	SY03	甕C	18				体部外面タタキスリケシ		灰色-灰色	良好、緻密	C層	10		387	
第9図-71	SY03	甕C	21.4				体部外面タタキスリケシ		赤褐色-赤褐色	良好、緻密	焼成部床直	7		391	
第9図-72	SY03	甕C	19.6				体部外面タタキ、体部内面(あて具痕あり)		赤褐色-赤褐色	良好、緻密	C層	32		403	
第9図-73	SY03	甕E	41.4				体部外面タタキ、口縁部ヨコナデ、体部内面(あて具痕あり)		明黒色-明黒色	良好	A・B層	5		398	
第9図-74	SY03	甕A					口頸部櫛描波状紋、櫛描一次紋 櫛描波状紋		黒褐色	良好	C層			882	
第9図-75	SY03	甕A	57.4				口頸部櫛描波状紋		赤褐色-赤褐色	良好	B・C層	3		397	
第9図-76	SY03	甕A	64.2				口頸部櫛描波状紋、櫛描一次紋		明黒色-明黒	良好、緻密	C層	3		400	色調-灰・内火勝
第9図-77	SY03	甕A	53.6				口頸部櫛描波状紋		赤褐色-明黒色	良好、緻密	C層	24		401	
第9図-78	SY03	甕A	35.6				口頸部タタキスリケシ		赤褐色-赤褐色	良好、緻密	焼成部床直	5		395	
第9図-79	SY03						甕の一部		明黒色-灰色	良好	床直			787	焼台
第171図-1	SW01	杯A	13.6	9.2	2.8		底部ヘラ切り 布目痕あり		明黒色-明黒色	良好	FN02、FN03、FL03	9	14	591	
第9図-2	SW01	杯A	13.8	8.8	3.1		底部ヘラ切り		黒色-明黒色	良好	IIIb層	5	8	462	
第9図-3	SW01	杯A	12.6	8.6	3.3		底部ヘラ切り		明黒色-明黒色	良好	B②区III層	8	13	590	
第9図-4	SW01	杯A	13.6	7.4	3.4		底部ヘラ削り		灰色-灰色	良好	IIIb層	4	18	470	
第9図-5	SW01	杯A	13.8	7.2	3.4		底部ヘラ切り		明黒色-明黒色	良好	IIb層トレンチ	16	17	459	色調・内火勝
第9図-6	SW01	杯A	14	9.3	3.2		底部ヘラ切り後ナデ		灰色-灰色	良好	II層	18	32	417	
第9図-7	SW01	杯A	14.4	9	3.2		底部ヘラ切り		灰色-灰色	良好、緻密	TA I 層	8	11	501	
第9図-8	SW01	杯A	13.1	7	3.3		底部不明瞭		明黒色-明黒	良好、緻密	FO01IIIb層	9	13	415	
第9図-9	SW01	杯A	13	5.8	3.4		底部ヘラ切り		明黒色-明黒色	やや甘く軟質	I層	7	11	465	
第9図-10	SW01	杯A	13.8	8.8	3.7		底部ヘラ切り後ナデ		黒褐色-明黒	良好	FM03IIIb層	24	8	422	色調-明・内は木勝
第9図-11	SW01	杯A	13.9	8.6	3.5		底部不明瞭		明黒色-明黒色	やや甘く軟質	JA-I 層	14	13	467	
第9図-12	SW01	杯A	13.2	7	4.1		底部ヘラ削り後ナデ		明黒色-明黒	良好	IIIb層	13	20	472	
第9図-13	SW01	杯A	13.8	5.2	3.5		底部ヘラ切り後ナデ		灰色-灰色	良好	IIIb層	6	12	461	
第9図-14	SW01	杯A	14.6	10.4	3.6		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		明黒色-明黒色	良好	IIIb層トレンチ	6	10	463	
第9図-15	SW01	杯A	15	10.4	3.5		底部ヘラ切り		明黒-明黒色	良好、緻密	FL03	7	12	427	
第9図-16	SW01	杯A	14.8	9.2	3.4		底部ヘラ切り		明黒色-明黒色	やや甘く軟質	I層	12	16	458	
第9図-17	SW01	杯A	15	7.4	3.4		底部ヘラ削り		暗色-暗色	甘く軟質	FM03IIIb層	8	15	421	
第9図-18	SW01	杯A	14.2	5.2	3.5		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色-灰色	E	III 4層	7	13	466	
第9図-19	SW01	杯A	13.4	7.6	4.2		底部ヘラ切り後ナデ		暗色-暗色	良好	FN01IIIb層	6	16	426	
第9図-20	SW01	杯A	13.6	9.2	3.7		底部ヘラ切り		明黒-明黒色	やや甘く軟質	不明	12	32	587	

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎土	層位	出土位置(cm)	遺物番号	備考
第171図-21	SW01	杯A	13.8	8.8	3.8		底部ヘラ切り後ナデ		明黄色・明黄色	良好	FL01IIIb層	4	19	424
第〃-22	SW01	杯A	14.4	4.2	3.6		底部ヘラ切り		明黄色・明黄色	良好	FL01IIIb層	8	12	423
第〃-23	SW01	杯A	13.4	7.8	3.9		底部ヘラ切り後ナデ		灰色・灰色	良好	FK02IIIb層	18	32	471
第〃図-24	SW01	杯A	14.8	9.6	4.2		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		明黄褐色・黄色	良好	FK02IIIb層	8	16	460
第〃-25	SW01	杯A	13.2	7.6	4		底部ヘラ切り後ナデ		橙色・橙色	やや甘く 鉄質	I層	6	17	454
第〃図-26	SW01	杯A	14.8	6	3.7		底部ヘラ切り		灰色・灰色	良好	I層トレンチ	16	16	468
第〃図-27	SW01	杯A	14.2	8.2	4		底部ヘラ切り		灰色・灰褐色	良好	FL01II層III b層	10	11	600
第〃図-28	SW01	杯A	14.6	8.6	3.8		底部ヘラ切り後ナデ		明黄色・明黄色	良好・鉄質	IIIb層 I層	3	19	479
第〃図-29	SW01	杯A	14.8	4.2			底部ヘラ切り後板ヘラナデ		明黄色・明黄色	良好	FL01IIIb層	9	9	420
第〃図-30	SW01	杯A	13	6	4.2		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		明黄色・明黄色	良好	後部面黒褐色土	7	12	588
第〃図-31	SW01	杯A	13.8	4.8	4.2		底部ヘラ切り後ナデ		明黄色・黄色	やや甘く 鉄質	FL02IIIb層	16	19	469
第〃図-32	SW01	杯A	14	6.8	4.3		底部ヘラ切り		灰色・灰色	良好・鉄質	AO02IIIb層	3	25	425
第〃図-33	SW01	杯A	14.4	8.6	4.6		底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰色・灰色	良好	BO02FL01III層	6	26	592
第〃図-34	SW01	杯A	17.2	9.4	4.2		底部不明瞭		灰色・灰色	良好・鉄質	TA-I層	10	9	580
第〃図-35	SW01	杯A	13.8	8.4	4.5		底部板ヘラナデ		明黄色・明黄色	良好	TA-I層	3	8	689
第〃図-36	SW01	杯A	14	8.4	3.5		不明			甘く 鉄質	FM04IIIb層	16		611
第〃図-37	SW01	蓋B	15.8		1.8		天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	IIIb層	4		632
第〃図-38	SW01	蓋B	16.8		1.9		燒成付着のため不明		オリーブ色・灰褐色	良好・鉄質	IIIb層	10		653
第〃図-39	SW01	蓋B	15.8		2.1		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	TA-I層	5		633
第〃図-40	SW01	蓋	17				天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好・鉄質	FK01-IIIb層 SO02-IIIb	8		658
第〃図-41	SW01	蓋B	15.4		1.9		天井部回転ヘラ削り		橙色・灰色	良好・鉄質	FK04FJ04	3		652
第〃図-42	SW01	蓋B	16.4		2.1		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	IIIb層	5		654
第〃図-43	SW01	蓋B	15.8		2.5		天井部回転ヘラ削り		明黄色・黄色	良好・鉄質	pitIIb層	5		685
第〃図-44	SW01	蓋B	15.3		2.8		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	FM-01IIIb層	6		414
第〃図-45	SW01	蓋B	15.2		1.9		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	IIIb層	1		636
第〃図-46	SW01	蓋B	16		2.7		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	I層III層	12		655
第〃図-47	SW01	蓋B	14.3		2.6		天井部回転ヘラ削り		黄色・明黄色	良好・鉄質	TA-I層	7		631
第〃図-48	SW01	蓋B	15.8		2.8		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	I層	15		630
第〃図-49	SW01	蓋B	18		2.3		天井部回転ヘラ削り		赤褐色・橙色	良好	FK-01IIIb層 F FL-01IIIb層	2		411
第〃図-50	SW01	蓋B	15.4		1.6		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	FL-01IIIb層	19		412
第〃図-51	SW01	蓋B	15.6		2.3		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	TA-I層	1		657
第〃図-52	SW01	蓋B	16.2		2.7		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	TA I層	5		627
第〃図-53	SW01	蓋B	16.6		2.7		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	I層	5		635
第〃図-54	SW01	蓋B	16.6		3		天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	FK03IIIb層	5		638
第〃図-55	SW01	蓋B	18.4		2.4		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好	FM01IIIC層	6		416
第〃図-56	SW01	蓋B	14.8		2.5		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	FL01IIIb層FK03 SO02IIIb層	15		637
第172図-57	SW01	蓋B	16.8		1.8		天井部回転ヘラ削り		橙色・橙色	良好	I層	3		639
第〃図-58	SW01	蓋B	16.8		2.8		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	FM-03	10		413
第〃図-59	SW01	蓋B	16.8		2.5		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	トレンチ黒褐色土層	14		640
第〃図-60	SW01	蓋B	15.4		2.7		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	トレンチ黒褐色土層	10		641
第〃図-61	SW01	蓋B	16.8		3.3		天井部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	TA-I層	5		656
第〃図-62	SW01	蓋A	16.9		3.2		天井部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好・鉄質	SO02IIIb層TA I層SO-C層	7		634
第〃図-63	SW01	蓋A ?					天井部回転ヘラ削り	井	灰色・灰色	良好	検出面			644
第〃図-64	SW01	蓋A					天井部回転ヘラ削り	井	明黄色・明黄色	良好	FK03IIIb層FK04IIIb層			642
第〃図-65	SW01	杯B	14.4	12	2.3	2.8	底部面転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	TA	12	12	485
第〃図-66	SW01	杯B	13.2	13	2.6	3.2	底部面転ヘラ削り		黄褐色・明黄色	良好・鉄質	TA I層	6	8	484
第〃図-67	SW01	杯B	14.8	12	2.2	2.9	底部面転ヘラ削り		灰色・灰色	良好・鉄質	表土	4	13	618
第〃図-68	SW01	杯B	15.8	13	2.6	2.8	底部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	FL01IIIb層	7	15	437
第〃図-69	SW01	杯B	14.4	10.7	2.3	3.2	底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好・鉄質	FM03IIIb層	26	16	428
第〃図-70	SW01	杯B	14.8	12	2.5	3	底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	FL01IIIb層	14	31	436
第〃図-71	SW01	杯B	15.4	11.2	3.2		底部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	BK01I層検	6	16	474
第〃図-72	SW01	杯B	15.2	11.6	2.5	3.1	底部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	FM01後黒褐色土	19	32	613
第〃図-73	SW01	杯B	15.8	11.8	3.1		底部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好	BO02II層	7	15	476
第〃図-74	SW01	杯B	16	11.3	2.7	3.3	底部回転ヘラ削り		赤褐色・明黄色	良好	FK02IIIb層FK04IIIb層	1	32	522
第〃図-75	SW01	杯B	14.8	11.4	2.7	3.2	底部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好	トレンチ	4	17	477
第〃図-76	SW01	杯B	16	13.6	2.5	3	底部回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好	IIIb層	4	9	479
第〃図-77	SW01	杯B	14.2	10.8	3	3.5	底部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好・鉄質	II層IIIb層	5	12	616
第〃図-78	SW01	杯B	14.8	10.6	3	3.3	底部回転ヘラ削り		明黄色・明黄色	良好	SO02IIIb層FL01IIIb層	8	11	433

清水山窯跡須恵器観察表

区画番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎成	層位	口縁部残存(%)	底部残存(%)	整理番号	備考
第172区B-79	SW01	杯B	16	13.1	3.4		底部回転ヘラ削り		明黄/黄褐色	良好、緻密	IIIa層	5	7	475	
第＃-80	SW01	杯B	15.4	12.2	3	3.6	底部回転ヘラ削り		灰色/灰色	良好	FM03IIIb層	8	18	430	SW01or SW02
第＃-81	SW01	杯B	17	13.4	2.6	3.3	底部周転ヘラ削り		黄褐色/明褐色	良好、緻密	FO01IIIb層	6	10	429	
第＃-82	SW01	杯B	16.9	11.4	3.3	3.9	底部回転ヘラ削り		灰色/灰色	良好	FL05	2	24	482	
第＃-83	SW01	杯B	14.8	11	3.4	4	底部回転ヘラ削り		灰色/灰色	良好	表土層～第2層	14	32	619	
第＃-84	SW01	杯B	11	7.5	3.1	3.7	底部回転ヘラ削り		明黄褐/黄色	良好、緻密	FL03IIIb層	6	13	432	
第＃-85	SW01	杯B	12.2	10	3.2	4	底部回転ヘラ削り		明赤褐/明赤褐	良好、緻密	FM01IIIb層	8	5	435	
第＃-86	SW01	杯B	15	10	5.1	5.6	底部回転ヘラ削り		灰色/灰色	良好、緻密		2	32	478	
第＃-87	SW01	杯B	15	10.3	5.2	5.7	底部回転ヘラ削り		灰色/灰色	良好、緻密	TA I 層	1	13	481	
第＃-88	SW01	杯B	14	10.2	5.5	6.3	底部周転ヘラ削り、体部的一部ヘラによる記号ナデ（一部）		明黄褐/明黄褐	良好、緻密	表土層～第2層	11	16	480	
第＃-89	SW01	杯B	15.4	9.8	3.8	4.8	底部回転ヘラ削り		橙色/橙色	良好	不明	7	14	615	
第＃-90	SW01	杯B？	13.8				(杯B？)体部にヘラ描き絵	？	灰色/灰色	良好	FL04IIIb層	4		778	
第＃-91	SW01	杯B		10			底部回転ヘラ削り	×	橙色/橙色	良好	FK06	10		486	
第＃-92	SW01	杯B		8.8			底部回転ヘラ削り	井	明黄褐/明黄褐	良好、緻密	I 層		10	625	
第＃-93	SW01	杯B		10.6			底部回転ヘラ削り	井	黄褐色/明黄色	良好、緻密	FN03		9	623	
第＃-94	SW01	杯B		10.4			底部回転ヘラ削り	井	明黄褐/黄褐色	良好、緻密	表土		11	624	
第＃-95	SW01	杯B		11			底部回転ヘラ削り	井	明黄褐/灰色	良好、緻密	FN03IIIb層		14	621	
第＃-96	SW01	杯B		9.8			底部回転ヘラ削り	井	赤褐色/灰褐色	良好	FN03IIIb層		12	620	
第172区B-97	SW01	椀B	14.2	6.8	5.6	6.2	底部欠損		橙色/橙色	良好	表土層～第2層	13	6	693	
第＃-98	SW01	椀C	15.6	11.4	6.9	7.6	底部回転ヘラ削り、体部的一部ヘラによる記号（線刻）あり		明黄褐/灰色	良好、緻密	一番目の層FN04	14	20	695	
第＃-99	SW01	椀C	16	11.4	7.2	8	底部～ヘラ切り痕跡底部～ヘラ削り、体部第2ヨコナデ以上は回転ヘラ削り		明黄褐/灰色	良好、緻密	表土層～第2層FN03	28	19	694	
第＃-100	SW01	椀C	20				体部外面に鍔を設ける	井	橙色/橙色	やや甘く緻密	FN03IIIb層FN05	7		790	
第＃-101	SW01	椀C	20				口縁部回転ナデ	井	黄褐色/明黄色	良好	FN04基礎色土層	4		903	小野寺時代試掘坑
第＃-102	SW01	高杯A	17.2				底部回転ヘラ削り		明褐色/明色	良好、緻密	FN04IIIb層色土層上面	15		671	色調内に石混入？
第＃-103	SW01	皿A	18.6		2.6		底部回転ヘラ削り	井？	明色/明褐色	良好、緻密	FN04IIIb層	2		673	
第＃-104	SW01	皿A	22.6		2.3		底部ヘラ削り		明褐色/明褐色	良好、緻密	FN03IIIb層色土層上面	8		672	
第＃-105	SW01	円面硯脚	8	12.4	3.3		脚部に直径約2cmの丸い孔部が残る「蓋かしつ？」、中央付近に脚部貫通ピナ		灰色/灰色	良好、緻密	B②区I層	12.5	6	773	
第＃-106	SW01	無頸壺	7				口縁部内側～ヨコ撫で、体下位内部ナデ(撫で)、底部外面「ヘら」	大	灰白色/灰色	良好、緻密		21		832	
第＃-107	SW01	無頸壺	6.2				口縁部ヘラ削り、肩部ナデ(板状工具痕)	板状工	明褐色/明褐色	良好、緻密	SW01第1層FN03IIIb層	4		592	
第＃-108	SW01	長頸壺C		7.2			体部回転ナデ、底部欠損、体部外面に線3条あり		明褐色/明褐色	良好、緻密	C区B層TA-I層		16	687	
第＃-109	SW01	短頸壺C		5.8			底部回転ヘラ削り、体部外面に線3条		灰色/灰色	良好、緻密	表土層～第2層FN03IIIb層		32	683	
第＃-110	SW01	光頸壺C					口頸部に沈線2本		灰白	良好	SYM3SIK層			880	
第＃-111	SW01	長頸壺C					肩部～体部ナデ、肩部3本の沈線が2条		黄褐色/明色	良好、緻密	FM03IIIb層FN03IIIb層			850	
第＃-112	SW01	長頸壺					頸部～基部ナデ、基部 有段		黄褐色/明色	良好、緻密	FN03IIIb層FN03IIIb層			844	
第＃-113	SW01	長頸壺					体部タタキスリケシ		明黄色/明色	良好、緻密	TA-I 層			842	
第＃-114	SW01	長頸壺					頸部～基部回転ナデ、基部 有段		明黄褐色/明黄色	良好、緻密	FN03IIIb層FN03IIIb層FN03IIIb層			841	
第＃-115	SW01	長頸壺		10.7			口頸部回転ナデ		灰色/灰色	良好、緻密	FL03 FN04IIIb層FN03IIIb層		10	453	
第＃-116	SW01	長頸壺A	8.6	12.2	21.7	22.7	口頸部ナデ(撫で工具痕)、底部回転ヘラ削り、体部内面ヘラ削り、肩部ヘラナデ、底部外面線刻		明黄褐色/明黄色	良好、緻密	FN03IIIb層FN03IIIb層	32	32	682	
第＃-117	SW01	長頸壺A					体部ナデ(板状工具痕)、底部ヘラ削り、肩部ヘラ削り、底部および口縁部欠損		明黄色/明黄色	良好	FL03IIIb層FN03IIIb層			846	
第172区B-118	SW01	横瓶	8.3				体部外面タタキ、体部内面ハケ		灰色/灰色	良好、緻密	FL03	2		775	
第＃-119	SW01	横瓶	10				体部外面タタキ		明黄色/明色	良好、緻密	表土層～第2層	9		668	
第＃-120	SW01	横瓶	13				口頸部ヨコナデ		黄褐色/灰色	良好、緻密	FM04IIIb層	5		509	
第＃-121	SW01	横瓶	12.8				口頸部ヨコナデ		明灰色/黄褐色	良好、緻密	FM03IIIb層	16		451	
第＃-122	SW01	横瓶	10.2				口頸部ヨコナデ		灰色/明褐色	良好、緻密	FM04IIIb層	7		510	
第＃-123	SW01	横瓶	11.4				口頸部回転ヘラ		明褐色/灰色	良好、緻密	表土層～第2層	6		503	
第＃-124	SW01	横瓶	12.6				口頸部ヨコナデ		黄褐色/明褐色	良好、緻密	I 層	7		514	
第＃-125	SW01	横瓶	14				口頸部ヨコナデ		灰色/灰色	良好、緻密	I 層	5		507	
第＃-126	SW01	横瓶	10.5				口頸部回転ナデ		灰色/黄褐色	良好、緻密	FN05B区II上層	12		505	SW01or SY01
第＃-127	SW01	横瓶	11.8				口頸部ヨコナデ		黄褐色/明色	良好、緻密	TA I 層	6		447	
第＃-128	SW01	横瓶	13				口頸部ヨコナデ		明褐色/明褐色	良好、緻密	FJ04	11		492	
第＃-129	SW01	横瓶	15.2				口頸部ヨコナデ		灰褐色/赤褐色	良好	FM04IIIb層	10		495	
第＃-130	SW01	横瓶	10.6				口頸部ヨコナデ		黄褐色/明色	良好、緻密	FM04IIIb層	9		500	
第＃-131	SW01	横瓶	12.1				口頸部回転ナデ		灰色/灰色	良好、緻密	P i I II III 5層	4		684	
第＃-132	SW01	横瓶	12.7				口頸部ヨコナデ		明黄色/明色	良好、緻密	IIIb層	8		496	
第＃-133	SW01	横瓶	12.6				口頸部回転ナデ		灰色/灰色	良好、緻密	表土層～第2層	5		665	
第＃-134	SW01	横瓶					頸部回転ヘラ削り、頸部～体部内面ヘラ削り痕あり、体部外面タタキスリケシ		黄褐色/明色	良好、緻密	IIIb層FN03IIIb層			697	
第＃-135	SW01	横瓶					体部外面タタキスリケシ、頸部～肩部内面ヘラ削り痕ナデ		明褐色/灰色	良好、緻密	FL03IIIb層FN03IIIb層FN03IIIb層			833	
第＃-136	SW01	横瓶					体部外面ヨコキズ、頸部部内面ヘラ削り、体部全体タタキ		明色/黄褐色	良好	表土層～第2層FN03IIIb層		16	686	

清水山窯跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高 A(cm)	器高 B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	胎土	出土位置	備考
第174図-137	SW01	横瓶					体部外面タタキスリケシ、装飾部外面ハケ		灰色・灰色	良好、緻密	FN2(FL)IIIb層 FN3(FL)IIIb層	781	
第 〃 図-138	SW02	横瓶					体部外面回転ヘラ削り、装飾後外面ヘラ削り		黒色・黒褐色	良好、緻密	I 層	700	
第 〃 図-139	SW02	横瓶					体部外面回転ヘラ削り、装飾部外面ヘラ削り		褐灰色・黒色	良好、緻密	FL01	699	
第 〃 図-140	SW02	横瓶					体部外面タタキスリケシ、装飾部分張出部ヘラ削り後ナデ		灰色・灰色	良好、緻密	SW01 IIIb層	858	
第175図-141	SW02	横瓶					体部外面タタキスリケシ、牛皮状剥げ跡あり		黒色・褐黒色	良好、緻密	I 層IIIb層FN04	836	
第 〃 図-142	SW02	横瓶					体部外面装飾後全部ヘラ削り後回転ヘラ削り		灰色・灰色	良好、緻密	TA、FN03、IIIb層、I 層	834	
第 〃 図-143	SW01,SW02	短頸壺A	6.8				□縁部～肩部ヨコナデ		明黒色・明黒色	良好、緻密	検出面	8 670	
第 〃 図-144	SW01	短壺	9.7				天井部回転ヘラ削り			良好、緻密	FL01、FN2IIIb層	20 674	
第 〃 図-145	SW01	短頸壺B	10.6				□頸部ヨコナデ、体部外面タタキスリケシ		明黒色・明黒色	良好	IIIb層	8 501	
第 〃 図-146	SW01	短頸壺B	8.4				□頸部ヨコナデ、体部外面タタキスリケシ		明黒色・明黒色	良好、緻密	FN04IIIb層FN03IIIb層	7 498	
第 〃 図-147	SW01	短頸壺B	8.6				胴部に3本凹線が3条、体上部外面カキメ		灰色・灰色	良好、緻密	FL03IIIb層	11 849	
第 〃 図-148	SW01	短頸壺B	11.4				□頸部回転ナデ		明黒色・明黒色	良好、緻密	FK03	6 499	
第 〃 図-149	SW01	短頸壺C	13.8				体部外面回転ナデ頸部以下高台、口縁部～体部分に国内化ナデ		黒色・黒褐色	良好、緻密	B区検	3 512	
第 〃 図-150	SW01	短頸壺C	13.2				□頸部ヨコナデ		灰色・灰色	良好、緻密	TA I 層	3 515	
第 〃 図-151	SW01	短頸壺C	13.3				□頸部～体部外面タタキスリケシ		灰色・灰色	良好、緻密	FN01IIIb層	7 497	
第 〃 図-152	SW01	短頸壺C	11.6				体部外面ナデ(ヘラ状のもの)		褐灰色・黒褐色	良好、緻密	FN04	8 446	
第 〃 図-153	SW01	短頸壺C	13				体上部外面ナデ(板状工具による)		明黒色・黒褐色	良好、緻密	FM03IIIb層	4 439	
第 〃 図-154	SW01	短頸壺C	13.8				体上部外面ナデ(板状工具による)		明黒色・黒褐色	良好、緻密	FM04IIIb層	2 443	
第 〃 図-155	SW01	短頸壺C	14.6				体上部外面ナデ(板状工具による)		明黒色・黒褐色	良好、緻密	FM03IIIb層	7 442	
第 〃 図-156	SW01	甕C	15				□頸部～体上部外面回転ナデ、体部タタキスリケシ		明黒色・黒褐色	良好、緻密	後出面黒褐色土	6 665	
第 〃 図-157	SW01	短頸壺C	16				□頸部ヨコナデ、体部内外面カキメ		明褐色・黒褐色	良好、緻密	FN04	7 441	
第 〃 図-158	SW01	短頸壺部都		9			胴部～体部タ下部高台、高台以下ヨコナデ、底部回転ヘラ削り		明黒色・黒褐色	良好、緻密	FM03IIIb層	12 851	
第 〃 図-159	SW01	甕A	22.4				□頸部回転ナデ		明黒色・明黒色	良好	FL04FL03	20 493	
第 〃 図-160	SW01	甕D	28.2				□縁内面沈線、口頸部不明瞭		明褐色・明褐色	やや甘く軟質	I 層	4 6.3	
第 〃 図-161	SW01	鉢D	19				□頸部回転ナデ		灰色・灰色	良好、緻密	IIIb層	5 506	
第 〃 図-162	SW01	壺C	16				体部外面タタキ、口頸部ヨコナデ、内面ハケ目調整あり		明黒色・明黒色	良好、緻密	FL03FL04 FN04,FN3 全区検出面	26 438	
第179図-163	SW01	壺D	22.8				□縁部2条の沈線、体部外面ナデ		褐色・褐色	良好、緻密	FM01IIIb層	6 450	
第 〃 図-164	SW01	壺C	22.8				体部外面タタキ、口頸部タタキスリケシ		黒褐色・黒色	良好	後出面黒褐色土	8 659	
第 〃 図-165	SW01	壺D	30				体部外面不明瞭(タタキスリケシ)、口頸部ヨコナデ		褐色・明黒色	良好	I 層	4 448	
第 〃 図-166	SW01	壺A	30				□頸部ヨコナデ		明黒色・明黒色	良好、緻密	FL03FL04FN2,FN3 IIIb層TA・I 層	7 456	
第 〃 図-167	SW01	壺D	32.5				体部外面タタキ、口頸部タタキスリケシ		灰色色・灰色	良好、緻密	FK02	3 452	
第 〃 図-168	SW01	壺A	25.2				□頸部ヨコナデ		明褐色・明褐色	良好、緻密	FL03	5 449	
第 〃 図-169	SW01	壺A	27				体部外面ナデ、口頸部ヨコナデ、内面ハケ目調整あり		明黒色・明黒色	良好、緻密	FN04 FL2IIIb層	8 454	
第 〃 図-170	SW01	壺A	27.2				体部内面ヘラ調整あり、口頸部ヨコナデ、体部外面ナデ		明褐色・明黒色	良好、緻密	B-2区II層	9 440	
第 〃 図-171	SW01	壺A	34.5				□頸部ナデ(厚板工具による)体部横位刷毛		灰色・灰色	良好、緻密	FL2IIIb層 FK2層	10 457	
第 〃 図-172	SW01	壺A	28.4				□頸部タタキスリケシ		明黒色・明黒色	良好、緻密	表土	7 660	
第 〃 図-173	SW01	壺A					□頸部櫛描波一つ紋 横横波状紋		褐褐色	良好	TA I 層	881	
第 〃 図-174	SW01	壺A	61.4				□頸部櫛横波状紋		明黒色・明黒色	良好、緻密	明黒色土層 FL2 TA・I 層 FN3 IIIb層	6 455	
写真図版PL	SW01	蓋					ツマミ部 ツマミなし	井	褐色・褐色	良好	FN05	645	
写真図版PL	SW01	III A					底部ヘラ削り(一方向)	井	灰色・灰色	良好	FN05TA	679	
写真図版PL	SW01	杯B		9.6			底部回転ヘラ削り	井	褐色・褐色	甘く軟質	トレンチ I 層	12 957	
写真図版PL	SW01	蓋					体部外面タタキ、ヘラ描き	井	黒色・灰色	良好、緻密	I 層	663	
第177図-1	SK13	杯A	13.4	8	3.6		底部ヘラ削り		灰白	良好		873	
第 〃 図-2	SK11	杯B	8.6				底部不明瞭		赤褐色	甘く軟質		869	
第 〃 図-3	SK11	杯A	14.8	8.5	4.4		底部ヘラ切り		暗褐色	良好		870	
第 〃 図-4	SK11	蓋B	16.8		1.5	2.3	天井部回転ヘラ削り		赤褐色	良好		872	
第179図-1	SX01	杯A	13.2	8	3.6		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		895	
第 〃 図-2	SX01	杯A	12.4	6.8	4		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		886	
第 〃 図-3	SX01	杯A	14	5.5	4.3		底部回転糸切り		灰	やや甘く軟質		888	
第 〃 図-4	SX01	杯A	13.6	6.5	4.1		底部回転糸切り		暗褐色	良好		889	
第 〃 図-5	SX01	杯A	13.4	6.6	3.8		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		891	
第 〃 図-6	SX02	杯A	12.8	6.8	4		底部回転糸切り		灰白	良好		893	
第 〃 図-7	SX02	杯A	13.2	7	3.7		底部回転糸切り		灰白	やや甘く軟質		897	
第 〃 図-8	SX02	杯A	11.8	6.4	3.7		底部回転糸切り		暗褐色	良好、緻密		898	

池田端窯跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	器種	口径(cm)	底部(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	胎土	底径	器高	整理番号	備考
第199図-1	SY01	杯A		13.5	7.8		3.2	底部不明瞭		黄褐色	甘く軟質	1層	4	14	7		
第#図-2	SY01	杯A		14.4	7.3		3.5	底部外面内面ナデ		黄褐色	良好	〃	8	13	2		
第#図-3	SY01	杯A		14.5	10		3.7	底部回転ヘラ削り		黄褐色	やや甘く軟質	〃	6	17	3		
第#図-4	SY01	杯A		15.7	9.2		3.5	底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰	良好	〃	10	16	1		
第#図-5	SY01	杯A		13.9	6		4.2	底部ヘラ切り後ナデ		黄褐色	やや甘く軟質	〃	14	14	4		
第#図-6	SY01	杯A		14.2	8		4.4	底部板ヘラナデ		黄褐色	やや甘く軟質	〃	5	14	5		
第#図-7	SY01	杯A			7.2			底部板ヘラナデ		黄褐色	やや甘く軟質	〃		32	6		
第#図-8	SY01	蓋B		14.9		2.3	3	天井部回転ヘラ削り		灰	良好,緻密	〃	20		13		
第#図-9	SY01	蓋B		14.7		2.9	3.6	天井部回転ヘラ削り		灰	良好,緻密	〃	13		15		
第#図-10	SY01	蓋B		15.4				天井部回転ヘラ削り		灰白	甘く軟質	〃	21		10		
第#図-11	SY01	蓋B		15.1		2.5	3.2	天井部回転ヘラ削り		灰白	良好	〃	9		12		
第#図-12	SY01	蓋B		16.2		3		天井部回転ヘラ削り		灰	良好,緻密	〃	19		11		
第#図-13	SY01	蓋B		18.7		3.2	4	天井部回転ヘラ削り		灰白	良好	〃	21		176		
第#図-14	SY01	蓋B		19.1		1.9	2.6	天井部回転ヘラ削り		灰	良好,緻密	〃	29		16		
第#図-15	SY01	蓋B		18.2		1.8	2.4	天井部回転ヘラ削り		灰	良好,緻密	〃	10		14		
第#図-16	SY01	杯B		13.8	10.8		3.1	底部回転ヘラ削り		灰	良好,緻密	〃	1	6	8		
第#図-17	SY01	杯B			13			底部回転ヘラ削り		灰白	やや甘く軟質	〃		14	9		
第#図-18	SY01	横瓶						内面平滑痕あり ナデ,底部ナデ,体部以転ナデ		灰	良好	〃			17		
第#図-19	SY01	壺底部			10.5			外面タタキ、内面ナデ		灰	良好,緻密	〃		7	18	平底	
第202図-1	SY02	杯A		13.3	8		3.7	底部ヘラ切り,体部回転ナデ痕,底部内面中央ナデ		灰	やや甘く軟質	2層・3層・5層	15	32	19		
第#図-2	SY02	杯A		14.4				底部欠損		灰白	やや甘く軟質	後ピ区,層	14		20		
第#図-3	SY02	杯B		13.2	9.2		3.3	底部回転ヘラ削り、体部板状工具痕		灰白	やや甘く軟質	3層	14	17	35		
第#図-4	SY02	杯B		13.4	9.8		3.5	底部回転ヘラ削り、体部板状工具痕		灰	良好	2層	5	6	26		
第#図-5	SY02	杯B		13.8	9.6		3.4	底部回転ヘラ削り、体部板状工具痕		灰白	良好		8	16	36		
第#図-6	SY02	杯B		13.7	9.9	3.2	3.5	底部回転ヘラ削り後外周長板状工具による回転ナデ		灰白	やや甘く軟質	2層・3層	16	16	37		
第#図-7	SY02	杯B		13.8	9.6	3.3	3.5	底部回転ヘラ削り		灰	良好		4	13	23		
第#図-8	SY02	杯B		14.5	10	3.4	3.4	底部回転ヘラ削り、体部内・外部板状工具痕		灰	やや甘く軟質	2層	5	13	29		
第#図-9	SY02	杯B		15.4	11.4		3.4	底部回転ヘラ削り		黄褐色	良好	1層・後ピ区・調査区	5	11	33		
第#図-10	SY02	杯B		13.8	9.2	3.8	4.1	底部回転ヘラ削り、体部板状工具痕		灰白	やや甘く軟質	2層	18	21	38		
第#図-11	SY02	杯B		14	10.2		3.7	底部回転ヘラ削り		黒褐色	良好,緻密		2	8	22		
第#図-12	SY02	杯B		14.6	11.2	3.8	4.6	底部回転ヘラ削り		灰白	良好,緻密	T-A-④	10	16	28		
第#図-13	SY02	長頸壺		7.2				ヨコナデ		黒褐色	良好	1層	18		42		
第#図-14	SY02	横瓶						内面あて具痕あり、外面タタキ		灰	良好,緻密	〃			39		
第#図-15	SY02	甕A		44				口縁部施形装飾紋		黒褐色	良好,緻密	〃		2	40		
第#図-16	SY02	壺A		25				口縁部～内面ヨコナデ		灰	良好,緻密	〃		4	44		
第#図-17	SY02	土師器長胴甕		23				ヨコナデ		黄褐色	甘く軟質	1層		9	41		
第211図-1	SY05	杯A		13.6	7.4		2.9	底部ヘラ切り後ナデ		灰白色	やや甘く軟質	2層	10	18	57		
第#図-2	SY05	杯A		13	9		3.3	底部回転ヘラ切り		灰白色	やや甘く軟質	〃	9	12	58		
第#図-3	SY05	杯A		18	12		6.3	底部不明瞭(ヘラ削り?)		灰白色	やや甘く軟質	〃	20	24	68		
第#図-4	SY05	杯A		17				底部欠損		灰	良好	〃	5		67		
第#図-5	SY05	蓋B		14.2		2.5	3.3	天井部回転ヘラ削り		黒褐色	やや甘く軟質	〃	10		66		
第#図-6	SY05	杯B		13.8	9.8	3.7	4.2	底部回転ヘラ削り		黒褐色	甘く軟質	〃	6	16	60		
第#図-7	SY05	杯B		14.2	9.4	4.2	4.8	底部回転ヘラ削り		黒褐色	やや甘く軟質	〃	30	31	61		
第#図-8	SY05	杯B		13.4	7.4	3.5	3.9	底部回転ヘラ切り		灰白色	やや甘く軟質	〃	13	11	59		
第#図-9	SY05	杯B			9			底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り		灰	やや甘く軟質	〃		20	63		
第#図-10	SY05	杯B			9.8			底部回転ヘラ削り		黒褐色	やや甘く軟質	〃		32	65		
第#図-11	SY05	杯B			9.6			底部回転ヘラ削り		黒褐色	やや甘く軟質	〃		32	64		
第#図-12	SY05	杯B			10.2			底部回転ヘラ切り		灰白色	甘く軟質	〃		15	62		
第#図-13	SY05	壺						外面タタキ、しぼり痕あり 回転ヘラナデ,体部内部ナデ(縦方向)		赤褐色	良好	遺構一括SY05一括			178		
211図-1	SY06	杯A		12.6	6.4		3.4	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	16	32	135		
第#図-2	SY06	杯A		12.8	5.8		3.5	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	6層	14	35	79		
第#図-3	SY06	杯A		12.6	6.4		3.9	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	25	32	70		
第#図-4	SY06	杯A		13.2	5.4		3.6	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	〃	12	32	87		
第#図-5	SY06	杯A		12	6.2		3.7	底部ヘラ切り		黄褐色	甘く軟質	〃	30	22	124		
第#図-6	SY06	杯A		12.4	6		3.7	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	6層	26	32	136		
第#図-7	SY06	杯A		12.8	6		3.5	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層	15	32	76		
第#図-8	SY06	杯A		13	5.8		4	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	〃	30	32	125		
第#図-9	SY06	杯A		12.8	5.8		3.8	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	25	32	82		

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎土	層位	口径指数(B/A)×100	底径指数(B/A)×100	整理番号	備考
第211図-10	SY06	杯A	12.8	5.2		3.9	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層	32	32	73	
第#図-11	SY06	杯A	13	4.4		3.8	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	32	32	69	
第#図-12	SY06	杯A	13.7	6.1		3.5	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	〃	12	32	86	
第#図-13	SY06	杯A	12.4	5.2		3.9	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	3層・4層	12	32	131	
第#図-14	SY06	杯A	12.8	5.8		4	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	4層	32	33	129	
第#図-15	SY05	杯A	13.2	6		4	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	29	33	74	
第#図-16	SY05	杯A	12.8	5.6		4.3	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	5層・7層	20	32	138	
第#図-17	SY05	杯A	12.8	5.2		4.1	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	29	32	133	
第#図-18	SY05	杯A	13.2	6.6		3.8	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	〃	11	32	84	
第#図-19	SY05	杯A	13	6.2		3.8	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	〃	24	32	83	
第#図-20	SY05	杯A	13.4	6		4.4	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	〃	19	32	134	
第#図-21	SY05	杯A	13.8	5.8		4	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	5層・7層	15	32	132	
第#図-22	SY05	杯A	13.4	6.2		3.9	底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	4	32	130	
第#図-23	SY05	杯B	10.1	5.5	4.5	5.2	底部回転糸切り		灰	良好、緻密	焼成部床直	6	32	89	
第#図-24	SY05	杯B		9.6			底部回転ヘラ削り		灰	良好	〃		5	94	
第#図-25	SY06	凸巻付耳有蓋					外面タタキ、内面ナデ		灰	良好	2a層			92	
第#図-26	SY06	壺					把手部		灰	良好	9層上面			93	把手
第#図-27	SY06	壺A					口頸部外面櫛状波状状、口縁部一口頸部内面ヨコナデ		黒褐色	良好	不明			215	他図面のみ掲載
第#図-28	SY06	壺A	52				口頸部櫛描波状状、内面ヨコナデ		灰	良好、緻密	3層	2		95	
第#図-29	SY05	壺		11.4			外面タタキ、内面指頭痕ありナデ		灰	良好	9層		3	96	平底
第#図-30	SY06	甕底部		16.4			内面ナデ、外面タタキ		灰	良好	1層		6	91	平底
第212図-1	SY07	杯A		5.8			底部回転糸切り		黄褐色	やや甘く軟質	2層？		19	209	
第#図-2	SY07	杯A		6.4			底部回転糸切り		黄褐色	やや甘く軟質	2a層		32	141	
第#図-3	SY07	杯A		5.4			底部回転糸切り		暗褐色	やや甘く軟質	不明		32	149	
第#図-4	SY07	杯A		5.6			底部回転糸切り		灰	良好	3層		20	210	他図面にも掲載され、重ねられた可能性あり
第#図-5	SY07	壺B					天井部回転ヘラ削り		灰	良好	1層			145	重ね焼き痕跡
第#図-6	SY07	杯B		12			底部回転ヘラ削り		灰	やや甘く軟質	1層		7	142	
第#図-7	SY07	壺底部		8			底部回転糸切り外周へラ削り		黄褐色	やや甘く軟質	焼成部床直・1層		32	143	底部
第#図-8	SY07	凸巻付耳有蓋					外面不明瞭、内面ナデ		黒褐色	良好	1層			148	
第#図-9	SY07	壺A					ヨコナデ		灰	やや甘く軟質	3層			146	
第#図-10	SY07	壺A	50.2				口頸部櫛描波状状		灰	やや甘く軟質	不明	2		150	
第#図-11	SY07	壺					外面タタキ、内面ナデ		黄褐色	良好	不明			144	丸底
第#図-12	SY07	甕底部		16.2			外面タタキ、内面不明瞭		灰	やや甘く軟質	上部表土		1	147	平底
第214図-1	SW02	杯A	12.8	7		4.1	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好、緻密		8	8	110	
第#図-2	SW02	杯A	12.8	8		5	底部回転ヘラ削り		灰白	良好	RM10	7	10	106	
第#図-3	SW02	杯A	13.8	8		4.3	底部ヘラ切り後ナデ、底部内面ハケ		灰白	良好	RO08	1	9	108	内面にハケ調の可能性あり、内面部分の剥落有り
第#図-4	SW02	杯A	14.5	9		4.2	底部ヘラ切り後ナデ		灰白	良好		2	10	105	
第#図-5	SW02	杯A	13.8	9		6.8	底部ヘラ切り後ナデ		灰白	良好	RN11	3	16	104	
第#図-6	SW02	杯A	14.6	9.4		3.7	底部回転ヘラ削り後ナデ		灰	やや甘く軟質	トンチ目(D)	15	15	109	
第#図-7	SW02	杯A	13.8	9.2		3.6	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好	RO08	19	19	107	
第#図-8	SW02	杯B	14.2	11.6		3.2	底部回転ヘラ削り		灰白	良好	RM10	7	8	113	
第#図-9	SW02	杯B	14.8	8.8	3.4	3.7	底部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密	RO08	1	5	111	
第#図-10	SW02	杯B	12.8	8.6		4.7	底部回転ヘラ削り		灰白	良好		4	8	112	
第#図-11	SW02	杯B	16.2	9.6	6.8	7.1	底部回転ヘラ削り		赤褐色	やや甘く軟質	RO08	15	14	115	
第#図-12	SW02	蓋B					天井部回転ヘラ削り、つまみ部に蓋をかぶせるための溝あり・焼成痕あり		灰白色	やや甘く軟質	RN16			102	つまみ部の剥落有
第#図-13	SW02	高杯	16	13		1.2	底部回転ヘラ削り		灰白色	良好	赤水トンチ	11	17	118	
第#図-14	SW02	皿	17.6				回転ヘラ削り		灰	良好、緻密	RN11	8		117	
第#図-15	SW02	円面硯		24			回転ナデ後ヘラによる切込み		灰	良好、緻密	RL12		2	221	
第#図-16	SW02	長頸壺A	7.8	10.4		19.7	内・外置回転ナデ、口巻部つまみ出し		灰	良好、緻密	RO08トンチ大粒、RN11ベタ、トンチ目	25		116	
第#図-17	SW02	凸巻付耳有蓋					外面タタキ、内面ハケ、耳部背孔あり		灰	良好	不明			101	
第#図-18	SW02	甕A	30.5				外面タタキ、内面あて具痕あり(凹心円)		灰	良好、緻密	RO08	6		122	内面同心円文
第#図-19	SW02	甕A	34.6				口頸部櫛描波状状		灰	良好	一括		3	121	
第#図-20	SW02	甕A	50.6				口頸部櫛描波状状		灰	良好	RP12			120	
第#図-21	SW02	甕A	50.6				口頸部櫛描波状状、櫛描波状状、櫛描一ツ状		灰	良好、緻密	RO10,RN10	5		123	
第#図-22	SW02	甕A					外面タタキ、内面ナデ		黄褐色	甘く軟質	RN10			98	丸底
第#図-23	SW02	土錘												230	
第226図-1	SK15	土師小型壺					不明瞭(回転ナデ？)		浅黄橙	甘く軟質				158	
第226図-1	SK20,21,24	須恵器破片					外面ナデ、口頸部部内面ヨコナデ、体部内面ハケ、内面に指ナデ		灰白色	良好				214	第4図参照 SK20・21・24 第1図参照 SK20,21

池田横穴遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎土	焼成	層位	出土位置(cm)	出土位置(cm)	実測番号	備考
第226図-1	SK22	壺胴下半部		13			内面不明瞭、外面タテ多方ケズリ		黄褐色	甘く軟質					160	胴部
第 ″ 図-2	SK23	壺胴下半部		9			外面不明瞭、内面ハケ		灰白色	甘く軟質			15	161		
第226図-1	SK23	杯A	14	8.2		3.6	底部ヘラ削り		灰白	良好		5	17	205		
第 ″ 図-2	SK23	杯A	12.5	7		3.5	底部ヘラ切り		灰白	良好		8	17	204		
第 ″ 図-3	SK23	杯B	18.2	12	3.3	3.8	底部転回転ヘラ削り後外周回転ヘラ削り		灰	良好		18	32	154	無釉部分に自然釉	
第 ″ 図-4	SK23	杯B	14.8	8.2	6	6.4	底部回転ヘラ削り後中央部ナデ		黒褐色	良好、緻密	1層ブラン直上	14	32	225		
第 ″ 図-5	SK23	土師長頸壺B	19.4				口縁部ヨコナデ、体部ハケ、内面不明瞭		赤褐色	甘く軟質		6		155		
第 ″ 図-6	SK23	凸帯付甕					外面タテ、体上部内面指頭痕あり		黒褐	良好、緻密				166		
第226図-1	SK24	土師長頸壺		4			外面ヘラ削り、内面ハケ		黄褐色	甘く軟質			18	157		
第227図-1	SK31	甕底部		20.8			外面タテ方ケズリ、内面横方向ケズリ、底部内面指頭痕、底部外面ナデ		赤褐色	甘く軟質			15	189	平底	
第227図-2	SK31-AREA	壺B	35.4				口頸部～内面ヨコナデ、体部外面タキ		灰白	甘く軟質		7		194		
第227図-1	SK32	須恵					外面タテ、内面ハケ		灰	良好				164		
第227図-1	SK34	杯A	13.2	6.6		3.6	底部回転糸切り		灰	良好、緻密	1層ブラン直上	5	32	226		
第 ″ 図-2	SK34	土師小型壺	11	7		11.7	口縁部ヨコナデ、体部内面ケズリ、底部部分ヨコナデ後ヘラ削り、内面ケバ状、緻密な胎土		赤褐色	甘く軟質	II層直上	25	33	165		
第 ″ 図-3	SK34	土師小型壺		6.4			体上部外面ケズリ、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り		赤褐色	甘く軟質			24	196		
第227図-1、第228図-2	SK34,38	壺胴部					外面タテ方ケズリ、内面ヨコナデ		黒褐色	良好、緻密				218	内面横方向ケズリ、一部に自然釉付着、内面に指頭痕	
第227図-1	SK39	壺胴下半部		11.4			外面、内面カキ		黒褐色	良好、緻密			7	163	内面に指頭痕、底部外面にヘラ状工具痕あり	
第228図-1、第229図-1	SK45	壺C	16.8				口縁部ヨコナデ、外面タタキ、内面ナデ		灰白色	甘く軟質		13		187		
第229図-2、第229図-1	SK46,47	土師長頸壺	19.8				内・外面不明瞭、外面指位ハケ(ロクロ回転)		赤褐色	甘く軟質		10		162		
第228図-2	SK53	横瓶	11.8			21.7	口縁部ヨコナデ、体上部内面ケズリ、内面ハケ目はナデ、体下部内面ヘラ削り	×	灰	良好、緻密		32		165		
第 ″ 図-3	SK53	土師長頸壺A	23.6	9.8		34.6	口縁部ヨコナデ、体上部内面ケズリ、体下部内面ヘラ削り、底部外面ヘラ削り、底部内面ヘラ削り		橙黄褐	良好、緻密		4	18	207	平底	
第 ″ 図-4	SK53	横瓶					体部外面タタキ、体部内面ヨコナデ、底部ヘラ削り		黒褐色	良好、緻密				203	丸底	
第 ″ 図-5	SK53	長頸壺A	10.8	14.8		21.5	口縁部～内面ヨコナデ、体部外面タタキ、体部内面横ハケ後ヨコナデ、底部ヘラ削り		灰	良好		31	12	198		
第229図-1	SK62	提瓶並B	15.2				口縁部不明瞭、口縁部～体上部内面ヨコナデ、体下部内面ハケ		灰白色	良好		6		185		
第229図-1	SK68,77	甕		15.4			外面タタキ、内面あて具痕あり(同心円)		灰	良好、緻密	1層		12	219	平底、胴部色調不均一	
第229図-1	SK71	鏡取部					外面タタキ、体下部内面指頭痕あり		黒褐	良好、緻密				168	胴部タタキあり	
第 ″ 図-2	SK71	横瓶	8				外面タタキ		灰	良好			7	167	平底	
第228図-1、第231図-1	SK72,77	横瓶					体部外面タタキ、底部部分第ハケ目あり、内面回転ナデ		灰	良好、緻密	1層黒色土			169		
第228図-1、第231図-1	SK72,73	横瓶					外面タタキ、底部部分不明瞭、内面ナデ		灰	良好、緻密	1層黒色土			170		
第228図-1	SK79	提瓶並					体部外面タタキ、内面内面指頭ナデ、底部外面ヘラ削り		灰白	良好				206	平底	
第230図-1	SK87	横瓶	12.8			23.6	口縁ヨコナデ、体下部ヨコナデ、体部外面タタキ、体部内面指頭ナデ		灰	良好		24		200	丸底	
第 ″ 図-2	SK87	壺C	22				ヨコナデ		灰	良好、緻密		17		171		
第 ″ 図-3	SK87-BB	壺					外面タタキ、内面ナデ		黒褐色	良好、緻密				173	底部指ナデ痕、胴部指ナデ	
第 ″ 図-4	SK87	横瓶					体部外面タタキ後指頭ナデ、体部内面横ハケ、底部部分ヨコナデ		灰	良好、緻密				211		
第230図-1	SK88	杯A	14.2	9		4.2	底部ヘラ切り後外周ヘラ削り		灰白	良好		32	33	152		
第 ″ 図-2	SK88	杯A	13.8	8.4	4.4		底部板ヘラナデ後外周ヘラ削り		灰	ややナ(軟質)		14	33	153		
第 ″ 図-3	SK88	横瓶					体部外面タタキ後中央部ハケ目あり、底部内面ヨコナデ、底部ヘラ削り		灰	良好、緻密				172	中央部に一部自然釉付、丸底	
第 ″ 図-4	SK88	横瓶					内面指頭ナデ、体部後ヨコナデ、外面指頭ナデ、底部部分ヨコナデ、外面中央に一部付着あり		黒褐色	良好、緻密				199	丸底	
第 ″ 図-5	SK88	土師長頸壺B	21.5			34.6	口縁部ヨコナデ、体下部内面不明瞭、底部～体部外面ハケ、体上部内面ハケ		橙黄褐	甘く軟質		20		208	丸底	
第 ″ 図-6	SK88	壺底部		10			体部外面タタキ後口縁ヨコナデ、体下部～底部内面ヨコナデ、体上		灰	良好、緻密			33	201	底部	
第 ″ 図-7	SK88	壺C	29.2		32.6		外面タタキ、内面ハケ目あり、内面ヨコナデ			良好、緻密				229		
第231図-1、第232図-1	SK88	壺底部					外面タタキ、底部内面指頭痕あり		灰白色	甘く軟質				188	丸底	
第231図-1	SK96	短頸壺					体上部ヨコナデ、体下部ヨコナデ後ヘラ削り、内面ヨコナデ		灰	良好、緻密				159	胴部	
第 ″ 図-2	SK96	壺D	26.4			26.8	口縁部～体上部内面ヨコナデ、体下部～底部内面ヨコナデ、外面タコナデ、内面ハケ目		灰	良好	B一括	13		197	丸底	
第232図-1	SK98	杯B	13	7.8	3.3	3.8	底部回転ヘラ削り		灰白	ややナ(軟質)		26	31	181		
第 ″ 図-2	SK98	杯B	17.8	12.4	5.2	5.8	底部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密		21	32	191		
第 ″ 図-3	SK98	壺C	18.4				ヨコナデ		黄褐色	ややナ(軟質)		13		174		
第232図-1	SK99	杯A	12.8	8.2		3.9	底部板ヘラナデ		灰白	良好		21	32	154		
第 ″ 図-2	SK99	杯A	9				底部ヘラ切り		灰白色	甘く軟質			32	156		
第233図-1	SX01	土師小型壺	14.5	9.4		24.9	外面不明瞭、内面ヨコナデ		赤褐色	甘く軟質	表採遺物と出土地点が	30	32	202		
第 ″ 図-2	SX01	土師長頸壺B	21				口縁部ヨコナデ、内面ヘケ		赤褐色	甘く軟質		5		195		
第 ″ 図-3	SX01	土師長頸壺B					外面ヘラ削り、内面ナデ		黄褐色	甘く軟質				177	丸底	
第 ″ 図-4	SX01	横瓶	10.5			24.5	体部外面ナデ多、底部部分第回転ヘラ削り、内面ヘケ、口縁部ヨコナデ		灰	良好、緻密	1層黒褐色土中	7		193	丸底	
第233図-1	SD03	弓形状須恵器					外面タタキ、内面不明瞭(同心円あて具痕?)		灰	良好				220		
第 ″ 図-2	SD03	甕					外面横縦波状紋、内面ヨコナデ		灰	良好、緻密				223		
第 ″ 図-3	SD03	壺	45				外面横撫波状紋、内面回転ナデ		灰	良好、緻密		1		224		
第 ″ 図-4	SD03	甕	45				外面横縦波状紋、内面互転ナデ		灰白色	ややナ(軟質)		2		222		
第 ″ 図-5	SD05	杯B	12.2	8.6	3.3	4.1	底部互転糸切り		灰	良好、緻密		15	15	183		

池田端窯跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	出土位置(No./20)	出土位置(No./20)	整理番号	備考
第233図-6	SD06	杯B	12.2	7.2	3.3	3.8	底部回転ヘラ削り		灰	良好、無砂		17	19	182	
第 # 図-7	不明	杯A	13.4	8.0	3.8		底部不明瞭(ナデ？)		灰			6	14	227	
第 # 図-8	不明	甕	23.4				ヨコナデ		灰	良好	②	3		190	

牛出古窯遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	出土位置(No./20)	出土位置(No./20)	整理番号	備考
第276図-1	SY01	杯A	13	7	3.4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		14	32	129	
第 # 図-2	SY01	杯A	14	5.6	3.7		底部回転糸切り		灰	良好		14	16	99	
第 # 図-3	SY01	杯A	15	7	3.5		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		11	32	94	
第 # 図-4	SY01	杯A	13	6	4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		8	8	91	
第 # 図-5	SY01	杯A	12.4	6.4	4.5		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		20	32	87	
第 # 図-6	SY01	杯A	12	5	4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		8	32	89	
第 # 図-7	SY01	杯A	12	6	4.3		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		21	32	95	
第 # 図-8	SY01	杯A	14	7.2	3.8		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		8		90	
第 # 図-9	SY01	杯A	13	6.4	4.1		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		9	32	127	
第 # 図-10	SY01	杯A	13.8	7	4.1		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		29	29	53	
第 # 図-11	SY01	杯A	14	6.4	4.2		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		11	32	88	
第 # 図-12	SY01	杯A	14.2	7	4.5		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		12	32	128	
第 # 図-13	SY01	杯A		6.4			底部回転糸切り	大	浅黄橙	ややもく軟質			32	311	底部に大印
第 # 図-14	SY01	蓋B	15		1.7	2.4	天井部回転ヘラ削り		灰白	良好		2		269	
第 # 図-15	SY01	蓋B	18.7		3	2.4	天井部1/2面転ヘラ削り		赤黒色	良好	竈埋内	8		342	
第 # 図-16	SY01	蓋B					天井部回転ヘラ削り		灰	良好				271	
第 # 図-17	SY01	蓋B	17.1		1.8		天井部回転ヘラ削り、天井部内面中心ナデ		灰	良好、軟質				270	
第 # 図-18	SY01	杯B		9.6			底部回転糸切り後外周面転ヘラ削り		黒褐色	良好			32	267	竈休付着
第 # 図-19	SY01	杯B		8.4			底部欠損		灰	良好			4	265	
第 # 図-20	SY01	杯B		7.8			底部ヘラ切り後ナデ(不定方向)	一	灰	良好			18	263	
第 # 図-21	SY01	杯B	16.6				底部欠損		灰	良好、軟質		4		262	
第 # 図-22	SY01	短頸壺C					回転ナデ(口縁部のみ)		青灰褐色	良好、軟質	竈底部ピット一括	4	0	341	
第 # 図-23	SY01	甕？	13.8	11.2		1.4	回転ナデ		灰	良好			5	307	
第 # 図-24	SY01	短頸壺C	15.8				内・外面回転ナデ		灰	良好		5		276	
第 # 図-25	SY01	短頸壺C	16				回転ナデ		黒褐色	良好		3		277	
第 # 図-26	SY01	甕A	24				回転ナデ		黒褐色	良好		11		279	
第 # 図-27	SY01	甕A	23.8				回転ナデ		暗褐色	良好		2		278	歪み有り
第 # 図-28	SY01	甕A？	26.6				回転ナデ		暗褐色	良好		2		275	
第 # 図-29	SY01	甕A					外面タタキ、内面回転ナデ		暗褐色	良好				281	
第 # 図-30	SY01	甕A	41.6				回転ナデ		灰	良好		2		282	
第 # 図-31	SY01	甕A？					回転ナデ	巻	赤褐色	良好				283	線刻
第 # 図-32	SY01	土師取手甕		11			円筒部一次調整ヨコナデ、内面ヨコナデ後ヘラ削り、底部ヘラ切り		浅黄橙	ややもく軟質			14	100	
写真図版PL	SY01	杯A	13.8	7.6	4.1		底部回転糸切り		黄褐色	ややもく軟質		28	32	92	
写真図版PL	SY01	杯A	13.8	7	3.9		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		30	32	96	
第277図-1	SW01	杯A	13	6	3.3		底部回転糸切り		灰	良好		11	13	178	
第 # 図-2	SW01	杯A	13.2	6.6	3.6		底部回転糸切り		灰	良好、軟質		4	14	180	
第 # 図-3	SW01	杯A	13.3	5.8	3.5		底部回転糸切り		灰白	良好		8	14	179	
第 # 図-4	SW01	杯A	13.4	7	3.5		底部回転糸切り		灰	良好、軟質		6	14	181	
第 # 図-5	SW01	杯A	12	6.8	4.1		底部回転糸切り		灰	良好、軟質		3	7	256	
第 # 図-6	SW01	杯A	13	6	3.6		底部回転糸切り		灰	良好、軟質		5	6	182	
第 # 図-7	SW01	杯A	13	6.4	3.6		底部不明瞭		灰白	良好		2	15	186	
第 # 図-8	SW01	杯A	13	6	3.6		底部回転糸切り		灰	良好		10		168	
第 # 図-9	SW01	杯A	13	6	3.8		底部回転糸切り		灰	良好、軟質		3	18	170	
第 # 図-10	SW01	杯A	13	7.8	3.9		底部回転糸切り		灰白	ややもく軟質		6	24	198	
第 # 図-11	SW01	杯A	13	6.2	4.8		底部回転糸切り		灰白	良好		7	32	195	
第 # 図-12	SW01	杯A	13	6.2	3.9		底部回転糸切り		灰	良好、軟質		16	32	188	
第 # 図-13	SW01	杯A	13	6	3.9		底部回転糸切り		灰	良好		6	10	171	
第 # 図-14	SW01	杯A	13	6	4.6		底部回転糸切り		灰白	良好		6	15	194	
第 # 図-15	SW01	杯A	14	7	3.6		底部回転糸切り		灰白	良好		5	32	173	
第 # 図-16	SW01	杯A	14	7.8	4.1		底部回転糸切り		灰白	良好		33	32	196	
第 # 図-17	SW01	杯A	14	6.6	3.1		底部回転糸切り		灰白	良好		14	32	197	

牛出古窯遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	胎土	出土位置	残存率(%)	復元率(%)	整理番号	備考
第277図-18	SW01	杯A	14	8	4		底部回転糸切り		灰白	ややせ・軟質			9	12	192	
第＃図-19	SW01	杯A	14	8	4.2		底部回転糸切り		灰白	ややせ・軟質			12	15	199	
第＃図-20	SW01	杯A	14	7.4	4.1		底部回転糸切り		灰白	良好			1	32	191	
第＃図-21	SW01	杯A	13	6.3	4.1		底部不明瞭		灰	良好			3	7	169	
第＃図-22	SW01	杯A	13.6	6.3	4.2		底部回転糸切り		灰白	ややせ・軟質			5	32	172	
第＃図-23	SW01	杯A	13.4	7.2	4.3		底部回転糸切り		暗褐色	良好			9	15	187	
第＃図-24	SW01	杯A	14	6.8	3.5		底部回転糸切り		灰	良好・緻密			4	16	177	
第＃図-25	SW01	杯A	14.2	7.2	3.9		底部回転糸切り		灰白	ややせ・軟質			9	31	176	
第＃図-26	SW01	杯A	14.6	7.6	4.1		底部回転糸切り		灰白	甘く・軟質				32	184	
第＃図-27	SW01	杯A	14.6	8.6	4		底部回転糸切り		灰白	ややせ・軟質			17	29	175	
第＃図-28	SW01	杯A	15	6.8	3.8		底部回転糸切り		灰	良好・緻密			8	14	183	
第＃図-29	SW01	杯A	15.1	8.8	3.7		底部回転糸切り		灰白	ややせ・軟質			8	15	174	
第＃図-30	SW01	杯A	14.3	8.2	4.1		底部回転糸切り		灰白	良好			29	32	193	
第＃図-31	SW01	杯A	14.6	8.4	3.8		底部回転糸切り		灰白	良好			9	14	190	
第＃図-32	SW01	杯A	14.1	7.4	4.1		底部回転糸切り		灰白	ややせ・軟質			6	14	189	
第＃図-33	SW01	杯A	14.4	6.8	3.9		底部回転糸切り		灰	良好			5		185	
第＃図-34	SW01	蓋B					天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好					254	
第＃図-35	SW01	蓋B					天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好・緻密					255	
第＃図-36	SW01	蓋H	13.6		2.6	3.8	天井部回転ヘラ削り、宝珠つまみ蓋		灰白	良好			15		200	
第＃図-37	SW01	杯B	11.8	7.2	3.4	3.8	底部欠損		灰	良好			9	5	202	
第＃図-38	SW01	杯B	13	7.2	3.9	4.2	底部糸切ヘラ削り		灰	良好			4	32	204	
第＃図-39	SW01	杯B	13.4	7.4	3.8	4.1	底部糸切ヘラ切り		灰白	良好			7	26	201	
第＃図-40	SW01	杯B	12.6	7.2	3.5	4	底部糸切ヘラ削り		灰	良好			2	15	203	
第＃図-41	SW01	鍋A	25.8				回転ナデ		灰白	甘く・軟質			2		251	口縁
第＃図-42	SW01	短頸壺C	15.6				口頸部タタキメスリケシ、内面回転ナデ		灰	良好・緻密	I層		7		250	
第＃図-43	SW01	短頸壺C	20				回転ナデ		灰白	ややせ・軟質			2		252	口縁
第＃図-44	SW01	甕A		13			外面タタキ、内面不明		黒褐色	良好・緻密	I層			9	249	底部
第277図-45	SW02	杯A	12.6	6	4		底部回転糸切り		灰	良好			12	32	259	ひびがき痕あり
第＃図-46	SW02	杯A	13	6.2	4.1		底部回転糸切り		灰	良好			16	32	258	
第＃図-47	SW02	杯A	13.4	6.5	4.2		底部回転糸切り		灰	良好			12	16	257	
第＃図-48	SW02	蓋B	13.2		2.2		天井部回転ヘラ削り		灰	良好			2		261	窯体付着
第＃図-49	SW02	蓋B	17.6				天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好			10		262	
第278図-1	SW03	杯A	12.8	6.4	4		底部回転糸切り、体部板状工具痕		灰白	良好	II・III層		2	16	295	板状工具痕
第＃図-2	SW03	杯A	12.8	6.8	4		底部回転糸切り		灰白	良好			24	32	165	
第＃図-3	SW03	杯A	12				底部欠損、体部板状工具痕		灰	良好・緻密	II・III層		4		296	板状工具痕
第＃図-4	SW03	杯A	14.4	7.2			底部不明瞭(ヘラ切りか？)		灰白	ややせ・軟質	II・III層		3	7	227	
第＃図-5	SW03	杯A	13.4	6	4.3		底部回転糸切り後工具ヘラ削り		灰	良好			16	16	167	歪ね焼
第＃図-6	SW03	蓋B	14				天井部回転糸切り後回転ヘラ削り		灰	良好・緻密	II・III層		4		288	糸切り痕
第＃図-7	SW03	蓋B	13.4		1.8	2.4	天井部回転ヘラ削り		灰白	ややせ・軟質			4		161	
第＃図-8	SW03	蓋B	15		2	2.7	天井部回転ヘラ削り、天井部中央中心ナデ、蓋ミングつまみ痕		灰	良好			1		168	
第＃図-9	SW03	杯B		7.4			底部回転ヘラ削り	メ？	灰	良好・緻密	II・III層		4	31	2	底部ヘラ描き
第＃図-10	SW03	杯B	12	8	3.1	3.5	底部糸切ヘラ削り後外周回転ヘラ削り		灰	良好・緻密			21	32	164	
第＃図-11	SW03	杯B	12.4	7.6	3.7	4.1	底部回転糸切り		暗褐色	良好	II・III層		5	32	301	
第＃図-12	SW03	杯B	14.1	8	6.8	7.4	底部回転ヘラ削り		灰	良好・緻密			8	16	163	
第＃図-13	SW03	杯A	12.8				底部回転糸切り		灰	ややせ・軟質			16	16	221	口径約13.6、底径8.8器高5.4
第＃図-14	SW03	椀形A					遺かし窯あり		灰	良好	II層上				290	
第＃図-15	SW03	受皿蓋B	8.2				回転ナデ		灰	良好	II・III層		8		294	口縁
第＃図-16	SW03	受皿蓋B	11				回転ナデ		灰	良好	II・III層		5		297	口縁
第＃図-17	SW03	鉢無蓋					回転ナデ		黒褐色	良好					222	
第＃図-18	SW03	皮鞴蓋	14				回転ナデ		灰白	良好	II・III層		7		303	口縁
第＃図-19	SW03	蓋蓋	12.4				天井部不明、天井部内面カキ		灰白	ややせ・軟質	II・III層、口層				285	
第＃図-20	SW03	短頸壺B	11				外面タタキ後スリケシ、内面回転ナデ		黒褐色	良好	II・III層		3		298	
第＃図-21	SW03	短頸壺B	11				回転ナデ		灰	良好	II・III層		5		230	
第＃図-22	SW03	短頸壺B	14				外・内面回転ナデ		灰	良好・緻密	II・III層		5		226	
第＃図-23	SW03	短頸壺B	13.6				回転ナデ	×	灰	良好・緻密	II・III層		2		315	胴部に大穴
第＃図-24	SW03	短頸壺					回転ナデ	大	黒褐色	良好・緻密					313	胴部に大穴
第＃図-25	SW03	短頸壺					内面回転ナデ、外面不明瞭	卅	灰	ややせ・軟質	III層				314	胴部に(？)
第＃図-26	SW03	三足壺					脚部六角形のヘラ削り		暗褐色	良好・緻密	II・III層				327	脚部

牛出古墳遺跡須恵器・土師器観察表

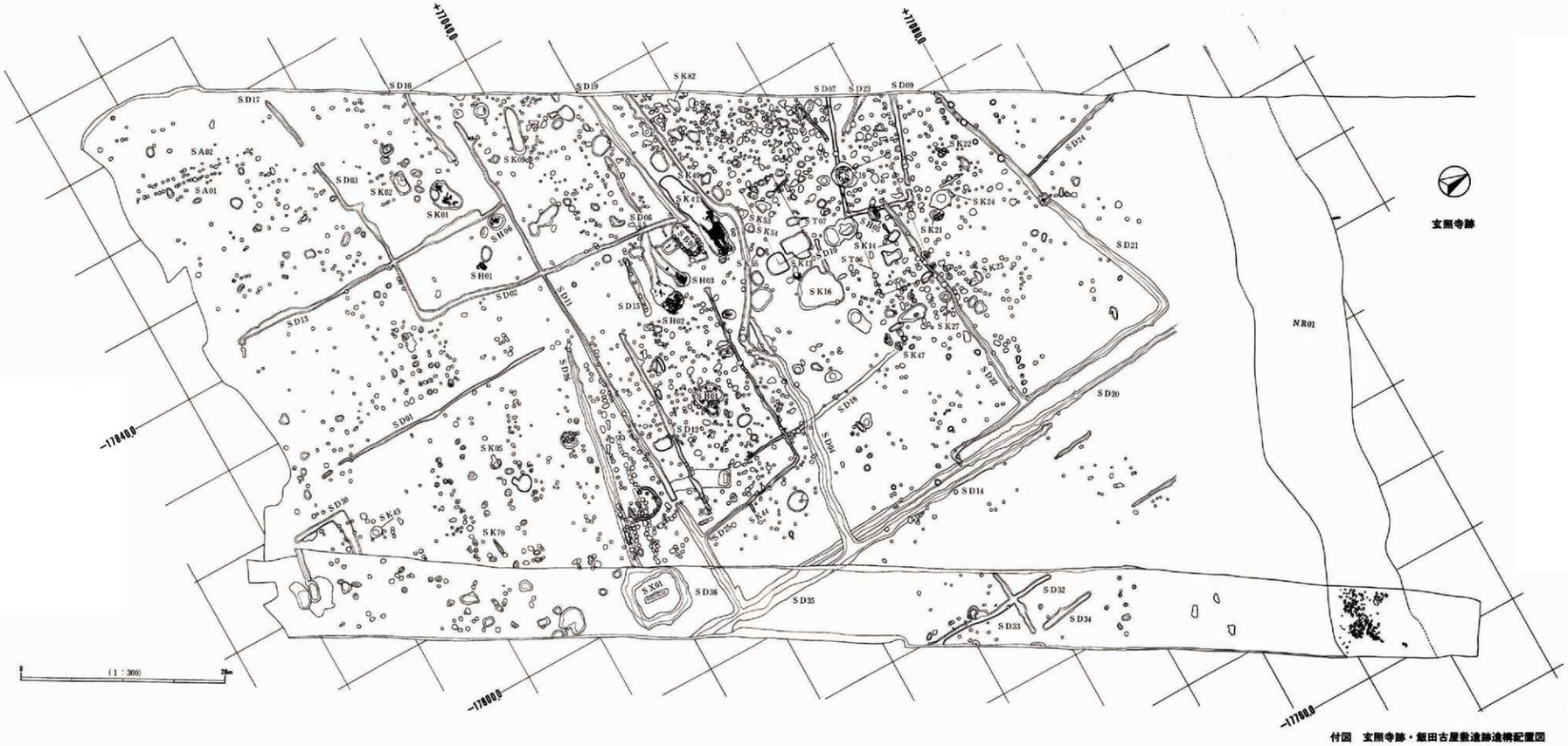
図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器厚B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	焼成	層位	残存率(口縁)(20)	残存率(底部)(20)	登録番号	備考
第278図-27	SW03	三足壺					脚部が八角形、下部が六角形のヘラ削り		暗褐色	良好、緻密	Ⅱ・Ⅲ層			328	脚部
第＃図-28	SW03	三足壺					脚部六角形のヘラ削り		暗褐色	良好、緻密	Ⅲ層			329	脚部
第＃図-29	SW03	短頸壺C	13.2				回転ナデ		灰白	良好		3		228	焼台
第＃図-30	SW03	短頸壺B					回転ナデ		灰白	やや甘(軟質	Ⅱ・Ⅲ層			292	焼台
第＃図-31	SW03	短頸壺B	14				口頸部回転ナデ、体部外面ナデ後ヘラケズリ、体部内面ナデ		灰	良好、緻密	Ⅱ・Ⅲ層	4		316	
第＃図-32	SW03	短頸壺B	16.8				回転ナデ		灰	良好、緻密	Ⅱ・Ⅲ層	14		230	*接続番号223、229はA～C接続*
第＃図-33	SW03	広口台付壺					耳部ヘラ削り穿孔あり		灰白	良好	Ⅲ層			317	
第＃図-34	SW03	甕					把手部		灰	良好	Ⅱ・Ⅲ層			318	把手
第＃図-35	SW03	甕A	39.8				回転ナデ		暗褐色	やや甘(軟質	Ⅲ層	2.5		304	口縁
第＃図-36	SW03	甕底部		19.6			底部内面回転ナデ(接続工具)、側外面ナデ(接続工具)、底部外面ナデ		灰	良好	Ⅱ・Ⅲ層		18	291	平底
第＃図-37	SW03	鍛造具	—				鍛造具		灰	良好	Ⅱ・Ⅲ層			320	焼台
第＃図-38	SW03	鍛造具					鍛造具		灰	良好	Ⅰ層			319	焼台
第279図-1	SK01	杯A	12.4	7	3.4		底部回転糸切り		灰	良好		5	19	234	
第＃図-2	SK01	杯A	12.5	6.6	3.7		底部不明瞭(回転糸切り？)		灰白	良好		6	15	309	
第＃図-3	SK01	杯A	13.6	7.6	3.4		底部回転糸切り		灰	良好		6	13	310	
第＃図-4	SK01	盛	11				内面丁寧ナデ、外面不明瞭		黒褐色	良好				236	
第＃図-5	SK01	土師器鍋B	20.6				ヨコナデ		淺黄橙	やや甘(軟質		12		235	
第282図-1	SB02	杯A	11.7	8.2	3.3		底部静止糸切り、内面底部ナデ		灰白	やや甘(軟質		32	32	12	
第＃図-2	SB02	杯A	12.4	4	4.2		底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好		7	10	52	
第＃図-3	SB02	杯A	12.8	6.6	3.8		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		32	32	55	
第＃図-4	SB02	杯A	14	7.4	3.8		底部回転糸切り		灰	良好		6	5	9	
第＃図-5	SB02	蓋B	13.8		2.2	2.8	天井部回転ヘラ削り		灰	やや甘(軟質		5		10	
第＃図-6	SB02	蓋B	14		2.3	3	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		5		11	
第＃図-7	SB02	蓋B	13.6		2.3	3.15	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		12		60	
第＃図-8	SB02	蓋B？	17.8		1.1	2	天井部回転ヘラ削り		灰白	やや甘(軟質		27		54	
第＃図-9	SB02	蓋B	13		2.2	2.7	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		32		56	
第＃図-10	SB02	杯B	12.4	9	2.7	3.1	底部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密		4	12	6	
第＃図-11	SB02	杯B	13	8.6	2.6	3.1	底部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密		8	10	5	
第＃図-12	SB02	杯B	11.8	8.4	3.1	3.6	底部ヘラ切り		灰	良好、緻密		9	16	51	
第＃図-13	SB02	杯B	12.8	8	4	4.1	底部ヘラ切り、内面底部縦横ナデ		赤褐色	やや甘(軟質		30	28	53	
第＃図-14	SB02	杯B	12.6	8.8	3.4	3.7	底部ヘラ切り		灰	良好		25	32	50	
第＃図-15	SB02	杯B	12.4	9.4	3.6	4.2	底部回転ヘラ削り		灰	良好		6	32	8	
第＃図-16	SB02	杯B	14	9.2	3.2	3.7	底部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密		6	12	7	
第＃図-17	SB02	椀C	15.6				丸底杯		灰白	良好	検	2		332	
第＃図-18	SB02	椀C	16	7	5.7		底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好、緻密		32	32	57	
第＃図-19	SB02	土壁					布目痕、穿孔あり		灰白	やや甘(軟質				59	
第＃図-20	SB02	甕C					口頸部ヨコナデ、体部ナデ後ヨコ、体部内面格子目痕あり		黒褐色	良好				61	
第＃図-21	SB02	土師小壺	10.8				口頸部ヨコ撫上げ、ヨコナデ、体部下部ケズリ後ヨコ四ケ所、内面ヘラ撫		淺黄橙	甘(軟質		3		2	
第＃図-22	SB02	土師小壺	12.6				口頸部一体撫上げ、ヨコナデ、体部下部ヘラ削り、体部内面上半ナデ、体部内面下半ハケ		淺黄橙	甘(軟質		14		58	
第＃図-23	SB02	土師鉢B	32.6				口頸部及び内面 回転ナデ、体部ヘラ削り		淺黄橙	やや甘(軟質		3.5		3	
第＃図-24	SB02	土師器壺B		26			外面ヘラ削り後ハケ、内面ハケ		淺黄橙	やや甘(軟質			16	63	
第＃図-25	SB02	土師器壺B	26				口頸部一体撫上面 回転ナデ、体部外面ヘラ削り		淺黄橙	やや甘(軟質		6		1	
第285図-1	SB11	器種不明	12.7	10		2.5	底部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密				13	
第＃図-2	SB11	杯A	11.4	6.8	3.2		底部ヘラ切り		灰白	やや甘(軟質		13	32	27	
第＃図-3	SB11	杯A	12.2	6.6	3.7		底部回転糸切り		暗褐色	良好		32	32	19	
第＃図-4	SB11	杯A	12.8	7.8	4.6		底部回転糸切り		灰白	やや甘(軟質		7	32	21	
第＃図-5	SB11	蓋B	18.5		3.7	5.1	天井部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密		32		16	
第＃図-6	SB11	杯B	12	8.4	3.5	3.7	底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好、緻密		13	32	14	
第＃図-7	SB11	杯B	12.9	8.6	3.4	3.5	底部静止糸切り後外縁回転ヘラ削り		灰	やや甘(軟質		13	16	20	
第＃図-8	SB11	杯B	13.9	9.4	3.6	4	底部回転ヘラ削り		暗褐色	良好、緻密		32	32	18	
写真図版PL	SB11	壺					つまみ接合部糸切り痕あり		暗褐色	良好				15	
第286図-1	SB12	杯A	12.8	6	3.7		底部回転糸切り		赤褐色	良好		27	32	73	
第＃図-2	SB12	杯A	12.6	6.4	4.2		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		17	11	70	
第＃図-3	SB12	蓋B	16.8		3.2	3.5	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		32		72	
第＃図-4	SB12	杯B	15.6	9.2	6.2	6.7	口縁部成形工具でのナデ、底部回転糸切り		灰	良好、緻密		20	32	74	
第＃図-5	SB12	高杯D	13.6				杯部中心溝ナデ		灰	良好、緻密		8		71	
第＃図-6	SB12	甕A	20				口頸部回転ナデ			良好		6		68	
第＃図-7	SB12	須恵器B		9.4			底部外面回転ヘラケズリ後回転ヘラナデ、体部内面指痕残あり、底部内面ナデ、底部縁部ヘラ撫		黒褐色	良好、緻密			32	75	

牛出古窯遺跡・須恵器・土師器観察表

区画番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎土	層位	出土位置(X座標)	出土位置(Y座標)	整理番号	備考
第286区-8	SB12	長頸壺		16			底部ナデ、体部回転ヘラ削り		黒褐色	良好			32	66	高台付近
第＊区-9	SB12	甕A		15			体部外面ナデ等、強い内面ヘラ削りあり、底部内面ハケ、底部外面糸切痕跡あり		灰	良好、微密			30	67	平底
第＊区-10	SB12	甕A		14.6			底部内面ハケ、体部内面ヘラ、体部外面ヨコナデ、底部外面ナデ		灰	良好、微密			17	69	平底
第＊区-11	SB12	甕					口縁部直線ナデ、ヨコナデ、底部外面ナデ、底部外面ヘラ削りあり		灰	良好				54	
第＊図-12	SB13	甕		1.4			外面ナデ、内面あて具痕後ナデ		灰	良好、微密				65	丸底
第287区-13	SB12	土師小型甕		7			底部回転糸切り、体部ヘラ・指ナデ		浅黄橙	やや甘く軟質			32	77	
第＊図-14	SB12	土師長胴壺B		0.6			外面ヘラ削り、内面ナデ		浅黄橙	やや甘く軟質				109	
第＊図-15	SB12	土師長胴壺D		5.8			体部外面ヘラ削り		浅黄橙	やや甘く軟質			32	80	
第＊図-16	SB12	土師長胴甕A		9.4			底部ナデ、底部内面ナデ、外面回転ナデ		浅黄橙	甘く軟質			28	78	
第＊図-17	SB12	土師小型壺	2	7.6		16.2	底部回転糸切り、体下部回転ナデ後回転ヘラ削り		灰白	やや甘く軟質		28	32	76	
第＊図-18	SB12	土師長胴壺	22				口縁部～内面ヨコナデ、体部ヘラ削り		浅黄橙	やや甘く軟質		3		143	
第＊図-19	SB12	刀子												5004	
第＊図-20	SB12	丸瓦												4003	
第＊図-21	SB12	瓦												4034	
第＊図-22	SB12	瓦												4032	
第＊区-23	SB12	瓦												4025	
第297区-1	SB13	杯A	13.2	5.4	4.1		底部回転糸切り		灰	良好		13	32	22	
第＊図-2	SB13	杯A	12.6	6.4	4		底部回転糸切り		灰白	やや甘く軟質		5	16	23	
第＊区-3	SB13	杯A	13.4	6.8	3.75		底部回転糸切り	別	灰	良好		29	32	85	
第＊区-4	SB13	杯A	14.1	7	4.3		底部回転糸切り	別	灰	良好		29	32	86	
第＊区-5	SB13	蓋B	13.4		2.6	3.5	天井部回転ヘラ削り		灰	良好、微密		23		44	
第＊図-6	SB13	蓋B	13.8		2.95	2.6	天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好		15		41	
第＊区-7	SB13	蓋B	13		2.4	3.1	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		18		36	
第＊図-8	SB13	蓋B	13.9		2.4	3	天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好		22		34	
第＊図-9	SB13	蓋B	13.8		2.4	3	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		9		35	
第＊図-10	SB13	蓋B	12.8		3	3.7	天井部回転ヘラ削り		灰白	やや甘く軟質		27		28	
第＊図-11	SB13	蓋B	13.4		2.4	3.2	天井部不明瞭(回転ヘラ削り？)		灰白	良好		28		29	
第＊図-12	SB13	蓋B	13		2.8	3.3	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		18		31	
第＊図-13	SB13	蓋B	13.2		2.3	3	天井部回転ヘラ削り		灰	やや甘く軟質		10		33	
第＊図-14	SB13	蓋B	13		2.1	2.7	天井部回転ヘラ削り		灰	良好、微密		32		30	
第＊図-15	SB13	蓋B	14.6		2.4	3	天井部回転ヘラ削り		赤褐色	良好		1		46	
第＊図-16	SB13	蓋B	13.1		2.3	3.1	天井部回転ヘラ削り		灰	良好、微密		32		39	
第＊図-17	SB13	蓋B	13.5		2.6	3.4	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		30		32	
第＊図-18	SB13	蓋B	17.2		2.5	2.9	天井部回転ヘラ削り		暗褐色	やや甘く軟質		4.5		40	
第＊図-19	SB13	蓋B	15.2		2.4	3.1	天井部回転ヘラ削り		淡褐色	良好		8		43	
第＊図-20	SB13	蓋B	18		2.65	4.1	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		32		48	
第＊図-21	SB13	蓋B	18		2.6	3.75	天井部回転ヘラ削り		灰	良好、微密		5		42	
第＊図-22	SB13	蓋B	18		3.4	4.7	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		31		49	
第＊図-23	SB13	蓋B	18.2		3.4	4.6	天井部回転ヘラ削り		灰	良好、微密		16		45	
第＊図-24	SB13	蓋B？	18.2		3.3		天井部回転ヘラ削り		灰	良好、微密		32		47	
第＊区-25	SB13	蓋B？	15				天井部回転ヘラ削り		灰	良好		5		37	
第＊図-26	SB13	杯B	12	6.6		3.4	底部回転糸切り		灰白	良好		18	32	26	
第＊図-27	SB13	杯B	12.8	6.4		3.3	底部回転ヘラ削り		暗褐色	良好		32	32	25	
第＊区-28	SB13	杯B	12.4	6.6	2.9	3.3	底部回転ヘラ削り		灰	良好、微密		25	32	24	
第＊図-29	SB13	杯B	12.4	9	2.9	3.3	底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り		暗褐色	良好		22	32	27	
第＊図-30	SB13	高杯D					回転ナデ		灰	良好、微密				330	杯部分
第＊図-31	SB13	短頸壺	8.5				外面不明瞭		灰	良好、微密		14		137	
第＊図-32	SB13	短頸壺		5.8			底部ナデ後ヘラ等で強くナデ一定方向、必要部上端外面回転ヘラ、底部回転糸切り痕ナデ(一定方向)		灰	良好、微密			27	136	底部
第＊図-33	SB13	甕A	45.8				内・外面回転ナデ		灰	良好				146	
第＊図-34	SB13	甕A					内・外面ヨコナデ		灰	良好				145	
第＊図-35	SB13	甕A					口頸部タタキ後櫛描波状紋		灰	良好				147	
第292区-36	SB13	甕A？					外面タタキ、底部内面ハケ、内面あて具痕(同心円状)あり		灰	良好、微密				124	
第＊区-37	SB13	甕A？					外面タタキ、体下部内面ハケ、体上部内面ナデ		灰	良好				126	丸底
第293区-38	SB13	甕A？					外面タタキ、内面縦横ナデ		灰	良好、微密				125	
第＊図-39	SB13	土師小型甕	11.5				体部外面ヘラ削り、体上部外面～内面不明瞭		浅黄橙	甘く軟質		31		134	
第＊図-40	SB13	土師小型壺		4			底部回転糸切り、体部外面ヘラ削り		浅黄橙	甘く軟質			32	130	
第＊図-41	SB13	土師長胴壺D	16.8				口頸部～内面ヨコナデ、体部ヘラ削り		浅黄橙	やや甘く軟質		8		142	
第＊区-42	SB13	土師長胴壺C	20				口頸部直線ナデ、体部外面ヘラナデ一定方向、体部内面ハケ		浅黄橙	甘く軟質				138	

牛出古墳遺跡須恵器・土師器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	技法の特徴	ヘラ描き	色調	胎土	層位	出土位置(X20)	出土位置(X20)	図版番号	備考
第293図-43	SB13	土師長胴壺B	20.6				口頸部ヨコナデ,体部外面カキ後ヘラ削り,内面カキ		浅黄橙	やや甘く軟質		16		141	
第 * 図-44	SB13	土師長胴壺D	18.6				内面ハケ,口頸部外面横位ハケ,体部外面ヘラ削り		赤褐色	甘く軟質		9		139	
第 * 図-45	SB13	土師長胴壺A	16	7		22	口頸部ヨコナデ,ヘラ削り,下半ヨコナデ,底部内面指頭圧痕あり,体下部外面ヘラ削り,底部外面ナデ		浅黄橙	甘く軟質		9	22	135	
第 * 図-46	SB13	土師長胴壺B		2			外面カキ後ヘラ削り,内面カキ		浅黄橙	やや甘く軟質			32	133	
第 * 図-47	SB13	土師長胴壺E	23.6				口頸部ヨコナデ,下半ヨコナデ,体下部外面ヘラ削り(縦方向),口頸部一体上部外面ヨコナデ,体中部外面ヘラ(縦方向)		浅黄橙	やや甘く軟質				144	
第294図-1	SD05	杯底部					底部回転糸切り	別	灰	良好,緻密	抽出			333	内面「則」印
第 * 図-2	SD06	杯底部					底部回転糸切り	別	灰	良好,緻密	一括抽出			334	内面「則」印
第 * 図-3	SD06	紡錘車					手づくね,中央に穿孔		灰白色	良好				338	土製SR(断面)
第297図-1	SB14	土師杯	10.6	5.6	2.9		底部回転糸切り		赤褐色	やや甘く軟質		9	30	103	
第 * 図-2	SB14	壺B	14.2		2.1	2.8	天井部頂転ヘラ削り,中央部のずれた所に盛みあり		暗褐色	良好		33		104	
第 * 図-3	SB14	土師椀B		6.8			底部不明瞭		赤褐色	甘く軟質			32	106	
第 * 図-4	SB14	土師椀B		6.6			底部不明瞭		赤褐色	甘く軟質			32	107	
第 * 図-5	SB14	凸形付把手					外面タタキ凸形付,内面あて具痕あり		灰白	良好				106	
第 * 図-6	SB14	甕A破片					口頸部ヨコナデ		灰	良好				148	
第 * 図-7	SB14	甕A破片					口頸部ヨコナデ		灰白	やや甘く軟質				149	
第 * 図-8	SB14	土師羽釜	24				内・外面回転ナデ		浅黄橙	やや甘く軟質		1		105	
第297図-1	SB15	杯A	12.2	6.4	4.1		底部回転糸切り		灰	良好		5	8	111	
第 * 図-2	SB15	杯A		8			底部回転糸切り		灰白	やや甘く軟質		15		120	
第 * 図-3	SB15	杯A	14.8	7.2	4		底部ナデ(中央部ヘラ切り痕あり)		灰白	やや甘く軟質		12		112	
第 * 図-4	SB15	蓋B	13		2.3	3	天井部回転ヘラ削り,摘りングつまみ蓋		灰	良好,緻密		32		118	
第 * 図-5	SB15	蓋B	14.8		2.4	3.1	天井部回転ヘラ削り		灰	良好		22		119	
第 * 図-6	SB15	杯B	9.2	6	3.2	3.6	底部不明		灰	やや甘く軟質		3	5	113	
第 * 図-7	SB15	杯B	10.2	7	3.7	4.1	底部不明		灰	やや甘く軟質			7	121	
第 * 図-8	SB15	杯B		9.6			底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り		灰白	良好			20	122	
第 * 図-9	SB15	短頸壺		8			外・内面回転ナデ		黒褐色	良好			32	117	
第 * 図-10	SB15	甕A					口頸部タタキ後擦揃波状紋		灰	良好				150	
第 * 図-11	SB15	甕C	18				口頸部外面タタキ後,体部外面タタキ,内面回転ナデ		灰白	やや甘く軟質		12		116	
第 * 図-12	SB15	甕A					外面不明瞭,底部外面ナデ,底部内面不明瞭,内面指頭圧痕あり		黄褐色	やや甘く軟質				123	丸底
第 * 図-13	SB15	甕C		7.8			外面タタキ,内面あて具痕あり		黒褐色	良好			32	110	丸底
第 * 図-14	SB15	土師長胴壺C	20				外面不明瞭,口頸部内面ナデ,口頸部一体上部内面ハケ,底下部内面不明瞭		赤褐色	やや甘く軟質		10		115	
第300図-1	SK13	黒色杯A	13	5	3.85		内面ヘラ磨き,外周回転ナデ,底部回転糸切り		内面黒色ヤ,外面褐色	やや甘く軟質		25	32	240	
第 * 図-2	SK13	黒色杯A	13.4	6.2	3.4		内面ヘラ磨き,外周回転ナデ,底部回転糸切り		内面黒色ヤ,外面褐色	甘く軟質		17	25	239	
第 * 図-3	SK13	黒色杯A	13.6	5.6	4		内面黒色,内面ヘラ磨き,外周回転ナデ,底部回転ヘラ削り墨書	墨書 ?	内面黒色ヤ,外面褐色	やや甘く軟質		25	32	248	墨書?
第301図-1	SK10	土師小型壺	13.4				回転ナデ。口縁端部丸縁		橙色	やや甘く軟質	No.23	6		345	
第 * 図-2	SK10	土師長胴壺F	24				口縁端部面取り後回転ナデ		橙色	やや甘く軟質	No.3	2.5		346	
第 * 図-3	SK10	土師羽釜					回転ナデ		橙色	軟質	No.16			348	内面ヘラ磨き,外面ヘラ削り,鍔部ヨコナデ,鍔下ヘラ削り
第 * 図-4	SK10	土師杯		24.3			回転ナデ		橙色	軟質	No.32		2.5	347	内面ヘラ磨き,外面ヘラ削り
第 * 図-5	SK12	土師杯	14				口縁端部面取り後回転ナデ,口縁端部痕跡三角形		橙色	軟質		2		344	
第 * 図-6	SK12	土師長胴壺	22				口縁端部面取り後回転ナデ		橙色	軟質		5		343	
第305図-1	SX02	杯A	13.8	7.2	4.3		底部回転糸切り		暗褐色	やや甘く軟質		9	7	244	
第 * 図-2	SX02	杯B	12.6	9	2.7	3.3	底部回転ヘラ削り		暗褐色	良好,緻密		11	8	243	
第 * 図-3	SX02	蓋B	12.6		1.6	2.3	天井部回転ヘラ削り		灰	良好,緻密		7		247	
第 * 図-4	SX02	蓋B	13.8		1.1	1.5	天井部回転ヘラ削り		灰白	良好		4		245	
第 * 図-5	SX02	蓋B	13.8		1.7	2.3	天井部回転ヘラ削り		灰白	良好		12		246	
第 * 図-6	SX02	甕底部		11.8			内面あて具痕あり,外面タタキ		灰	良好			32	241	平底



付図　玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡遺構配置図

報告書抄録

書名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13
副書名	飯田古屋敷遺跡・玄無寺跡・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡 清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡
巻次	小布施町内・中野市内その1・その2
シリーズ名	財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	24
編著者名	土屋　積　鶴田典昭　中島英子　中島庄一
編集・発行機関	財長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒387 長野県更埴市屋代字清水260－6　TEL026－274－3891
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
飯田古屋敷遺	上高井郡小布施町	20541	15	36°41'19"	138°17'48"	1992年7～11月	12,300	上信越
跡・玄無寺跡	大字飯田					1993年11月	1,110	自動車
がまん淵遺跡	中野市大字草間	20211	92	36°43'20"	138°19'08"	1991年7～11月	3,000	道建設
沢田鍋土遺跡	中野市大字立ヶ花	〃		36°43'26"	138°19'05"	1991年4～12月	20,000	に伴う
清水山窯跡	〃	〃	109	36°43'32"	138°19'13"	1992年9～12月	5,000	事前調
池田端窯跡	〃	〃	110	36°43'44"	138°19'18"	1992年4～ 8月	16,000	査
牛出古窯遺跡	中野市大字牛出	〃	121	36°44'03"	138°19'14"	1993年4～12月	8,500	

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯田古屋敷遺跡	集落	中世・近世	溝・水田	木製品・陶磁器	
玄無寺跡	集落	中世・近世	掘立柱建物址・井戸・溝	陶磁器・五輪塔	
がまん淵遺跡	集落	旧石器・縄文早期	ブロック	石器・土器	
		弥生時代後期	柵列、環濠、竪穴住居址4	土器・鉄鏃・管玉	高地性防御集落
沢田鍋土遺跡	窯跡・集落	旧石器・古墳前期	ブロック・粘土採掘跡	石器・土師器	
		奈良時代	窯跡2・竪穴住居址2	須恵器・土師器	
清水山窯跡	窯跡	奈良時代	窯跡3	須恵器	高井・佐敦郡銘の須恵器
池田端窯跡	窯跡	古墳時代前期	竪穴住居址1	土師器	
		奈良・平安時代	窯跡7、粘土採掘跡	須恵器・土師器	
牛出古窯遺跡	集落・窯跡	旧石器・古墳前期	ブロック・竪穴住居跡8	土師器・勾玉・ガラス玉	
		奈良時代	窯跡1、竪穴住居跡7	須恵器・土師器	